奈良女子大学構内遺跡
発掘調査概報Ⅴ

―― 平城京左京二条六坊五坪・北小路遺跡の調査 ――

１９９５年

奈良女子大学

序　　言

本学では、昭和56年（1981年）11月、埋蔵文化財発掘調査会が組織され、大学構内施設の新増築にともなう発掘調査と、その調査結果の公表を逐次おこなってまいりました。今回、「奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅴ」の刊行が実現の運びになりましたことは誠に喜ばしいことであります。あわせて、関係各位のご尽力とご協力に深く敬意を申しのべたいと存じます。

今回の発掘調査は、奈良女子大学国際交流会館の建設にともなって昭和62年（1987年）7月から10月にかけて実施されたものであります。この建設地は、平城京の左京二条六坊五坪の地にあたるところであって、古代から江戸時代にいたる、それぞれの時代の遺構が重層して埋蔵されていると聞いております。

このたびの発掘調査によって数々の貴重な新知見が入手されましたが、特筆すべきは、「佐保殿・梨原宮・宿院との関係」考察の手がかりができたこと、中世の奈良町の形成を究明する資料が得られたこと、でありましょう。また、奈良時代の大形の井戸や室町時代の井戸から、それぞれの時代の生活と文化の一端を証明する遺物が大量に発見されました。このように、本学における過去数次にわたる発掘調査の結果にもまして重要度の高い成果が今回獲得されましたことは、学術研究の面から、その意義少なからずと存じております。

発掘調査は本学独自におこなったものですが、このたびもまた奈良国立文化財研究所から、変わらぬご指導をいただきました。また、学内の発掘調査会・事務局・臨時文化財調査室、その他の方々には、それぞれの立場から数々のご協力をいただきました。深く感謝の意を表します。

平成7年1月

奈良女子大学長　田　村　　俶

例　　言

1　本書は昭和62年に奈良女子大学が実施した奈良市北小路町4番地奈良地区国際交流会館建設予定地の発掘調査概要報告書である。

2　発掘調査の実施にあたっては調査員・坪之内徹が現場を担当し、下記の人々の協力を得た。赤木美苗・矢村直重・宮本口佐美・深尾真弓ほか（奈良女子大学）、鈴木景二（神戸大学）、金村浩一・西川寿勝・伊佐智法・平繁満穂美（奈良大学）

3　本書の執筆は坪之内徹、松尾史子、信田真美世が分担し、奈良時代の土器を松尾・信田が、その他を坪之内が執筆した。

4　遺物の実測・拓本は仲井光代、宮永早智子、松尾、信田、岡恵子、末永美由紀が行い、製図は松尾・信田・末永・小林和美・宮崎良美が分担して行った。

5　遺構写真は偶山佳洋氏、遺物写真は坪之内が担当した。

6　本書の編集は末永美由紀の協力を得て坪之内が行った。

凡　　例

1　層位と遺構の位置は国土座標によって表示している。また高さは絶対高をあらわす。

2　遺構の略号、土器の器種分類、軒瓦の型式は奈良国立文化財研究所で設定したものに準拠した。

3　遺構番号は発掘調査区内検出のもののみに付されたもので、既往の調査の通し番号との関連はない。

目　　次

Ⅰ　調査の契機と概要…… 1

Ⅱ　遺　　構…… 3

1　層位…… 3

2　遺構と時期区分…… 4

3　小結…… 22

Ⅲ　遺　　物…… 25

1　土器…… 25

2　瓦・塼…… 37

3　木製品・石製品・金属製品…… 42

（あとがき）

挿　図　図1　調査地点位置図

図2　第2層出土遺物

図3　遺構配置図、東壁・南壁土層図

図4　遺構配置図（D～H期）

図5　SE011実測図

図6　SE011構造模式図

図7　SX051出土土師器甕

図8　SE111実測図

図9　SX355と東壁土層図

図10　SX351平面図

図11　SX352平面図

図12　SD531断面土層図

図13　SE511実測図

図14　SE612・SE512実測図

図15　SK722・SE611実測図
図16　SE612出土擂鉢
図17　SE711実測図
図18　SE811・SE812実測図
図19　A期の遺構変遷
図20　F・G期の遺構配置
図21　SE111および周辺の遺構・包含層出土土器
図22　大和北部の9～11世紀の土師器の変遷
図23　14～15世紀南都の土師器皿
図24　咸平元宝

図　版

第1図　SK022出土土器（1）
第2図　SK022出土土器（2）
第3図　SK021出土土器・SK024出土土器（1）
第4図　SK024出土土器（2）
第5図　SE011・SD032・SK023出土土器
第6図　SE111・SE112出土土器
第7図　SG361・SX355出土土器
第8図　SX352出土土器・SX351出土土器（1）
第9図　SX351出土土器（2）・SK421出土土器
第10図　SD431出土土器（1）
第11図　SD431出土土器（2）
第12図　SD431出土土器（3）
第13図　SE411出土土器（1）
第14図　SE411出土土器（2）
第15図　SE411出土土器（3）
第16図　SE411出土土器（4）
第17図　SK422出土土器
第18図　SE511・SK521・SD531出土土器
第19図　SK622出土土器
第20図　SK621出土土器（1）
第21図　SK621出土土器（2）・SK721出土土器（1）

第22図　SK721出土土器（2）
第23図　SK722出土土器
第24図　SX751出土土器
第25図　SK822出土土器（1）
第26図　SK822出土土器（2）
第27図　SK822出土土器（3）
第28図　SK822出土土器（4）
第29図　SK822出土土器（5）
第30図　SK822出土土器（6）
第31図　飛鳥・奈良時代軒瓦
第32図　平安時代軒丸瓦（1）
第33図　平安時代軒丸瓦（2）
第34図　平安時代軒丸瓦（3）
第35図　平安時代軒丸瓦（4）
第36図　平安時代軒丸瓦（5）
第37図　平安時代軒平瓦（1）
第38図　平安時代軒平瓦（2）
第39図　平安時代軒平瓦（3）
第40図　平安時代軒平瓦（4）
第41図　平安時代軒平瓦（5）
第42図　平安時代軒平瓦（6）
第43図　丸瓦（1）
第44図　丸瓦（2）
第45図　丸瓦（3）
第46図　丸瓦（4）・平瓦（1）
第47図　平瓦（2）
第48図　平瓦（3）
第49図　平瓦（4）
第50図　平瓦（5）
第51図　平瓦（6）
第52図　平瓦（7）
第53図　平瓦（8）

第54図　平安・鎌倉時代軒瓦
第55図　木製品・石製品

写　真　図版1　遺構全景
図版2　西北部遺構全景
図版3　東北部・東南部遺構全景
図版4　A期建物
図版5　A期井戸・建物
図版6　A期土坑・B期井戸
図版7　B期小穴
図版8　C期遺構
図版9　C期遺構
図版10　C期遺構
図版11　C期遺構
図版12　C期遺構
図版13　上層遺構
図版14　D・E期遺構
図版15　E・F期井戸
図版16　F期埋桶
図版17　F・G期遺構
図版18　G期遺構
図版19　H期井戸
図版20　土器（1）
図版21　土器（2）
図版22　土器（3）
図版23　土器（4）
図版24　土器（5）
図版25　土器（6）
図版26　土器（7）
図版27　土器（8）
図版28　土器（9）
図版29　土器（10）

図版30　土器（11）
図版31　土器（12）
図版32　土器（13）
図版33　土器（14）
図版34　土器（15）・塼
図版35　軒瓦（1）
図版36　軒瓦（2）
図版37　軒瓦（3）
図版38　軒瓦（4）
図版39　軒瓦（5）
図版40　石製品（石造墓標）

付　表　土器観察表
表1　SK022
表2　SK021
表3　SK024
表4　SE011
表5　SD032
表6　SK023
表7　SE111・その他
表8　SE112
表9　SG361
表10　SX355
表11　SX352
表12　SX351
表13　SK421
表14　SD431
表15　SE411
表16　SK422
表17　SE511
表18　SK521
表19　SD531

表20　SK622
表21　SK621
表22　SK721
表23　SK722
表24　SX751
表25　SK822

1　調査の契機と概要

奈良女子大学が立地する現在の奈良市北魚屋西町とその周辺は、奈良時代の平城京左京（外京）二条六坊十一・十二・十三・十四坪と七坊三・四坪にあたる。

このため大学構内全体は平城京という周知の遺跡の範囲内に存在することになり、校舎建設に伴って地下の埋蔵文化財が破壊されると認定された場合は発掘調査が行われてきた。

1981年のE棟以来、本格的な調査を行ったのは1987年3月現在6箇所にのぼる。

このような大学構内中心部以外に、旧来からの敷地として裏やすらぎの道をへだてた西側の北小路町の一部が存在していた。平城京左京二条六坊五坪の東半中央にあたる。1987年ここに奈良地区国際交流会館が建設されることになったが、当該地は奈良時代の遺構のみでなく、古代から中世にかけての藤原氏の南都での宿所である佐保殿・梨原といった諸施設の関連遺構の存在が予想された。

そのため、埋蔵文化財の調査を大学で行うこととなり、臨時文化財調査室がその任にあたることとなった。

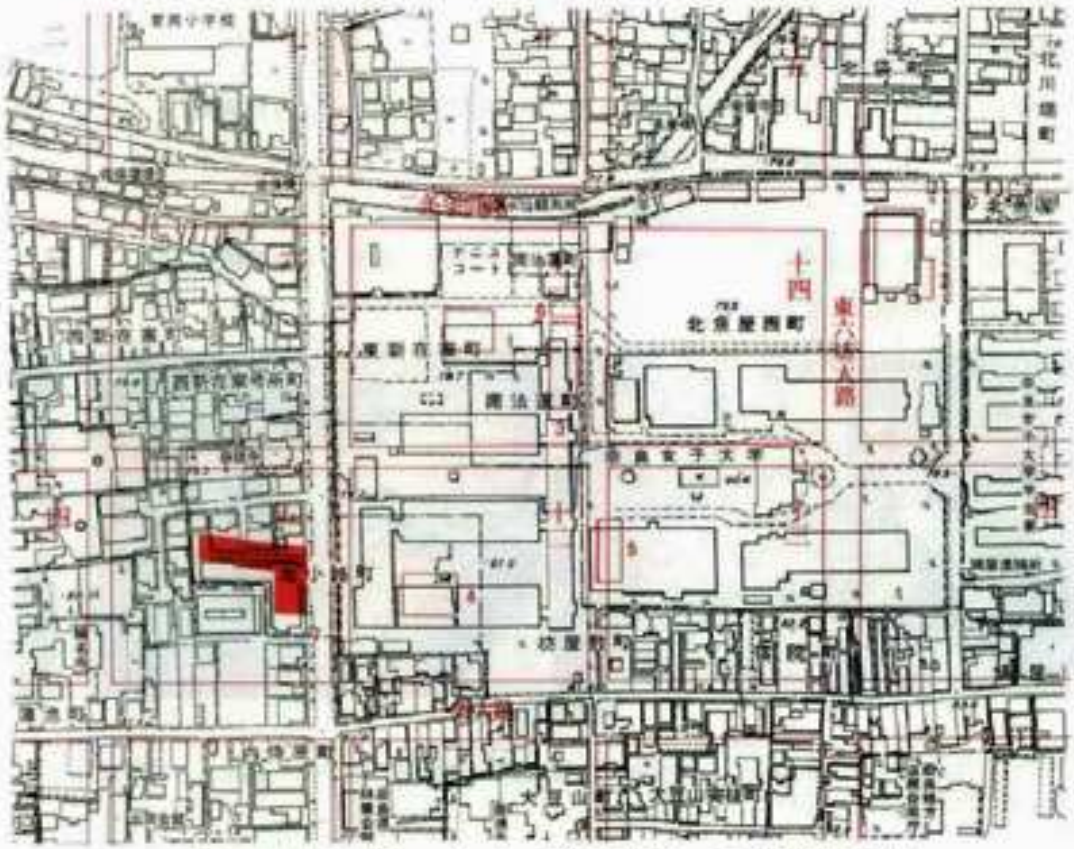


図1　調査地点位置図　　1～6　既往の調査地　　7　今回の調査地点

調査は７月27日に開始された。対象面積は798㎡である。古代から近代に至る各時期の遺構が検出されたが、残存状態が比較的良好で、上層の寺院遺構に伴う瓦の堆積の処理に時間がかかり、最終遺構面での空撮を終了したのは10月３日であった。

早くから田畠となった平城京中心部とは違い、外京部分は京以後も都市として存続し、中近世奈良町を経て現代の奈良に至っている。このような状況をふまえた都市遺跡としての構内調査と教育研究機関としてこれを行なう当大学の調査体制の充実が切に望まれるが、これらをどのようにして実現するかを今後の課題として考えさせられる発掘調査であった。

調査日誌（1987年７月27日～10月８日）

７月27日～28日　発掘調査地区の機械掘削。地表下110cm掘った所で、西北部・東北部で平安時代の瓦堆積確認。この面から遺構検出をはじめることにする。

７月29日～31日　排水のための側溝掘り下げと資材搬入。

８月１日～９月３日　基準点設定・地区杭打ち・上面の遺構検出・平板実測。

９月４日～22日　２箇所の瓦堆積の実測。下層の奈良時代の遺構の検出。

９月８日　記者発表。

９月12日　現地説明会。

９月23日～30日　瓦堆積を除去して遺構検出。奈良時代の遺構検出。井戸実測。

10月１日～３日　断面図作成。空中撮影の準備。

10月３日　ヘリコプターによる空中撮影。

10月４日～８日　断面図作成。井戸の実測。柱穴断ち割り。馬骨・井戸枠取り上げ。

10月８日　資材撤収して現場作業終了。

発掘調査風景

なお、発掘区内を地点明示のため西北部・東北部・東南部に分けた（図４）。本概要報告でもこの地区分けを用いている。

Ⅱ 遺 構

1 層 位

発掘区の本来の地形は東から西への緩斜面で、南北方向はほとんど高低差がないが、大きくは南から北に向って僅かに傾斜していたと考えられる。この傾斜面を奈良時代から平安時代初頭にかけて何度か整地しているが、その範囲と時期的な対応関係は充分明らかに出来ていない。平安時代末になると、瓦葺建物からなる寺院建立のため東と西を同一水平面にしようとする大規模な整地が行われる。この整地面をベースにして中世～現代の面がさらなる整地によって形成され、漸次高くなっていったことを発掘区東壁と南壁の土層観察によって知り得る。

地山（第1層）は砂礫混りの明黄灰色粘質土や明黄褐色粘質土から成っており、東から西に向って傾斜していて、発掘区内東西40mの間の比高差は 0.4mである。

この傾斜に沿って砂混り黄灰色粘質土・暗黄灰褐色粘質土からなる整地土（第2層）があり、奈良～平安時代前半と考えられる。第2層中には土師器・須恵器・製塩土器のほかに三彩陶器蓋・緑釉陶器・土馬（図2）等が包含されているが、整地の規模は大きくないようである。

この上に11世紀中葉以降に黄灰褐色粘質土（第3層）で整地を行っている。整地は西に行くほど分厚く、一定の敷地全体を均一の高さにしようとする意図がうかがえる。西北部東寄りでは、整地土中に馬の首が埋納されていた（SX354）。

この整地土の上面には多量の瓦・壁材・土器片を混じた焼土が、西北部南壁際と東北部東北隅に集中して堆積している。この焼土層は灰茶褐色砂質土（第4層）による整地が行われた際若干動かされているようである。この層の形成する遺構面は中世後期と考えられるが、上面の近世以降の撹乱が著しいため、断面では確認出来ない。

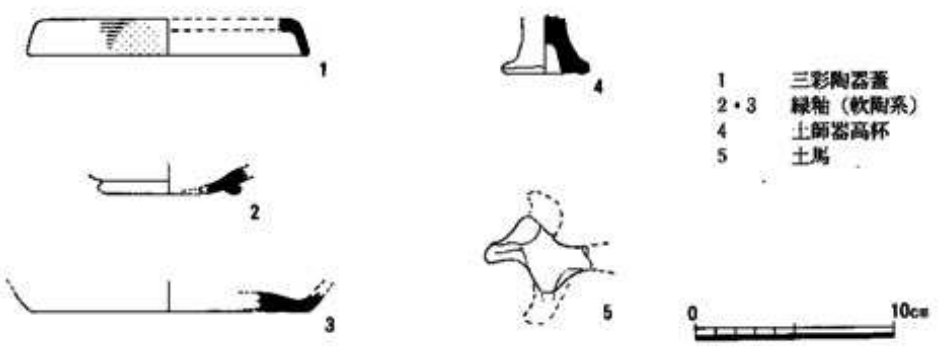


図2 第2層出土遺物

2　遺構と時期区分

検出した遺構は奈良時代から近代にまでわたっているが、層位との対応や主要遺構の時期区分に留意すると、A～Hの8時期に分けることが出来る（図3・4）。

A期

地山上に盛土整地を行って、建物・井戸・土坑・溝等が営まれている。この時期の遺構群は建物や溝の方向、柱穴の大きさ、出土遺物等の検討により、次のA_1・A_2・A_3の3小期に分けられると考えた。

A_1期

SB001　西北部中央壁際に並ぶ東西方向の柱穴3箇所を建物の一部と考えSB001とした。柱間は2.1m（7尺）で、SB002・003と柱筋を合わせており、相互の距離も等間隔（側柱心心間5.1m）で復原出来る。SB001を中心にSB002・003はコの字型配置を取ると推定した。このように考えると、SB001は桁行4間の東西棟で、柱間寸法は2.1m（7尺）等間である。柱掘形は1辺0.7～0.9mの不整形な方形で、柱痕跡が0.15～0.20mと掘形に比してやや小さいところから、廂部分の柱である可能性が大きい。

SB002　SB001の西側にある南北棟3間以上（6.3m以上）×2間（4.2m）の掘立柱建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに 2.1m（7尺）。柱掘形は不整形な方形で1辺0.6～0.9m。東南隅掘形は近世の土坑による攪乱で消滅している。柱痕跡は東側の列の2個を除いて確認され、南側では木柱も残存していた。

SB003　SB001の東側にある南北棟2間以上（4.8m以上）×2間（4.2m）の掘立柱建物。SB001・002と柱筋をそろえていて、SB002とは南端の線が一致する。柱間寸法は桁行2.4m（8尺）、梁間2.1m（7尺）。柱掘形は不整形の方形で1辺0.35～0.75m。すべてに柱痕跡が認められた。SB002・003とも軸線はN4.5° Wと西に振れている。

SK021　西北部西北隅にある長方形の土坑。東西3.5m、南北4.0m以上の平面プランで深さ約0.3mである。平城Ⅱ・Ⅲ期の土師器・須恵器と重郭文軒平瓦が出土した。

SK022　西北部東南隅やや西寄りにある東西に細長い大きな土坑。東西6.2m、南北2.4m以上で、深さは0.4m。埋土は上層が明灰褐色粘質土、下層が灰褐色砂質土。平城Ⅲ期の土師器・須恵器が出土した。

SK023　西北部中央やや西寄りにある不整方形の小土坑。東西1.0m、南北0.9m、深さ0.27m。坑底部ほぼ中央に須恵器高杯（第5図21）が投棄された状態で出土した。埋土中出土土器には土師器・須恵器・製塩土器があり、奈良時代前半の特徴を有している。

SD031　発掘区東南部北寄りにある東西溝で、一連の東西溝群のいちばん北にある。西側はSD531に切られており、さらに西に伸びるかどうかは明らかでない。残存部分の西端はやや南

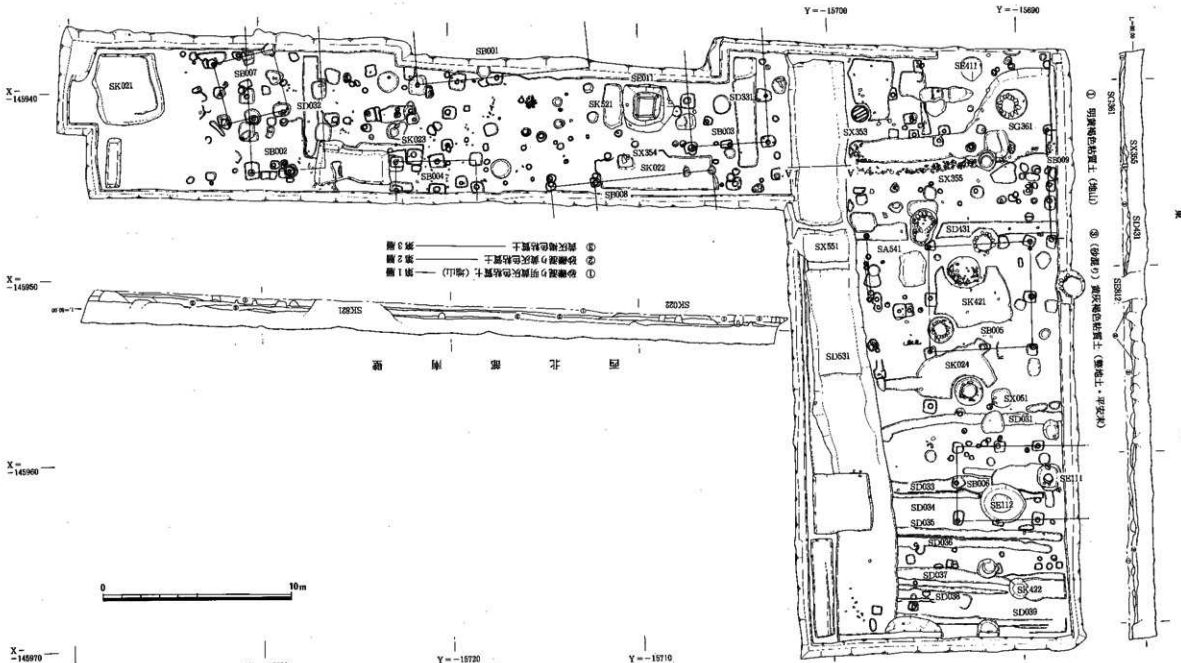


図3　遺構配置図、東壁・南壁土層図

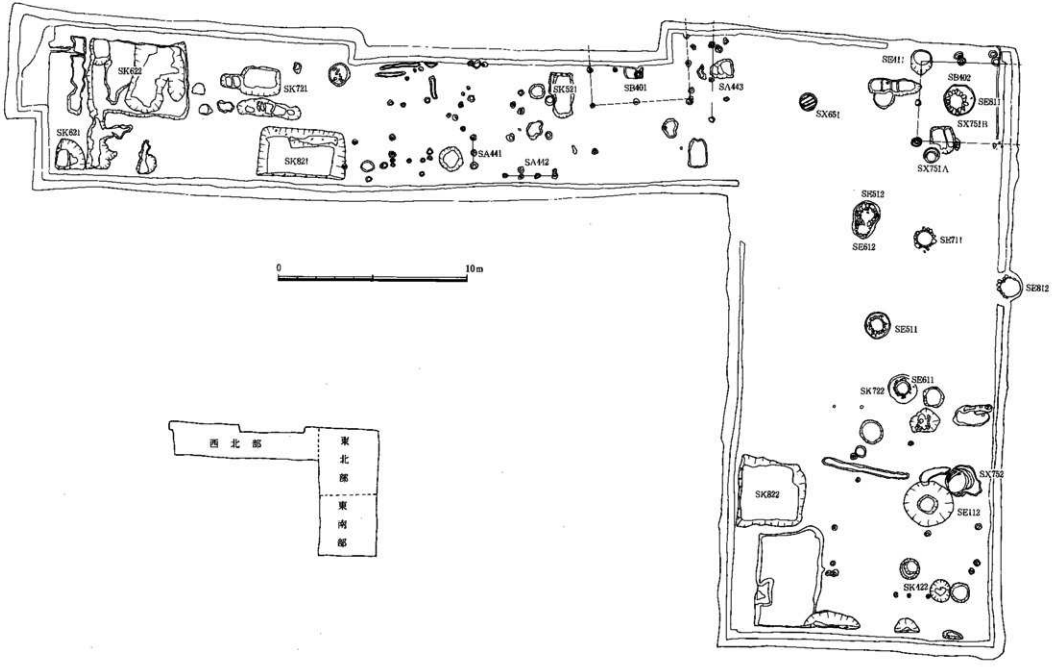

SK622
SK721
SK521
SB401
SA443
SX651
SB411
SB402
SB811
SX751B
SX751A
SK621
SK821
SA441
SA442
SX512
SE612
SK711
SE812
0
10m
SE811
SE611
SK722
SX752
SK822
SE112
SK422
西北部
東北部
東南部

図4　遺構配置図（D～H期）

に屈曲している。幅は0.5～0.7m、深さは0.11～0.17mである。埋土中から奈良時代の須恵器杯蓋・土師器杯等が出土した。須恵器杯蓋は奈良時代前半の様相を呈している。

A₂期

SB004　西北部中央南壁際にある東西2間（4.2m）×南北2間以上（1.5m以上）の掘立総柱建物。2間×2間の総柱建物になる可能性が強い。柱間寸法は東西方向が2.1m（7尺）、南北方向が1.5m（5尺）である。柱掘形はほぼ正方形（0.6～0.8m四方）で、深さは0.4～0.5mである。東北隅掘形を除いて柱痕跡が認められる。

SB005　東北部南半東寄りにある南北棟2間×2間（桁行5.4m、梁間5.4m）の掘立柱建物。梁間方向の中間の柱は北側が近世のSE711で消滅し、南側はSK024との前後関係を明らかに出来なかった。西側の桁行を北側に1間、南側に1間ずつ伸ばして柵列とし、東側の桁行を別の建物とすることも可能である。柱間寸法は桁行2.7m（9尺）、梁間2.7m（9尺）である。掘形はほぼ正方形（0.5～0.7m四方）で、深さは0.3～0.5m、桁行はすべての柱穴に柱痕跡を残し、東列の2箇所、西列の1箇所では木柱が残存していた。

SB006　東南部中央東壁際にある東西棟2間以上（4.2m以上）×2間（4.2m）の掘立柱建物。柱間寸法は桁行が2.1m（7尺）、梁間が2.1m（7尺）等間である。柱掘形はほぼ正方形（0.5～ 0.7m四方）で深さは0.4mである。柱痕跡は西北隅を除いて遺存しており、桁行南列のまん中のものは木柱が残存していた。

SE011　西北部東端北壁際にある方形横板組の井戸。東西2.1m、南北2.3m、深さ1.4mの掘形の底を1.0m四方にわたって0.3m掘り凹め、扁平な石や長さ0.4～0.7m、幅0.1～0.25m、厚さ0.05m前後の板切れで基礎を安定させ、その上に両端近くを四角く刳った長さ1.15～1.25m、幅0.13mの板材を矩形に組み合わせて、四隅の交点に太さ0.16mの円柱をおのおの立てている。さらに、横板を組み合わせたいわゆる井籠組みの井戸枠を外側に巻くようにしていたかあるいは内側に落し込むように組んでいたと考えられるが、側板部分が完全に抜き取られており、詳細な構造はこれ以上明らかに出来ない。円柱の残存高は約1.4mである。なお、基礎の板材のうちの2枚は組み合わせ部分以外にも刳り込み

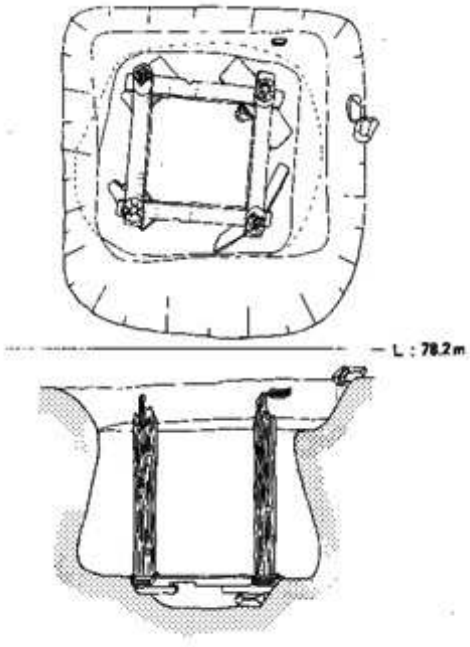


図5　SE011実測図（1／60）

があり、他の井戸枠部材あるいは建築部材からの転用と考えられる。また四隅の円柱にも枘穴があけられているものがあり、やはり建築部材の転用と考えられる。

掘形全体が袋状を呈しているのは、枠を抜き取るために本来の掘形を拡張した結果と考えられる。したがって、井戸枠内と掘形内の遺物を分けることは出来なかった。埋土内からはかなりの量の軒瓦・丸瓦・平瓦・塼とともに平城Ⅳ期の土師器・須恵器・黒色土器が出土した。瓦・土器ともに火熱を受けて赤変あるいは歪みを生じているものが多い。埋土中にも焼土がかなり認められた。(図5・6、図版5)

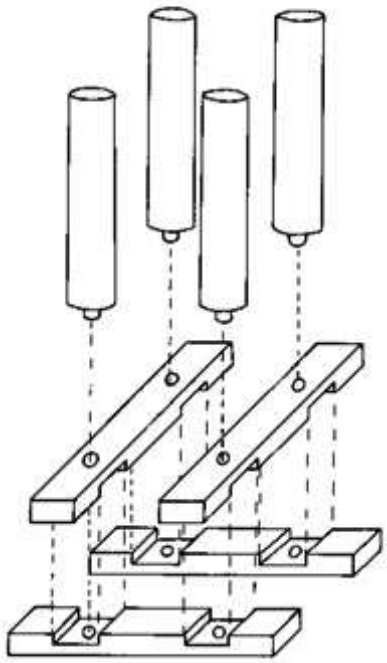


図6　SE011構造模式図（鈴木景二氏作成）

SK024　東南部ほぼ中央にある楕円形の土坑。東西4.2m、南北2.5mで西側に幅0.6mの溝状部分が付く。深さ0.8m。埋土は上層が明褐色土、下層が茶褐色土という具合に分けることが出来たが、出土土器に時期的な差は認められなかった。埋土からは平城Ⅳ期の土師器・須恵器・黒色土器が出土した。

SD032　西北部西半中央にある南北溝。南壁際やや北寄りで途切れている。幅0.8m、深さ0.16m。SB002の東側の柱穴を切って掘られていると考えた。埋土は暗灰色一層でレンズ状に堆積している。埋土中から奈良時代後半の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

SD033　東南部中央、SD031の南にある東西溝。SD034と形を接していて、西側はSD531で、東側は近世の攪乱で分らなくなっている。幅0.5～0.7m、深さ0.04～0.07mである。埋土中から土師器・須恵器の断片が出土したが、少量で年代の判るものはない。

SD034　SD033の直ぐ南に接する東西溝。東端は発掘区東壁際から1.5mのところで終っている。またSE112によって東端近くを分断されている。幅0.2～ 0.4m、深さ0.08～0.09m。埋土中から土師器・須恵器の断片が出土したが、奈良時代のものであること以外に詳しい時期は不明である。

SD035　SB006のすぐ南側に接する東西溝。SD036と形を接しており、西側はやはりSD531に切られている。幅0.35～0.5m、深さ0.08～0.10m。埋土中から土師器・須恵器の断片が出土したが少量であり時期不明。SD034から南に約1.7mのところにある。

SD036　SD035の南に接する東西溝。東端は東壁際より1.1mのところで完結しており西側はSD531に切られている。幅0.4～0.6m、深さ0.03～0.06m、埋土中から土師器・須恵器が出土しており、奈良時代前半の様相を呈している。

SD037　SD036の南約1.2mのところにある東西溝。東壁際より約3.0mくらいの所で途切れ、東端はSK422に、西側はSD531に切られている。幅0.4～0.7m、深さ0.05～0.11m。埋土中から須恵器・製塩土器が出土した。

SD038　SD037の南約0.3mとほとんど接するような位置にある東西溝。SK422の直前で途切れ、西側はSD531に切られている。幅0.15～ 0.3m、深さ0.02～0.05m。埋土中から土師器・須恵器が出土したがいずれも断片で、時期などの詳細は明らかでない。

A_2期

SB007　西北部西半北壁寄りにSB002と重複して存在する東西2間（3.0m）南北2間以上（3.0m以上）の掘立総柱建物。柱穴には前後関係があり、SB008同様2時期にわたると考えられる。柱間寸法は東西方向が1.5m（5尺）、南北方向が1.5m（5尺）である。掘形は不整形で大きさも一定していない（0.5～0.8m）。深さは0.4mである。柱痕跡は東三列以外は残存していたが、0.2mと掘形同様規模が小さい。

SB008　西北部東側南壁際にある推定東西3間（7.2m）の掘立柱建物。SK022の上層にあたり、遺構検出時に柱穴を分別することが出来なかった。また、南北方向は発掘区外にあたるため不明で、柵列の可能性もある。SB007同様に柱穴に前後関係があり、2時期にわたると見られる。柱間寸法は東西方向で2.4m（8尺）である。掘形は不整形で大きさも一定していない（0.3～0.5m）。柱痕跡はSK022の外側にあるものが明瞭であるが、残存状態はよくない。

SB009　東北部東壁際に南北に並ぶ柱穴3カ所を建物の一部の可能性があるためSB009とした。柱間寸法は3.0m（10尺）である。時期などは不明であるが、発掘区の東側には坪境小路の存在が想定されるため、関連した施設であることも考えられる。

SD039　東南部南端南壁際にある東西溝。東端は浅くなって消失するように終っており、西側はSD531に切られている。また南岸の一部も中世の土坑で切られている。幅0.35m、深さ0.06～0.11m。埋土中より平安時代前半の土師器が出土している。

SX051　東南部北東寄り、SD031の北岸にある埋甕遺構。本来は甕よりやや大きなピット内に埋納していたと考えられるが、対応する遺構面で検出することが出来ず、A_1期の面まで下げた時点で、甕だけが浮き上った状態で発見された。遺構の状況は平城京内で検出例が増加してきている胞衣壺と考えてよく、土器内の土を発見時に除去してしまい、銭貨の痕跡が土器内面に見られることと併せて非常に惜しまれる。

土師器甕（図7）は口径16.0cm、高さ12.4cm、胴部最大径15.2cm。やや細長い半球形の胴部

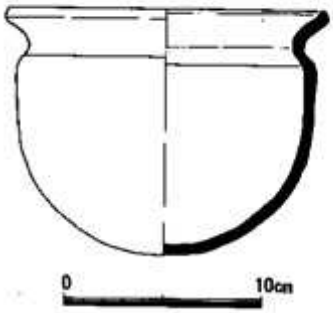


図7　SX051出土土師器甕

にくの字状に外反する短い口縁部がつく。胎土には0.5cm以下の白色あるいは桃赤色の砂粒を含み色調は灰白色を呈する。比較的硬質に焼成されているが、表面は磨滅のため調整は明らかでない。底部内面に銭貨の付着痕跡と見られるものが3箇所認められるが、その所在は明らかでない。

以上がA期のなかの各小期（A_1・A_2・A_3）の遺構の主なものであるが、各々の年代をおおよそ示しておくと、A_1が奈良時代前半、A_2が奈良時代後半、A_3が平安時代前半に比定されよう。

B期

奈良時代の整地の上にさらに整地を行って、井戸を中心とした遺構が営まれている。しかし整地の範囲は部分的で、東北部・東南部には見られるが、西北部では見られない。

SE111　東南部中央東壁際にある井戸。1辺約1.0mの隅丸方形の掘形の中央をさらに掘り凹めて、直径0.4mの曲物を据えている。曲物は桶の底を抜いて転用したもので、最下段は一部欠損しているだけであったが、それより上段は近世の土坑で破壊され断片しか残らない。掘形と井戸枠内から11世紀中葉の瓦器椀・黒色土器椀・土師器皿などが出土した。

SE112　SE111の西南1.1mのところにある井戸。井戸枠は抜き去られていたが、直径2.4m、深さ0.35mのスリバチ状土坑の底部をさらに直径1.1m、深さ0.36mにわたって掘り下げるという形態から井戸と判断した。上層は灰褐色粘質土、下層は暗灰色砂質土であるが、最下層は灰色砂質土になる。下層と最下層の間に木製品・木片が特に多く出土した。これら埋土中から12世紀中葉の瓦器椀・土師器皿・土師器土釜が出土した。

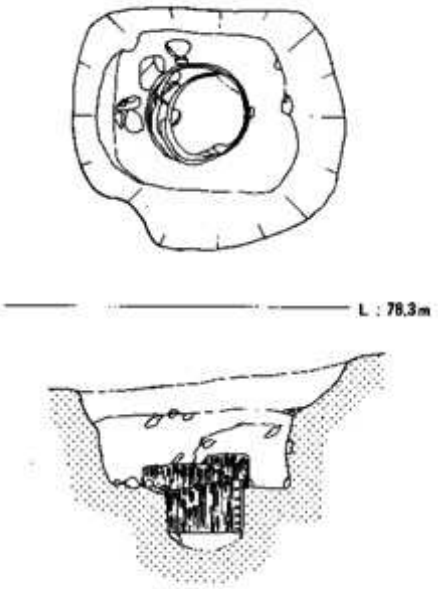


図8　SE111実測図

B期の実年代は11世紀中葉～12世紀後半と考えられるが11世紀代の遺構は希薄であり、12世紀の遺構もC期に移行していく過渡的な意味をもつものと考えられる。

すなわち、このほかのB期の遺構は新しい段階（12世紀中葉～後半）になると、東南部でSE112と一連のものと考えられる土坑群が検出されたが、次の段階になると東北部南半にピット・小土坑が集中している。多くは完形の瓦器椀・土師器皿が数点程度見られ、投棄というよ

りは意図的な埋納をうかがわせる出土状態である（図版7）。このようにC期に近くなるにしたがって遺構群の中心が東南部から東北部に移行していくことがうかがえるのである。

C期

東から西に傾斜していた旧地形上に大規模な盛土整地を行って均一な面にし、その上に瓦葺建物からなる寺院を中心とした諸施設が営まれている。寺院に伴う瓦や土器・壁材は火を受けているものが多く、この時期の遺構は火災に際して廃絶したと考えられる。

SD331　西北部東端、SB003と重複して存在する南北溝。南壁から北へ1.8mの所で終っている。幅1.2m、深さ0.14mで、北壁際で段をなして深くなっている。埋土は上層が暗灰色粘質土、下層が灰色砂質土で、13世紀後半の瓦器椀・上師器皿や平安時代後半の軒平瓦が2点出土した。

SG361　東北部北寄りで東壁外に伸びていく池。東壁際での幅4.4m、深さ0.35mであるが、西に長さ6.0m、幅1.2m、深さ0.23mの溝状部分がつく。埋土は暗灰色粘質土であるが、溝状部分ではSD331と同じ灰色砂質土が見られる。埋土中から13世紀後半の瓦器椀・上師器皿や瓦片・漆器椀が出土している。SD331とともに基壇状遺構SX353を形成していると考えられる。また、南岸にはある時点での護岸SX355が築かれている。

SX355　池SG361の南岸に築かれた護岸施設。拳大から人頭大の石・瓦片・細かく砕いた土器片を明黄灰色の粘土でつき固めている。東壁土層断面の検討によれば、SG361がある

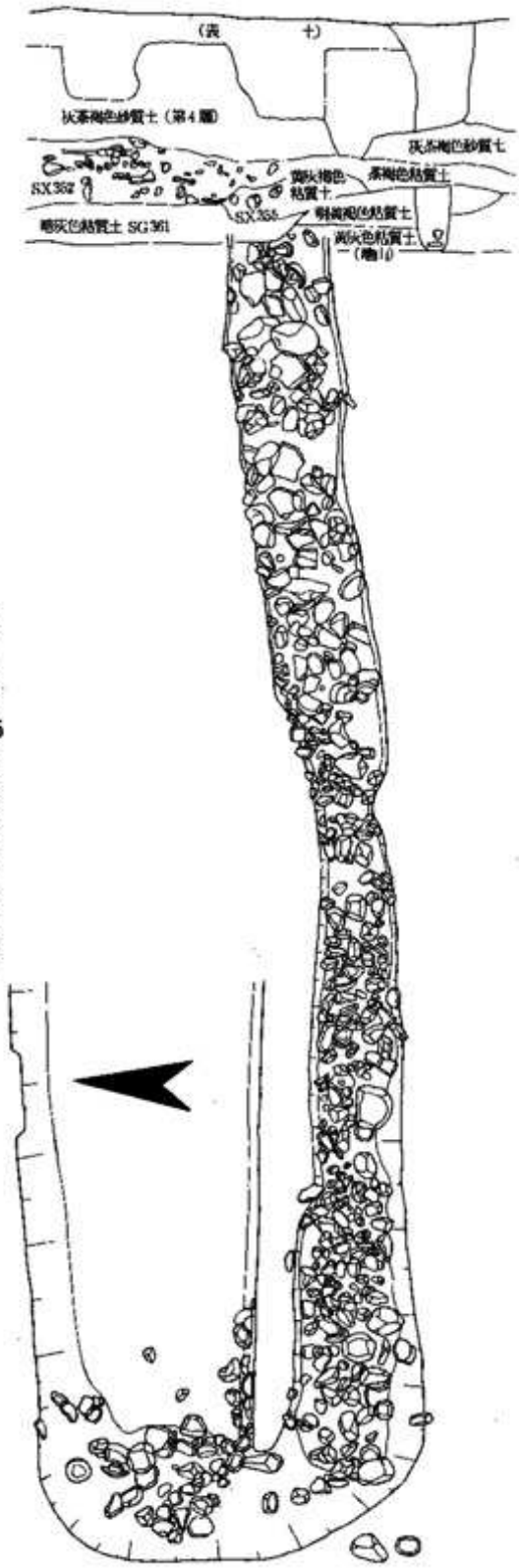


図9　SX355と東壁土層図（1／40）

程度埋没した時点で築かれている（図9）。13世紀後半の瓦器椀・土師器皿や中国製青磁片が出土している。SG361と時期的な差異は認められない。

SX351　西北部中央から南壁外にひろがる瓦の堆積。東西5.0m、南北6.5m以上のひろがりをもつ。瓦以外にも多量の焼土、破砕した壁材、土器片を混じている。このような状況から、瓦葺建物が火災に遭って倒壊した結果の堆積と考えた。しかし、倒壊時の状況をそのまま残しているかどうかは検討の余地がある。焼土の厚さは0.15mで、これを除去しても瓦片を含む数個の小穴以外、顕著な遺構は検出されなかった。混じていた土器は瓦器椀・火鉢・土師器皿・中国製輸入陶磁器などである（図10）。

SX352　東北部北半東寄りから発掘区外にひろがる瓦の堆積。東西・南北とも6.0m以上のひろがりをもつ。堆積の厚さは東壁断面では0.2mである。SX351同様、焼土・壁材・土器片

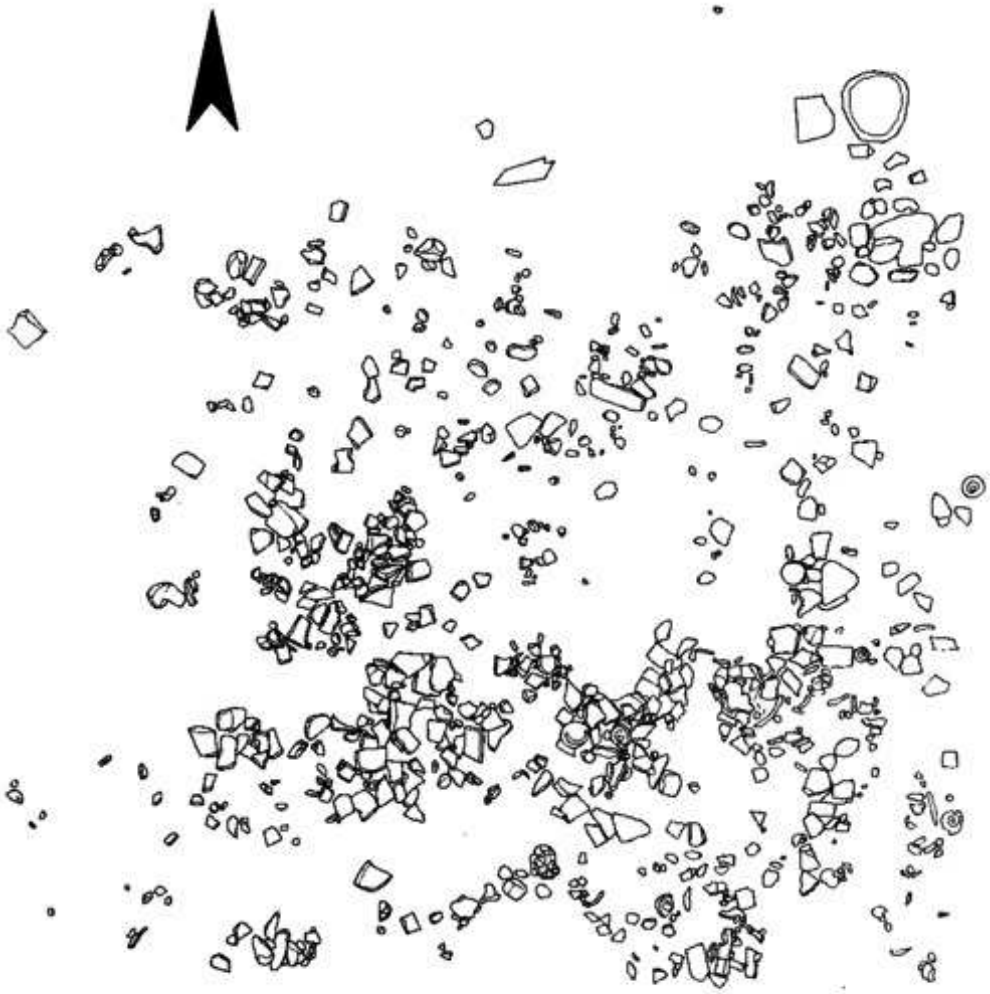


図10　ＳＸ351平面図（1／40）

を多く混じていた。また、炭化した木材も認められた。これらのことから、やはり瓦葺建物が火災により倒壊した結果と考えたが、堆積中に次のD期以降の土器も僅かながら含まれており、D期以降の整地に際して、倒壊時の堆積を若干動かしている可能性もある（図11）。

SX353　SX352の下層、SD331とSG361で区画された基壇状の遺構。東西10m以上、南北4.5m以上で発掘区外に及んでいる。全体に地山部分が高く残されており、東端（東北隅）でのSG361の底との比高差は0.3mである。しかし、それ以外の部分は、中央部が中近世の遺構、西側がSD531に切られていて、細部の状態を明らかにすることが出来ない。

SX354　西北部東側、SE011の南の南壁寄り、SK022の上層にあたる整地層（第3層）中に馬の首が埋められていた。首は北北西の方向に向き、下顎骨を残すのみであったが、歯や骨格部分の残存状態は良好である。掘形を周辺で検出できなかったことから、整地に際しその途上

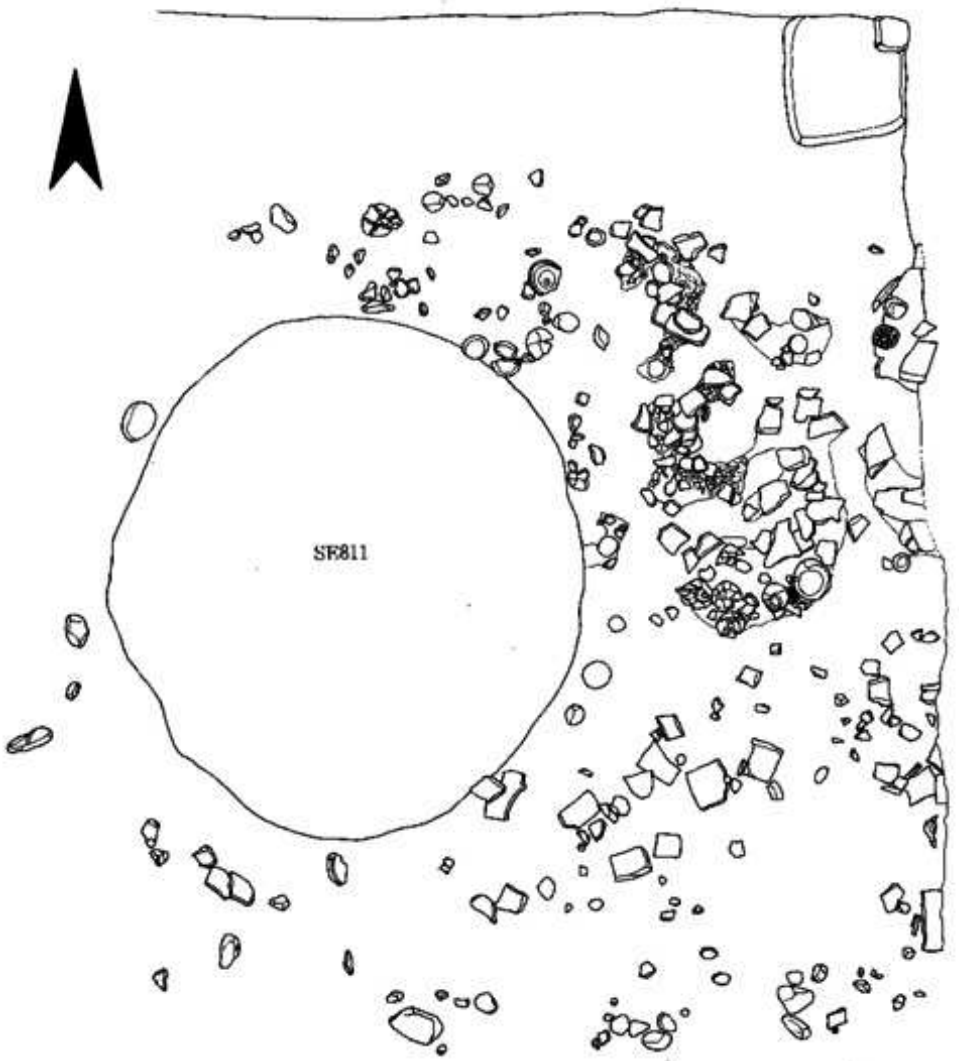


図11　ＳＸ352平面図（1／40）

で埋められたと考えられる。

以上のC期の遺構の実年代は、おおむね12世紀末～13世紀に比定されよう。

D期

火災のあとを片付け、部分的に整地を行って、その上に建物・井戸・溝・土坑等が営まれる。

SB401　西北部東端の北壁際にある東西2間（5.1m）、南北2間以上（3.3m以上）の掘立柱建物。南北方向の建物と考えられる。柱間寸法は桁行が1.5m（5尺）・1.8m（6尺）、梁間が2.4m（8尺）・2.7m（9尺）と一定していない。掘形は円形（直径0.2～0.3m、深さ0.15～0.27m）で、埋土はいずれも灰褐色粘質土である。

SB402　東北部東北隅にある南北2間（4.2m）、東西2間以上（4.2m以上）の掘立柱建物。柱間寸法は南北方向が2.1m（7尺）である。掘形は円形（直径0.3～0.4m）で底に扁平な石を1枚ないし2枚（重ねて）敷き、柱の安定を保っているのが特徴的である。

SA441　SB401の西にある2間の掘立柱南北塀。1.5mの間に3本の柱が等間隔に並んでいるが、さらに北に延伸される可能性がある。掘形は円形（直径0.3m、深さ0.15～0.20m）である。

SA442　SB441の東、南壁際にある3間の掘立柱東西塀（2.7m）。SA441とは逆L字状を呈するように配されている。柱間寸法は0.9m（3尺）等間である。掘形は円形（直径0.25～0.3m、深さ0.07～0.18m）である。

SA443　SB401の東に接する2間以上の掘立柱南北塀（4.0m以上）。柱間寸法は1.8m（6尺）・2.1m（7尺）と不ぞろいである。掘形は円形（直径0.2m、深さ0.07～0.12m）、埋土は暗灰褐色粘質土で焼土混りである。最南端の柱穴では咸平元宝が出土した。

SK421　東南部北半中央東寄りにある不整矩形の土坑。東西4.0m、南北3.4mで、一部分を近世の井戸SE511や土坑で切られている。深さは0.27mで底は平坦である。埋土から14世紀前半の土師器皿、中国製輸入磁器が出土した。

SD431　東北部と東南部の境界にある東西溝。残存長10.6m、幅0.6～1.0m、深さ0.07～0.11mであるが、東は発掘区外に延び、西はSD531で切られている。SD531とぶつかる北側で土坑状をなして拡大しているが、性格は不明である。埋土は暗灰褐色砂質土で、14世紀後半の瓦器・土師器皿・土師器土釜・土師器鍋が大量に出土した。

SE411　東北部北半中央の北壁際にある井戸。掘形の直径1.1m。検出面から1.5m掘り下げ、発掘終了時に周辺を下げてさらに2mばかり掘り下げたが、底に至らず井戸枠の有無を確認出来なかった。時期的にみて円筒形石組の井戸であったと考えられる。埋土は上層が灰褐色粘質土と砂質土が混ざり合ったもので下層が灰色粘質土である。埋土中からは15世紀後半の土師器皿・土釜、瓦質土器火鉢、中国製輸入磁器、国産陶器のほか軒瓦・丸瓦・平瓦が大量に出土した。

SK422　東南部東南隅にある円形土坑。直径1.0m、深さ1.25mで、形状から井戸の可能性もある。埋土は暗灰色砂質土で、15世紀後半の土師器皿・瓦質土器火鉢等が出土した。

D期の実年代は、おおよそ14・15世紀に比定されよう。

E期

東北部から東南部を貫く南北大溝SD531が掘削される特異な時期である。D期との間に断絶があるので、整地の有無は明らかでない。当該期の遺構はSK521以外はSD531の東側に偏る傾向がある。

SD531　東北部北壁の発掘区外から東南部南端に至り、南壁の発掘区外に伸びる南北方向の大溝。真北よりやや西に偏している。検出した長さ31.5m、幅2.7～3.3m、深さ0.07～0.72mで、南に行くほど浅くなっている。西北部溝内中央南寄りでの断面（図3A－A'）の検討によれば、溝底近くの自然堆積と考えられる明灰色砂質土以外は人為的かつ短期間に埋められたもので、東西両側から投ぜられていることが判る。さらに最上層は次のF期の遺構のための整地土（暗黄褐色砂質土）が比較的厚く見られる（図12）。護岸などの施設は認められず、当初から素掘り断面逆台形であったと考えられる。埋土から古代から近世に至る時期の土器や墓標石造物、銭貨等が出土した。土器は付近の包含層や遺構のものと接合したり同一個体と考えられるものが多く、埋め戻しに両岸近くの土を使用したことを伺わせる。あるいは、土塁に盛り上げていた土を使った可能性もある。

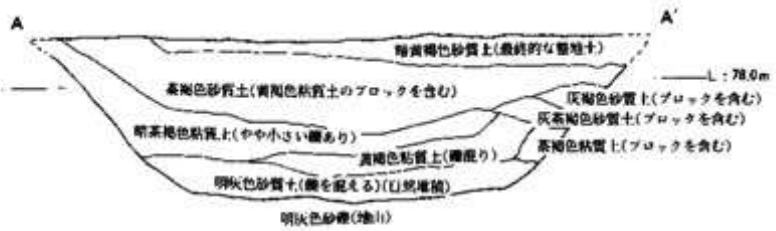


図12　SD531断面土層図（1／40、図3A－A'北壁）

SX551　SD531中の東南部西北隅にあたる部分で、南北2箇所地山が橋状に掘り残されている部分が検出された。北側のものの基底幅0.7m、上端の幅0.4m、南側は基底幅1.1m、上端の幅0.4m、両者の間の距離は1.3mである。SA541と組み合って、この場所に橋状施設の存在を想定した。

SA541　SX551の東側、SD531の東岸に沿って存在する南北方向の柱列。底に石を据える柱穴を両端に、北から1.5m（5尺）・1.8m（6尺）という2本1組の柱穴が南北に連なって並ぶ。南北両側に土塁を想定すれば、この部分が橋に続く出入口となるが、SX551との関連を考えれば、橋状施設の一部ともすることが出来よう。

SE511　東南部北半中央にある円筒形石組の井戸。拳大かやや大きな石を主として使用し、人頭大の石を所々にまじえる。内法直径0.6m、検出面からの深さ0.75mと比較的浅い。埋土から17世紀前半の国産陶器・土師器皿・瓦質土器が出土した（図13）。

図13　ＳＥ511実測図（１／40）

SE512　東北部南端中央でSD431と重複する円筒形石組の井戸。南側をSE612で切られている。人頭大の石を中心に構築されているが、石造五輪塔の空輪や風輪を５個体以上転用しているのが特徴的である。内法直径は0.8ｍで、高さは0.5ｍしか残存していない。遺構面の高さから考えて、本来の高さは１ｍ前後であったと考えられる。埋土から中世後半～近世初頭にかけての土器が出土したが、年代をより明確に出来る資料はない（図14）。

SK521　SE011のすぐ西に接する南北に細長い土坑。北側は発掘区外になる。幅1.6ｍ、深さ0.6ｍ。埋土から近世初頭の国産陶器（唐津焼）が出土した。

このほか、Ｄ期のSB402もこの時期に下る可能性がある。

Ｅ期の実年代は下限を砂目積唐津皿の時期とし、17世紀前半であるが、上限はSD531の掘削された時期とともに明らかに出来ていない。SD531は最上層の整地土である暗黄褐色砂質土中に近世の土器や寛永通宝を含んでおり、近世前半の町並み形成に伴う整地で最終的に埋められたと考えられる。また、埋土中出土遺物で近い時期のものでは李朝の白磁碗があるが、16世紀前半までさかのぼるものはない。このようなことと、時間的に短期間であると推定したことなどから、上限をいちおう16世紀末とした。

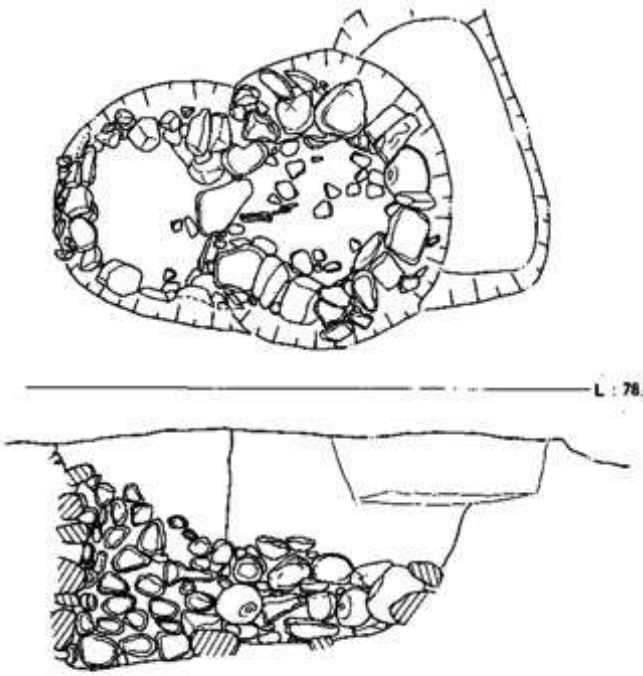


図14　ＳＥ612・ＳＥ512実測図（１／40）

Ｆ期

SD531を埋め立て、東北部を中心に一帯を暗黄褐色砂質土で整地している。この上に近世奈良町の町屋が展開していくわけであるが、次のＧ期に存在した墨屋および製墨施設がこの時期までさかのぼるかは明らかでない。

SK621　西北部西南隅の壁際と発掘区外にひろがる土坑。壁際で東西 1.5m、南北1.5m、深さ0.84m。輪郭は弧を描き、急に深くなっていて井戸の可能性もある。埋土は上層が礫まじりの灰色砂質土、下層が灰褐色粘質土で、17世紀初頭から後半にかけての土器が大量に出土した。

SK622　西北部西北隅寄りにある方形土坑。北壁外にひろがってゆく。東西5.0m、南北4.0m（以上）、深さ0.5mであるが、底は凹凸がはげしく、浅い部分が多い。埋土は暗灰褐色粘質土で、17世紀初頭から後半にかけての土器が出土した。性格はゴミ捨て穴と考えられ、付近にはG期のSK721 をはじめとして、同じ性格の土坑が多い。

SE611　東南部中央やや北寄りにある円筒形石組井戸。上半部をG期に墨製作工房の油煙受けを投棄した際の土坑SK722で破壊されている。残存部分の内法 0.8m、高さ0.55m、検出面からの深さ1.4mで、井戸としては浅い。人頭大でやや扁平な石を多く使っている。井戸枠内にも油煙受けが大量に落ち込んでいるので、出土土器から時期を明らかに出来ないが、SK722以前とすることは出来よう（図15）。

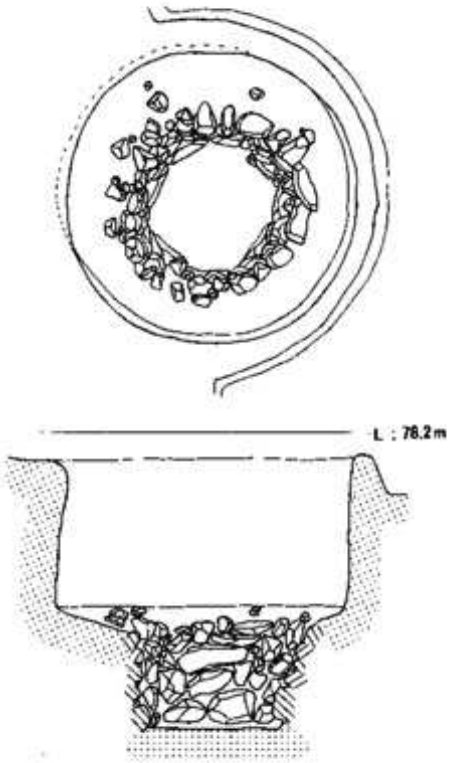


図15　SK722・SE611実測図（1／40）

SE612　東北部南端中央のSE512の南側に接する円筒形石組井戸。SE512の石組みの一部を破壊して造られている。基底部に人頭大の扁平な石を置き、その上に拳大から人頭大よりやや小さな石を積み上げている。残存部分の内法 0.5m、高さ1.0m、検出面からの深さ1.2mで、浅く小規模な井戸と言える。埋土から図16の瓦質土器擂鉢ほか近世前半の土器が出土した（図14）。

SX651　東北部中央西よりのSD531際で、径1.0m弱の円形掘形中に径0.85mの木桶を据えている遺構である。木桶は底部しか残存せず、5枚の細板を組み合わせて円形に形造っている。底部を除去すると0.1m弱の灰褐色の砂が敷き詰められていた。桶を据えるための土坑内の埋土も灰褐色砂質土である。性格は、類例から推して、トイレと考えられる。

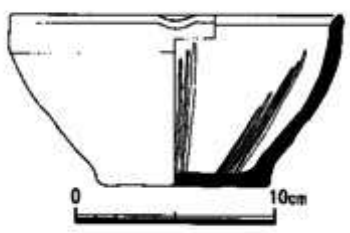


図16　SE612出土擂鉢（1／4）

F期の実年代は、井戸からの資料で良好なものがない

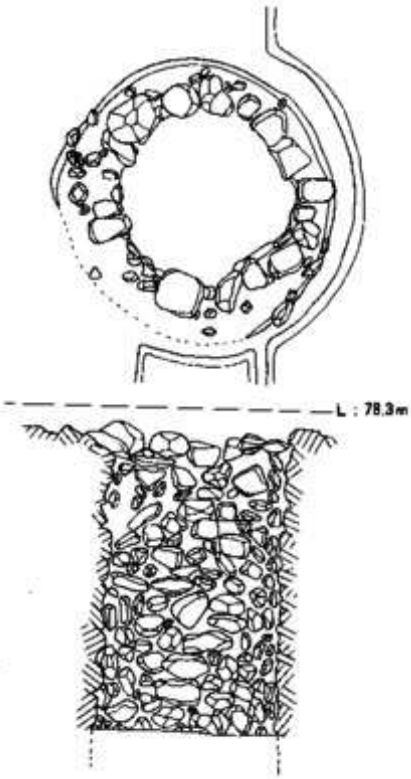


図17　ＳＫ711実測図（１／40）

ため、下限を明らかに出来ない。２つの土坑出土遺物の中心時期と町屋の存続期間とを考慮して、いちおう17世紀後半としたが、Ｇ期の上限とともに検討すべき問題を残している。

Ｇ期

町屋が発展を見せ、墨屋および製墨施設が遺構の中心となる。この墨屋は18世紀中葉まで存続した。

SK721　西北部西半北寄りにある土坑。東西2.0ｍ、南北1.5ｍの方形土坑の西側に1.0ｍ×0.8ｍの突出部分がつく。深さは中心部で0.28ｍである。埋土は暗灰褐色砂質土で、近世の瓦や18世紀前半～中葉の土器が出土した。

SE711　東南部北端東寄りにある円筒形石組井戸。検出面から1.5ｍの深さまで掘り下げたが、完掘していない。人頭大の石を中心に構築されている。内法の直径0.85ｍ。埋土中から近世の土器が出土したが量は少ない（図17）。

SK722　東南部中央やや東寄りにある円形土坑。掘削にあたってＦ期の井戸SE611を破壊している。直径1.5ｍ、深さ0.8ｍで、全体は円筒形を呈している。埋土はほとんどが土師器油煙受けであり、そのほかは焼土・炭・灰と若干の近世後半の土器であった（図15）。

SX751　東北部中央東寄りにある１組の土坑。１辺1.2ｍ、深さ0.8ｍの隅丸方形の土坑（SX751Ｂ）を径0.8ｍ、深さ0.2ｍの円形土坑（SX751Ａ）が切っているが、両者から出土した土器がかなり接合したため、同一性格の一連の土坑と考えた。またSX751Ｂから出土した磁器がSK721のものと接合したことから、両者の同時廃棄が裏付けられたと言える。

SX752　東南部南半東寄り、SE111の東北に接する箇所で径1.8ｍの不整円形の掘形の西隅に樹皮を束ねて径1.1ｍの円形に組んだ遺構。性格は不明であるが、円環状の南端やや東寄りに木柵が１点置かれていた。この遺構を造るにあたって下層のSE111を破壊しており、掘形内からは近世後半の土器が出土している。

Ｇ期の年代はおおよそ18世紀前半～中葉と考えられるが、Ｆ期と連続する可能性も残されており、下限も18世紀後半に下る可能性がある。

Ｈ期

墨屋および製墨施設は廃絶し、新たな町屋が形成されるが、その性格は明らかでない。しか

し、SK821の大量の瓦やSK822の豊富な近世・近代の陶磁器によって、その生活の豊かな一面を伺うことが出来る。

SK821　西北部中央南壁際から発掘区外にひろがる方形大土坑。東西4.5m、南北2.5m（以上）、深さ0.7mである。上層は暗灰色砂質土で瓦・竹の根・木片などを多く含み、下層は灰色粘質土で遺物はあまり多くない。断面は逆台形で同じような傾斜がつくように計画的に掘削されている。なお、北側の土坑内斜面に木や竹の杭を8箇所打ち込んでいた。埋土からの出土遺物はほとんどが近世瓦で、土器は僅小であるが、19世紀前半の特徴をもったものが多い。

SK822　東南部南寄り西壁際から発掘区外にひろがる方形大土坑。E期の南北大溝SD531を切っている。東西3.5m（以上）、南北3.5m、深さ0.67mである。SK821同様、形態を考えて計画的に掘削されている。埋土から18世紀後半から19世紀にかけての土器が大量に出土したが、時期的な中心は19世紀前半、いわゆる幕末期である。

SE811　東北部の東側中央にある円筒形石組井戸。検出面から1.5mの深さまで掘り下げたが、完掘していない。内法の直径は0.7mで、大部分が人頭大の石を積み上げて構築されてい

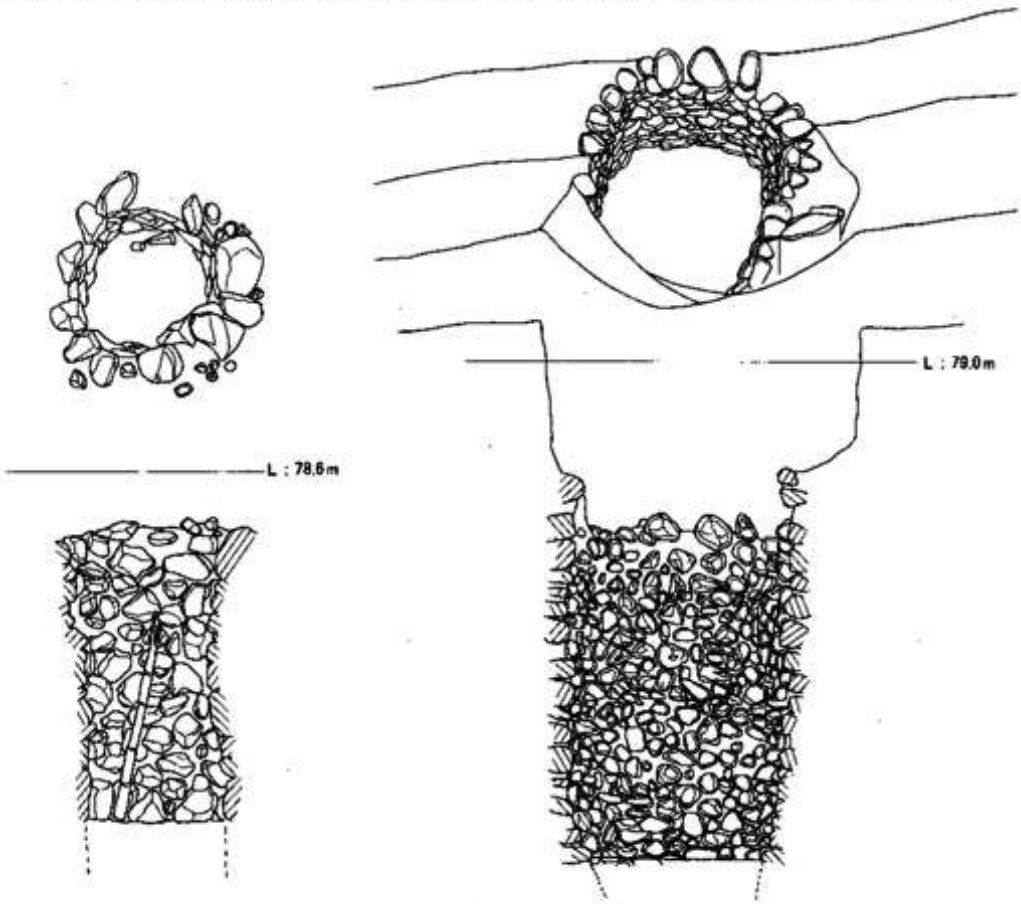


図18　SE811・SE812実測図（1／40）

る。井戸を埋める際に節を抜いた竹を立てているのが特徴的である。埋土中から近世～近代にかけての土器が出土した。(図18)

SE812　東壁上の中央よりやや北寄りにある円筒形石組井戸。検出面から2.8mの深さまで掘り下げたが、完掘していない。内法の直径1.1mで、拳大から人頭大よりやや小さな大きさの石で構築されている。埋土内出土遺物はC期のSX352にあった瓦・壁材・土器・焼土ばかりであるが、近代のスレートを僅かに含んでいるのでこの時期に入れた（図18)。

H期の年代は18世紀後半～19世紀である。下限についてはさらに詳細な検討が必要である。

3　小　結

まとめに代えて、実態が比較的明らかな主要時期の遺構変遷の概略についてふれておきたい。

A期は奈良～平安時代初頭であるが、遺構変遷からは3つの時期に分けられた。A_1期は東西棟SB001の東西に南北棟SB002・SB003が規則的に配されると考えたが、SB001が想定通りの建物であるとするとその中心軸は、概算であるが、坪（左京二条六坊五坪）を東西に2等分した場合の宅地割中心線と一致する可能性が大きい。また、SD031を坪内を南北に区画する施設であるとすれば、5坪内東半は、東西方向は坪の半分を占め、南北方向は宅地規模によっていくらかに分割されていたと想定されよう（図19－上)。A_2期は東側に坪境小路に接するようにして南北棟SB005と東西棟SB006、西側に倉庫と考えられるSB004、両者の間に井戸SE011が存在する。このような建物配置はA_1期とは大きく異なると言えるが中心部分を明らかにしていないので、これ以上の様相の比較は困難である。ただ、この時期の南北溝SD032は、区画施設であるとすると、一坪を東西に3等分した時の地割に関連する可能性があり、少なくとも奈良時代を通じて五坪内では規則的な宅地割りが施行されていたと言えよう（図19－下)。

C期の遺構は、瓦葺き建物（寺院？)・ピット群が存在した東北部および西北部と遺構の希薄な東南部に分けられる。東南部はB期から井戸・土坑が多く、西北部・東北部に比べて日常生活の場としての色彩が濃い。このように発掘区南半と北半との間に境界を意識する傾向は以後の時期も踏襲され、D期のSD431は区画施設の可能性がある。またD期後半（15世紀）のSE411とSK422の出土遺物の相違はやはり北半が遺跡の目的域であり、南半が日常生活の営まれる機能域であったことを示している。

このような南半と北半に境界を認める意識が消滅したのは次のE期の南北大溝SD531の掘削によってである。SD531の存在はこの地域の遺構の大きな画期の指標となるものとして意義深いと言えよう。

F・G・H期は江戸時代と近代初頭である。G期には墨屋と墨製作工房が存在したが、他の時期の町屋の性格および細かな時期変遷は未だ充分に検討していない。しかし、道路を発掘区

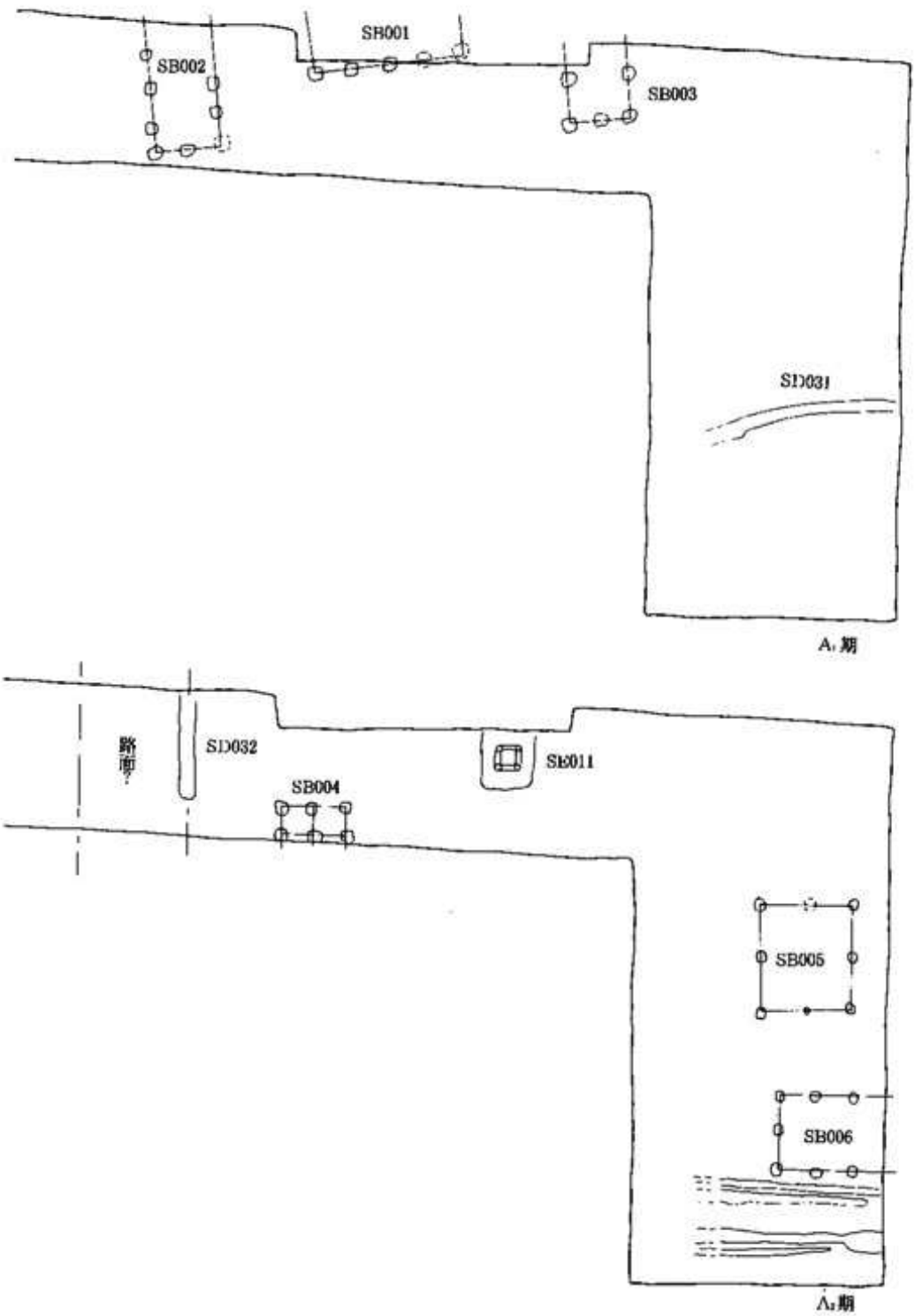

SB001
SB002
SB003
SD031
A1期
路肩
SD032
SE011
SB004
SB005
SB006
A2期

図19　A期の遺構変遷

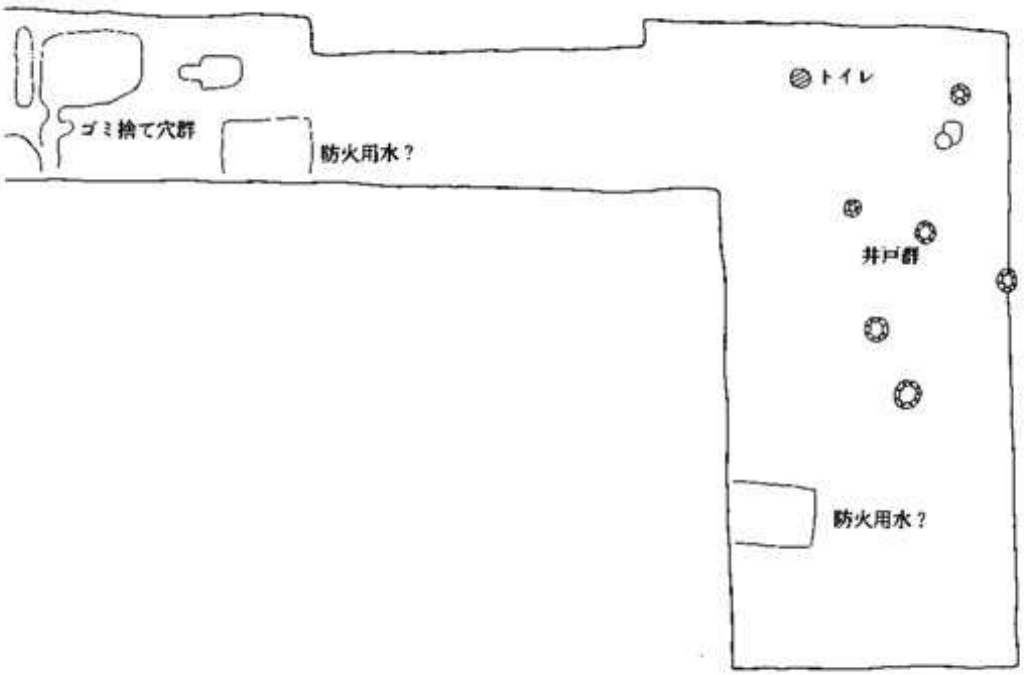


図20　F・G期の遺構配置

のすぐ東側、かつての坪境小路と同じ位置に考え、これに面して玄関たる出入口があったと考えると、発掘区内の居住空間においての日常生活に関連した遺構が一定の法則性をもって分布していることが判る。すなわち、F期では道路に近い東北部や東南部北半にSE611・SE612といった井戸が集中し、生活廃棄物の捨て場たる土坑は、SK622・SK621のように、西北部西半に見られる。また、次のG期でもSE711やSX751をはじめとする生活関連の遺構は東北部から東南部にかけて集中し、ゴミ捨て穴はSK721を中心とする土坑群が西北部西半に見られるのである（図20）。

このようなことから、発掘区東北部東南部は居住空間で東側に玄関があり、井戸は玄関近くにあって、これらから西に離れた家屋の背後は空地になっていて、ゴミ捨て穴が多く掘られたと推定される。次のH期もSE811・SE812の存在から発掘区東半が居住空間であったことは変りないが、ゴミ捨て穴は西半には見られず大土坑SK812・SK822がこの役割を果たしたと考えられる。2つの大土坑は最初からゴミ捨て穴として掘られたものではなく、空間利用のあり方が、この時期になると変わってきていることが伺える。

Ⅲ　遺物

出土した遺物には土器・瓦・木製品・木簡・金属製品・石製品等があり、古代から近代に及んでいる。このほか、鹿角・馬頭骨といった動物遺体があり、いずれも時期が明らかな資料である。

1　土器（第1～30図、図版20～34）

奈良時代から明治時代までの土器が主として出土した。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・国産陶磁器・中国製輸入陶磁器・朝鮮王朝製磁器がその内容である。井戸・土坑などの遺構ごとの出土遺物を略述するが、各々の詳細は観察表に拠ることにし、ここでは一括遺物としての様々な意義について述べることにする。

SK022出土土器（第1・2図、図版20）　土師器は杯C（第1図1～17）が多い。しかし、杯A（第1図19～21）・皿A（第2図2～4）ともに二段暗文や連弧状暗文が見られないことは平城Ⅲ期の様相が強いと言える。これらはいずれも磨滅が著しく杯A・皿Aの暗文が明瞭でない。さらに鍋B（第1図24）や甕A（第2図8）のように平城Ⅰ・Ⅱに後続あるいは近い形式のものが見られることから、平城Ⅲをややさかのぼる時期と考えられよう。このことは須恵器の鉢（第2図16）の残存や、口縁端内面肥厚の明瞭な甕A（第2図17）の存在とも矛盾しない。

SK021出土土器（第3図1～7、図版20）　第3図2の杯Aはやや古い様相を示しているが3の杯A底部外面、1・4の皿A底部外面にb手法が見られることから、平城Ⅲ期に比定するのが妥当であろう。

SK024出土土器（第3図8～21、第4図、図版21）　土師器杯・皿（第3図8～15）は暗文手法が消滅し、黒色土器A類杯（18）が見られることや須恵器杯蓋（第4図1～4）の口縁部の形態などから平城Ⅳ期とすることが出来る。

SE011出土土器（第5図1～19、図版21）　土師器皿Aのなかに C手法の見られるもの（5）があり、黒色土器A類鉢（16）の存在などから、やはり平城Ⅳ期に比定出来よう。

SD032出土土器（第5図20）　土師器皿AⅠは口径が20.4cm、復原高2.9cmで、法量からは少なくとも平城Ⅲ期以降のものである。外面はヨコナデの上にヘラミガキが施されていて、底部は不調整である。

SK023出土土器（第5図21）　須恵器高杯は土師器高杯と形態・法量に共通性をもっている。杯部がくの字状に折れ曲る平城宮SB116の高杯とは系譜が異なると考えられる。土師器高杯との共通性を前提にすれば、平城Ⅲ期かやや新しい時期に比定されよう。

SE111出土土器（第6図1～6）　井戸掘形出土のもの（1・2）と井戸内出土のもの（3～6）に分かれる。また、この井戸は近世の遺構SX752で破壊されているため付近の遺構や包含層には同時期の土器が多く見られた。第6図7～9もそれらの一部で（遺構出土）、これとSE111出土土器も含めて図示したのが図21である。1～15が土師器、16が黒色土器A類、17～19が黒色土器B類、20～23が瓦器である。瓦器椀が古い様相を示していることや黒色土器B類椀との共存を前提とすると、これらの土器の年代は11世紀中葉に位置づけられるが、2のような土師器杯形態の残存、13～15のような土師器椀の存在はこの時期における大和北部北半地域の土器様式構成の特徴と言えよう。特に、高台付土師器椀は瓦器や黒色土器と高台の形態が類似するものがあり、この地域における瓦器椀の出現に重要な意義を有していると考えられる。このほか3～10の土師器皿と11・12の土師器皿の口径が異なるとすれば、この段階に皿の法量分化が行われていたと考えられる。

このように、SE111出土土器の実年代は11世紀中葉であるが、瓦器椀出現時の黒色土器の様相だけでなく、土師器杯の残存、土師器椀の存在などいわゆる"中世的土器様式の成立"を考えることの出来る資料でもある。すなわち、図22には9世紀末～11世紀中葉の大和北部における土師器杯・皿の変遷を示しているが、少なくともこの地域においては杯が遅くまで残存し土器組成の中に一定の割合を占めていると言える。また、11世紀中葉においては高台付の椀形態は瓦器だけでなく、黒色土器（B類）、土師器にも見られ、瓦器がこの器種を独占するのにはなお多くの時間を必要としたようである。したがって、土器様式論を中心に中世的土器様式の成立を考えた場合、瓦器椀の出現をもって中世的土器様式に移行したということは、少なくとも大和北部地域については、直ちに言うことは出来ない。

SE112出土土器（第6図10～23、図版22）　瓦器椀（10・11）は形態・法量としては共通性が認められるが、内底面の連結輪状暗文には精粗がある。高台の断面形態や径も明らかに異なっており、これらは瓦器椀のもつ諸属性のうち、従来は時期差に還元されていたものである。後述する土師器皿の法量に若干の差違が認められるので、時期差と考えることも可能であるが同時期における個体差の蓋然性が高い。今後はこのような個体差を認識することによって、大和型瓦器椀の系譜の違いや地域的様式を明らかにしていくことが要求されるであろう。瓦器皿（12）は口縁部内面のヘラミガキが退化し、内底面のジグザグ状暗文の周囲を不完全に一周するような形態となる。土師器皿（13～20）は大きくは大（19・20）・小（13～18）2つのタイプに分けられるが、大皿にやや口径の大きいもの（19）が認められる。口縁部内外面のナデも2度にわたって行っているもの（18・20）とそうでないものがある。土師器土釜（21・22）はくの字状の口縁部と鍔が肩部上方にめぐらされ、菅原正明氏分類の大和B1型に相当する。

これらの土器は瓦器椀の型式や土師器皿の様相から、12世紀中葉かやや新しい時期に位置づ

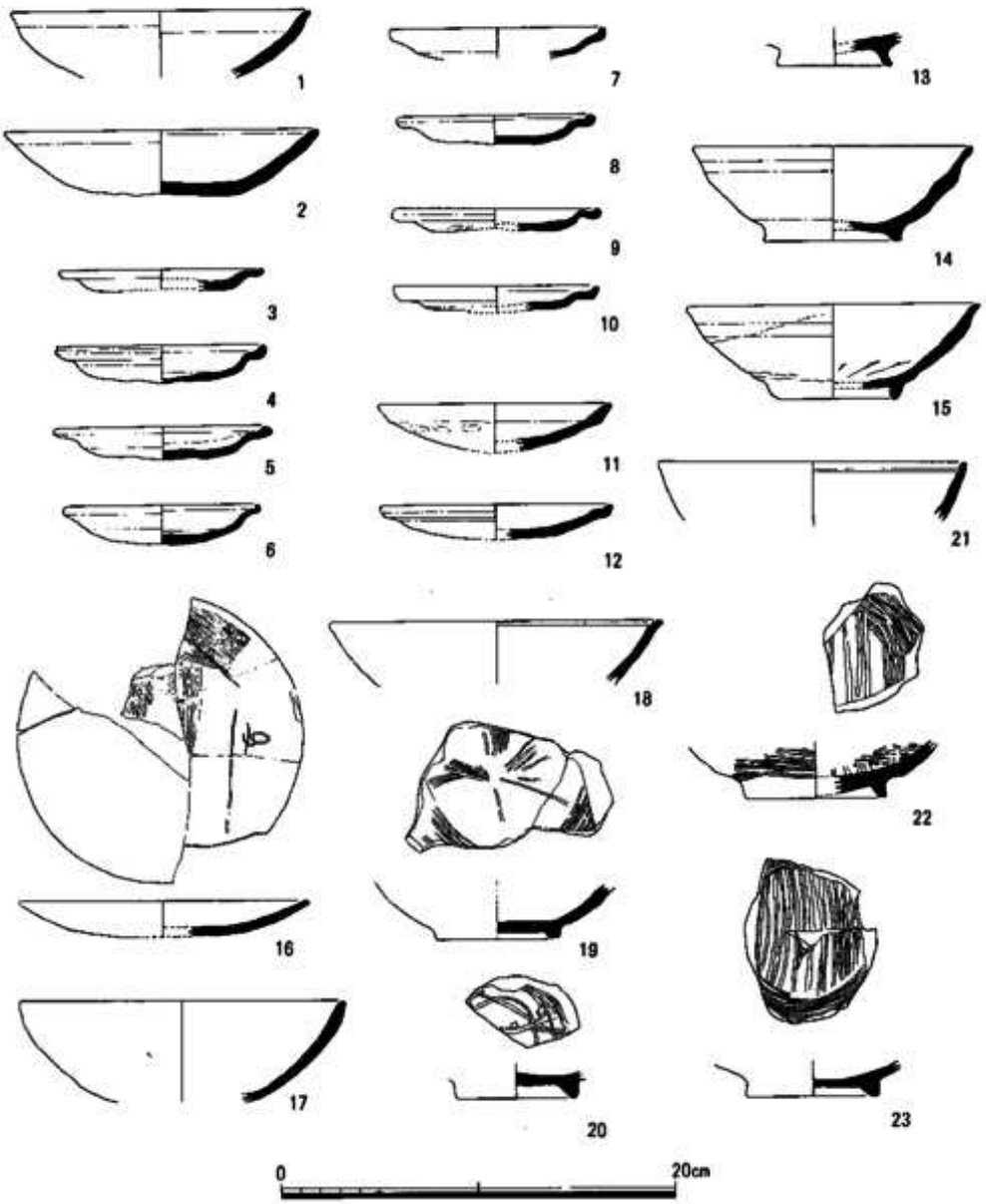


図21　ＳＥ111および周辺の遺構・包含層出土土器

けられよう。

SG361出土土器（第７図１～36、図版22・24）　土師器皿（１～34）は大皿と小皿に分けることが出来る。大皿（24～34）は口径14.0～16.0cmと中世前期南都の土師器皿のなかでも最大径のものが多数を占めるが、小皿は口径10.0cm以下で器高の低いものがすでに主体となってい

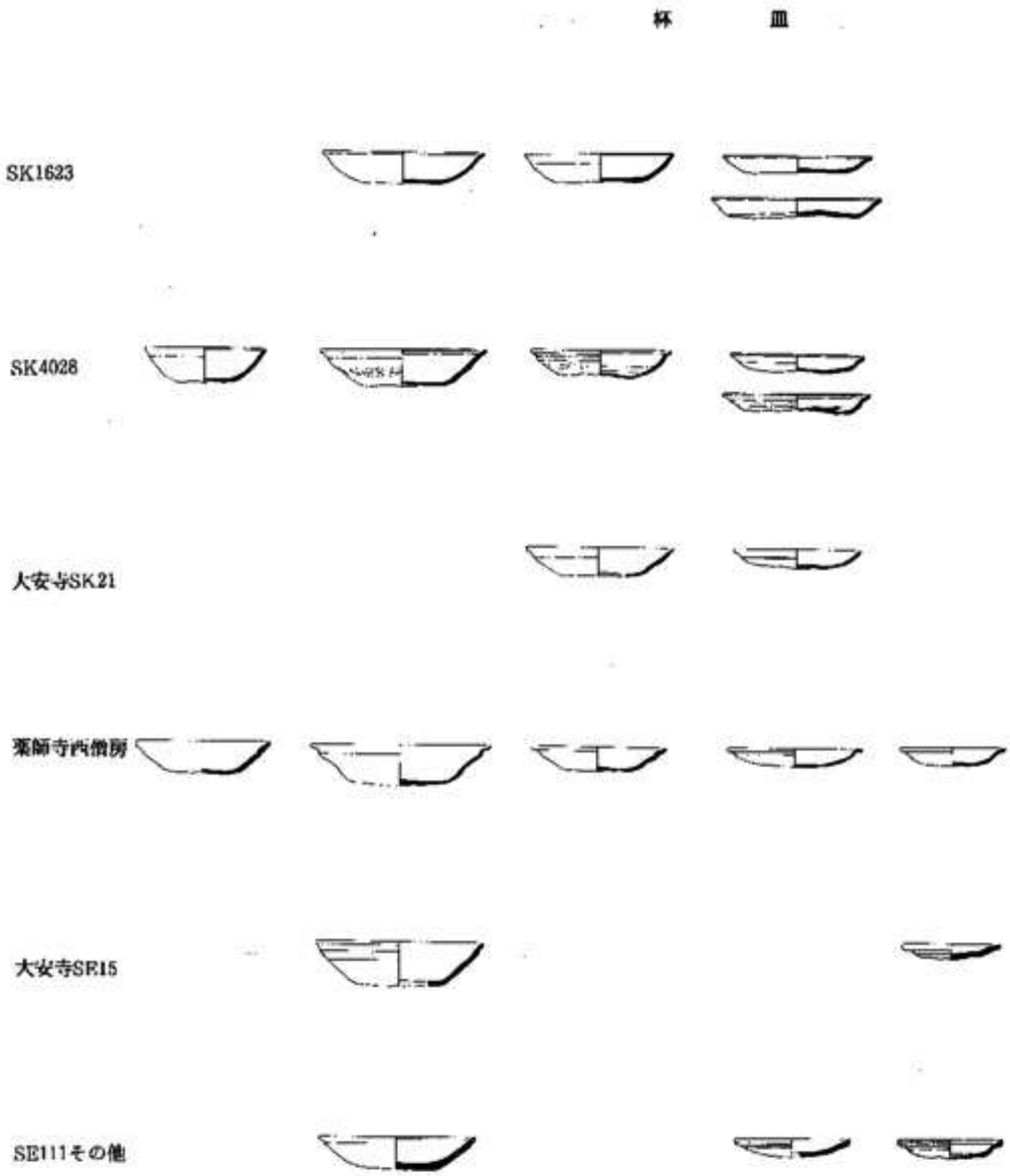


図22　大和北部の９～11世紀の土師器の変遷

る。SE112の土師器小皿同様口縁の一部等にススが付着しているものがいくらかの割合で見られる。瓦器椀（35）は口径15.0cm以下で、稲垣氏分類のH型式、川越氏分類の第Ⅲ段階A型式にあたり12世紀後半～末に比定されよう。瓦器皿（36）は口縁部内面のヘラミガキが完全に消滅している。

SX355出土土器（第7図37～46）　青磁碗（37）は内面に草花文（荷花文）を片切り彫りで刻し、太宰府輸入陶磁器分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2－b類に相当する。土師器皿（38～43）は大皿・小皿ともSG361のものより法量の縮小傾向にある。瓦器椀（44～46）は稲垣氏分類のⅠ型式、川越氏分類の第Ⅲ段階B型式にあたり、13世紀初頭～前半に比定される。瓦器皿はSG361のものより口径が小さくなり内面の暗文も退化の様相を見せている。

（37）の青磁碗は亀井明徳氏の龍泉窯青磁碗の分類編年では12世紀後半後葉に比定され、時期的に大きな矛盾はない。

SX352出土土器（第8図1～9、図版23・24）　中国製輸入陶磁器（1～7）は（1～4）が磁器、（5～7）は黄釉陶器盤である。青磁碗（1）は断片であるため内面の文様が明らかでないが、太宰府龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2類に属するものであろう。青磁皿（2・3）は（2）が同安窯系青磁皿Ⅰ－1b、（3）はやはり断片であるが内底面に文様があることがわかり、龍泉窯系青磁皿Ⅰ－2類に属すると考えられる。青白磁合子（4）は外面底部周辺が露胎である。黄釉陶器盤はいずれも内面の明黄褐色ないし黄白色の地に鉄絵が描かれており、内面全体と外面は体部まで施釉されている。形態は（5）が玉縁状の口縁で体部がややふくらみ扁平な鉢状で、（6）も他遺跡出土の同じ文様をもつものから同じものとした。（6）の文様は4つの円環を組み合わせた中に「福海寿山」の吉祥句を書いたもので、「海」の字の一部が残存している。瓦器椀（8）は火熱のために黒色部分がなくなり、淡黄褐色を呈している。稲垣氏分類のH型式、川越氏分類の第Ⅲ段階A型式に相当する。瓦器盤（9）は火鉢と考えられているものである。やはり火熱を受けて黄褐色ないしは桃赤色を呈している。SX351出土のもの（第9図2）よりは小さい。土師器椀（10）は高台をもたない。体部外面に指頭痕が見られる。土師器皿（11・12）は大皿と小皿があるが、小皿のなかに底部外面に糸切り痕跡を残すもの（12）が1点だけ認められた。

SX351出土土器（第8図13～20、第9図1・2）　中国製輸入磁器（第8図13～20）は青磁皿（13～15）、青磁碗（16・17）、青白磁碗（18）、白磁碗（19・20）がある。（13）は所属窯系不分明、（14）は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類であろう。（15）は高台をもつタイプの龍泉窯系青磁皿で、内面に片切り彫りの草花文が刻されている。亀井明徳氏分類の竜東Ⅲ期のなかに見られる。青磁碗は（16）が龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4bに属し、（17）はや大型でやはりⅠ－4b類に属する。（18）は小型の青白磁碗で器壁が薄く、内面には線刻文様が見られる。口縁端は釉をカキ取っ

ていない。(19) は白磁碗Ⅷ類、(20) はⅣ類である。

第9図（1）は中国製鉄絵黄釉陶器盤である。内面に淡黄褐色の地に鉄絵で区画文様と花文の一部、さらに外側に雲気状の文様を残存させている。（2）は瓦器盤（火鉢）でSX352出土のもの（第8図9）より大きく、脚はついていない。底部外面に横つなぎの板状痕跡が見られる。

SK421出土土器（第9図3～17、図版24）　（3・4）は中国製輸入磁器で、魚文青磁皿（3）は口縁端の釉をカキ取った上に銀を貼りつけている。白磁皿（4）は底部しか残存していないが、他の類例によって口縁端の釉をカキ取ったいわゆる口禿の白磁と考えられる。太宰府白磁皿分類のⅨ－1c類である。土師器皿（5～17）は瓦器椀を伴っておらず、大皿（8～17）が12.0～13.0cm、小皿（5～7）が9.0～9.5cmと、瓦器椀が大量に存在する構内遺跡SK2873の土師器皿（大皿14.0cm前後、小皿9.5～10.0cm）の様相からは口径の縮小がやや進んでいる。この遺構の時期と考えられる14世紀前半では、瓦器椀が大量生産されることがもはやなかったと考えたい。

SD431出土土器（第10・11・12図、図版24・25）

第10図は輸入陶磁器（1）・土師器皿（2～21）・土師器土釜（22～27）である。

白磁碗（1）は底部しか残存していないが、口縁部が玉縁状を呈する太宰府白磁碗Ⅳ類に属するものであろう。土師器皿は赤褐色を呈するいわゆる赤土器（2～10）と灰白色を呈するいわゆる白土器（11～21）に分けられる。赤褐色系土師器皿（赤土器）は口径の大きさによって特大皿（10、14.0cm）・大皿（6～9、10.0cm前後）・小皿（2～5、8.0～8.5cm）に分類され、特大皿は1点しか存在しない。灰白色系土師器皿（白土器）も特大皿（19～21、13.0cm前後）・大皿（15～18、11.0cm前後）・小皿（11～14、6.5～7.0cm）に分けられ、特大皿は灰白色系土師器皿のなかで一定の割合を占めている。

灰白色系土師器皿は瓦器椀に代って大和の中世後期を代表する土器であるが、個体としては構内遺跡SK2873（13世紀後半）出土土師器皿のなかにも認められ、中世前期においてもこのような土器の焼成技術が一部の工人に伝習されていたと考えられる。しかし、日常雑器のなかに一定の割合を占めることを意図して製作されるようになったのは14世紀中葉以降であろうと推定される。その正確な時期は資料不足のため明らかに出来ないが、SD431の前段階と考えられる構内遺跡SK2816やSK2802下層では赤褐色系の土師器皿がほとんどである。しかしSK2802下層において灰白色系土師器皿のうちの特大皿の影響を受けたとみられる特大皿がすでに見られることは、すでにこの段階から白土器としての土師器皿の法量分化が意識されていたことを示すものであり、SD431の前段階すなわち14世紀中葉でも新しい時期に灰白色系土師器皿が日常雑器の中に意図的に一定の割合を占めていたことを伺わせるのである（図23）。土師器土

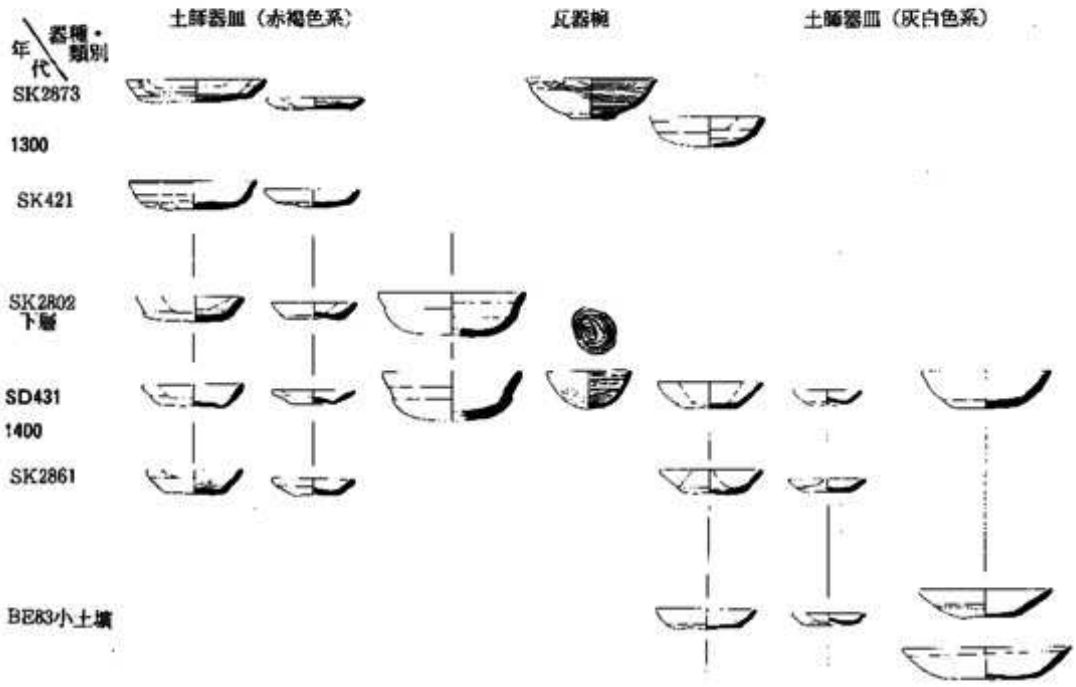


図23　14～15世紀南都の土師器皿

釜は口縁部が内彎するタイプで、大きくは大・小２つの法量がある。菅原正明氏分類の大和H_2型である。

第11図は瓦器椀（１～５）・土師器土釜（６～８）・ミニアチュア土師器土釜（９・10）・土師器鍋（11～15）である。

瓦器椀のうち（１～４）は口径8.0cm前後の半球形を呈するタイプで、高台と外面の暗文は消失してしまっている。出土土器中では個体として７点しか認められず、同時期の土師器皿の量に比べると圧倒的に少ないと言える。

大和北部北半（中世南都及びその周辺）地域の瓦器椀は、日常雑器として大量に生産・使用されるのは13世紀後半一構内遺跡SK2873の段階一で終り、上述のSK421の段階（14世紀前半）ではもはや見られなかった。この段階になって再度見られるようになるのであるが、法量は極端に縮小し、他の日常雑器に対する量的比率も13世紀代とは比べものにならない。中世南都の瓦器椀終末時の様相は以上のようなものであるが、大和平野中南部では14世紀前半も前代からの退化型式としての瓦器椀が継続し、14世紀中葉～後半にかけて終末となる。このような南都と大和中南部の瓦器椀終末時の様相の違いについては現在のところ充分な説明が出来ないが、少なくとも南都およびその周辺では、日常雑器としての瓦器椀は13世紀後半でその役割を終えていたと言えるであろう（図23）。

（5）の瓦器椀は内面に交差した縦方向の暗文が施されており、この時期の椀としては特異なものである。土師器土釜（6～8）は口縁端部を外側に折りかえす菅原氏分類の大和H$_1$型である。ミニアチュア土釜（9・10）は外面にススが認められない。ススが付着する例もある。土師器鍋（11～15）は球形の胴部に口縁部がくの字状に外折するタイプで、端部を内側に折りかえしていて、内面が溝状を呈している。胴部内面には円弧状の当て具痕跡や細かいハケ目、外面には縦方向のハケ目が残る。

第12図は常滑焼甕（1）・東播系須恵器練鉢（2）・瓦質土器擂鉢（3）・風呂（4）・深鉢（5）・浅鉢（6）・火鉢（7～10）である。

常滑甕（1）は13世紀中葉～後半のものであり、他の土器の年代観よりは古くなる。東播系須恵器練鉢（2）は14世紀中葉に位置づけられ、大きな隔たりはない。瓦質土器擂鉢（3）は5本1単位の擂り目を疎らに施している。口縁端は尖り気味に丸く収まり、同時期の備前擂鉢とはやや異なった形態である。瓦質土器風呂（4）は口縁部外面にスタンプによる文様帯が施されている。瓦質土器深鉢（5）も口縁部外面を2本の突帯で区画し、その間にスタンプによる文様帯が見られる。瓦質土器浅鉢（6）は口縁部内外面に横方向のヘラミガキを施す。底部外面には離れ砂痕跡が認められる。瓦質土器火鉢の（7）は小型で口縁端部が水平な面をなしているのが特徴である。（8）は口縁部外面に鍔状の突帯が付いている。（9）は平面花形で残存しない部分に菊花文のスタンプがあると考えられる。（10）は平面矩形で、体部上端には2本の突帯に区画されたスタンプによる文様帯が見られる。

SD431出土の瓦器椀・土師器皿をはじめとする土器は奈良市紀寺地蔵町SE15出土土器と共通するところが多く、14世紀後半の年代が与えられる。

SE411出土土器（第13・14・15・16図、図版26）

第13図は土師器皿（1～9）・土師器土釜（10～13）・中国製輸入磁器（14～18）・国産陶器（19～23）である。

土師器皿（1～9）は口径が7.0～7.5、8.0前後、10.0cm前後に分けることが出来る。これらのうち（1～8）は底部を僅かに上方に押し上げたいわゆるヘソ皿と呼ばれるタイプである。色調は14世紀後半～15世紀前半の土師器皿の灰白色系とは異なり、茶褐色あるいは淡褐色を呈している点が注意される。土師器土釜のうち（10～12）は菅原氏分類の大和H$_2$型、（13）は大和H$_1$型である。中国製輸入磁器は（14～16）が青磁碗、（17）が青磁皿、（18）が青磁盤、（19）が青磁香炉である。青磁碗は内外面に片切り彫り文様をもち内面を雲気文で飾るもの（14）、無文のもの（15）、内底面にスタンプ文様をもち、外面は簡略化した蓮弁文と雷文をヘラ描きしているもの（16）がある。（16）はいわゆる雷文帯蓮弁文青磁碗で、蓮弁文は断片で本来の構図を明らかに出来ないが、ラマ式蓮弁文と考えられる。このタイプの青磁碗の流通年代は亀

井明徳氏によって「14世紀中葉から15世紀前半を中心とし、一部後半まで及んでいる」とされており、この青磁碗は雷文帯・蓮弁文の簡略化からみて15世紀中葉～後半に下る可能性が大きい。青磁皿（17）は内底面中央の釉を丸くカキ取っている。高台内も無釉である。貼花文青磁香炉（19）は本来は獣足状の三脚を有しており、文様意匠は若干異なるが、新安沖海底沈船中の磁器群中に形態が近いものがある。灰釉おろし皿（20）は口縁部内外面にだけ施釉されている。口縁部は折縁状を呈している。灰釉折縁盤（21）は三脚がつく。やはり口縁部内外面にのみ緑色の釉が施されている。灰釉陶器はいずれも15世紀代のものである。（22・23）は丹波で（22）は擂り目1本1単位からなる擂鉢、（23）は擂り目のない鉢である。

第14図は国産陶器（1～6）、瓦質土器（7～14）である。

信楽擂鉢（1）は焼成軟弱で灰白色を呈しているが、信楽鉢（2）は焼成良好で色調も赤褐色を呈している。信楽壺（3・4）はいずれも底部のみで（3）が灰白褐色、（4）が明茶褐色を呈し、胎土も粗く、（3）は焼成も軟らかい。備前擂鉢（5・6）は口縁端がやや広い面をなすもの（5）と口縁端が面をなしさらに上方に伸びるもの（6）に分けられる。特に（6）は体部から口縁部にかけて外傾するために器高が低くなり、口縁端に作り出された幅広の面も中央の凹みがやや顕著になっている。このような形態は低い器高で内面の擂り目を交差させ口縁端の幅広の面に沈線を作り出す16世紀前半の備前擂鉢の前段階に位置づけられるものとして注意されよう。なお、（5・6）とも外面のヘラ削りは顕著でなく、不定方向のナデで消されてしまっている。瓦質土器擂鉢（7～10）はいずれも断片であるが、外面に指頭痕を残し、内面は使用による磨滅が著しい。瓦質土器ミニアチュア擂鉢（11）は内面に使用による磨滅が認められる。瓦質土器火鉢（12～14）は浅くて口縁端部が水平な面をなすタイプのものであるが、（14）のようにスタンプによる文様の見られるものもある。

第15図は瓦質土器火鉢の口縁部または脚部の断片である。

系譜的にはSD431出土の平面矩形の箱形火鉢（第12図10）の延長上にあると考えられるが、（10）は菊花文がスタンプされているだけで文様帯をもたず、口縁端も内側へ水平な面をもっていない。また（11）の脚部も火鉢のものではない可能性がある。（1～8）のタイプの火鉢はこの時期に最も盛行する。本来は金属製品を模倣したものであろう。スタンプ文様も雷文・花菱文など中世後期の瓦質土器に使用されているものに一般的に見られる。

第16図は瓦質土器風呂火鉢（1～3）・瓦質土器大型深鉢（4、縮尺1／8）・瓦質土器蓋（5、縮尺1／8）である。

風呂火鉢（1～3）は口縁端が水平な面をなすのが特徴で、口縁部外面は2条の突帯に囲まれたスタンプによる文様帯が認められる。深鉢（4）は無文で高さは80.0㎝以上になると考えられる。蓋（5）は天井部外面に離れ砂痕跡が認められる。

SK422出土土器（第17図、図版25・27）　土師器皿（1～42）は小型のものは底部を僅かに押し上げているのが特徴である。口径が7.0～7.5、9.0前後、12.0～13.0cmに分けることが出来るが、最も多いのは7.0～7.5cmのものである。これらは内面や口縁端外面にススが付着したものが多い。色調は淡（灰）褐色あるいは茶褐色のものが圧倒的に多く、この点でもSE411の土師器皿と共通性をもつ。この段階においては、少なくとも日常雑器としての土師器皿は「白土器」を意識して製作されなくなったことを指摘出来よう。土師器土釜（43）は菅原氏分類の大和H1型である。瓦質土器擂鉢（44～46）は小型のものが中心である。瓦質土器風呂（48）は風呂火鉢の基底部しか残存していない。蓮弁文と珠文を貼り付けた文様帯を突帯で囲んでいる。

SE411・SK422は土師器皿の様相に共通するものがあり、土師器土釜の型式などから同時期と考えた。実年代は雷文帯蓮弁文青磁碗や信楽陶器の様相、備前擂鉢の編年的位置付けから、15世紀後半のやや新しい時期と考えたい。

SE511出土土器（第18図1～9）　土師器皿（1・2）は形態・胎土・焼成ともに近世の様相を示している。信楽擂鉢（4）は6本1単位の擂り目の間隔が比較的せまくなっている。丹波擂鉢（5・6）は外面に指頭痕を残しているのが特徴である。（4）は口縁部の形態から17世紀以前にさかのぼると考えられているものである。唐津碗（7～9）はいずれもやや薄手の高台周辺が露胎のものである。

SK521出土土器（第18図10～13、図版27）　唐津碗（10～12）は（10）が高台周辺露胎、（11・12）が高台内施釉・畳付部分無釉である。唐津波縁皿（13）は高台周辺露胎で、内底面には胎土目積痕跡が3ケ所見られる。

SD531出土土器（第18図14・15）　李朝（朝鮮王朝）製白磁碗（14）は補修に漆を使用し内底面の目あとも漆を塗っている。（15）は用途不明の土師器で、筒状の胴部にラッパ状にひらく口縁部をもつ。中世後半～近世の特殊な用途のものであろう。

SK622出土土器（第19図、図版27）　中国製輸入磁器（1・2）は（1）が青磁碗の底部と高台部分、（2）の白磁皿は口縁端の釉をカキ取るいわゆる口禿の白磁である。美濃系大目茶碗（3）は登窯期に入ってからのもので、大型化する途上にある17世紀前半の特徴を備えている。（4～7）は京焼系あるいは京焼風の陶器で、（4）は内底面に絵付けのある深皿、（5・7）は体部外面に絵付けのある碗で、高台内面に押印が見られる。これらは九州の肥前陶系の窯で焼かれたと考えられているもので、京焼風陶器と呼ばれている。しかし、（6）の竹葉状の絵柄はこれら京焼風陶器にはなく、肥前とは別系統と考えざるを得ない。胎土も卵黄色を呈しており、釉色も暗黄色と相違が見られる。これが真正の京焼であるとすれば、その年代を知り得る資料となろう。（8～10）は高台畳付部分無釉で、全体に貫入が著しい卵黄色の釉が施

されたいわゆる献上唐津手の碗である。(11) は信楽の壺である。伊万里磁器 (12～19) はおおよそ17世紀中葉～18世紀初頭にかけての特徴をもつものである。(13) は柿右衛門手と考えられる。土師器皿 (20～30) は口径によって6.5～7.0、9.0～10.0、11.5cm前後に分けることが出来る。これらをSK422のような中世の土師器皿群の法量の変遷上に位置付けることが出来るかどうかは今後の課題であるが、ほとんどの皿にススが付着していることや法量分化の傾向が共通していることは指摘出来る。(31) は底部に焼成前に穿孔されている。土師器ほうらく (34～36) はロクロを使って型造りで製作されている。(34) は菅原氏分類の大和Ⅰ₂型土釜を原型とするものである。

SK621出土土器 (第20図・第21図1～20)　唐津陶器 (1～6) のうち (5) の碗は献上唐津手と呼ばれるものである。(6) の皿は溝縁口縁ではないが、薄手で砂目積みであり、溝縁皿に平行する時期のものであろう。美濃系天目茶碗 (7・8) は近世初頭、登窯期のものである。(10) は明末の中国製染付磁器である。伊万里磁器 (11～24) は17世紀前半～後半にかけてのものであるが、初期伊万里を比較的多くを含んでいる。(12) は型押し文様の白磁皿、(14) は青磁染付碗、(17) はミニアチュア網目文碗、(18) は小型徳利である。(25・26) は口縁部しか残存していないが、菅原氏分類の大和Ⅰ₂型土釜である。土師器皿 (27～41、第21図1～19) は、口径7.0～8.0、9.0前後、11.0～12.0、13.0cm前後に分けることが出来る。瓦質土器壺 (第21図20) は頸部が短いのが特徴で、内面には指頭痕と細かく単位の小さい横方向のハケ目が見られる。

SK721出土土器 (第21図21～35、第22図、図版27・28)　陶器灯火具 (21) は内外面に褐釉が施されている。所属窯系不明。陶器水注 (22) は底部周辺露胎である。他は褐釉が施されている。京焼系陶器碗 (23) は外面に白と黒で花文様を絵付けしている。伊万里磁器 (24～35) は (24) が口錆の碗、(25・26) が型紙摺りによる絵付けの染付碗、(27) が白磁碗、(28) が赤色絵の小坏、(35) が見込み蛇目釉ハギの染付皿である。(29～34) の染付碗は17世紀後半～18世紀前半のものである。土師器火舎 (第22図1・3) は瓦質土器の製作技法が認められるが、焼成は土師器のそれのみになってしまっている。

SK722出土土器 (第23図、図版28)　(1) は美濃系天目茶碗、(2) は唐津系青緑釉碗 (3) は高台内露胎の伊万里青磁碗、(4) は献上唐津手碗である。(5) は信楽鉢、(6) は備前壺である。(7) は土師器七輪である。土師器油煙受け (8～13) は径17～18cmの皿状の土師器製品を逆にして、天井部中央に把手をつけたものである。器高7.4～8.0cm。墨の原料のススを採るための道具で、全体に分厚くススが付着している。天井部外面に横方向のケズリを施すものと指頭痕のみを残すものがある。これに対する燈明皿が (14～22) の土師器皿である。SK722に隣接する土坑から出土した。全体にタール状の黒色物質が付着している。

SX751出土土器（第24図、図版29）　伊万里磁器（1～4）のうち（4）は細頸の青磁徳利である。（5）は唐津系刷毛目徳利で、佐賀県嬉野町内野山窯の製品と考えられる。（6）の褐釉陶器壷は所属窯系不明である。（7）は信楽擂鉢、（8）の鉢、（9）の壷ともに土師器の焼成である。（10）は瓦質土器壷である。（11）は焼塩壷であるが刻印部分は残存していない。

SK822出土土器（第25・26・27・28・29・30図、図版29・30・31・32・33・34）

第25図は染付磁器（1～15・17～21）、色絵磁器（16、22～25）である。

青磁染付碗（4）は18世紀前半に盛行したものであるが、ここではこれ1点しか見られないという事実が年代の指標となる。（11）はコバルト系の顔料を使った猪口で、焼継を行っている。（18・19）は蓋身のセットとして作られている。色絵のうち（25）の端反り碗は近代に入ってからのものであろう。

第26図はやや大型（2・3）と稜を有する（1・4・5）染付磁器と筆立て（6・7）、中国製染付磁器（8・9）である。中国製染付磁器は明代末期のもので、この時期まで伝世されていたことが知られ、骨董品として扱われていた可能性もある。

第27図は（八）角鉢（1）、深鉢（2）、深皿（3・4）といった大型の伊万里染付磁器である。（3）は焼継が施されており、口縁の一部分の欠損も鉛ガラスで補修している。

第28図は伊万里青磁皿（1）、九谷色絵皿（2）、陶器花瓶（3）、陶器蓋（4～6）、陶器灯火器（7）、陶器上瓶（8）、陶器植木鉢（9）、陶器壷（10）、陶器甕（11・12）である。

第29図は陶器徳利（1）、白磁碗（2）、染付磁器蓋物（3）、陶器碗（4・5・6）、陶器皿（7）、陶器灯明皿（8・9・10）、行平蓋（11・13・17）、行平身（12・14・16）、練り鉢（15）、土瓶（18）である。（11～15）は暗緑色あるいは淡褐色に施釉されているが、（16・17）は外面に飛鉋文様と鉄釉を併用、（18）は飛鉋の上から鉄釉を全面に施している。第30図は備前系擂鉢（1）、土師器皿（2～4）、土師器器台形土器（5～13）である。（1）は堺擂鉢と考えるべきであるが、最近生産が明らかになってきた明石産の可能性もある。土師器皿は口縁部にススが付着し、器台形土器は杯部から脚部にかけて指頭痕が顕著である。

SK822出土の伊万里系磁器は、18世紀後半に盛行した青磁染付碗（第25図4）が1点しかなく、広東碗（第25図5）も少数で、端反り碗が主体を占めている。また、新しい段階のものは（第25図11）のコバルト系顔料使用の坏や（第25図25）の色絵など、明らかに近代のものと見られるが、これも少数である。したがって、土器・陶磁器組成の時期的な中心は19世紀前半－いわゆる幕末期－にあるが、下限は近代初頭にまで下ると考えられよう。いずれにしても、幕末期地方都市の町屋の日常雑器を中心とした土器様相をよく示していると言える。

2　瓦・塼（第31～54図、図版35～39）

瓦は軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦が出土しており、時代は古代から近世に及んでいる。遺構等からまとまって出土した良好な資料としては奈良時代の井戸SE011・平安時代末の寺院遺構関連のSX351・SX352（SE812）・室町時代の井戸SE411の瓦をあげることが出来よう。ここでは前2者を中心に簡単な説明を加えたい。

飛鳥・奈良時代の軒瓦（第31図、図版35）

八弁単弁蓮華文軒丸瓦（1）　角度をもった蓮弁の先端に珠点を置いた単弁蓮華文が主文様で、中房の蓮子は1＋4に復原出来る。近似した文様構成は横井廃寺・姫寺のものがあるが同笵の確認は行っていない。SX352中にこの断片1点だけが出土しており、同時期（7世紀前半）の丸瓦・平瓦も今のところ認められない。焼成は硬く、灰黒色を呈している。

重弧文軒平瓦（2）　施文痕跡から重弧文と考えた。顎部下面に格子叩きが認められる。焼成はやや軟弱で、灰白色を呈している。包含層出土。

複弁蓮華文軒丸瓦（3）　小さな断面であるが、7世紀後半の複弁蓮華文の一部と判断した。蓮弁と子葉の形態から法隆寺式と考えられる。包含層出土。

八弁複弁蓮華文軒丸瓦（4）　周縁が低く、線鋸歯文が認められないところから平城宮出土軒瓦型式中の6301－Fと考えられる。焼成は良好で、淡灰青色を呈す。包含層出土。

均正唐草文軒平瓦（5）　唐草文の形態から6671－Bと考えられる。焼成は軟弱で暗灰茶褐色を呈す。近世遺構出土。

重郭文軒平瓦（6～8）　二重郭の6572－Aである。すべて段顎であるのが特徴的である。（6）はSK021出土で平城Ⅲ期の土器を伴っているが、従来からのこの瓦の年代観と大きな矛盾はない。

SE011出土軒瓦（9～16）は平城Ⅳ期の土器を伴っている。

八弁複弁蓮華文軒丸瓦（9）　周縁端の状況や中房蓮子の大きさから6301－Bと考えられる。瓦当裏面は削りや指頭による押圧をそのまま残している。胎土に紫黒色粒や白色砂粒を比較的多く混じる。焼成は良好で明灰色を呈する。

八弁複弁蓮華文軒丸瓦（10）　中房の凹んだ6311－Bである。赤色クサリ礫ややや大きな砂粒が見られるが胎土は精良。焼成は普通で暗灰白色を呈する。

均正唐草文軒平瓦（11）唐草文の右半分が残るが、主葉と支葉の各単位が独立し上下の界線とつながっている。6694－Aである。火熱を受けたため黒変している。

均正唐草文軒平瓦（12）　断片であるが6664のうちの1型式と考えられる。

均正唐草文軒平瓦（13～15）　（13）は磨滅著しく、（14・15）は火熱を受けて赤褐色を呈しているが、6721型式のいずれかと考えられる。

均正唐草文軒平瓦（16）　明瞭な中心飾りをもたず、3単位の唐草文様が左右対称に展開されると推定される。平城宮軒瓦型式に類例なし。胎土は精良で焼成はやや軟弱、灰白色を呈す。

以上の軒瓦のうち、6694Aと6721が軒瓦平城第Ⅲ期であり、SE011出土土器の年代観に最も近いと言えよう。新出の均正唐草文軒平瓦（16）の年代もこのころに考えて良いのではないだろうか。

平安時代末の軒瓦（第32～42図、図版35～39）

SX352・351およびSX352の瓦を大量投棄したSE812をはじめとする後世の遺構から出土した同じ軒瓦を扱う。これらの軒瓦は、後世に若干動かされているものの、建物が火災に遭って倒壊したままの堆積中の一括資料に近いとみてよく、古代末～中世初頭の南都における軒瓦の様相を端的に示すものとして重要と言える。

現在のところ軒丸瓦が3型式、軒平瓦が5型式に分けられるが、これはそのまま笵の違いに還元されると考えてよい。

軒丸瓦Ⅰ型式（第32・33図、図版35・36）　大きな頭部と幅広くて細長い尾部の量感のある二ッ巴を主文とし、外区は16個の珠文をめぐらす。内区主文と外区は界線で区別して主文尾部と界線はつながっていない。周縁はほぼ直立しており高い。文様全体の円周の3分の1くらいのところで周縁から巴文様の一部を3箇所横切りもう一方の周縁までを貫く笵割れ痕跡が顕著に認められる。この笵割れはこの型式のいずれの個体にも存在するが、丸瓦挿入位置に対して瓦当部の左上から右下を通過するものと左下から右上がりに右下に至るものとがある。しかし、その角度に法則性は見出し難く、笵の外周の状況を推察する手がかりにはならない。丸瓦部分挿入位置はやや低く、接合粘土は多い方ではない。瓦当部分に粘土を切り取ったときの痕跡や離れ砂痕跡を残すものがある。火災のためほとんどが明黄褐色ないしは淡桃赤褐色を呈するものが多いが稀に灰黒色ないしは淡灰褐色を呈するものがあり、こちらが本来の色調と考えられる。（第32図図5）の直径14.1cm、周縁の幅1.2cm、高さ1.0cm、外区の幅1.8cm。（4）の全長34.5cm、玉縁長6.8cm。

軒丸瓦Ⅱ型式（第34図、図版36）　やや小さな頭部と細長い尾部からなる左巻きの二ッ巴が主文で、外区に17個の珠文をめぐらす。内区主文は上面が平坦なために実際よりも量感が感じられず、尾部を極端に細長くしていて、界線の代用を務めている。周縁はほぼ直立しているがⅠ式に比べてかなり低い。微細な笵傷や珠文との関係から、瓦当文様と丸瓦挿入位置が180°回転しているものが認められる。丸瓦挿入位置は比較的高く、接合粘土は多くない。火災のために変色しているものもあるが、灰黒褐色を呈するものもある。（第34図5）の直径12.4cm、周縁の幅0.7～1.2cm、高さ0.5cm、外区の幅1.5～1.8cm、全長35.0cm、玉縁長5.8cm。

軒丸瓦第Ⅲ型式（第35・36図、図版36・37）　小さな頭部と幅狭で細長い尾部のⅠ・Ⅱと同

じ左巻き二ツ巴を主文とし、外区に16個の珠文をめぐらす。内区主文は量感に欠け、二ツ巴の頭部は連接している。外区との境界には界線が設けられ、主文尾部と界線はつながっていない。周縁はほぼ直立しており比較的高い。丸瓦挿入位置はやや低いが、接合粘土が多くないので瓦当部から外れている例が多い。瓦当面に離れ砂痕跡を残すものが多い。火災のために変色しているものと本来の色調を保つものがある。（第35図５）の復原直径13.8cm、周縁の幅1.1cm、高さ1.0cm、外区の幅1.6cm。

軒平瓦第Ⅰ型式（第37図、図版37）　半截花文状の下向き花文を中心飾りとし、左右に３回反転する唐草文をもつ。周縁は素文で内区主文以外に文様はないが、（第37図９）は例外的に右側の唐草第１単位から第２単位にかけての下辺に接して11個の刺突が見られる。また、どの個体も左側第３単位の唐草が周縁のために途切れているのが特徴である。平瓦部凹面に粗い布目痕、凸面は縦方向に10単位程度のハケ目を施す。火災のための変色と本来の灰黒を呈するものがある。（第37図５）の上弦幅22.0cm、弧深3.7cm。（６）の瓦当面の厚さ4.3cm、内区の厚さ2.7cm、上外区厚さ0.8cm、下外区厚さ0.8cm、脇区幅1.2～1.3cm。文様は0.5cmの深いものと、0.2cm以下の浅いものがある。薬師寺出土資料で文様が酷似しているものがあり、唐草文の特徴が共通することなどから同笵の可能性が高い。

軒平瓦第Ⅱ型式（第38～40図・41図１～３、図版38・39）　竹葉状の半截花文を上下交互に５単位配したのが主文で周縁は素文である。右から２単位目の花文の中央の花弁の先端が笵傷で埋まっているのが特徴である。平瓦部凹面には比較的細かい布目痕と粘土切り離し痕跡が見られ、凸面には縦方向のハケ目が認められるが、さらに不定方向のナデで処理しているものもある。（第38図１）の瓦当面上弦幅20.0cm、弧深3.5cm、下弦幅20.3cm、厚さ3.8cm、内区の厚さ2.0cm、上外区厚さ0.7cm、下外区厚さ0.7cm、脇区幅0.6～0.8cm、文様の高さ0.4cm、全長27.3cm。同じ文様構成のものは興福寺食堂・薬師寺等に見られるが上述のような笵傷をもつものはなく、同笵の確認は行っていない。

軒平瓦第Ⅲ型式（第41図４～９、図版39）　やや崩れた花菱文を中心飾りとし花文をあしらった唐草文を左右に反転させた宝相華唐草文である。花文は原形を止めないほど簡略化され中心飾りの左右にある唐草文も先端が二分してしまっている。平瓦部は凹面に布目痕と粘土切り離し痕跡が認められ、凸面は縦方向のハケ目が施されているものが多いが指掌痕を顕著に残しているものも見受けられる。やはり火熱で変色しているものと本来の黒灰（褐）色を保っているものがある。（第41図４）の瓦当面上弦幅21.3cm、弧深3.3cm、下弦幅22.2cm、厚さ4.4cm、内区の厚さ2.6cm、上外区厚さ1.0cm、下外区厚さ1.0cm、脇区幅0.7～1.5cm、文様の高さ0.2cm、全長28.5cm。同じ文様構成をもつ軒平瓦が春日東塔から出土しており、唐草文細部の比較などから、同笵の可能性が極めて高い。

軒平瓦第Ⅳ型式（第42図１～10、図版39）　均正唐草文がくずれて幾何学的な文様になっている。瓦当面と文様部分のズレが比較的目立つ。平瓦部は凹面に細かい布目痕と粘土切り離し痕跡が認められ、凸面は縦方向のハケ目が施されている。

軒平瓦第Ⅴ型式（第42図11～15、図版39）　連珠文であるが、文様面の完形な個体がないため珠文の数は不明である。文様面右端と２個の珠文の間隔が特にせまくなっているのが特徴的である。平瓦部凹面は細かい布目痕が見られ、凸面は縦方向のハケ目で調整されている。内区の厚さ1.3～1.5cmと他の型式よりも小さい。

以上の平安時代末軒瓦の破片も含めた総点数は229点（軒丸瓦73点、軒平瓦156点）である。

丸瓦・平瓦（第43～53図）　これらの軒瓦群に伴うと考えられる丸瓦・平瓦を簡単に報告しておきたい。

丸瓦　丸瓦は３遺構出土資料には完好なものがなく、確認した限りでは全て玉縁付の形態のものであった。ここでは便宜的に玉縁の形態と端面の形態の分類のみを行う。なお資料的な制約から両者に対応関係があるかは不明で、軒丸瓦型式との関係も十分検討していない。全体的に内面は布目が認められ、外面は縦方向の縄タタキの上をナデやハケで調整している。端面や側面はヘラで丁寧に面取りされ、特に側面では玉縁部分も同様に二面の面取りが行われている。

玉縁部分は形態と長さによって分類される。前者は丸みを帯びるもの（Ⅰ類、第43図）と真直ぐ斜め上に凸出するもの（Ⅱ類、第44図）で、後者は５cm弱のもの（ａ）、６cm前後のもの（ｂ）、７cm弱のもの（ｃ）である。ａは数は少ないがⅠ類に多く見られ、ｂは数が多くⅠ・Ⅱ類に共通して見られる。また、ｃはｂに次いで多く、Ⅱ類に比較的多く見られるという傾向を指摘出来る。

端面部分は断面の形態により分類が可能で、変則的な台形をなすもの（Ⅰ類、第45図）と凸面側を指でおさえて浅い溝状の凹みをつくるもの（Ⅱ類、第46図１）に分けられるが、個体数が少ないため有効な分類であるかは明らかでない。

平瓦　凸面の成形道具・調整技法より次のように分類した。凹面は布目および粘土切り離し痕跡が顕著で、布目をナデ消している例が若干認められる。

Ａ　縄目叩き　細かな縄目を使用しているもの（Ⅰ－１、第46図２）、やや粗い縄目のもの（Ⅰ－２、第47図）、縄目が交差しているもの（Ⅰ－３）はナデ調整により不明瞭な部分が多い。ナデ調整が施されていないもの（Ⅱ）は少数で、いずれも断片であるため詳細を知り得ない。

Ｂ　平行叩き　タタキ目の細かいもの（Ⅰ－ａ、第48・49図）とやや太いもの（Ⅰ－ｂ、第50図）が基本的に認められる。（第49図）のようなナデ消されていないものは少数である。このような平行叩き原体に斜交する線を彫り加えて格子叩きのように見せているのをⅡ類（第51・52図）とする。

C　格子叩き　完好な個体がないので不明な部分が多いが、縦方向の幅0.5cm、横方向の幅0.8cmの斜格子を最小単位としている。叩き原体の大きさ、叩き締め方向などは不明である(第53図)。個体数もやや少なく、確認出来るのは全て斜格子である。

ナデ調整　断片であるが不定方向のナデ調整を施すものが若干見られる。軒平瓦の一部分である可能性が高い縦方向のハケ目の見られるもの同様、軒平瓦の平瓦部分である可能性を考えるべきであろう。

その他の軒瓦（第54図、図版39）

平安時代末～鎌倉時代の軒瓦で、SX352・351の焼土・焼瓦堆積以外から出土したものを以下に報告する。

三巴文軒丸瓦（1）　SE812出土であるが、SX352・351からは出土していないのでここで扱うことにした。やや小さな頭部に中途から急激に細長くなる尾部をもつ三巴文が主文で、外区は22個の珠文をめぐらす。界線は内区と外区の境界、外区と周縁の境界にめぐっていて、主文尾部とはつながっていない。周縁は高く直立し、平坦面部分に離れ砂痕跡が見られる。

三巴文軒丸瓦（2・3）　頭部よりも尾部中央が幅広く比較的短い三巴文が主文である。外区は剣頭文を二重にめぐらせるが、内側の21個は退化して花弁状になっている。内区と外区の境界は界線がめぐらされ、巴文の尾部とつながっている。瓦当面全体に離れ砂痕跡が認められる。(2)は胎土に白色砂粒と赤色クサリ礫を大量に混じ、表面茶褐色、断面暗赤褐色を呈する。近世遺構出土。(3)は表面灰黒色、断面灰褐色。14世紀の遺構出土。

菊花文軒丸瓦（4）　細長い弁で表現される菊花が内区主文で、外区には珠文がめぐる。界線はなく、周縁との境界は段状をなしている。胎土は精良で、焼成はやや軟らかく、淡灰黒色を呈している。

均正唐草文軒平瓦（5）　SE812出土であるが、SX352・351からは出土していない。樹枝状の唐草文様が左右対称に展開すると考えられる。文様の中心部分が欠失しており、中心飾りの有無は明らかでない。瓦当面と文様部分にはズレが見られる。平瓦部凹面には細かい布目が見られる。凸面は不定方向のナデが施され、離れ砂が多く残存している。胎土には金雲母や黒紫色粒が多く見られ、やや大きな白色や灰色の砂粒も多い。焼成は普通で色調は明灰褐色を呈している。あらゆる点で、他の同時期の軒瓦とは異なっている。

唐草文軒平瓦（6）　(5)と文様意匠は近いと思われるが、断片のため不明。

宝相華文軒平瓦（7）　中心に化文を置く唐草よりも宝相華文に近い内区主文である。薬師寺・興福寺菩提院・春日東塔に同文様のものがあり、同笵の可能性がある。

宝相華文軒平瓦（8）　文様部分の左端だけを残しているが、中心に花文を置く宝相華文が主文となる。春日東塔のものとおそらく同笵であろう。灰青色を呈し、焼成は良好である。

SD331出土。

唐草文軒平瓦（9）　各支葉が渦巻き状を呈している。中心部分が失われているが、おそらく均正唐草文であろう。胎土には茶褐色斑とやや大きな砂粒を含み、焼成は普通で色調は淡灰色を呈している。

均正唐草文軒平瓦（10）　中央に大きな珠文を載する中心飾りの両側に唐草文が展開すると考えられる。凹面にはやや粗い布目が見られ、凸面は横方向のハケで調整している。SK421出土。共伴の土器は年代観を知る手がかりとなろう。

格子文軒平瓦（11）　2本1組の線をX字状に交差させ左右に連続させて格子状の文様をつくり出している。上外区と下外区には対応する位置に珠文が配されている。瓦当面の厚さ3.4cmと、かなり小型の瓦である。SK421出土。

興福寺銘軒平瓦（12）　いちばん右側の「興」の字のみ残存している。外区は2本の界線に郭されて連珠文がめぐる。SD431出土で、やはりこの瓦の年代観を知る資料となろう。

塼（図版34）はいずれもSE011 出土。総計3点出土しているが、各々法量・形態が異なる。長方形無文塼は縦28.0cm、横21.3cm、厚さ5.6cmのものと縦22.0cm以上、横22.0cm、厚さ6.3cmのものがある。どちらも縦方向のハケ目が施されており、調整起点を線状に認めることが出来る。前者は焼成がやや軟弱で緑灰褐色を呈しており、後者は火熱を受けて全体が黒変している。変形無文塼は断片であるために全体の形状を復原出来ないが、長さ19.0cm、幅10.5cm～12.0cm、の断片に弧状の刻りが入っている。厚さは8.2cmと分厚いが、2枚の塼を上下に重ねて製作されたことがうかがえる。やはり火熱を受けて赤変している。

3　木製品・石製品・金属製品（第55図、図版40）

木製神像（第55図1）　高さ9.0cm、最大幅6.2cm、最大厚さ2.2cm。顔容は表現されておらず、左肩部分を欠いている。方形の板に彫刻刀様の工具で溝を彫り加え、神像形を作り出しているが、加工が単純であるにもかかわらず、衣冠と束帯は的確に表現されている。雛人形の可能性もある。材質不明。SE411出土。

毬杖（第55図2）　径5.0cm×5.8cmの上面・下底面の扁平な球形の木製品で、表面は滑らかに仕上げられている。底面中央に径0.5cm、深さ0.15cmの小孔が認められ、幅0.2cmの溝が孔から側面に伸びている。糸を巻き付けるための起点としたとも考えられるが想像の域を出ない。材質不明。SK422出土。

漆器　器形不明。スプーン状の凹みがあるので匙のようなものか。黒漆の地に赤で扇の絵が描かれている。SK422出土。

木簡（第55図３）　長さ10.3cm、幅5.0～5.3cm、厚さ1.0cmの角を面取りした台形の板の表裏に次のような墨書がある。

・「高大（以下不明）」

・「手桶拾三之内」

第１字目のすぐ上、上面中央には0.4×0.25cm（表）の穿孔がある。材質不明。SE611出土。

木製櫛（第55図４）　一部欠失。残存幅12.6cm、高さ4.5cm。歯が28本残存している。材質不明。ツゲ製か。SX752出土。

砥石（第55図４）　淡黄褐色を呈するきめの細かい石材である。側面は４面ともよく使用され、端面に少しばかり未使用部分を残す。側面に不定方向の細かな溝が刻されている部分がある。SK024出土。

石造墓標（図版40）　石造墓標はSD531から１点（舟形五輪塔板碑）、SE512の井戸枠転用材として９点（五輪塔水輪３点・風空輪１点・墓標断片１点・笠１点・火輪１点・火輪？断片２点）が出土している。舟形五輪塔板碑（図版40－１）はSX551南側のSD531埋土中上層から出土した。高さ70.0cm、最大幅29.0cm。梵字と「聖圓」の戒名が刻されている。戒名部分に赤色顔料の残存が認められる。逆修のためであろう。SE512出土の墓標群（図版40－２～７）は五輪塔とその他の墓標に分けることが出来る。墓標断片（７）には「道珍」という戒名が刻されているが、他は磨滅のために梵字等の存在は明らかに出来ない。五輪塔水輪（２・３）は直径25.0cmのものと20.0cmのものがあり、火輪（４）も一辺18.5cmと小さいことから、様々なタイプの墓標を転用していることが知られる。

銭貨（図24）　咸平元宝（北宋咸平年間・998～1003年初鋳）がSA443の最南端の柱穴から出土した。

他には東南部の整地土中から複数枚（銭文不明）、SD531の埋土中（上層整地土中）から寛永通宝が出土しているが、概して数は少ない。

胞衣壷SX051中の銭貨は存在を確認出来なかった。

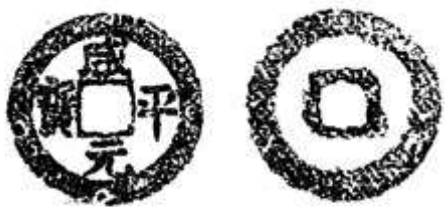


図24　咸平元宝（１：１）

あとがき

本学国際交流会館の建設にかかる発掘調査が行われてから六年以上も経過してしまいましたが、この度ようやく調査結果に関する概報を発刊できることとなりました。

今回の調査地は初めて大学構内を出た場所になりましたが、前々回の理学部B棟の際の発掘地との関連の深い遺跡のようで、両調査地合わせて佐保殿・梨子原宮・宿院など平城京外京地区の都市構造の変遷の解明にとって欠かせないデータが得られたと思います。

このように貴重な成果を一刻も早く学会に報告する義務を大学としておわされていながら、大変遅れてしまいましたことを申し訳なく存じます。言い訳がましいことで心苦しい次第ですが、今後の調査事業に関わりますことで、ご理解を得ておきたいと思います。今回から大学の独自調査に踏み切りましたので、人員その他諸条件を整えてバックアップすべきところ、結局は非常勤で専従してもらっています坪之内徹氏に全面的に依存せざるを得なくなり、今日の考古学の水準とは大きく隔たった過酷な条件下で仕事を進めて頂いて、ようやく概報の発行にこぎつけた次第です。

実は平成六年度に理学部B棟に続くG棟の建設に伴う発掘調査が同様の条件下で実施されまして、学術的にはますます重要な成果のまとまる可能性が高まってきたのですが、この方の整理と報告の仕事の前途も厳しい実情です。関係各位のご理解とご協力を切にお願いする次第です。またこの間本学付属中学校・高等学校の体育館新営工事に伴う発掘調査がありましたが、前述のような事情をご理解くださった奈良国立文化財研究所に全面的に担当して頂きました。このような各方面の方々のご配慮・ご援助のお陰でこの報告書もようやく成ったことを感謝致します。

終わりに重ねて、今回の調査・整理・執筆の過程で、また予算執行を含む運営面でご尽力くださった皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成7年1月

発掘調査会委員長　村田修三

表1　SK022

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器杯C	1－1	口径12.6 器高 2.8	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにやや内彎気味に外側上方にひらく。口縁端部は外反する。	内面はナデを施す。外面は磨滅していて不明。	色調：橙褐色
	1－2	口径12.8（復原） 器高 3.4（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにやや内彎気味に外側上方にひらく。口縁端部は外反する。	磨滅していて不明。	色調：白褐色
	1－3	口径12.9（復原） 器高 2.8（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにやや内彎気味に外側上方にひらく。口縁部上半はややたちあがり気味で、口縁端部はやや外反気味である。	磨滅していて不明。	色調：淡橙色
	1－4	口径13.6（復原） 器高 3.3（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにやや内彎気味に外側上方へひらく。口縁部上半はややたちあがり気味で口縁端部は外反する。	磨滅していて不明。	色調：白褐色
	1－5	口径13.9（復原） 器高 3.1（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにやや内彎気味に外側上方にひらく。口縁端部は外反する。	磨滅していて不明。	色調：淡橙色
	1－6	口径14.0（復原） 器高 3.3（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにやや内彎気味にひらく。	磨滅していて不明。	色調：橙色
	1－7	口径15.1（復原）	口縁部はやや内彎気味に外側上方にひらく。口縁端部はやや外反気味である。	磨滅していて不明。	色調：暗茶褐色
	1－8	口径14.8（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにやや内彎気味に外側上方へひらく。	口縁部外面にヨコナデがみとめられる他、磨滅していて不明。	色調：赤褐色
土師器杯C	1－9	口径15.6（復原） 器高 3.2（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにたちあがり、外側上方にひらく。	口縁部外面と、口縁端部内面にヨコナデを施している他、磨滅していて不明。	色調：橙色 外面の一部灰色
	1－10	口径16.2（復原）	口縁部はゆるやかにたちあがり、外側上方にひらく。	磨滅していて不明。	色調：内面　淡茶灰色　外面口縁部淡橙色 底部黒色

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
	1－11	口径16.4（復原） 器高 3.1（復原）	平らな底部から口縁部がやや丸みをおびてたちあがり、外側上方にまっすぐにひらく。口縁端部は外反する。	磨滅していて不明。斜放射暗文が口縁部内面から底部にかけてのこる。	色調：明橙色
	1－12	口径16.5（復原） 器高 2.8（復原）	平らな底部から口縁部はやや内彎気味に外側上方にひらく。口縁端部は外反する。	口縁部外面と口縁端部内面にヨコナデ、底部外面にヘラケズリを施す。口縁部内面から底部にかけて斜放射暗文を施す。	色調：橙色
	1－13	口径17.2（復原） 器高 3.8（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がそのままゆるやかにたちあがり、外側上方にひらく。	口縁部内面に斜放射暗文を施す。	色調：内面 濃灰色 外面　黒色
	1－14	口径19.0（復原）	口縁部は外側上方にまっすぐにひらく。	口縁部内面に斜放射暗文を施す。	色調：暗橙褐色
	1－15	口径18.6（復原）	口縁部はゆるやかにやや内彎気味に外側上方にひらく。	磨滅していて不明。	色調：暗橙色
	1－16	口径18.7（復原） 器高 3.2（復原）	丸みをおびた底部から口縁部がゆるやかにたちあがり、外側上方にひらく。	口縁部に斜放射暗文を施す。	色調：内面 濃灰色 外面　口縁部 淡橙色 底部淡灰色
	1－17	口径19.2（復原） 器高 2.8（復原）	口縁部はゆるやかにたちあがり、外側上方にひらく。	口縁部内面から底部にかけて斜放射暗文を施す。	色調：明橙色
土師器 杯E	1－18	口径12.5（復原） 器高 3.8（復原）	丸みをおびた底部から口縁部が内彎しながらたちあがる。	底部にオサエの痕跡が残る他、磨滅していて不明。	色調：内面 明淡橙褐色 外面　白橙褐色
土師器 杯A	1－19	口径12.2（復原） 器高 3.3（復原）	平らな底部からやや丸みをもってたちあがった口縁部が外側上方にまっすぐにひらく。	磨滅していて不明。	色調：明橙色
	1－20	口径15.3（復原）	口縁部は、外側上方にまっすぐにひらく。口縁端部は内側に丸く肥厚する。	磨滅していて不明。	色調：内面 橙色 外面　淡橙色
	1－21	口径15.9（復原） 器高 3.2（復原）	平らな底部から口縁部がゆったりとたちあがり、外側上方にまっすぐにひらく。口縁端部は内側に丸く肥厚する。	口縁部内面に斜放射暗文を施す。	色調：明橙色
土師器 椀	1－22	口径11.1（復原）	口縁部はやや内彎気味にたちあがり、外側上方にひらく。	磨滅していて不明。	色調：明橙色

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器甕	1－23	口径17.4（復原）	体部の形態の詳細は不明であるが、わずかに上にひろがり、そのまま口縁部が外側にひらく。	体部内外面にハケ目、体部外面にナデ、口縁部にヨコナデを施す。	色調：内面淡白茶色 外面　淡灰色がかる
土師器鍋B	1－24	口径28.8（復原） 器高 9.7（復原）	半球形に近い体部に外側上方にひらく口縁がつき、把手を有す。	口縁部外面にヨコナデ、体部外面にハケ目、口縁部内面にハケ目、体部内面上部にオサエと強いヨコナデ、体部内面にナデを施す。	色調：橙色 内面の一部と底部外面は灰色
土師器鉢	2－1	口径20.2 器高 7.1	丸みをおびた平底から口縁部がやや内彎気味に外側上方にひらく。	口縁部内面にヨコナデ、底部内面にオサエとナデ、外面にオサエとナデを施す。	色調：明橙色
土師器皿A	2－2	口径16.3（復原）	口縁部は外側上方にまっすぐにひらく。口縁端部は内側に丸く肥厚する。	底部外面にオサエの痕跡が残る他は、磨滅していて不明。	色調：淡橙色
	2－3	口径19.3（復原） 器高 2.6（復原）	平らな底部から口縁部がやや丸みをおびてたちあがり、外側上方へまっすぐにひらく。	磨滅していて不明。	色調：淡茶灰色
	2－4	口径22.1（復原） 器高 2.6（復原）	平らな底部から口縁部がやや丸みをおびてたちあがり、外側上方にまっすぐにひらく。口縁端部は内側に丸く肥厚する。	口縁部外面にヨコナデ、底部外面にオサエの痕跡が残る他は、磨滅していて不明。	色調：橙色
土師器甕	2－5	口径12.6（復原）	口縁部は外側上方にまっすぐにひらく。	磨滅していて不明。	色調：茶灰褐色
	2－6	口径14.0（復原） 器高12.7（残存高）	球形に近い体部に外反する口縁部がつく。	体部外面のハケ目がみとめられる他は、磨滅していて不明。	色調：内面茶灰褐色 外面　淡赤褐色
	2－7	口径10.3（復原） 器高12.0（残存高）	球形に近い体部に外反する口縁部がつく。	体部外面にハケ目が認められる他は、磨滅していて不明。	色調：明橙褐色 外面の一部黒色
	2－8	口径13.4（復原） 器高10.2（残存高）	半球形に近い体部にやや外側にひらきながらまっすぐにたちあがり、端部が外反する口縁部がつく。	磨滅していて不明。	色調：内面暗茶灰褐色 外面　赤褐色ところどころ黒色
	2－9		大型の三角形把手	把手にオサエ、ナデを施す。器壁には強いヨコナデではりつける。器壁は内外面にナデを施す。	色調：内面淡灰褐色 外面　淡赤橙色 耳の一部は黒色

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器杯A	2－10	口径11.0（復原） 器高 3.4（復原）	平底から口縁部は外側上方にまっすぐにひらく。	底部内面と口縁部内外面にロクロナデを施す。底部はヘラ切り痕を残す。	色調：灰色 焼成：硬質
	2－11	口径17.8（復原）	底部からゆるやかに口縁部がたちあがり、外側にひらく。口縁端部はやや外反気味である。	口縁部内外面にロクロナデ、底部外面にロクロケズリを施す。	色調：灰白色 焼成：軟質
須恵器杯B	2－12	口径15.2（復原） 器高 4.7（復原）	口縁部下半は内彎し、上半は外反する。高台は外反し、端面はやや内傾する。	底部内面から口縁部内外面、高台にかけてロクロナデを施す。	色調：灰色 焼成：硬質
	2－13	口径17.1（復原） 器高5.9（復原）	平底から口縁部は外側上方へまっすぐにひらく。高台はやや外反し、端面は水平である。	口縁部外面下半から底部外面にかけてロクロケズリ、底部内面から口縁部内外面、高台にかけてロクロナデを施す。底部外面中央部は、ヘラ切り痕を残す。	色調：灰色 焼成：硬質
須恵器杯B蓋	2－14	口径13.4（復原） 器高 2.7	天井部は丸く笠形を呈し、縁部は屈曲しない。つまみは扁平である。	天井部にロクロケズリ。他の部分はロクロナデを施す。	色調：灰白色 焼成：硬質
	2－15	口径18.0（復原） 残存高 2.8	天井部は笠形を呈し、縁部は屈曲しない。つまみの痕跡がかすかに認められる。	天井部にロクロケズリ。全体にロクロナデを施す。	色調：灰白色 焼成：硬質
須恵器鼈	2－16	体部最大径 7.5 某部径 4.3 体高 4.9	口頸部は欠損。最大径を体部の中位よりやや上位に有し、体部は球形を成す。円孔スカシ（径1.1）は体部の¾上位に穿つ。高台は外反し、端面は外傾する。	体部外面円孔スカシより下部にロクロケズリ、体部外面から底部外面にロクロナデを施す。内面は不調整。	色調：濃灰色 焼成：硬質
須恵器甕A	2－17	口径25.6（復原）	体部欠損。口縁部は外反し、端部は肥厚する。	体部外面は平行タタキの上からロクロケズリを施す。体部内面は同心円当具痕を残す。口縁部外面にロクロナデとカキメ、口縁部内面にロクロナデを施す。	色調：濃灰色 焼成：硬質

表2　SK021

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿A	3－1	口径19 器高 2.65	平底で口縁部は斜め上に開く。	b手法 底部内面、口縁部内外面をなでた後、底部外面をヘラ削りし、口縁部にははヘラ磨きを施す。内面に螺旋暗文を施す。	色調：乳白色
土師器 杯A	3－2	口径19.5 器高 4.1	A形態の口縁部をもつ口縁部は下半が内彎。上半がわずかに外反し、口縁端部は内側に丸肥厚する。内面に連弧や斜放射十螺旋暗文を施す。	b手法で、底部内面、口縁部内外面をヨコナデしたあと底部外面をヘラケズリし、口縁部外面にヘラミガキを施す。	色調：白褐色
土師器 杯A	3－3	口径19.4 器高 3.5	平底で口縁部は斜め上に開く。内面に斜放射状暗文を施す。	b手法 底部内面、口縁部内外面をなでた後、底部外面をヘラ削りする。口縁部外面については磨滅がひどく不明。	色調：淡褐色
土師器 皿A	3－4	口径18 器高 1.9	平底で口縁部下半は内彎で、上半は外反し、口縁端部は内側に肥厚する。内面に斜放射状暗文を施す。	b手法 底部内面、口縁部内外面をなでた後、底部外面にヘラ削りをする。	色調：白褐色
須恵器 杯A	3－5	口径12.6 器高 3.5	口縁部は斜め上に立ち上がり、上半で外反ぎみになる。	ロクロナデ、底部に切り離し痕跡有。	色調：淡灰色 焼成：軟質 ロクロ回転方向　時計回り 口縁部の一部に内側から外側にかけて墨痕
須恵器 杯B	3－6	口径15.2 器高 4	口縁部は斜め上にまっすぐのび、口縁端部は丸くおさまる。高台端部は水平である。	ロクロナデ	色調：淡灰色 焼成：軟質 ロクロ回転方向　時計回り 内面に赤色顔料付着、底部外面に墨付着
須恵器 壺	3－7	高台の直径 9.8	丸い底部と斜めに立ち上がる体部に外傾する高台がつく。	底部内面はなでが強い。外面全体をロクロナデする。	底部のみ残存 色調：灰色 焼成：硬質 体部外面に自然釉がかかる

表3　SK024

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿C	3－8	口径12.6（復原） 器高 2.1（復原）	厚手で丸底に近い平底で斜めに上がる短い口縁をもつ。口縁端部は丸くおさまる。		色調：白褐色 焼成：軟質 口縁端部に油煙の跡がある
土師器 皿A	3－9	口径15.9（復原） 器高 2.35（復原）	平底で、口縁部は下半が内彎し上半が外彎して口縁端部は内側に肥厚する。	口縁部外面にヨコナデを施す。	色調：暗茶褐色 内面が黒ずんでいる
	3－10	口径20.7（復原） 器高 2.2（復原）	平底で口縁部は下半が内彎し上半が外彎して口縁端部は内側に肥厚する。	口縁部外面に一筋磨きらしきものがある。	色調：明橙色
	3－11	口径22.0（復原） 器高 2.7（復原）	平底で口縁部は下半が内彎、上半が外彎して口縁端部は内側に肥厚する。	口縁部になでを施す。	色調：淡橙色
	3－12	口径21.4（復原） 器高 3.3（復原）	丸底に近い平底で口縁部は下半が内彎し、上半が外彎して口縁端部は内側に肥厚する。		色調：淡橙色
	3－13	口径25.8（復原） 器高 1.9（復原）	平底で斜めにひらく短い口縁部をもつ。口縁端部の肥厚は小さい。		色調：橙色
土師器 杯C	3－14	口径11.6（復原） 器高 2.8（復原）	丸底で斜めにきつく立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は内傾する。	e手法 オサエとナデで仕上げる。	色調：乳白色
土師器 杯A	3－15	口径19.5 器高 4.1	口縁端部はナデのため内側に肥厚したようになっている。	底部外面にヘラケズリを施す。	色調：明橙色
土師器 甕	3－16	口径19.5（復原）	体部欠損。口縁部は外反し、口縁端部は内側に肥厚する。	ナデを施す。	色調：暗茶橙色
	3－17	口径15.7（復原）	体部欠損。口縁部は外反し、口縁端部は内側に肥厚する。	ナデを施す。	色調：淡橙色
黒色土器 B類 坏	3－18	口径16.5（復原）	口縁部は内彎気味に斜め上にひらく。	内外面を黒色化させ丁寧に磨く。	色調：黒色
土師器 高杯A	3－19	残存高 5.7	ラッパ状に開く裾部とヘラで多面体に面取りした脚部である。脚部のみ	ナデたあとに面取りを上から下に向けて行う（8面）	色調：橙色 焼成：硬質 面取り痕が明瞭である
	3－20		脚部のつけ根のみヘラで面取りをして11面にしている。	ナデたあとに面取りを行う。	色調：淡橙色 焼成：硬質

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
	3－21		把手部分	ナデを施す。	色調：灰白色 焼成：硬質
須恵器 杯B蓋	4－1	口径20.7（復原） 残存高 2.7	天井部は平らで縁部は屈曲する。	天井部外面から縁部外面にかけてロクロケズリ、縁部内外面にロクロナデを施す。	色調：灰色 焼成：硬質
	4－2	口径16.4 器高 2.4	天井部は中央がややへこみ、つまみがつく。縁部は屈曲しない。	天井部外面から縁部外面にかけてロクロケズリ、縁部内外面にロクロナデを施す。	色調：濃灰色 焼成：硬質
	4－3	口径16.3（復原） 残存高 2.4	縁部は屈曲する。	天井部外面から縁部外面にかけてロクロケズリ、縁部内外面にロクロナデを施す。	色調：灰色 焼成：硬質
	4－4	口径14.6（復原） 残存高 0.7	全体的に扁平で、口縁部がゆるやかに屈曲する。	天井部外面にロクロケズリをした後、ロクロミガキを施す。縁部内外面にはロクロナデを施す。	色調：灰色 焼成：硬質
須恵器 皿C	4－5	口径22.3（復原） 器高 2.4（復原）	平底に外側上方にまっすぐにひらく短い口縁部がつく。口縁端部は平坦。	口縁部内外面にロクロナデ、底部内面にナデ、底部外面にはヘラケズリを施す	色調：濃灰色 焼成：軟質
	4－6	口径22.6（復原） 器高 2.8（復原）	平底に外側上方にまっすぐにひらく短い口縁部がつく。口縁端部は平坦。	口縁部から底部内外面にかけてロクロナデ、底部内面にナデ、底部外面にはヘラ切りの後、かるくナデを施す	色調：内面 濃灰色 外面　淡灰色 焼成：硬質
	4－7	口径22.6 器高 2.4	平底に外側上方にまっすぐにひらく短い口縁部がつく。口縁端部は、平坦で外傾する。	底部内面から口縁部内外面にかけてロクロナデ、底部外面はヘラ切りの後ナデを施す。	色調：淡灰色 焼成：やや軟質
	4－8	口径23.0（復原） 器高 2.9（復原）	平底に外側上方にまっすぐにひらく短い口縁部がつく。口縁端部は、平坦である。	磨滅していて不明。	色調：灰白色 焼成：軟質
	4－9	口径32.0（復原） 器高22.0（復原）	平底に外側上方にまっすぐにひらく短い口縁部がつく。口縁端部は平坦である。	口縁部内面はロクロナデ、口縁部外面はロクロケズリ、底部外面はヘラ切りの後、ロクロケズリを施す。	色調：濃灰色 焼成：軟質 ロクロ回転方向
須恵器 皿B	4－10	口径28.4（復原） 器高 4.2（復原）	口縁部は外側上方にゆるやかに内彎しながらのび、端部は外反する。底部はやや彎曲し、高台は短く低く、やや外反する。	口縁部外面下半から底部外面にかけてロクロケズリ、口縁部内外面と底部外面にロクロナデを施す。	色調：淡灰色 焼成：軟質

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
	4 −11	口径24.4（復原） 器高 4.9（復原）	平底から口縁部は外側上方にまっすぐにひらく。高台はやや外反し、端面は水平である。	底部外面にロクロケズリ、全体にロクロナデを施す。	色調：灰色 焼成：硬質
須恵器杯B	4 −12	口径13.8（復原） 器高 4.0	平底から口縁部は外側上方にのび、口縁端部は外反する。高台はやや外反し、端面は水平である。	口縁部内外面から高台にかけてロクロナデ、底部内面にナデを施す。底部外面にヘラ切り痕が残る。	色調：灰色 焼成：硬質
	4 −13	口径14.2（復原） 器高 4.4	平底から外側上方に下部はやや丸みをおび、端部まではまっすぐにひらく口縁部がつく。高台はやや外反し、端面は水平である。	底部外面はヘラ切りの後ロクロケズリを施す。その他の部分はロクロナデを施す。	色調：灰色 焼成：硬質
	4 −14	口径15.3（復原） 器高 3.9（復原）	平底にやや内彎気味に外側上方にひらく口縁部がつく。高台はやや外反し、端面は水平である。	口縁部内外面から高台にかけてロクロナデを施す。	色調：淡灰色 焼成：硬質
	4 −15	口径20.0（復原） 器高 6.0	口縁部は外側上方にまっすぐにひらく。高台はやや外反し、端面は水平である。	口縁部内外面から高台にかけてロクロナデを施す。	色調：灰色 焼成：硬質
須恵器杯A	4 −16	口径13.4（復原） 器高 3.7（復原）	平底から口縁部はゆったりとたちあがって外側上方にひらく。	口縁部内外面にロクロナデを施す。	色調：灰白色 焼成：軟質
	4 −17	口径15.6（復原） 器高 4.3（復原）	平底から口縁部は外側上方にまっすぐにひらく。	底部内面から口縁部内外面にかけてロクロナデ、底部内面にナデを施す。底部外面にヘラ切り痕が残る。	色調：淡灰色 焼成：やや軟質
	4 −18	口径17.4 器高 3.2	平底から口縁部は外側上方にまっすぐにひらく。	口縁部内外面にロクロナデ、底部内面にナデを施す。底部外面にヘラ切り痕が残る。	色調：淡灰色 焼成：やや軟質
須恵器盤	4 −19	口径49.5（復原）	口縁部は、外側上方にひらく。	口縁部内外面にロクロナデを施す。	色調：淡灰色 焼成：やや軟質

表4　SE011

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 椀A	5－1	口径11.4（復原） 器高 2.9（復原）	丸底に近い平底で、口縁部は内彎して斜めに大きく開く。底部から口縁部にかけては漸次的である。		色調：白褐色 焼成：軟質
土師器 皿C	5－2	口径13.6（復原） 器高 2.5（復原）	丸味を帯びた平底で口縁部は短く、斜め上にひらく。口縁端部は内彎する。	e．手法 手づくねで厚手である。口縁部はヨコナデを施す。	色調：淡褐色 焼成：硬質
土師器 皿A	5－3	口径17.8（復原） 器高 2.25（復原）	平底で、口縁部は短く斜め上にひらく。口縁端部は丸くおさまる	ナデ	色調：乳橙色 焼成：硬質
	5－4	口径18.8（復原） 器高 2.45（復原）	平底で口縁部は短く斜め上にひらく。口縁端部は内側に小さく肥厚する。	ナデ	色調：橙色
	5－5	口径20.6（復原） 器高 2.9（復原）	平底で口縁部は短く斜め上に開く。口縁端部は若干内側に肥厚する。	C₂．手法 全体をナデたあとに外面全体にヘラミガキを施す。	色調： 内面　淡橙色 外面　黒色 外面全体にススが付着
黒色土器 A類 杯	5－16	口径23.9（復原） 器高 7	丸底に近い平底で斜め上にひらく口縁部からなる。		色調： 内面　黒色 外面　淡褐色 焼成：軟質
須恵器 杯B蓋	5－6	口径14.2（復原） 器高 2.3	A形態のもので縁部は屈曲し、つまみは宝珠つまみである。	頂部はロクロナデを施す。縁部もロクロナデ、内面のナデは乱方向である。	色調：灰色まじりの明橙色（二次焼成の為、変色している）
	5－7	口径16.0（復原） 器高 1.5	B形態の縁部で、つぶれたようなつまみをもつ。	頂部はロクロ削り。全体をロクロナデで仕上げる。	色調：灰色 焼成：硬質
	5－8	口径17.0（復原） 器高？	A形態のもので縁部が屈曲する。つまみの有無は不明。	全体にロクロナデ。頂部はロクロ削りの後ロクロナデを施す。	色調：淡灰色 焼成：軟質
	5－9	口径17.1 器高 2.2	A形態のもので縁部が屈曲する。宝珠つまみ	頂部はロクロ削りの後ロクロナデを施す。縁部もロクロナデ。	色調：青灰色（外面の頂部とつまみは褐色）硬質 二次焼成を受ける。
	5－10	口径17.5（復原） 器高？	B形態の縁部をもつ、つまみの有無は不明。	ロクロ削りののちロクロナデ。	色調：灰色 焼成：硬質

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器杯B	5－11	口径13.3 器高 4.7	底部は平坦で内彎して斜めに立ちあがる口縁部からなる。高台端面は水平。	ロクロナデ。底部外面にヘラ削り痕がみられる。	色調：汚白色 焼成：軟質 外面に全体をおおうようにススがつく。口縁端部に油煙のあとらしきものがついている
	5－12	口径15（復原） 器高 3.9	底部は平坦で、口縁部は内彎して立ち上がり、口縁端部は外反する。佐渡理椀を真似たものか。高台端面は内傾する。	底部外面はヘラ削りのまま。全体にロクロナデ。	色調：淡灰色 焼成：硬質
須恵器杯A	5－13	口径？ 器高？	二次焼成のためかなりゆがんでいる。	外面は手持ちヘラ削り、口縁部内面にナデを施す。	色調：外面赤褐色 内面　灰色 焼成：硬質
	5－14	口径14.8（復原） 器高 2.9（復原）	平底で斜め上にひらく口縁部をもつ。口縁端部は若干内傾する。	口縁部はロクロナデ、底部内面は乱方向ナデ、底部外面はヘラ切りのまま。	色調：明橙色 二次焼成を受けている。
	5－14	口径14.8（復原） 器高 2.9（復原）	平底で斜め上にひらく口縁部をもつ。口縁端部は若干内傾する。	口縁部はロクロナデ、底部内面は乱方向ナデ、底部外面はヘラ切りのまま。	色調：明橙色 二次焼成を受けている。
	5－15	口径15.9（復原） 器高 2.9（復原）	平底で斜め上にひらく口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚。		色調：橙色 二次焼成を受けている。
須恵器皿B	5－17	口径27.6（復原） 器高 4.7	底部は沈み気味で、口縁部は斜め上に大きくひらく。高台端面は少し外傾。	口縁部外面の立ち上がりから底部外面にかけてロクロ削りのちロクロナデ。口縁部内外面から底部内面にかけてロクロナデ。	色調：灰色まじりの淡褐色 二次焼成をうけている。
須恵器高杯	5－18	残存高 9.5	脚部のみラッパ状にひらく脚柱部である。	ロクロ水挽き。	色調：濃灰色 焼成：硬質
須恵器壺E	5－19	口径 8.6（復原） 器高 6.85	胴部は内彎気味に斜め上に開き、肩部は狭い。口縁部は短くまっすぐに立つ。高台は外向きにつき、端面は水平。	全体にロクロナデを施す。	色調：灰色 焼成：硬質

表5　SD032

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器皿A	5－20	口径20.4（復原） 器高 2.9（復原）	平底で口縁部は短く内彎気味に斜め上にひらく。口縁端部は内側に肥厚する。	a．手法 底部外面に成形時の凸凹が残る。内外面をヨコナデしたあと口縁部外面にヘラミガキを施す。	色調：橙色

表6　SK023

器種	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器高杯	5－21	口径29.2 器高13.9	ラッパ状にひらく脚柱部と、外反する口縁部をもつ平坦な杯部からなる。	脚部内外面はロクロナデ。杯部は内面と口縁部内外面にロクロナデ、外面にロクロケズリを施す。	色調：灰白色 焼成：軟質

表7　SE111・その他

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
6－1	土師器皿	(10.5)	(1.2)		口縁部ての字状を呈す	口縁端部を強くナデ	（色調）暗褐色・暗灰色（胎土）白色砂粒　井戸掘形出土
6－2	土師器杯	(16.0)	(3.5)		口縁端やや尖り気味	口縁端部だけナデ	（色調）灰褐色（胎土）白色砂粒・赤色クサリ礫を含む　井戸掘形出土
6－3	黒色土器（B）椀	(16.6)	—	—	口縁端やや尖り気味	内外面ヘラミガキ	（胎土）白色砂粒を僅かに含む、やや磨滅　井戸内出土
6－4	土師器皿	(10.5)	(2.0)		口縁部ての字状を呈す	口縁端部を強くナデ	（色調）暗茶褐色（胎土）白色砂粒・赤色クサリ礫を含む　井戸内出土
6－5	土師器皿	(11.7)	(1.8)		口縁部ての字状を呈す	口縁端部を強くナデ	（色調）灰褐色（胎土）チャート細粒を僅かに含むが良好　井戸内出土
6－6	土師器杯	(15.2)	—		口縁端やや尖り気味	口縁部内外面だけナデ	（色調）暗灰褐色（胎土）白色砂粒・金雲母を含む　井戸内出土
6－7	土師器皿	(11.0)	(1.6)		口縁部ての字状を呈す	口縁端部を強くナデ	（色調）明褐色、一部淡桃褐色（焼成）良好
6－8	土師器皿	9.8	2.0		口縁部ての字状を呈す	口縁端部を強くナデ	（色調）淡灰褐色（焼成）やや軟らかい
6－9	土師器皿	(11.9)	(2.5)		口縁端部は丸く収まる	体部外面指掌痕	（色調）明褐色、一部淡桃褐色（焼成）良好

表8　SE112

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
6－10	瓦器椀	15.0	5.4	5.8	口縁の一部歪み		（色調）黒灰色（胎土）良（焼成）良好
6－11	瓦器椀	14.5	5.5	5.1			（色調）黒灰色（胎土）良（焼成）良好　口縁の一部、高台の一部灰白色
6－12	瓦器皿	9.4	1.6				（色調）黒灰色（胎土）良（焼成）良好
6－13	土師器皿	10.2	1.9			外面に粘土巻上げ痕跡	（胎土）雲母片多量、灰色細砂粒若干（焼成）普通（色調）明灰褐色　完形
6－14	土師器皿	10.0	2.3		口縁の一部ス ス付着		（胎土）金雲母片・赤色クサリ礫・灰色細砂粒（焼成）普通（色調）淡赤褐色　完形
6－15	土師器皿	10.2	2.0		口縁の一部ス ス付着	底部外面一部をヘラケズリ	（胎土）少量の雲母片・白色砂粒・灰色細砂粒、赤色クサリ礫（焼成）普通（色調）灰褐色
6－16	土師器皿	10.1	2.0		口縁一部ス ス付着	外面粘土結合痕跡	（胎土）雲母片・灰色細砂粒・黒色細砂粒（焼成）普通（色調）淡赤褐色
6－17	土師器皿	10.7	2.6			外面粘土結合痕跡	（胎土）多量の金雲母・赤色クサリ礫（焼成）普通（色調）明灰褐色
6－18	土師器皿	10.7	2.1			外面粘土結合痕跡	（胎土）多量の金雲母・赤色クサリ礫（焼成）普通（色調）明灰褐色　完形
6－19	土師器皿	(13.5)	(2.6)			口縁部内外面二段ナデ	（胎土）雲母片・灰色細砂粒・黒色細砂粒（焼成）普通（色調）淡赤褐色
6－20	土師器皿	14.9	2.8				（胎土）雲母片・赤色クサリ礫（焼成）普通（色調）灰赤褐色
6－21	土師器土釜	(22.5)	—	鍔径(28.4)	くの字状口縁、口縁端内面肥厚	鍔部分内面等間隔当て具痕	（色調）茶褐色（胎土）良、微小砂粒あり（焼成）良好
6－22	土師器土釜	(21.5)	—	鍔径(28.8)	くの字状口縁、口縁端内面肥厚		（色調）赤褐色（二次焼成）（胎土）良、微小砂粒あり（焼成）良好
6－23	須恵器鉢	(32.4)	—	—		口縁外面重ね焼痕跡	（色調）明黒灰色（胎土）良（焼成）堅緻

表9　SG361

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
7－1	土師器皿	8.5	1.1				（色調）白褐色（胎土）やや粗（焼成）良好、内面墨痕、口縁部二次焼成うける。
7－2	土師器皿	(8.9)	(1.5)				（色調）淡赤褐色（胎土）良雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－3	土師器皿	8.9	1.5				（色調）白褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
7－4	土師器皿	9.0	1.6				（色調）淡赤褐色（他のものより白っぽい）（胎土）良、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－5	土師器皿	10.5	1.9				（色調）淡赤褐色（白っぽい）（胎土）やや粗、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－6	土師器皿	9.3	1.45			外面粘土接合痕跡	（色調）赤褐色（胎土）良、雲母（焼成）良好
7－7	土師器皿	(9.2)	(1.4)		ゆがみ顕著		（色調）茶褐色（胎土）やや粗、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－8	土師器皿	9.6	1.5				（色調）白褐色（胎土）やや粗、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－9	土師器皿	9.5	1.8				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－10	土師器皿	9.3	2.0			外面粘土接合痕跡	（色調）淡赤褐色（白っぽい）（胎土）やや粗、クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
7－11	土師器皿	(9.1)	(1.6)				（色調）白褐色（胎土）やや粗、雲母等を含む（焼成）良好
7－12	土師器皿	9.4	1.8				（色調）淡赤褐色（胎土）良、クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
7－13	土師器皿	9.5	1.6				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗、クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
7－14	土師器皿	10.0	1.5				（色調）白褐色（外面底部淡赤褐色）（胎土）良、雲母含む（焼成）良好
7－15	土師器皿	10.0	1.4				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗、クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
7－16	土師器皿	9.6	1.7				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗、雲母含む。クサリ礫（焼成）良好
7－17	土師器皿	(9.7)	(1.8)				（色調）白褐色（胎土）やや粗、クサリ礫含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
7－18	土師器皿	9.6	1.6				（色調）淡赤褐色（他のものより白っぽい）（胎土）良、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－19	土師器皿	10.1	1.4				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－20	土師器皿	10.0	1.9				（色調）白褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
7－21	土師器皿	10.2	2.2				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗、クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
7－22	土師器皿	(10.5)	(1.9)			外面粘土接合痕跡	（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
7－23	土師器皿	(11.7)	(2.4)			内面ハケ目	（色調）白褐色（胎土）やや粗、クサリ礫・石英等含む（焼成）良好
7－24	土師器皿	(12.9)	(2.9)				（色調）淡赤褐色（赤っぽい）（胎土）やや粗、クサリ礫・雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
7－25	土師器皿	(12.9)	(2.8)			外面粘土接合痕跡	（色調）淡赤褐色（胎土）良、クサリ礫・雲母等含む（焼成）良好
7－26	土師器皿	9.1	1.4			外面粘土巻上げ痕跡	（色調）茶褐色（胎土）やや粗、雲母・クサリ礫含む（焼成）良好、スス付着
7－27	土師器皿	(12.9)	(2.4)			外面粘土接合痕跡	（色調）淡赤褐色（赤っぽい）（胎土）やや粗、クサリ礫・雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
7－28	土師器皿	13.7	2.6			外面粘土巻上げ痕跡	（色調）淡赤褐色（白っぽい）（胎土）良、わずかな雲母・白色砂粒（長石等）含む（焼成）良好
7－29	土師器皿	13.7	3.1			外面粘土接合痕跡	（色調）淡赤褐色（胎土）良　雲母その他砂粒含む（焼成）良好、スス付着
7－30	土師器皿	13.7	2.5				（色調）淡赤褐色（胎土）良、クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
7－31	土師器皿	(13.9)	(2.2)			外面粘土接合痕跡	（色調）淡赤褐色（白っぽい）（胎土）良、クサリ礫・わずかな雲母含む（焼成）良好
7－32	土師器皿	(14.1)	(2.4)			外面粘土接合痕跡	（色調）白灰色・灰色（胎土）やや粗、雲母等を含む（焼成）不良
7－33	土師器皿	(14.9)	(2.6)				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗、クサリ礫・雲母・微小砂粒含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量(cm) 口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整技法	備考
7－34	土師器皿	(15.0)	(2.4)				(色調) 淡赤褐色 (白っぽい) (胎土) 良、クサリ礫・わずかに雲母含む (焼成) 良好
7－35	瓦器椀	(14.8)	(4.7)	(5.3)			(色調) 黒灰色 (胎土) 精良 (焼成) 堅緻
7－36	瓦器皿	7.9	1.4			外面重ね焼痕跡	(色調) 黒灰色 (胎土) 精良 (焼成) 堅緻

表10　SX355

図版番号	器種・名称その他	法量(cm) 口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整技法	備考
7－37	青磁碗 (龍泉窯)	(15.2)	—				
7－38	土師器皿	9.4	1.6				(色調) 明赤褐色 (胎土) 赤色クサリ礫・灰色チャート?・金雲母を含む (焼成) 良好 口径全体の¼欠失　6片以上の破片
7－39	土師器皿	9.2	1.5				(色調) 明灰赤褐色 (胎土) 赤色クサリ礫・灰色チャート?・金雲母片を含む　1×0.5cmの大きな砂粒あり (焼成) 普通　全体の⅛欠失
7－40	土師器皿	9.3	1.7				(色調) 淡赤褐色 (胎土) 赤色クサリ礫・金雲母を含む (焼成) 普通　口縁の一部欠失　5片以上の破片　口縁の一部と底部外面にスス付着
7－41	土師器皿	10.8	7.2				(色調) 淡赤褐色 (胎土) 赤色クサリ礫・長石粒・チャート片・金雲母片を含む (焼成) 普通　口縁部にスス付着　口縁の一部欠失　5片以上の断片
7－42	土師器皿	13.6	2.5				(色調) 明赤褐色 (胎土) 赤色クサリ礫・長石粒・金雲母片を含む (焼成) 良好　ほぼ完形　10片以上にわかれる
7－43	土師器皿	14.0	2.4				(色調) 明黄赤褐色 (胎土) 赤色クサリ礫・金雲母片を含む (焼成) 良好　ほぼ完形　13片以上の破片にわかれる
7－44	瓦器椀	14.5	4.5	4.8			(色調) 黒灰色 (胎土) 良 (焼成) 良好
7－45	瓦器椀	14.7	4.8	3.9			(色調) 黒灰色 (胎土) 良 (焼成) 良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
7－46	瓦器椀	14.3	4.8	4.2		外面重ね焼痕跡	（色調）黒灰色（胎土）精良（焼成）良好
7－47	瓦器皿	7.9	1.4				底部の一部欠失　5片以上の断片

表11　SX352

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
8－1	中国製青磁碗	(16.4)	—	—			
8－2	中国製青磁皿	—	—				同安窯系
8－3	中国製青磁皿	(11.7)	—				
8－4	中国製青白磁合子	—	—	(4.0)		外面底部周辺露胎	受け部欠損
8－5	中国製黄釉陶盤	(25.2)	(7.3)	(21.8)	玉縁状口縁	体部外面下半窯道具痕、口縁端露胎	内底面に鉄絵の一部残存
8－6	中国製黄釉陶盤	—	—	(23.0)			
8－7	中国製黄釉陶盤	—	—	(24.0)			
8－8	瓦器椀	13.6	4.7	4.4			火熱を受け淡黄褐色を呈す
8－9	瓦器盤	(34.6)	(8.5)	(29.4)			火熱のため黄褐色、桃赤色を呈す
8－10	土師器椀	14.0	4.9				
8－11	土師器皿	13.4	2.8				
8－12	土師器皿	—	—				底部外面糸切り痕跡

表12　SX351

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
8－13	中国製青磁皿	(10.6)	—				
8－14	中国製青磁皿	(11.9)	—				
8－15	中国製青磁皿	(12.7)	—	—			
8－16	中国製青磁碗	(13.0)	—	—			
8－17	中国製青磁碗	(16.6)	—	(6.6)			
8－18	中国製青白磁碗	(12.0)	—	—			
8－19	中国製白磁碗	(15.7)	—	—		内底面釉輪状カキ取り	
8－20	中国製白磁碗	(16.9)	—	—	玉縁口縁		
9－1	中国製黄釉陶器盤	—	—				
9－2	瓦器盤	(64.8)	—				

表13　SK421

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
9－3	青磁皿	9.2	2.5	2.9		口縁端釉カキ取り、銀貼り	（色調）素地上　白灰色　釉　淡青灰色（胎土）密　微小砂粒含む（焼成）堅緻
9－4	白磁皿	9.5	2.5	5.8			底部およびその周辺露胎
9－5	土師器皿	(8.6)	(1.8)				（色調）赤褐色（胎土）やや粗　クサリ礫・雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
9－6	土師器皿	9.2	1.8			外面粘土巻上げ痕跡	（色調）赤褐色（胎土）やや粗　クサリ礫・雲母・微小砂粒含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
9－7	土師器皿	(9.6)	(2.0)		底部穿孔		（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗　クサリ礫・雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
9－8	土師器皿	(12.1)	(2.5)			外面粘土巻上げ痕跡	（色調）乳赤褐色（胎土）良　クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
9－9	土師器皿	(12.1)	(2.7)			外面粘土接合痕跡	（色調）淡赤褐色（胎土）良　微小砂粒・クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
9－10	土師器皿	(12.7)	(2.7)			外面粘土接合痕跡	（色調）赤褐色（胎土）やや粗　微小砂粒・クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
9－11	土師器皿	(12.3)	(3.1)				（色調）淡赤褐色（胎土）良　微小砂粒・クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
9－12	土師器皿	(12.0)	(2.8)				（色調）赤褐色（胎土）良　クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
9－13	土師器皿	(12.0)	(2.7)				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗　微小砂粒・クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
9－14	土師器皿	(11.6)	(3.0)				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗　雲母・クサリ礫・微小砂粒含む（焼成）良好
9－15	土師器皿	(12.3)	(2.8)				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗　白色砂粒・クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
9－16	土師器皿	(13.1)	3.2				（色調）乳赤褐色（胎土）やや粗　微小砂粒・クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
9－17	土師器皿	(13.5)	(2.1)				（色調）赤褐色（胎土）良　クサリ礫・雲母・微小砂粒含む（焼成）良好

表14　SD431

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
10－1	白磁皿	—	—	6.9		底部外面露胎	（色調）淡灰白色（胎土）密　微小砂粒、比較的多く含む（焼成）堅緻
10－2	土師器皿	8.2	1.4				（色調）赤褐色（胎土）赤色　クサリ礫・金雲母含む（焼成）やや軟弱（表面磨滅）
10－3	土師器皿	8.1	1.6				（色調）赤褐色（胎土）赤色クサリ礫・雲母片を含む（焼成）普通
10－4	土師器皿	8.2	1.6				（色調）淡赤褐色（胎土）赤色クサリ礫・雲母片・黒色細砂粒を含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
10－5	土師器皿	8.3	1.9				（色調）淡赤褐色（胎土）赤色クサリ礫・雲母片・黒色細砂粒を多く含む（焼成）普通
10－6	土師器皿	10.0	2.1				（色調）赤褐色（胎土）赤色クサリ礫・長石粒を含む（焼成）やや軟弱　底面縁辺に3㎜の穿孔一ケ所
10－7	土師器皿	10.0	2.2				（色調）淡赤褐色（胎土）赤色クサリ礫・長石粒・雲母片を含む（焼成）普通　底部外面の一部に剥離痕状の段
10－8	土師器皿	10.0	2.5				（色調）淡赤褐色（胎土）赤色クサリ礫・長石粒・雲母片・黒色細砂粒を含む（焼成）普通
10－9	土師器皿	9.8	2.5				（色調）淡赤褐色（胎土）赤色クサリ礫・雲母細片・黒色細砂粒を含む（焼成）普通
10－10	土師器皿	(14.0)	(5.0)				（色調）淡褐色（胎土）赤色クサリ礫・灰色チャート片・金雲母片を含む（焼成）やや軟弱
10－11	土師器皿	6.9	1.5				（色調）明灰褐色（胎土）微細な黒色粒、長石粒を含む（焼成）普通
10－12	土師器皿	6.9	1.6				（色調）明灰褐色（胎土）微細な黒色粒、長石粒を含む（焼成）普通
10－13	土師器皿	6.9	1.5				（色調）明灰白褐色（胎土）灰色チャート・長石粒を含む（焼成）やや軟弱
10－14	土師器皿	6.8	1.6				（色調）明灰白褐色（胎土）微細な黒色粒・長石粒を含む（焼成）普通
10－15	土師器皿	11.3	3.1		口縁の一部片口状を呈す		（色調）褐色・内面一部茶褐色に変色（胎土）微細な黒色粒・長石粒を含む（焼成）普通　口縁の一部片口状を呈するが偶然の産物か？
10－16	土師器皿	10.7	3.0				（色調）灰褐色（胎土）微細な黒色粒・長石粒・灰色チャートを含む（焼成）普通　口縁½欠失
10－17	土師器皿	10.5	2.7				（色調）明灰白褐色（胎土）灰色チャート・長石粒を若干含む（焼成）普通　完形（口縁一部欠失）
10－18	土師器皿	10.6	2.6				（色調）明灰褐色（胎土）微細な黒色粒・長石粒・灰色チャートを含む（焼成）普通　口縁一部欠失

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
10－19	土師器皿	12.9	3.9			外面粘土接合痕跡	（色調）明灰白褐色（一部分桃赤）（胎土）微細な黒色粒・長石粒を含む（焼成）普通
10－20	土師器皿	12.5	3.5				（色調）明灰白褐色（一部分桃赤）（胎土）微細な黒色粒・灰色チャート・長石粒含む（焼成）普通　口縁½弱欠損
10－21	土師器皿	13.9	3.9				（色調）灰褐色（胎土）微細な黒色粒・灰色チャート？・長石粒含む（焼成）やや軟弱口縁⅙欠損
10－22	土師器土釜	(17.6)	—	鍔径(21.5)		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）白褐色（胎土）良微小砂粒・雲母を多く含む（焼成）良好
10－23	土師器土釜	(19.6)	—	鍔径(25.9)		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）白褐色（胎土）良微小砂粒を含む（焼成）良好
10－24	土師器土釜	(23.6)	—	鍔径(28.1)		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）淡褐色（胎土）良微小砂粒・雲母多く含む（焼成）良好
10－25	土師器土釜	(24.4)	—	鍔径(29.9)		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）淡黄褐色（胎土）良微小砂粒を含む（焼成）良好
10－26	土師器土釜	23.8	16.7	鍔径28.7		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）淡黄褐色（胎土）良（焼成）良好　外面体部・内面兄込み煤付着
10－27	土師器土釜	(26.8)	—	鍔径(31.4)			（色調）淡黄褐色（胎土）良微小砂粒含む（焼成）良好
11－1	瓦器椀	8.4	3.9		高台なし	内面ハケ目の上から暗文	（色調）黒灰色（胎土）密微小砂粒・雲母わずかに含む（焼成）良好
11－2	瓦器椀	7.8	4.0		高台なし		（色調）黒灰色（胎土）やや粗　微小砂粒含む（焼成）良好　約½残存
11－3	瓦器椀	7.8	3.8		高台なし		（色調）外面黒灰色　内面白灰色（胎土）やや粗　微小砂粒・雲母含む（焼成）良好　½程度残存
11－4	瓦器椀	7.8	4.8		高台なし		（色調）淡灰白色（胎土）密微小砂粒比較的多く含む（焼成）堅緻　底部のみ完存
11－5	瓦器椀	(11.2)	--				（色調）外面黒灰色　内面白灰色（焼成）良好
11－6	土師器土釜	(23.4)	—				（色調）淡黄褐色（胎土）良微小砂粒含む（焼成）良好
11－7	土師器土釜	24.4	15.3	鍔径29.4			（色調）白褐色（胎土）良微小砂粒含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
11－8	土師器土釜	(17.6)	—	鍔径(21.5)			（色調）淡褐色（胎土）良 微小砂粒・雲母含む（焼成）良好 鍔部下 煤付着
11－9	土師器ミニアチュア土釜	(11.3)	—	鍔径(13.0)			（色調）淡灰褐色
11－10	土師器ミニアチュア土釜	(12.5)	—	鍔径(13.4)			（色調）淡灰褐色
11－11	土師器土鍋	(23.1)	—				（色調）白褐色（胎土）良 微小砂粒・雲母含む（焼成）良好
11－12	土師器土鍋	(22.2)	—				
11－13	土師器土鍋	(22.3)	—				（色調）淡黄褐色（胎土）良 微小砂粒・雲母含む（焼成）良好 内外面一部煤付着
11－14	土師器土鍋	(22.1)	—				（色調）白褐色（胎土）良 微小砂粒わずかの雲母含む（焼成）良好
11－15	土師器土鍋	(26.0)	—				（色調）白黄褐色（胎土）やや粗 微小砂粒・雲母含む（焼成）良好
12－1	常滑	(25.3)	—				
12－2	土師器こね鉢	(31.7)	—				（色調）青灰色 口縁外面黒色（胎土）やや粗 微小の白色砂粒を含む（焼成）堅緻
12－3	瓦質土器擂鉢	(32.5)	—				（色調）白灰色 外面口縁付近・内面・口縁端部黒色（胎土）やや粗（焼成）良好
12－4	瓦質土器風呂	—	—				
12－5	瓦質土器鉢	—	—				
12－6	瓦器鉢	(28.6)	(8.3)	(21.6)			（色調）黒灰色（胎土）良 微小砂粒と雲母を含む（焼成）良好
12－7	瓦質土器火鉢	(18.0)	(4.0)	(18.5)			（色調）黒灰色（胎土）良 微小砂粒含む（焼成）良好
12－8	瓦器火鉢	—	—				
12－9	瓦器火鉢	—	—				
12－10	瓦器火鉢	—	—				（色調）黒灰色（胎土）良 微小砂粒含む（焼成）堅緻

表15　SE411

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
13－1	土師器皿	(6.5)	(1.5)				（色調）淡褐色（胎土）良雲母含む（焼成）良好
13－2	土師器皿	(7.0)	(1.4)				（色調）茶褐色（胎土）良雲母含む（焼成）良好
13－3	土師器皿	(7.8)	(1.6)				（色調）白褐色（胎土）良雲母含む（焼成）良好
13－4	土師器皿	(7.0)	(1.5)				（色調）淡褐色（胎土）良雲母含む（焼成）良好
13－5	土師器皿	(8.0)	(1.6)				（色調）茶褐色（胎土）良雲母を含む（焼成）良好
13－6	土師器皿	(7.6)	(1.7)				（色調）茶褐色（胎土）良雲母含む（焼成）良好
13－7	土師器皿	7.9	1.4				（色調）淡褐色（胎土）良雲母含む（焼成）良好
13－8	土師器皿	(7.8)	(1.7)				（色調）淡褐色（胎土）良雲母含む（焼成）良好
13－9	土師器皿	10.2	2.5				（色調）淡褐色（胎土）良雲母含む（焼成）良好
13－10	土師器土釜	(18.8)	—	鍔径(24.0)		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）淡黄褐色（胎土）密（焼成）良好
13－11	土師器土釜	(16.6)	—	鍔径(25.0)		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）淡黄褐色（胎土）良微小砂粒含む（焼成）良好
13－12	土師器土釜	(20.7)	—	鍔径(28.0)		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗（焼成）不良
13－13	土師器土釜	(20.2)	—	鍔径(26.5)		内面鍔部付近に押圧痕	（色調）白黄褐色（胎土）良（焼成）良好
13－14	青磁碗	(17.6)	—		内面雲気文		（色調）淡灰緑色（胎土）密（焼成）堅緻
13－15	青磁碗	(16.9)	—				（色調）淡灰緑色　白灰色（胎土）密（焼成）堅緻
13－16	青磁碗	(13.2)	(7.7)	5.0		内底面スタンプ文様	
13－17	青磁皿	—	—	6.8		高台内・内底面中央露胎	（色調）釉　灰緑色（胎土）密（焼成）堅緻

図版番号	器種・名称その他	法量(cm)			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
13－18	青磁鉢	(19.4)	—		菊弁文		(色調) 暗緑色 (胎上) 密 (焼成) 堅緻
13－19	青磁香炉	(19.3)	—			花文貼付け	(色調) 緑色 (胎土) 密 (焼成) 堅緻
13－20	灰釉おろし皿	(15.0)	—				(色調) 素地土 淡茶褐色 釉 灰緑色 (胎土) 密 (焼成) 堅緻
13－21	灰釉三足盤	(34.5)	(7.5)				(色調) 明茶褐色 暗緑色 (釉) (胎土) 良 (焼成) 良好
13－22	丹波すり鉢	—	—	(12.0)			(色調) 明赤褐色 断面暗赤褐色 (胎上) 1㎜前後の白色細砂粒3㎜くらいの白色砂粒を含む (焼成) 普通 内面磨滅
13－23	丹波こね鉢	—	—	(14.5)			(色調) 外面明赤褐色 内面暗赤褐色 断面灰色 (胎土) 1㎜前後の白色砂粒若干、やや大きな砂粒含む (焼成) 良好
14－1	信楽擂鉢	—	—	(12.4)			(色調) 白灰色 (胎土) 粗 (焼成) 不良
14－2	信楽鉢	(27.8)	—	—			(色調) 赤褐色 (胎土) 良 白色砂粒 (長石) 含む (焼成) 良好
14－3	信楽壷底部	—	—	(16.8)			(色調) 灰白褐色 (底部外面黒変) (胎上) 白色細砂粒多数、2～4㎜の白色砂粒・チャート粒を若干含む (焼成) やや不良
14－4	信楽壷底部	—	—	(15.0)			(色調) 明茶褐色 (胎上) 白色細砂粒を多く2～3㎜の白色砂粒を若干含む 紫黒色斑あり 吹出し顕著でない
14－5	備前擂鉢	(29.7)	—	—			(色調) 暗赤褐色 暗灰色 (内面) (胎土) 良 白色砂粒含む (焼成) 堅緻
14－6	備前擂鉢	(25.9)	9.4	(12.6)			(色調) 暗赤褐色 (胎土) やや粗 砂粒を含む (焼成) 堅緻
14－7	瓦質土器擂鉢	—	—	(10.4)			(色調) 黒灰色・白灰色 (胎土) 良 微小砂粒含む (焼成) 不良
14－8	瓦質土器擂鉢	(24.4)	—	—			(色調) 黒灰色・白灰色 (胎土) やや粗 微小砂粒含む (焼成) 不良
14－9	瓦質土器擂鉢	(24.2)	—	—			(色調) 黒灰色 (胎土) やや粗 微小砂粒・くさり礫含む (焼成) やや不良
14－10	瓦質土器擂鉢	(30.1)	—	—			(色調) 黒灰色 (胎土) 良 微小砂粒含む (焼成) 良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
14－11	瓦質土器ミニチュアすり鉢	(10.4)	(4.7)	(6.4)			
14－12	瓦質土器火鉢	(19.9)	4.4	17.4			（色調）黒灰色（胎土）良（焼成）良好
14－13	瓦質土器火鉢	(20.2)	5.0	21.2			（色調）黒灰色（胎土）良（焼成）良好
14－14	瓦質土器火鉢	(24.4)	(5.4)	(23.2)			（色調）黒灰色（胎土）良（焼成）良好
15－1	瓦質土器火鉢		—		平面矩形	花菱文スタンプ	
15－2	瓦質土器火鉢		—		平面矩形	雷文スタンプ	
15－3	瓦質土器火鉢		—		平面矩形	雷文スタンプ	
15－4	瓦質土器火鉢		—		平面矩形	雷文スタンプ	
15－5	瓦質土器火鉢		—		平面矩形	花菱文スタンプ	
15－6	瓦質土器火鉢		—		平面矩形	花菱文スタンプ	
15－7	瓦質土器火鉢		—		平面矩形	花菱文スタンプ	
15－8	瓦質土器火鉢		—		平面矩形	花菱文スタンプ	
15－9	瓦質土器火鉢		—		隅角部分	花菱文スタンプ	
15－10	瓦質土器火鉢		—		隅角部分	菊花文スタンプ	
15－11	瓦質土器		—		脚部分		
16－1	瓦質土器風呂火鉢	(31.8)	—			口縁外面唐草文スタンプ	
16－2	瓦質土器風呂火鉢	(36.8)	—			口縁外面唐草文スタンプ	
16－3	瓦質土器風呂火鉢	(43.0)	—			口縁外面花菱文スタンプ	

図版番号	器種・名称その他	法量(cm) 口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整技法	備考
16－4	瓦質土器大型深鉢	(80.4)	—	—			
16－5	瓦質土器蓋	(74.6)	—	—		天井部離れ砂痕跡	

表16　SK422

図版番号	器種・名称その他	法量(cm) 口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整技法	備考
17－1	土師器皿	6.0	1.2				(色調) 淡褐色 (胎土) 良 (焼成) 良好
17－2	土師器皿	6.8	1.5				(色調) 明茶褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好
17－3	土師器皿	7.0	1.2				(色調) 茶褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好
17－4	土師器皿	7.3	1.3				(色調) 淡褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好 一部二次焼成うける
17－5	土師器皿	6.9	1.3				(色調) 淡褐色 一部赤褐色 二次焼成 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好
17－6	土師器皿	7.2	1.2				(色調) 淡灰褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好
17－7	土師器皿	6.9	1.3				(色調) 淡茶褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好
17－8	土師器皿	7.0	1.2				(色調) 暗灰褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好
17－9	土師器皿	7.0	1.4				(色調) 茶褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好
17－10	土師器皿	6.7	1.2				(色調) 茶褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好 煤付着
17－11	土師器皿	7.2	1.2				(色調) 淡茶褐色 内面明茶褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好
17－12	土師器皿	7.0	1.1				(色調) 白褐色 (胎土) 良 (焼成) 良好
17－13	土師器皿	7.0	1.2				(色調) 淡灰褐色 (胎土) 良 雲母含む (焼成) 良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
17－14	土師器皿	6.7	0.9				（色調）淡灰褐色（胎土）良（焼成）良好　外面底部に二次焼成みられる
17－15	土師器皿	7.4	1.0				（色調）茶褐色・淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－16	土師器皿	7.0	1.1				（色調）淡赤褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－17	土師器皿	6.5	1.1				（色調）淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－18	土師器皿	6.7	1.3				（色調）淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好　全面煤付着
17－19	土師器皿	6.8	1.2				（色調）淡茶褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－20	土師器皿	7.2	1.2				（色調）茶褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－21	土師器皿	7.4	1.5				（色調）淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－22	土師器皿	7.4	1.4				（色調）淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－23	土師器皿	7.0	1.4				（色調）淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－24	土師器皿	7.5	1.5				（色調）茶褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－25	土師器皿	7.4	1.6				（色調）茶褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－26	土師器皿	7.5	1.5				（色調）淡茶褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－27	土師器皿	7.8	1.7				（色調）茶褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－28	土師器皿	8.1	1.7				（色調）淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－29	土師器皿	8.2	1.7				（色調）淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－30	土師器皿	8.2	1.9				（色調）淡褐色　部分的に二次焼成（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
17－31	土師器皿	8.4	1.7				（色調）淡褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好　煤付着

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
17－32	土師器皿	8.5	1.7				（色調）暗茶褐色（胎土）良 雲母含む（焼成）良好
17－33	土師器皿	8.3	1.8				（色調）淡茶褐色（胎土）やや粗 雲母含む（焼成）良 煤付着
17－34	土師器皿	8.3	1.9				（色調）淡茶褐色（胎土）密 雲母含む（焼成）良好 煤付着
17－35	土師器皿	8.1	1.6				（色調）淡茶褐色（胎土）良 雲母含む（焼成）良好 煤付着
17－36	土師器皿	8.6	1.4				（色調）白褐色（胎土）良（焼成）良好 煤付着
17－37	土師器皿	8.3	1.8				（色調）淡褐色（胎土）良 雲母含む（焼成）良 煤付着
17－38	土師器皿	8.8	1.9				（色調）淡茶褐色（胎土）やや粗 雲母含む（焼成）良 煤付着
17－39	土師器皿	9.1	2.1				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗 雲母含む（焼成）良好
17－40	土師器皿	(10.1)	(2.0)				（色調）淡灰褐色（胎土）やや粗 クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
17－41	土師器皿	11.9	2.5				（色調）淡褐色（胎土）良（焼成）良好 口縁付近煤付着
17－42	土師器皿	(12.9)	(2.0)				（色調）白褐色 体部薄淡桃赤色（胎土）密（焼成）良好
17－43	土師器土釜	(16.7)	—	鍔径 (21.5)		内面鍔部付近押止痕	（色調）内面 白褐色 外面 淡茶褐色（胎土）良 微小砂粒含む（焼成）良好 煤付
17－44	瓦質土器擂鉢	(25.4)	—			外面ハケメ指頭痕	（色調）黒灰色（胎土）やや粗 白色砂粒・微小砂粒含む（焼成）良好
17－45	瓦質土器擂鉢	(19.3)	—			外面指頭痕	（色調）黒灰色（胎土）やや粗 白色砂粒（石英）含む（焼成）良好
17－46	瓦質土器擂鉢	—	(11.0)			外面指頭痕	（色調）外面 黒色 内面・外面底部 白灰色（胎土）やや粗 微小砂粒含む（焼成）良好
17－47	瓦質土器火鉢	—	—				（色調）黒色（胎土）良（焼成）良好
17－48	瓦質土器風呂	—	—				（色調）黒灰色（胎土）やや粗 雲母含む（焼成）良好

表17　SE511

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
18－1	土師器皿	9.9	1.8				（色調）白褐色（胎土）良（焼成）良好　内外面煤付着
18－2	土師器皿	(11.5)	(2.1)				（色調）白褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好
18－3	瓦器土器擂鉢	22.3	—				（色調）白灰色・灰色・黒灰色（胎土）やや粗　微小砂粒含む（焼成）不良
18－4	信楽擂鉢	—	14.3				（色調）黒灰褐色（胎土）やや粗　1㎜内外の白色砂粒含む（焼成）堅緻
18－5	丹波擂鉢	—	12.2			外面指頭痕	（色調）暗赤褐色（胎土）やや粗　1㎜内外の白色砂粒含む（焼成）堅緻
18－6	丹波擂鉢	(38.7)	14.4	(16.5)		外面指頭痕	（色調）赤褐色・茶褐色（胎土）やや粗　2㎜の白色砂粒その他含む（焼成）堅緻
18－7	唐津碗	—	—	3.8		高台周辺露胎	（色調）灰白色（胎土）良（焼成）堅緻
18－8	唐津碗	—	—	3.8		高台周辺露胎	（色調）素地土　灰白色　釉　灰白色（胎土）精良（焼成）堅緻
18－9	唐津碗	11.2	—				（色調）白褐色（胎土）良（焼成）良好

表18　SK521

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
18－10	唐津碗	11.3	7.5	4.4		高台周辺露胎	（色調）素地土　茶褐色　釉　灰褐色（胎土）密（焼成）堅緻
18－11	唐津碗	10.6	7.5	4.7		高台内全釉	（色調）灰色（ねずみ色）（胎土）緻密（焼成）堅緻
18－12	唐津碗	11.5	7.7	4.0		高台内全釉	（色調）淡青灰色（青っぽいねずみ色）（胎土）緻密（焼成）堅緻
18－13	唐津皿	11.1	3.7	3.9	波状口縁	高台周辺露胎	（色調）素地土　赤茶褐色　釉　乳白色（胎土）密（焼成）堅緻

表19　SD531

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
18－14	李朝白磁碗	—	—	6.6		漆継ぎ　日あとに漆塗	（色調）白色　釉　青味がかった透明（胎土）良（焼成）良好
18－15	土師器深鉢	17.7	10.9	9.1	平面多角形	内山輪積み痕跡	（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗　クサリ礫・雲母を多く含む（焼成）良好

表20　SK622

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
19－1	中国製青磁碗	—	—	(7.5)			（色調）薄緑色（胎土）密（焼成）良好
19－2	中国製白磁皿	9.8	2.65			口縁端釉カキ取り	口禿の白磁
19－3	美濃天目茶碗	(10.5)	—	—			
19－4	京焼風陶器碗	11.4	—	—			内底面に絵付け
19－5	京焼風陶器碗	—	—	5.0			高台周辺露胎　外面絵付け？
19－6	京焼碗	—	—	4.2			
19－7	京焼風陶器碗	—	—	4.5			刻印あり
19－8	献上唐津碗	(9.6)	(7.25)	(4.0)			高台内全釉　畳付砂付着
19－9	献上唐津碗	9.6	—	—			
19－10	献上唐津碗	—	—	4.4			高台内施釉　畳付部分だけ露胎
19－11	信楽焼壷	15.6	4.8	—			（色調）表－茶　裏－茶・黄土色（胎土）2㎜程度の石粒含む（焼成）普通
19－12	伊万里白磁小坏	6.6	4.9	2.8			残存（全体の⅓）部分に絵付けなし　高台内面まで全釉

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
19－13	伊万里色絵碗	(9.6)	5.7	4.0			柿右衛門手か
19－14	伊万里染付碗	(10.8)	—	—			（色調）染付（胎土）並（焼成）良
19－15	伊万里染付碗	—	—	3.0			（色調）染付（胎土）密（焼成）良
19－16	伊万里染付碗	(11.0)	(11.8)	(4.4)			（色調）クリーム色　染付（胎土）密（焼成）良
19－17	伊万里染付小坏	5.4	3.2	2.0			（色調）染付（胎土）密（焼成）良
19－18	伊万里染付碗	(11.4)	—	—			（色調）灰白色（胎土）密（焼成）良好
19－19	伊万里白磁碗	(18.0)	—	—			（色調）白色（胎土）密（焼成）良好
19－20	土師器皿	7.4	1.7				（色調）灰黒褐色（胎土）石英粒・長石粒・灰色細砂粒を含む（焼成）普通　口縁の一部欠損
19－21	土師器皿	6.8	1.2				（色調）明赤褐色（胎土）雲母片・白色細砂粒・灰色砂粒を多く含む（焼成）良好
19－22	土師器皿	7.0	1.4				（色調）暗褐色（胎土）灰黒色細砂粒・白色砂粒含有　量は少ない（焼成）普通　コブ状の粘土粒あり
19－23	土師器皿	6.6	1.3				（色調）明赤褐色（胎土）雲母細片・長石粒・灰色砂粒を含む（焼成）良好
19－24	土師器皿	7.4	1.5				（色調）明茶褐色（胎土）金雲母片・灰黒色細砂粒を多く含む　5㎜大の白色砂粒あり（焼成）普通
19－25	土師器皿	6.8	1.45				（色調）明灰褐色（胎土）金雲母細片・灰黒色細砂粒を含む（焼成）普通　口縁の一部煤付着
19－26	土師器皿	7.0	1.5				（色調）淡赤褐色（胎土）金雲母片・赤色クサリ礫・白色砂粒を含む　灰黒色細砂粒の含有少ない（焼成）良好　口縁の一部煤付着
19－27	土師器皿	6.6	1.55				（色調）灰白褐色（胎土）やや大きな白色砂粒・灰色細砂粒を含む（焼成）良好　口縁の一部欠失

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
19－28	土師器皿	7.0	1.5				（色調）灰白褐色（胎土）灰黒色細砂粒を多く含む　金雲母片あり（焼成）良好　口縁の一部煤付着
19－29	土師器皿	6.8	1.45				（色調）褐色（胎土）（灰）黒色細砂粒を含む（焼成）普通
19－30	土師器皿	10.0	2.35				（色調）暗褐色（胎土）金雲母・チャート細片を含む（焼成）普通　口縁の一部に煤付着　全体の⅔残存
19－31	土師器皿	9.2	2.1			底部中央に小孔	（色調）明灰褐色（胎土）金雲母片・チャート細片を含む（焼成）普通　全体の⅓残存　底部焼成前穿孔
19－32	土師器皿	11.4	2.15				（色調）明褐色（胎土）金雲母細片・長石粒・チャート細片を含む（焼成）良好　全体の⅙欠失　口縁の一部に煤付着
19－33	土師器皿	11.4	1.8				（色調）明褐色（胎土）金雲母片・赤色クサリ礫・やや大きい白色砂粒を含む（焼成）良好　全体の⅔残存
19－34	土師器ほうらく	16.8	—			外型造り	（色調）淡橙色（胎土）1.5㎜の砂粒を含む（焼成）良好
19－35	土師器ほうらく	28.4	—			外型造り	（色調）淡橙色（胎土）～2.5㎜の白い砂粒を含む（焼成）良　底部灰色（黒っぽい）
19－36	土師器ほうらく	24.1	—			外型造り	（色調）淡橙色（胎土）0.5～2.5㎜の砂粒を含む（焼成）良好　底部が黒い
19－37	瓦質土器壷	12.6	—				（色調）灰色（胎土）1.5㎜の砂粒を含む（焼成）普通
19－38	瓦製飛礫	（直径）7.3					（色調）灰色　一部黄味がかる

表21　SK621

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
20－1	唐津碗	10.4	5.4	3.7		高台周辺露胎	

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
20－2	唐津碗	10.2	5.4	3.6			
20－3	唐津碗	10.6	—	—			（色調）乳白色（胎土）密（焼成）良好　献上唐津手
20－4	唐津碗	11.8	—	—			（色調）淡緑灰色（胎土）密（焼成）堅緻　内野山系
20－5	唐津碗	10.8	—	—			献上唐津手
20－6	唐津皿	13.6	—	—			（色調）淡緑灰色（胎土）密（焼成）堅緻
20－7	美濃天目茶碗	(10.8)	—				（色調）茶褐色（釉）（胎土）密（焼成）良好
20－8	美濃天目茶碗	—	—	3.8		高台周辺露胎	（色調）茶褐色　部分的に黒色（胎土）密（焼成）良好
20－9	信楽播鉢	—	—	12.0			（色調）茶褐色（胎土）やや粗　白色砂粒（長石）を多く含む（焼成）良好
20－10	中国製染付磁器	—	—	4.4			
20－11	伊万里染付皿	—	—	3.8			（色調）青白色（胎土）密（焼成）堅緻
20－12	伊万里白磁皿	13.0	--	—		型押しによる花文	（色調）白色（胎土）密（焼成）堅緻
20－13	伊万里白磁皿	12.0	—	—		型押しによる菊弁文	（色調）白色（胎土）密（焼成）堅緻
20－14	伊万里青磁染付椀	—	—	(4.0)			
20－15	伊万里染付碗	(11.0)	(7.2)	(3.4)			（色調）青白色（胎土）密（焼成）堅緻
20－16	伊万里染付碗	—	—	4.3			
20－17	伊万里染付碗	(2.8)	1.7	1.6			（色調）白色　あいいろの呉須（胎土）密（焼成）堅緻
20－18	伊万里青磁徳利	—	--	3.6			（色調）淡緑灰色（胎土）密（焼成）堅緻
20－19	伊万里染付杯	2.6	1.7	1.2			（色調）白灰色（胎土）密（焼成）堅緻

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
20－20	伊万里染付碗	—	—	3.6			（色調）青白色（胎土）密（焼成）堅緻
20－21	伊万里染付碗	(10.6)	(5.7)	(3.8)			
20－22	伊万里染付碗	(9.6)	—	—			
20－23	伊万里染付碗	(11.2)	(6.5)	(4.7)			（色調）青白色（胎土）密（焼成）堅緻
20－24	伊万里染付碗	(8.6)	(5.35)	(4.4)			
20－25	土師器土釜	(21.4)	—				（色調）淡褐色（胎土）密わずかに雲母・クサリ礫・微小の長石等含む（焼成）良好
20－26	土師器土釜	(22.0)	—				（色調）白褐色（胎土）密わずかの雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
20－27	土師器皿	6.2	1.35				（色調）淡黄褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
20－28	土師器皿	5.8	1.3				（色調）淡褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
20－29	土師器皿	6.8	1.6				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母含む（焼成）良好
20－30	土師器皿	6.8	1.7				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　わずかに雲母等含む（焼成）良好
20－31	土師器皿	6.2	1.45				（色調）褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
20－32	土師器皿	7.2	1.25				（色調）淡褐色（胎土）粗雲母・石英・長石など多く含む（焼成）良好
20－33	土師器皿	6.1	1.1				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・砂粒など含む（焼成）良好
20－34	土師器皿	6.8	1.5				（色調）淡褐色（胎土）密雲母を含む（焼成）良好
20－35	土師器皿	7.0	1.65				（色調）茶褐色（胎土）やや粗　雲母等含む（焼成）良好
20－36	土師器皿	6.8	1.5				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
20－37	土師器皿	7.6	1.1				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗　雲母・クサリ礫その他含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
20－38	土師器皿	7.4	1.4				（色調）淡赤褐色（胎土）粗　雲母・微小砂粒、わずかにクサリ礫含む（焼成）良好
20－39	土師器皿	7.8	1.6				（色調）淡赤褐色（胎土）粗（焼成）良好
20－40	土師器皿	7.4	1.65				（色調）茶褐色（胎土）やや粗　雲母等含む（焼成）良好
20－41	土師器皿	8.0	1.55				（色調）淡褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
21－1	土師器皿	8.3	2.4				（色調）淡褐色（胎土）密　雲母含む（焼成）良好
21－2	土師器皿	8.0	1.8				（色調）淡褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
21－3	土師器皿	(8.5)	(2.3)				（色調）淡褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
21－4	土師器皿	10.5	2.5				（色調）淡黄褐色（胎土）やや粗　微小砂粒、わずかにクサリ礫含む（焼成）良好
21－5	土師器皿	(10.3)	(2.25)				（色調）淡褐色（胎土）密　雲母少し（焼成）良好
21－6	土師器皿	(10.4)	(1.85)				（色調）淡赤褐色（胎土）精良（焼成）良好
21－7	土師器皿	(10.2)	(1.7)				（色調）淡褐色（胎土）密　雲母を含む（焼成）良好
21－8	土師器皿	(10.4)	(2.0)				（色調）茶褐色（胎土）やや粗　雲母含む（焼成）良好
21－9	土師器皿	9.8	2.25				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
21－10	土師器皿	10.0	2.0				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒、わずかにクサリ礫含む（焼成）良好
21－11	土師器皿	(10.4)	(2.15)				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　微小砂粒含む（焼成）良好
21－12	土師器皿	(11.0)	(2.4)				（色調）淡黄褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
21－13	土師器皿	(10.7)	(2.05)				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
21－14	土師器皿	(11.0)	(2.4)				（色調）淡灰褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
21 15	土師器皿	(10.8)	(2.2)				（色調）淡褐色（胎土）やや粗 雲母含む（焼成）良好
21－16	土師器皿	(11.0)	(2.1)				（色調）淡赤褐色（胎土）密（焼成）良好
21－17	土師器皿	(11.4)	(1.7)				（色調）淡褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
21－18	土師器皿	(10.4)	(2.0)				（色調）淡褐色（胎土）やや粗 雲母・微小砂粒を含む（焼成）良好
21－19	土師器皿	(12.0)	(2.15)				（色調）淡黄褐色（胎土）密（焼成）良好
21－20	瓦質土器壺	10.8	—				（色調）淡灰色（胎土）やや粗 雲母・微小砂粒含む（焼成）良好

表22 SK721

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
21－21	陶器ひようそく	8.2	2.8	5.6			内外面煤付着
21－22	陶器注口	10.4	10.8	8.4			
21－23	京焼系陶器碗	10.0	5.3	3.4			
21－24	伊万里白磁碗	9.8	5.6	4.3		口銹	（色調）白色（胎土）精良（焼成）堅緻
21－25	伊万里染付碗	6.3	2.6	2.4		型紙摺	
21－26	伊万里染付碗	7.8	7.6	2.2		型紙摺	
21－27	伊万里白磁碗	8.8	4.85	3.2			
21－28	伊万里色絵小鉢	5.3	2.35	1.9		赤色絵	
21－29	伊万里染付碗	10.8	5.5	3.8			

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
21－30	伊万里染付碗	10.8	5.8	4.2		見込蛇目釉ハギ	
21－31	伊万里染付碗	(10.6)	—	—			
21－32	伊万里染付碗	(10.1)	—	—			
21－33	伊万里染付碗	(9.8)	(5.55)	(3.5)			
21－34	伊万里染付碗	(9.9)	(7.3)	(3.7)			
21－35	伊万里染付皿	12.2	6.4	6.6		内底面蛇ノ目状釉ハギ	（色調）淡青白色（胎土）密（焼成）堅緻
22－1	土師器火舎	17.4	11.15				（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗　雲母・クサリ礫・石英・長石等含む（焼成）良好
22－2	土師器七輪	-	—				（色調）赤褐色（胎土）やや粗　雲母・クサリ礫・白色砂粒含む（焼成）良好
22－3	土師器火舎	12.8	—				（色調）淡茶褐色（胎土）やや粗　雲母・クサリ礫・微小砂粒含む（焼成）良好
22－4	土師器瓶	—	—	2.3			（色調）淡赤褐色（胎土）良　雲母・クサリ礫含む（焼成）良好
22－5	土師器ほうらく	15.8	6.0				（色調）暗赤褐色（胎土）良　雲母を多く含む（焼成）良好　全体の½残存
22－6	土師器皿	6.9	1.6				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒（焼成）良好
22－7	土師器皿	7.2	1.7				（色調）淡褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
22－8	土師器皿	3.3	1.5				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－9	土師器皿	7.2	1.3				（色調）淡黄褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒、わずかにクサリ礫含む（焼成）良好
22－10	土師器皿	6.4	1.5				（色調）淡褐色（胎土）やや粗（焼成）良好
22－11	土師器皿	6.6	1.6				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－12	土師器皿	6.0	1.6				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
22－13	土師器皿	7.4	1.7				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－14	土師器皿	7.3	1.45				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－15	土師器皿	6.6	1.5				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－16	土師器皿	6.6	3.3				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－17	土師器皿	6.4	1.5				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－18	土師器皿	7.0	1.8				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　白色砂粒・雲母含む（焼成）良好
22－19	土師器皿	9.8	1.85				（色調）白褐色（胎土）やや粗　白色砂粒・雲母含む（焼成）良好
22－20	土師器皿	9.6	2.2				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－21	土師器皿	9.8	2.1				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－22	土師器皿	10.0	2.5				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－23	土師器皿	10.2	2.3				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－24	土師器皿	10.1	2.0				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－25	土師器皿	10.0	2.15				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－26	土師器皿	9.6	2.2				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　微小砂粒・雲母含む（焼成）良好
22－27	土師器皿	10.2	2.1				（色調）淡褐色？煤のため黒色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－28	土師器皿	10.6	2.0				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　微小砂粒・雲母含む（焼成）良好
22－29	土師器皿	9.8	2.0				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－30	土師器皿	10.2	2.05				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
22－31	土師器皿	9.8	2.2				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・白色砂粒等含む（焼成）良好
22－32	土師器皿	10.0	2.35				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－33	土師器皿	11.0	2.4				（色調）淡黄褐色（胎土）やや粗　雲母・長石粒・微小砂粒含む（焼成）良好
22－34	土師器皿	10.2	1.7				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－35	土師器皿	10.0	2.15				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－36	土師器皿	10.6	2.4				（色調）黒褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－37	土師器皿	10.8	1.9				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－38	土師器皿	11.2	2.4				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－39	土師器皿	11.8	2.45				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　雲母・白色砂粒・微小砂粒含む（焼成）良好
22－40	土師器皿	12.0	2.8				（色調）淡黄褐色（胎土）やや粗　雲母・白色砂粒（長石）微小砂粒含む（焼成）良好
22－41	土師器皿	11.6	2.35				（色調）淡褐色（胎土）やや粗雲母・微小砂粒含む（焼成）良好
22－42	土師器皿	11.2	2.65				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・1㎜内外の白色砂粒など含む（焼成）良好
22－43	土師器皿	12.0	2.6				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・白色砂粒・微小砂粒含む（焼成）良好
22－44	土師器皿	11.6	2.4				（色調）白褐色（胎土）やや粗　微小砂粒・わずかに雲母含む（焼成）良好
22－45	土師器皿	11.8	2.4				（色調）淡黄褐色（胎土）やや粗　白色砂粒・クサリ礫含む（焼成）良好
22－46	土師器皿	12.2	2.1				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　白色砂粒・雲母含む（焼成）良好
22－47	土師器皿	11.7	2.6				（色調）淡褐色（胎土）やや粗　微小砂粒・雲母含む（焼成）良好
22－48	土師器皿	11.4	2.6				（色調）白褐色（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒わずかにクサリ礫含む（焼成）良好

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
22－49	土師器皿	11.6	2.4				（色調）淡黄褐色（胎土）微小砂粒・わずかのクサリ礫含む（焼成）良好
22－50	土師器皿	12.6	2.25				（色調）淡褐色（胎土）粗わずかな雲母その他砂粒含む（焼成）良好
22－51	土師器皿	11.6	2.6				（色調）黒褐色（煤）（白褐色）（胎土）やや粗　雲母・微小砂粒含む（焼成）良好

表23　SK722

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
23－1	美濃系天目茶碗	(10.6)	—				
23－2	唐津系青緑釉碗	(12.0)	—	—			
23－3	伊万里青磁碗	—	—	(4.5)		高台内露胎	
23－4	献上唐津手碗	(9.8)	(6.2)	(5.0)			
23－5	信楽鉢	—	—	(12.0)			
23－6	備前壺	—	—	(14.1)			
23－7	土師器七輪	(19.8)	—				
23－8	土師器油煙受け	17.1	8.0			外面指おさえ	全体にスス付着
23－9	土師器油煙受け	17.1	7.1			外面ナデ、内面ヘラミガキ	全体にスス付着
23－10	土師器油煙受け	18.0	8.0			内面ヘラミガキ	全体にスス付着
23－11	土師器油煙受け	17.5	7.5			外面ヘラケズリ内面ヘラミガキ	全体にスス付着
23－12	土師器油煙受け	17.5	7.8			外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	全体にスス付着

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
23－13	土師器油煙受け	18.0	8.0			外面指おさえ、内面ヘラミガキ	全体にスス付着
23－14	土師器皿	11.0	2.0				全体にスス付着
23－15	土師器皿	11.1	1.8				全体にスス付着
23－16	土師器皿	11.5	2.0				全体にスス付着
23－17	土師器皿	11.0	1.9				全体にスス付着
23－18	土師器皿	11.3	2.1				全体にスス付着
23－19	土師器皿	11.8	1.9				全体にスス付着
23－20	土師器皿	11.3	1.8				全体にスス付着
23－21	土師器皿	11.6	1.9				全体にスス付着
23－22	土師器皿	11.8	2.1				全体にスス付着

表24　SX751

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
24－1	伊万里染付碗	11.4	—	—		コンニャク判	（色調）淡青白色（胎土）密（焼成）堅緻
24－2	伊万里染付碗	10.4	5.2	4.3		見込蛇目釉ハギ	（色調）淡青白色（胎土）密（焼成）堅緻
24－3	伊万里染付碗	7.6	4.3	3.2		型紙摺、見込蛇目釉ハギ	（色調）淡青白色（胎土）ち密（焼成）堅緻
24－4	伊万里青磁徳利	—	—	—			（色調）淡緑色（胎土）密（焼成）堅緻　外面に陰刻文様
24－5	唐津系刷毛目徳利	—	—	7.0			（色調）淡茶色（胎土）ち密（焼成）堅緻

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
24－6	陶器壷	9.0	8.7	7.4			（色調）釉　暗褐色・素地白褐色（胎土）良　微小砂粒含む（焼成）良好
24－7	信楽擂鉢	—	—	10.6			（色調）淡赤褐色　茶褐色（外面）（胎土）やや粗　3㎜内外の白色砂粒（長石）を多く含む（焼成）堅緻
24－8	土師器鉢	21.4	13.4				（色調）淡赤褐色（胎土）クサリ礫・白色砂粒（長石など）雲母含む（焼成）良好
24－9	土師器壷	12.8	13.1	12.5		内面指頭痕	（色調）淡黄褐色（胎土）良　クサリ礫含む（焼成）良好口縁端面・内面・外面一部黒、4ヶ所穿孔
24－10	瓦質土器壷	—	—	16.6			（色調）外面　黒色、内面白灰色（胎土）やや粗　5㎜内外の石粒含む（焼成）良好
24－11	土師器塩壷	—	—	4.0			（色調）淡赤褐色（胎土）粗　クサリ礫・雲母・その他の砂粒含む（焼成）やや不良
24－12	土師器ほうらく	30.4	—	鍔径32.3			（色調）淡赤褐色（胎土）やや粗　クサリ礫・雲母含む（焼成）良好
24－13	土師器皿	7.0	1.7				（色調）淡黄褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好　口縁内外面に二次焼成　煤付着
24－14	土師器皿	6.8	1.4				（色調）茶褐色（胎土）良雲母含む（焼成）やや不良煤付着　二次焼成うける
24－15	土師器皿	10.8	2.45				（色調）淡黄褐色（胎土）良　雲母含む（焼成）良好

表25　SK822

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
25－1	伊万里染付猪口	6.2	3.0	2.5			
25－2	伊万里染付猪口	6.7	3.2	2.0			
25－3	伊万里染付猪口	(6.5)	(3.0)	(2.6)			
25－4	伊万里青磁染付碗	(10.5)	(6.5)	(3.0)			角銘　見込五弁花コンニャク判

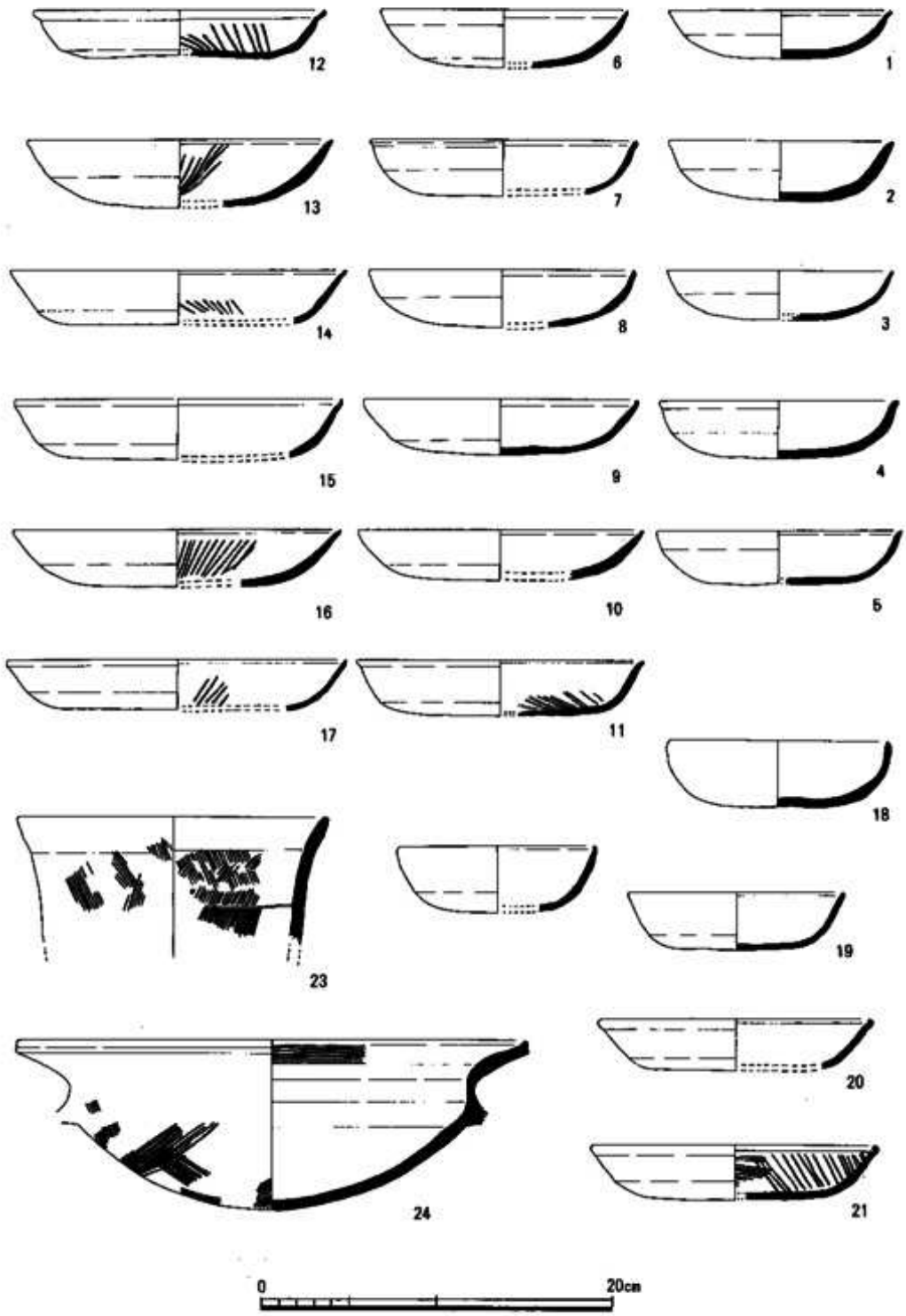
図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
25－5	伊万里染付碗	10.3	6.2	5.4	広東碗		
25－6	伊万里染付碗	(6.8)	(5.1)	(2.5)			
25－7	伊万里染付碗	(8.5)	(3.8)	(4.0)	端反り碗		
25－8	伊万里染付碗	(9.7)	(5.2)	(3.9)			
25－9	伊万里染付碗	(9.0)	(4.7)	(3.2)			
25－10	伊万里染付皿	8.0	2.0	4.0			墨弾き
25－11	伊万里染付猪口	6.0	3.0	2.0			焼継、コバルト系呉須
25－12	伊万里染付皿	9.1	2.7	5.2			焼継、墨弾き
25－13	伊万里白磁碗	10.5	—	—			口銹
25－14	伊万里染付碗	10.0	6.2	4.6	端反り碗		
25－15	伊万里染付碗	9.5	5.8	4.0	端反り碗		
25－16	伊万里色絵蓋	8.3	2.6	つまみ径 3.2			角銘
25－17	伊万里染付蓋	(9.1)	(3.0)	つまみ径 (3.5)			
25－18	伊万里染付蓋	9.7	3.0	つまみ径 4.2			25－19の蓋、墨弾き
25－19	伊万里染付碗	10.8	6.2	4.4			墨弾き
25－20	伊万里染付碗	10.4	6.1	4.2			
25－21	伊万里染付碗	9.8	5.3	4.0			
25－22	伊万里色絵碗	(8.7)	(5.6)	(3.9)			焼継

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
25－23	伊万里色絵蓋	8.7	3.5	—			焼継
25－24	伊万里色絵蓋物	11.2	6.9	6.7			
25－25	伊万里色絵碗	(8.9)	5.0	3.6			焼継
26－1	伊万里染付鉢	10.0	6.3	5.7	八角鉢		角福字銘
26－2	伊万里染付鉢	(14.3)	6.8	7.2	八角鉢		焼継、墨弾き
26－3	伊万里染付鉢	(15.8)	7.2	9.1			蛇ノ目凹型高台、墨弾き
26－4	伊万里染付鉢	(13.0)	5.4	5.2	八角鉢		
26－5	伊万里染付鉢	12.1	5.8	6.0	六角鉢		「太明年製」銘
26－6	伊万里染付筆立	—	—	—			
26－7	伊万里染付筆立	—	—	一辺5.3			
26－8	中国製染付皿	13.8	4.5	5.8			明代末、高台内墨書
26－9	中国製染付皿	15.9	3.6	8.7			明代末
27－1	伊万里染付鉢	16.3	7.9	7.9			蛇ノ目凹形高台
27－2	伊万里染付鉢	26.5	8.3	15.6			
27－3	伊万里染付皿	21.0	4.7	10.9			焼継、ハリ支え
27－4	伊万里染付皿	18.2	4.7	10.3			蛇ノ目凹形高台角銘
28－1	伊万里青磁皿	—	—	(9.0)	蛇ノ目凹型高台		（色調）淡緑色（胎土）緻密（焼成）堅緻
28－2	九谷色絵皿	(21.2)	(3.65)	(12.2)			貫入あり、漆継ぎ

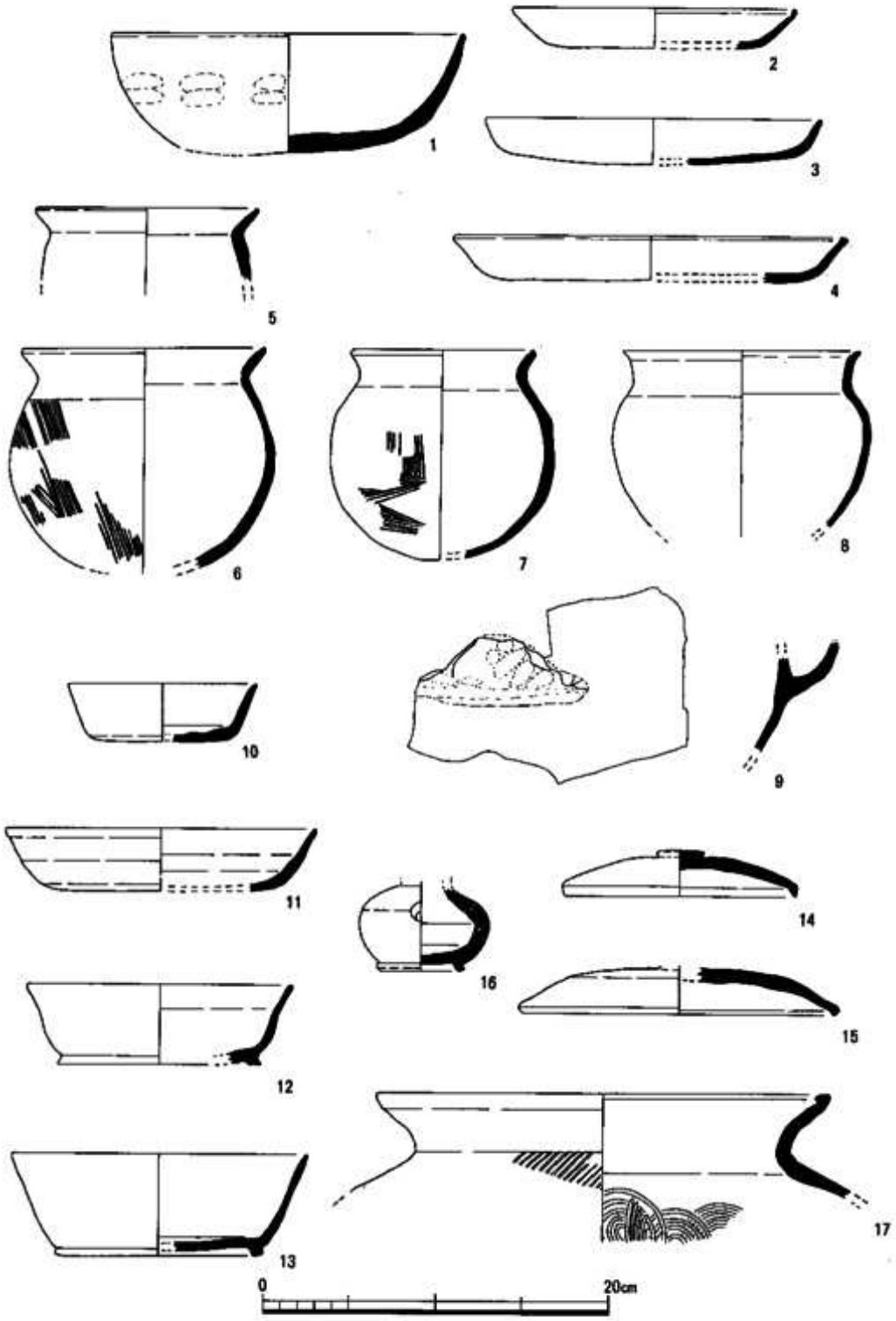
図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
28－3	陶器花瓶	(9.8)	—				釉色　暗茶黒色
28－4	陶器蓋	5.2	1.7				（色調）釉　暗緑灰色（胎土）精良（焼成）堅緻
28－5	陶器蓋	7.9	3.6	つまみ径 2.4			（色調）釉－黒褐色（胎土）精良（焼成）堅緻
28－6	陶器蓋	(7.3)	(2.7)	(3.9)			釉色　黒褐色
28－7	陶器灯火器	6.0	4.3	4.2		底部糸切り痕	釉色　明灰褐色
28－8	陶器土瓶	6.1	—				釉色暗赤褐色上に色絵
28－9	陶器植木鉢	(11.2)	13.5	6.8			（色調）胎土－淡茶褐色　釉－淡黄褐色（胎土）密（焼成）良好
28－10	陶器壺	6.6	8.3	5.2			釉色淡緑灰色　「秋田」銘
28－11	陶器甕	18.0	23.1	9.0			
28－12	陶器甕	(28.0)	—	—			
29－1	陶器徳利	5.4	14.8	5.7			
29－2	白磁碗	9.3	6.0	3.7			
29－3	染付磁器蓋物	(5.5)	2.4	(4.8)			
29－4	陶器碗	(7.7)	(4.0)	—			高台周辺露胎　貫入
29－5	陶器碗	10.8	4.6	3.8			高台周辺露胎
29－6	陶器碗	(9.3)	—	—			
29－7	陶器皿	6.8	1.5				
29－8	陶器灯明皿	8.6	1.8				

図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
29－9	陶器灯明皿	10.6	2.0				
29－10	陶器灯明皿	11.2	2.1				
29－11	陶器行平蓋	14.6	3.9	つまみ径 3.5			
29－12	陶器行平鍋	(14.5)	(13.8)	(6.6)			
29－13	陶器行平蓋	(15.3)	(4.4)	つまみ径 4.0			
29－14	陶器行平鍋	17.0	—	—			
29－15	陶器鉢り鉢	15.2	8.2	7.0			高台周辺露胎
29－16	陶器行平鍋	10.8	6.7	5.0			飛鉋と鉄絵併用
29－17	陶器行平蓋	14.8	4.0	3.2			飛鉋と鉄絵併用
29－18	陶器土瓶	(11.3)	(13.8)	(10.0)			飛鉋の上に褐釉　把手に針金使用
30－1	陶器擂鉢	34.0	13.5	16.5			明石産
30－2	土師器皿	6.5	1.5				口縁にスス付着
30－3	土師器皿	5.5	1.0				口縁にスス付着
30－4	土師器皿	6.2	1.0				口縁にスス付着
30－5	土師器器台型土器	(8.2)	(7.4)	7.5			
30－6	土師器器台型土器	9.3	6.8	7.5			外面指頭痕
30－7	土師器器台型土器	9.0	6.5	8.4			外面指頭痕
30－8	土師器器台型土器	8.5	8.0	6.5			外面指頭痕

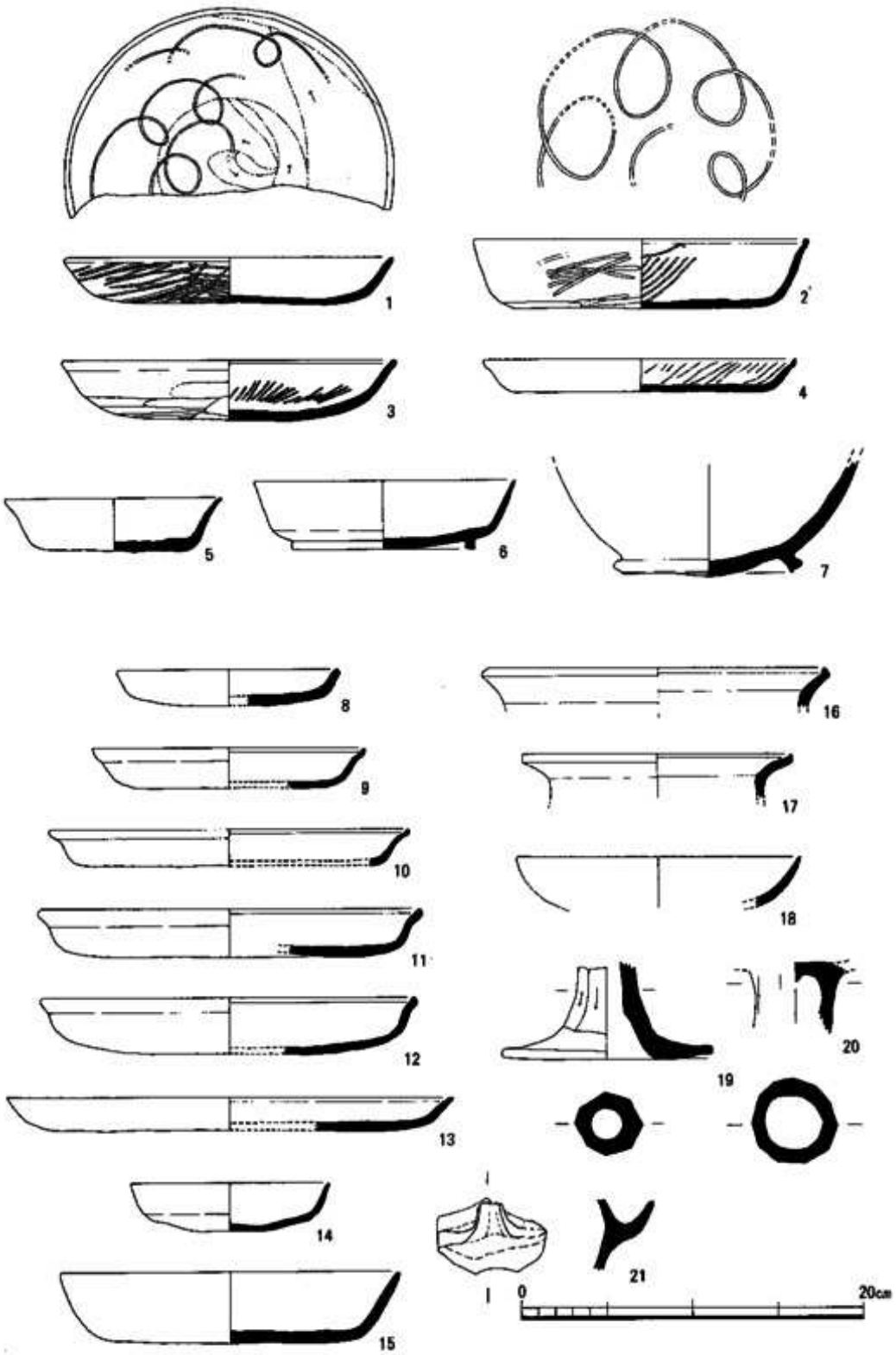
図版番号	器種・名称その他	法量（cm）			形態の特徴	成形・調整技法	備考
		口径	器高	底径			
30－9	土師器器台型土器	7.8	7.3	6.0			外面指頭痕
30－10	土師器器台型土器	9.4	(8.4)	(6.5)			外面指頭痕
30－11	土師器器台型土器	8.8	5.6	7.0			
30－12	土師器器台型土器	8.9	6.2	7.4			外面指頭痕
30－13	土師器器台型土器	(8.8)	(6.1)	7.3			外面指頭痕



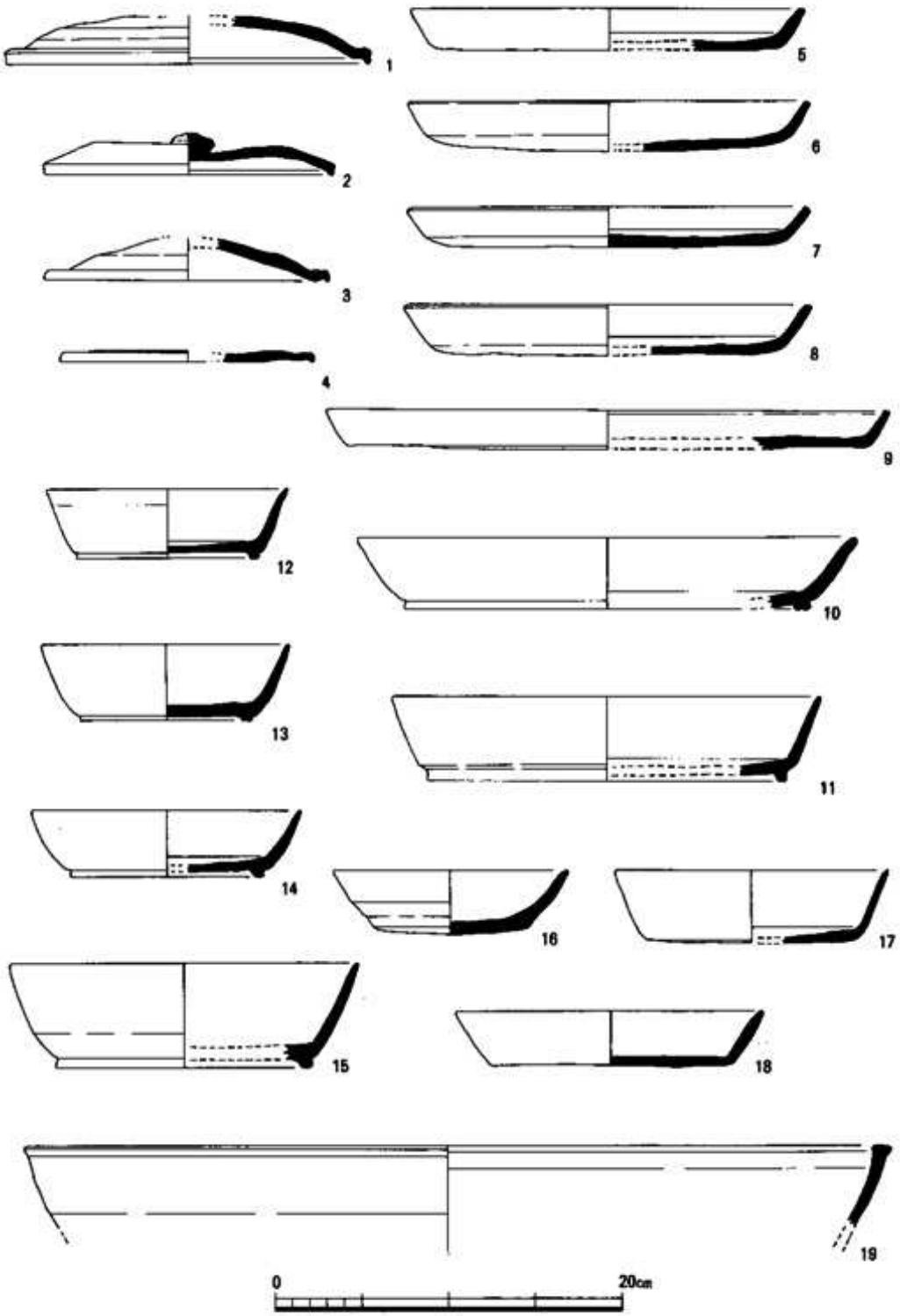
第1図　SK022出土土器(1)



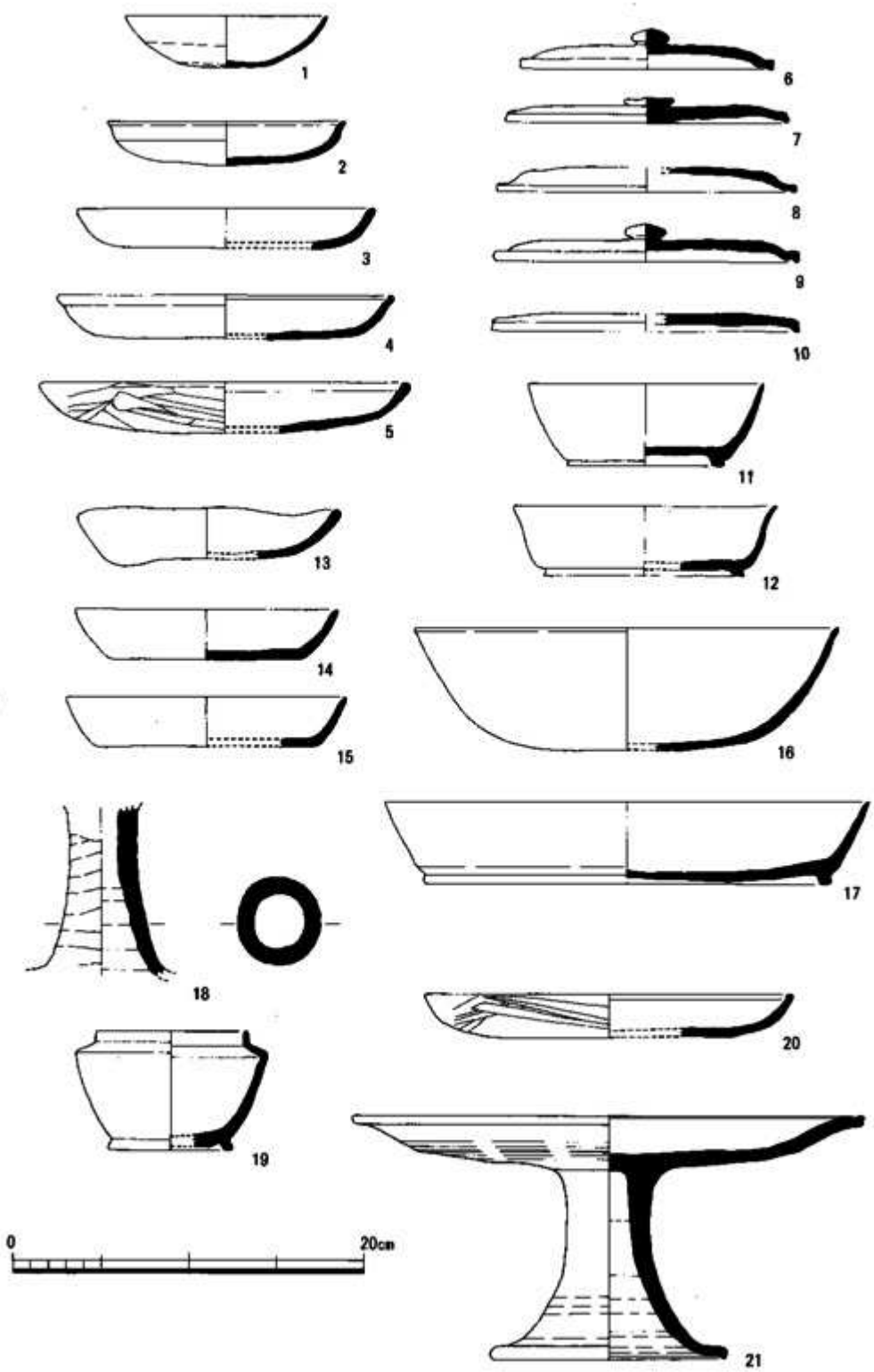
第２図　ＳＫ022出土土器(2)



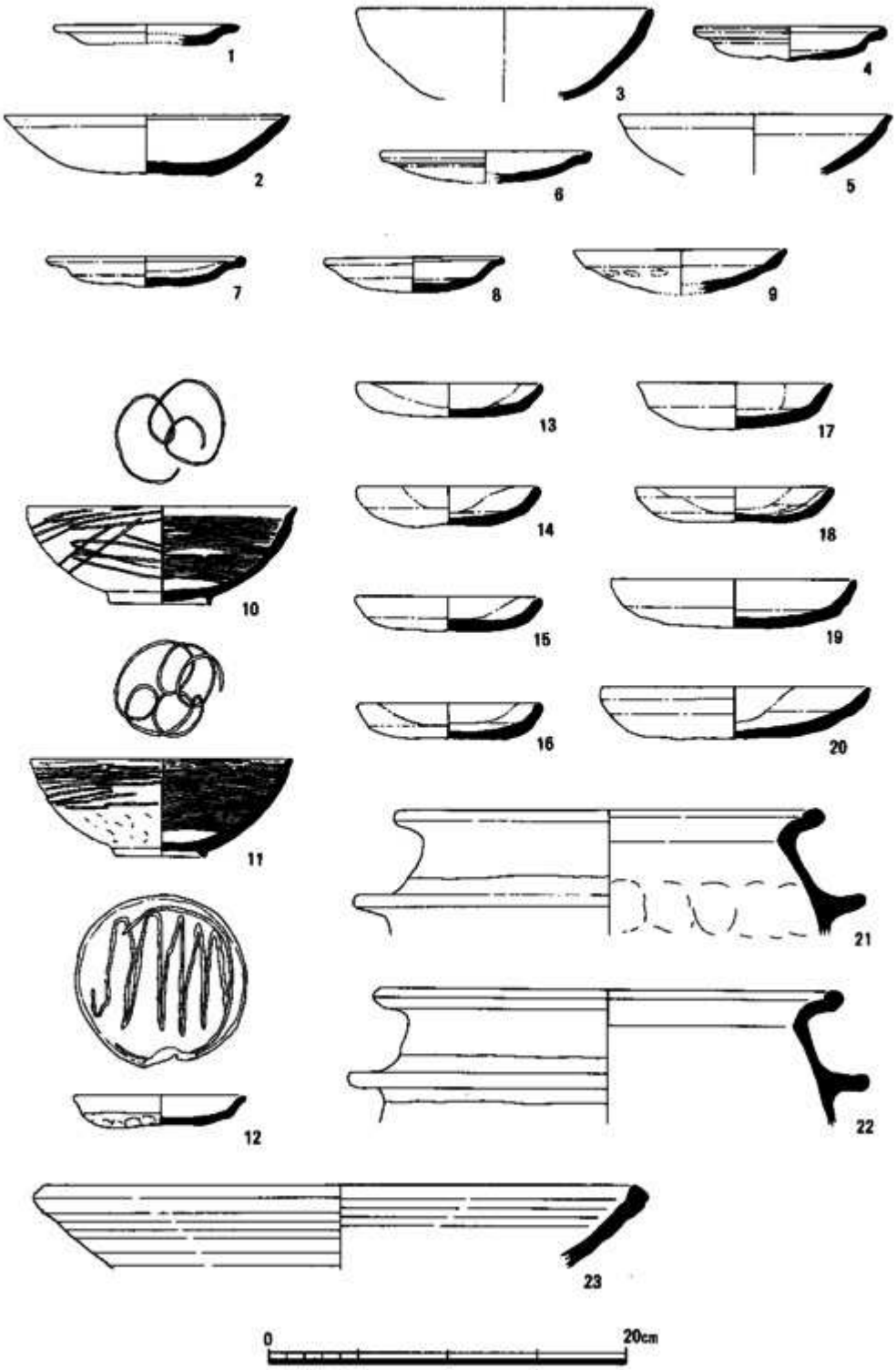
第3図　ＳＫ021出土土器・ＳＫ024出土土器(1)



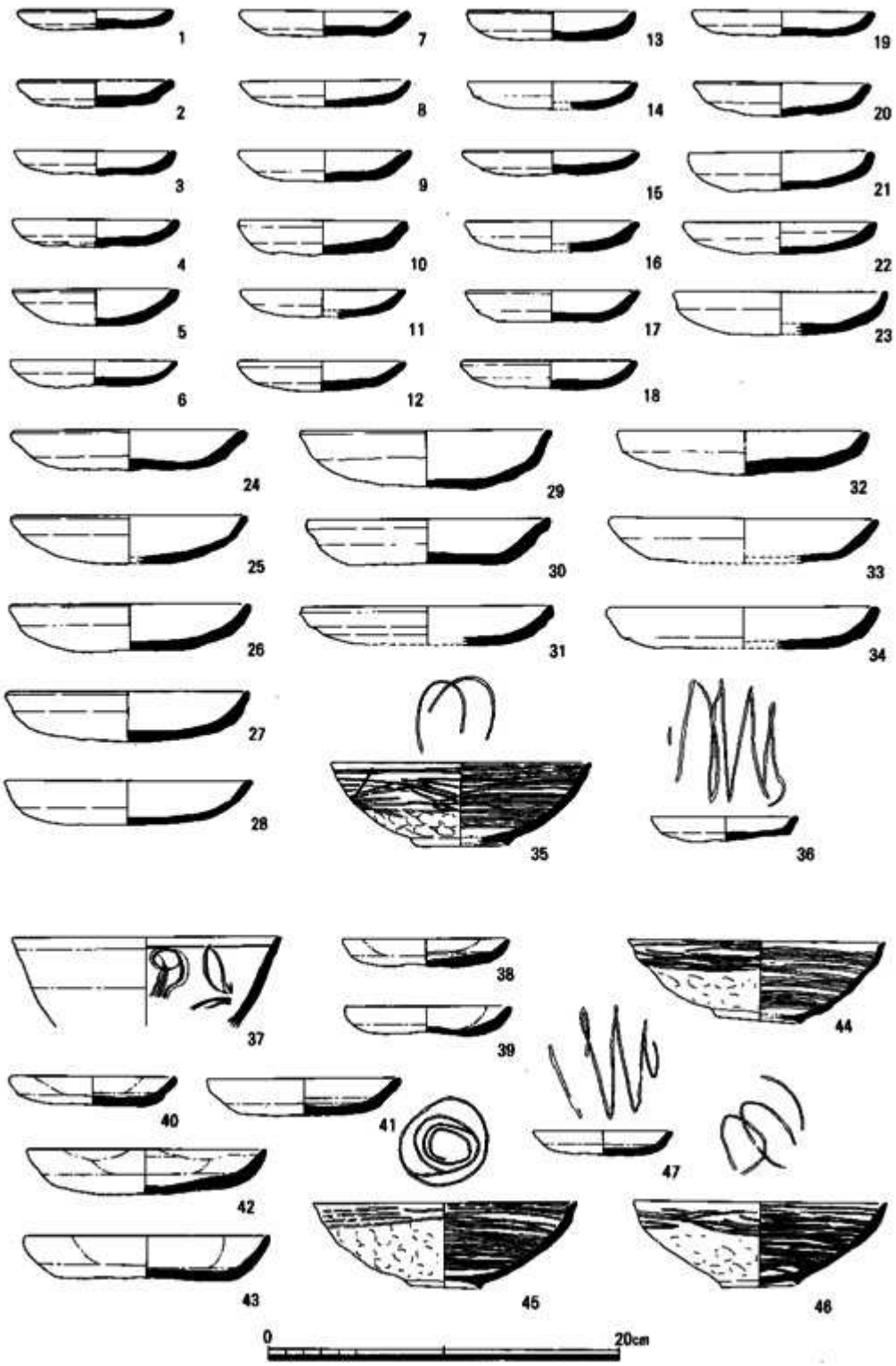
第4図　ＳＫ024出土土器(2)



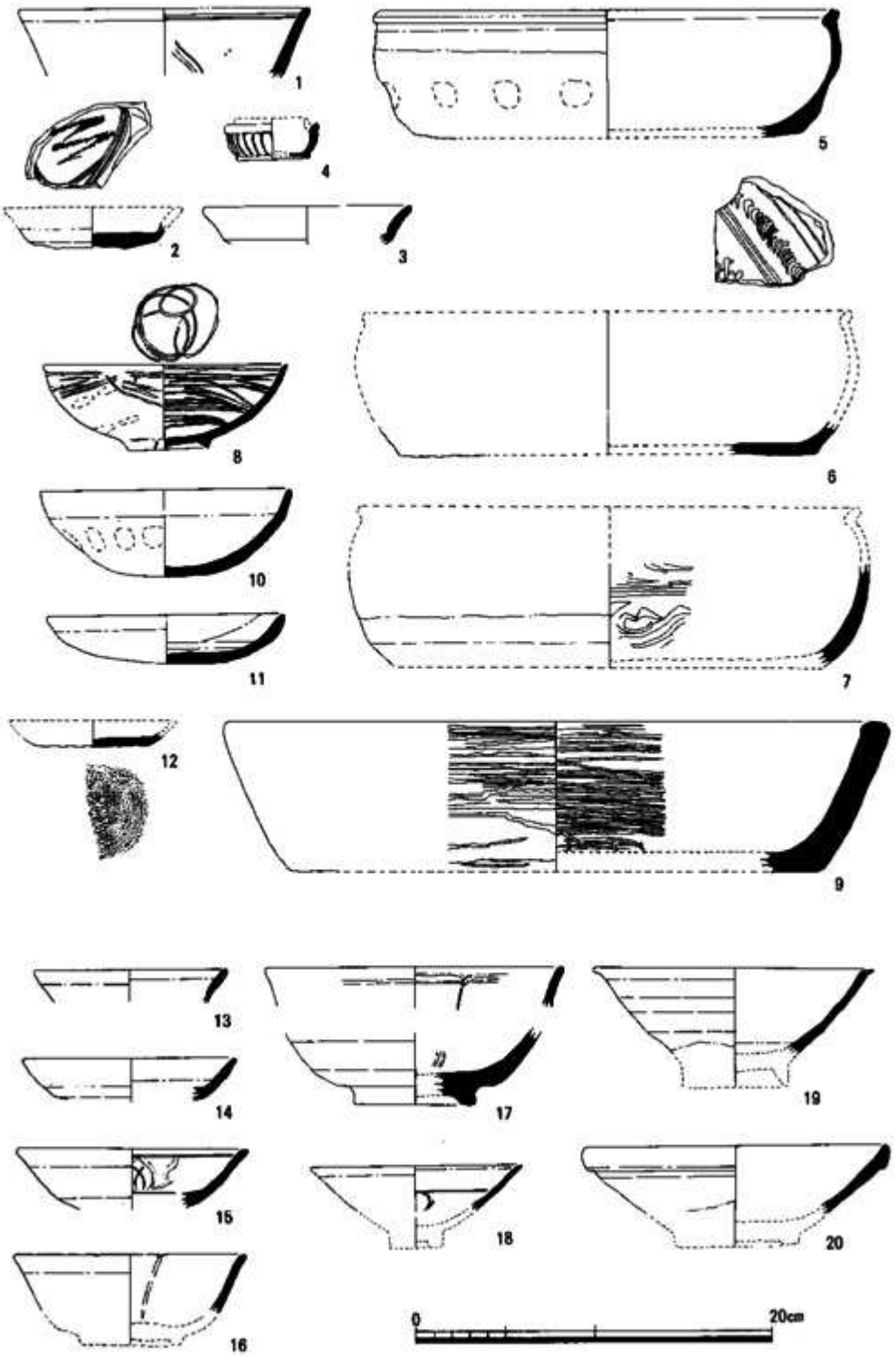
第5図　ＳＥ011・ＳＤ032・ＳＫ023出土土器



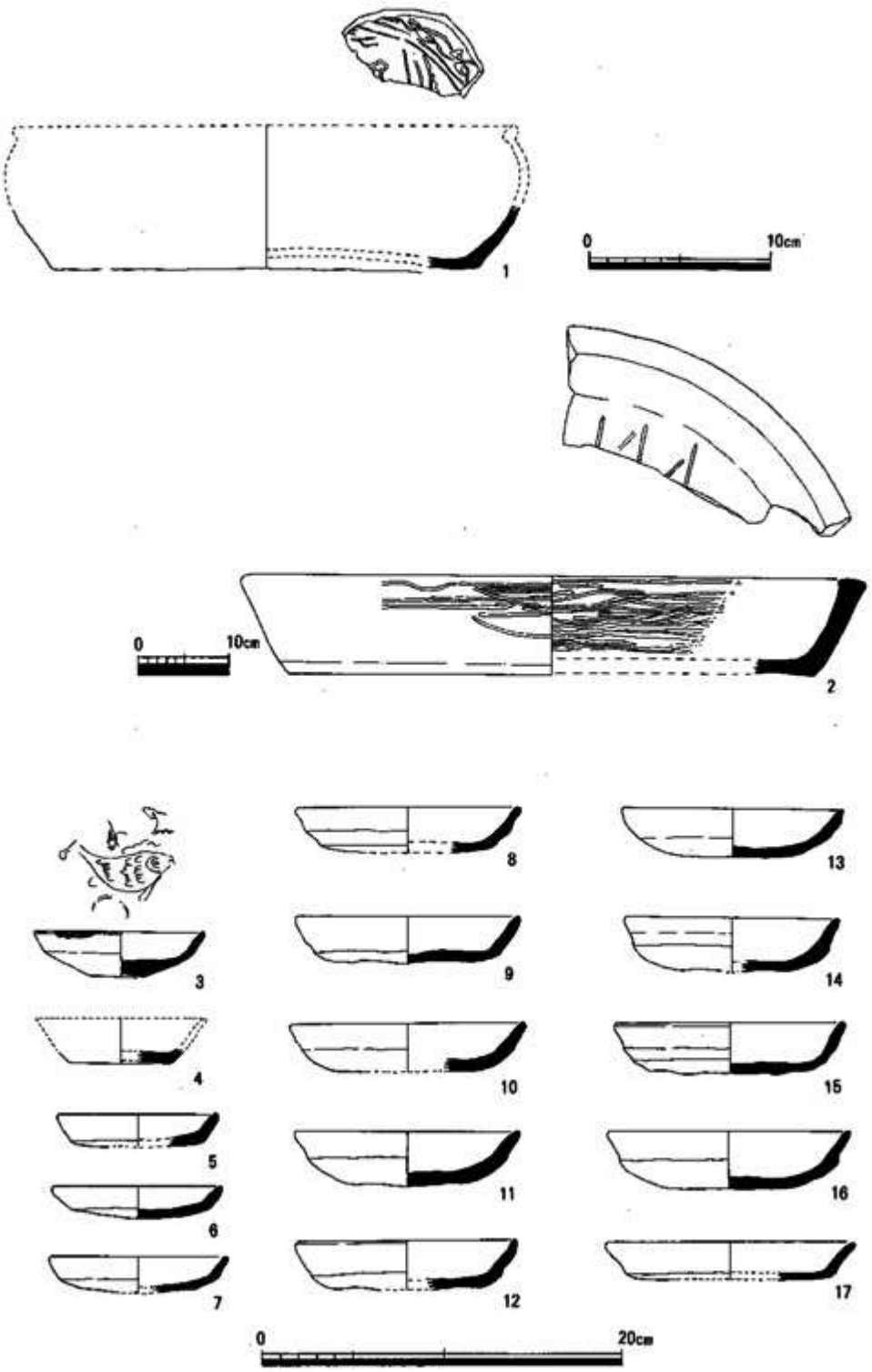
第6図　SE111・SE112出土土器



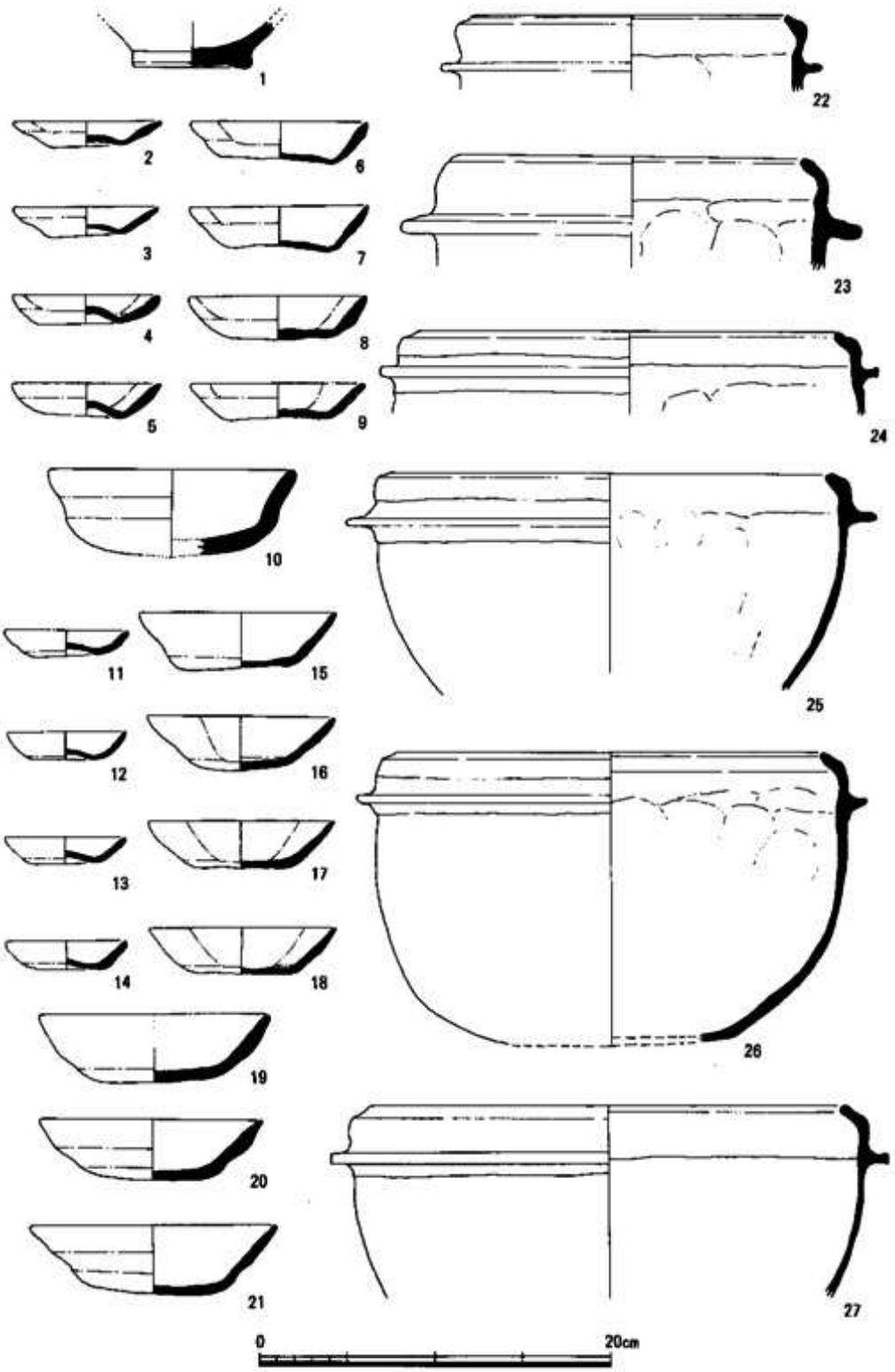
第7図　ＳＧ361・ＳＸ355出土土器



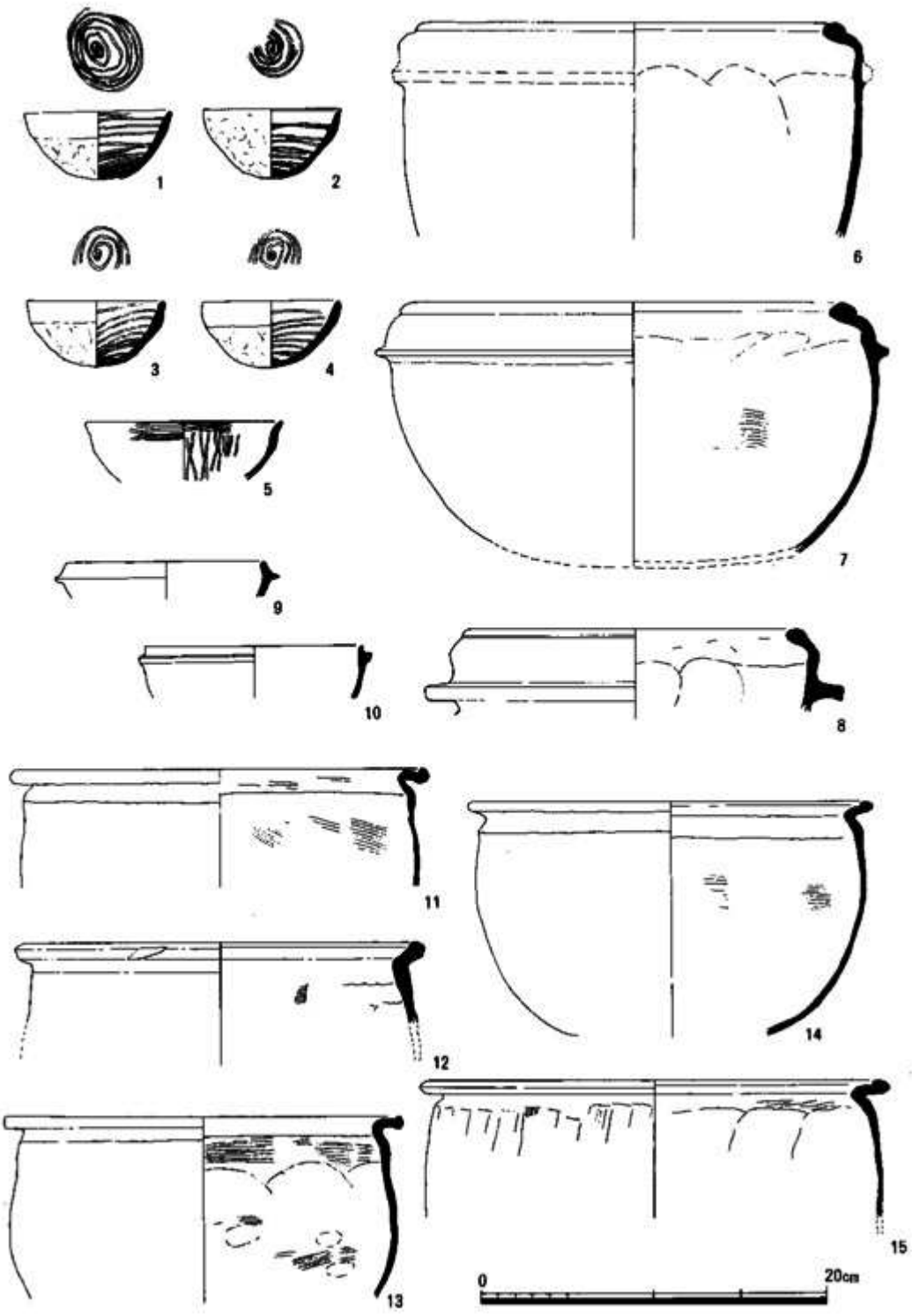
第8図　ＳＸ352出土土器・ＳＸ351出土土器(1)



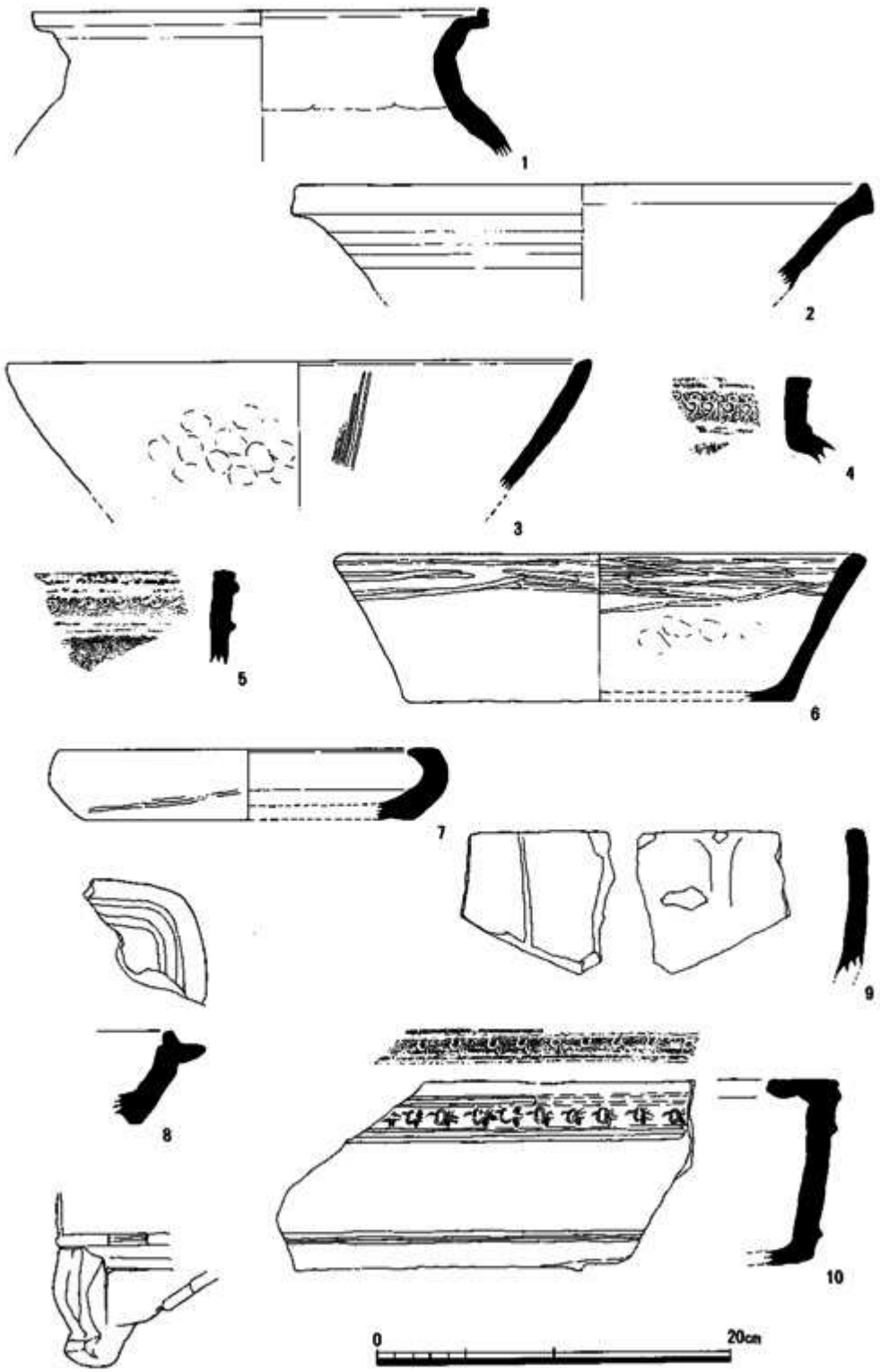
第9図　ＳＸ351出土土器(2)・ＳＫ421出土土器



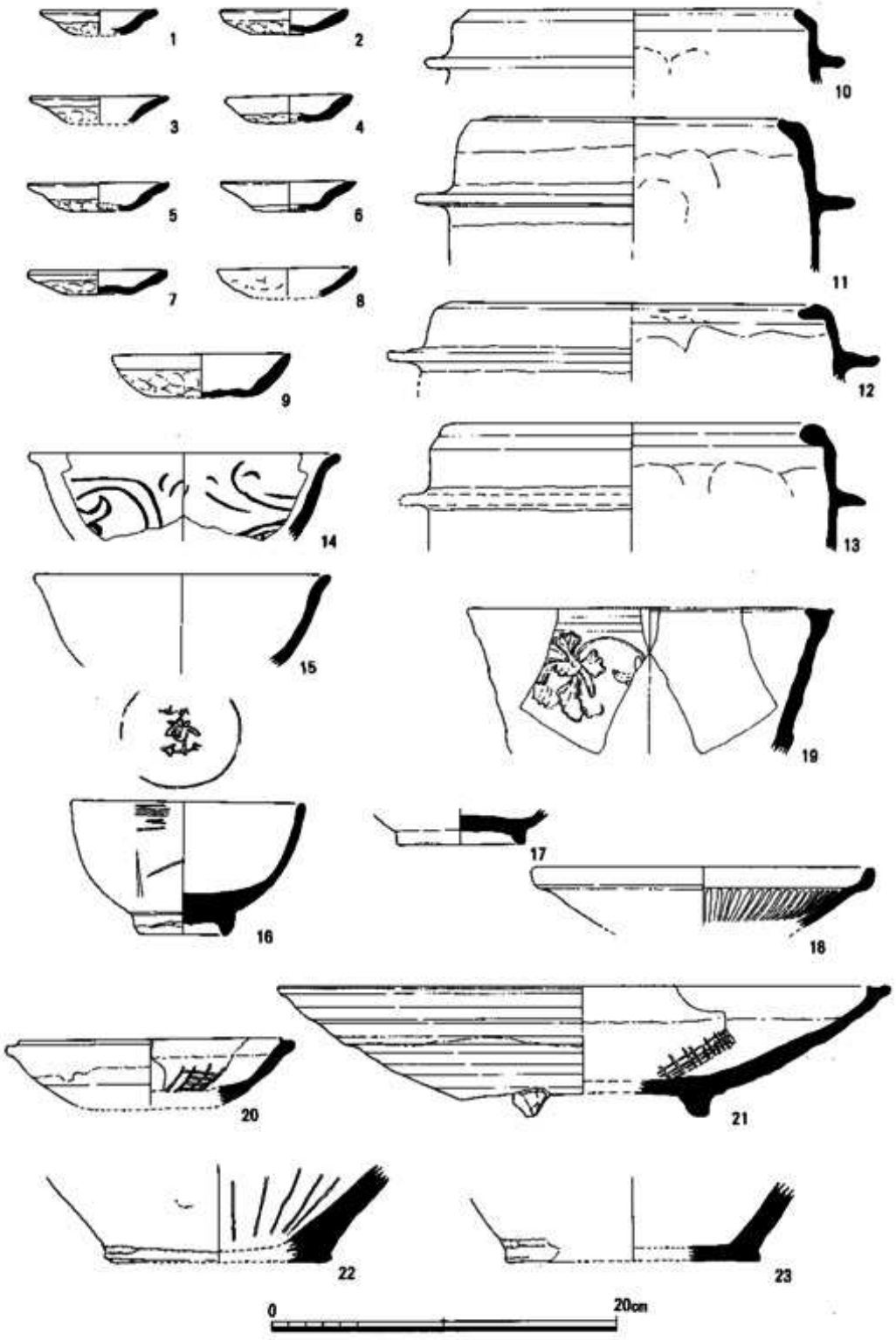
第10図　ＳＤ431出土土器(1)



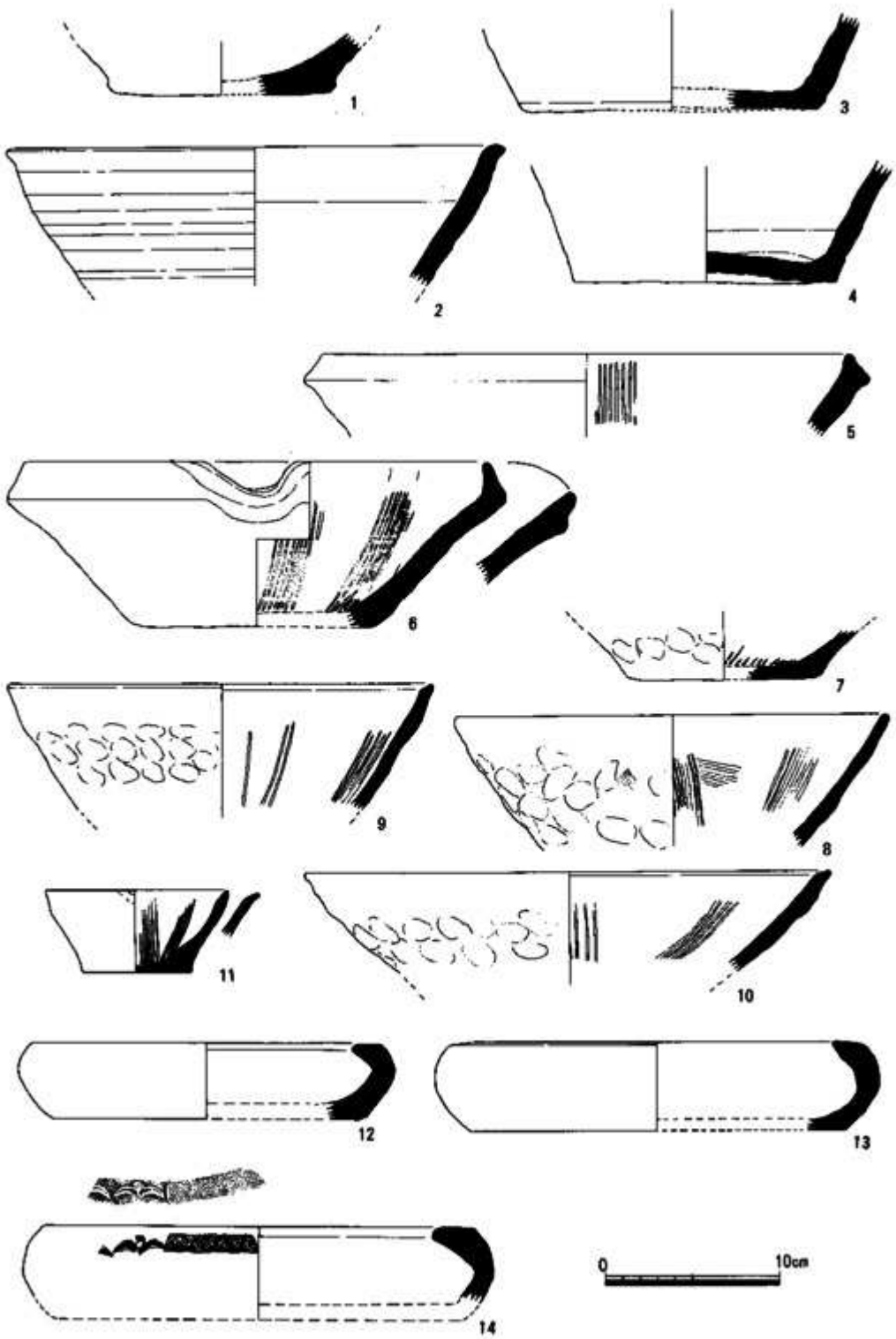
第11図　ＳＤ431出土土器(2)



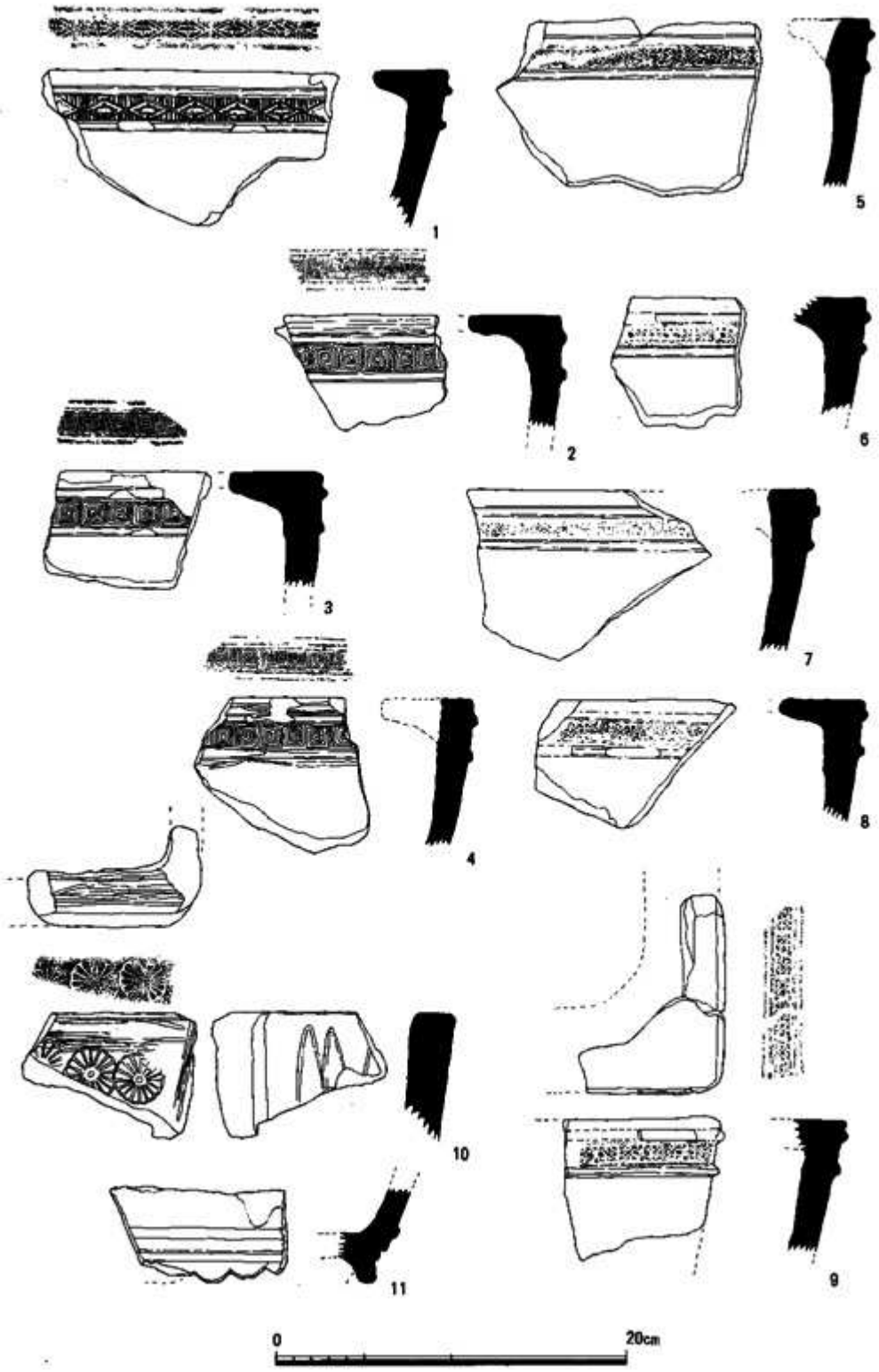
第12図　ＳＤ431出土土器(3)



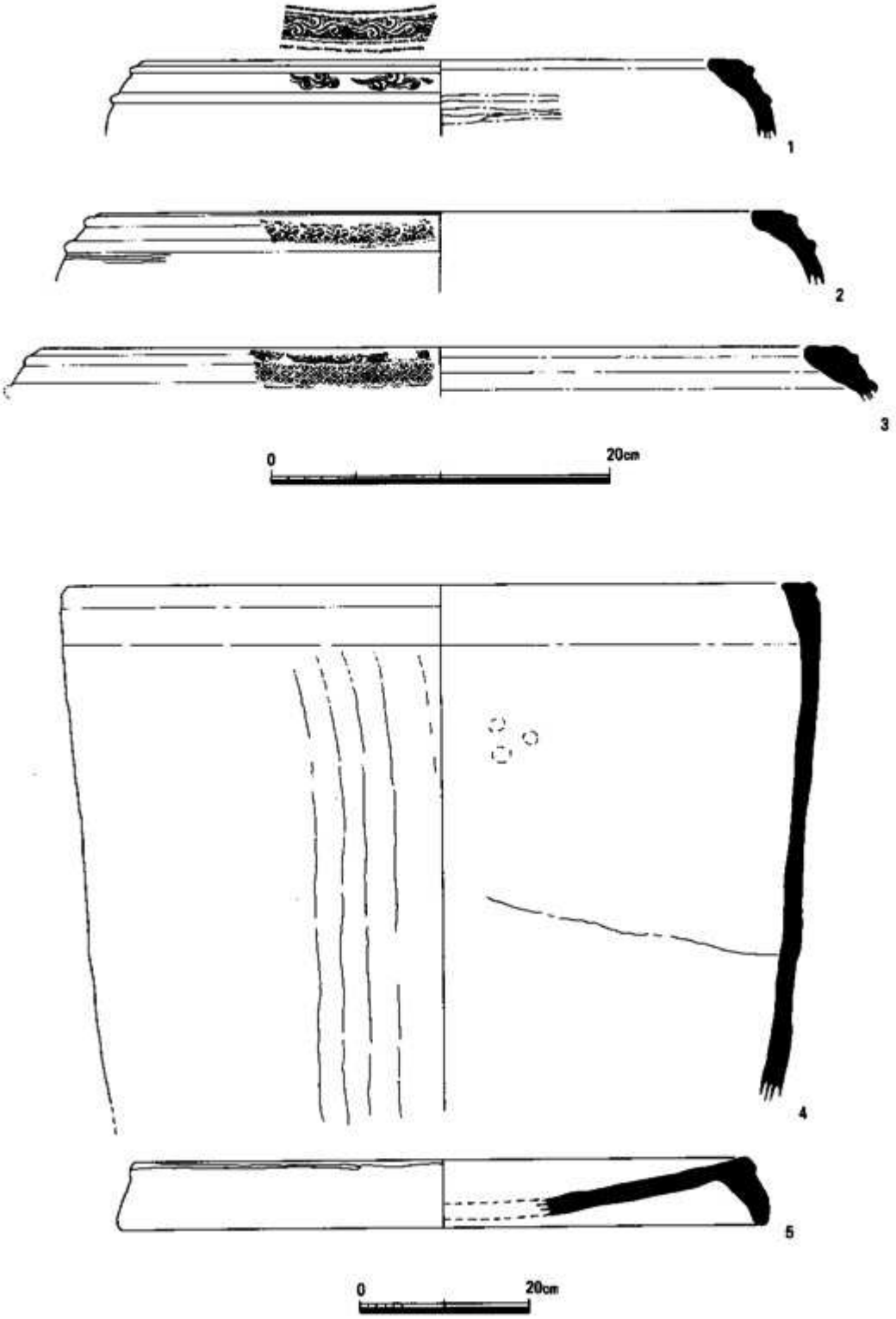
第13図　ＳＥ411出土土器(1)



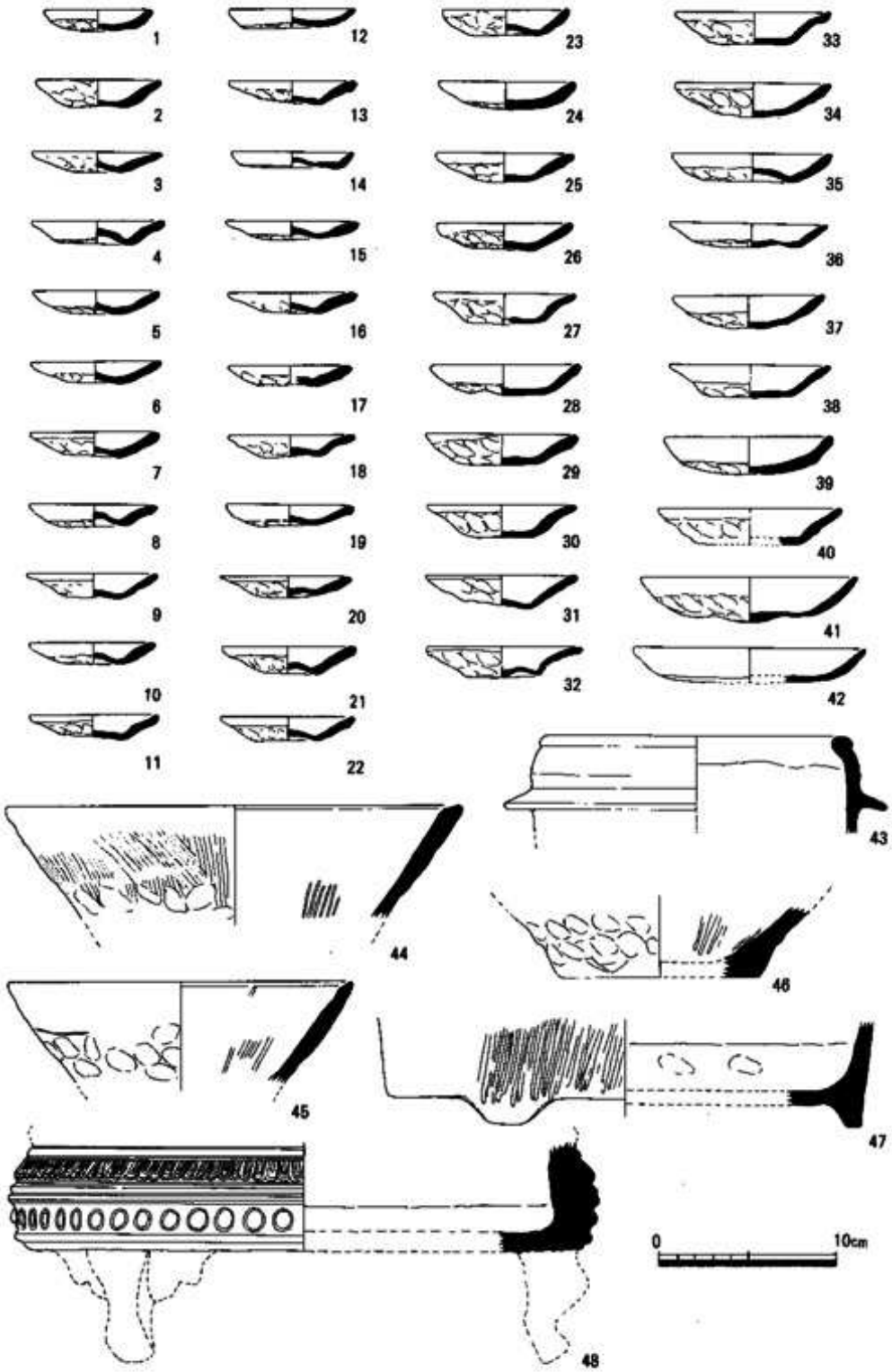
第14図　ＳＥ411出土土器(2)



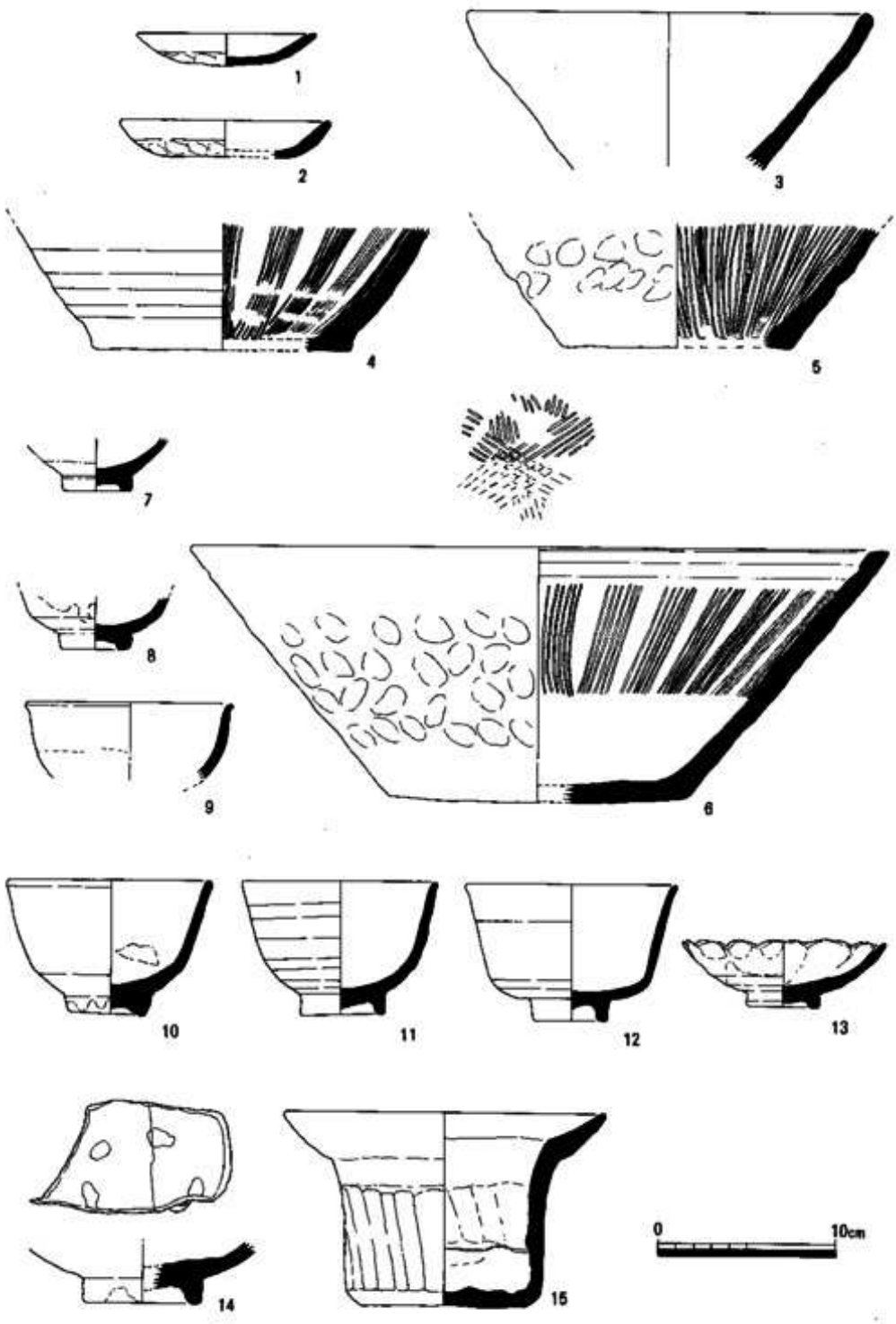
第15図　ＳＥ411出土土器(3)



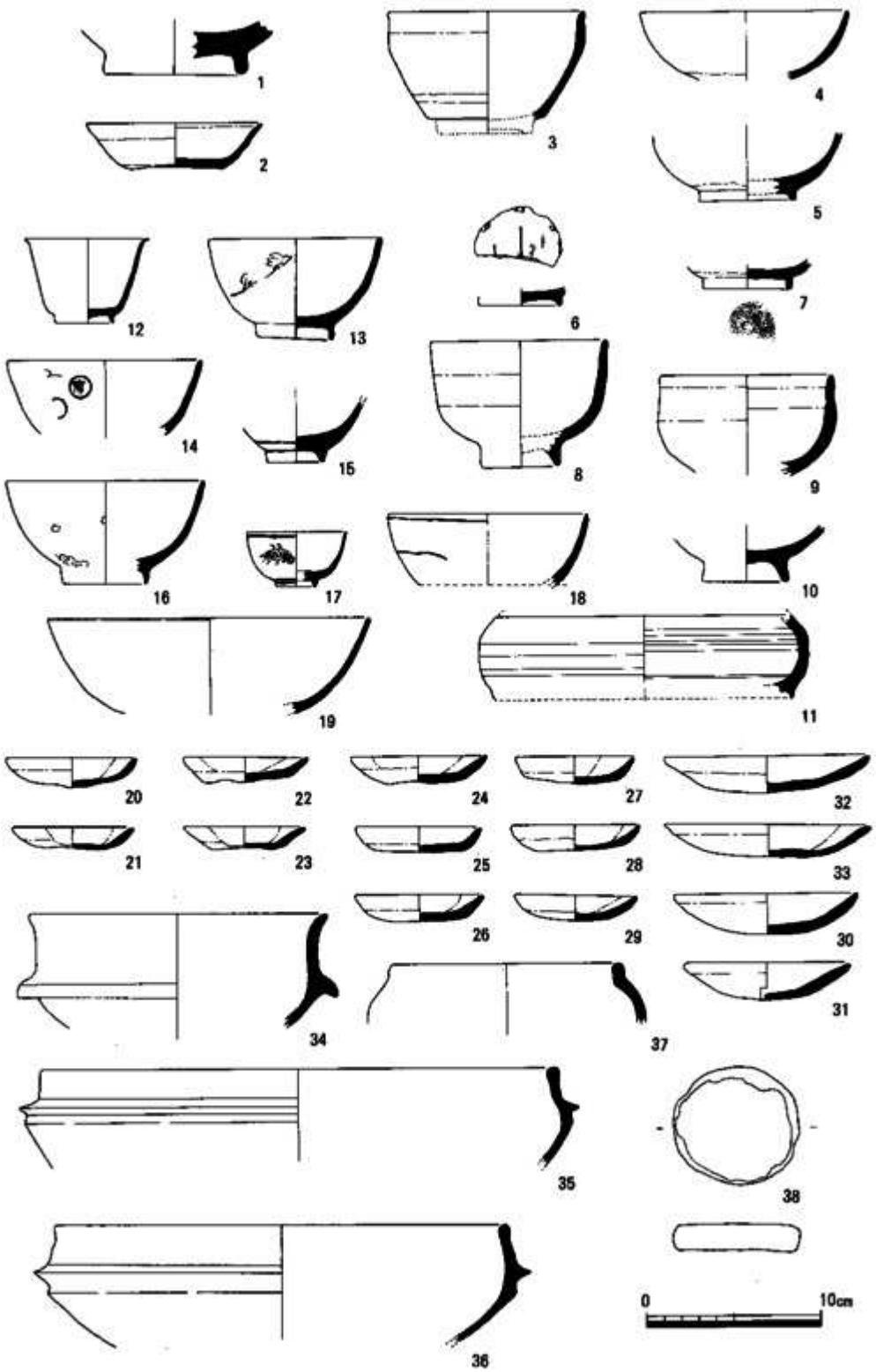
第16図　ＳＥ411出土土器(4)



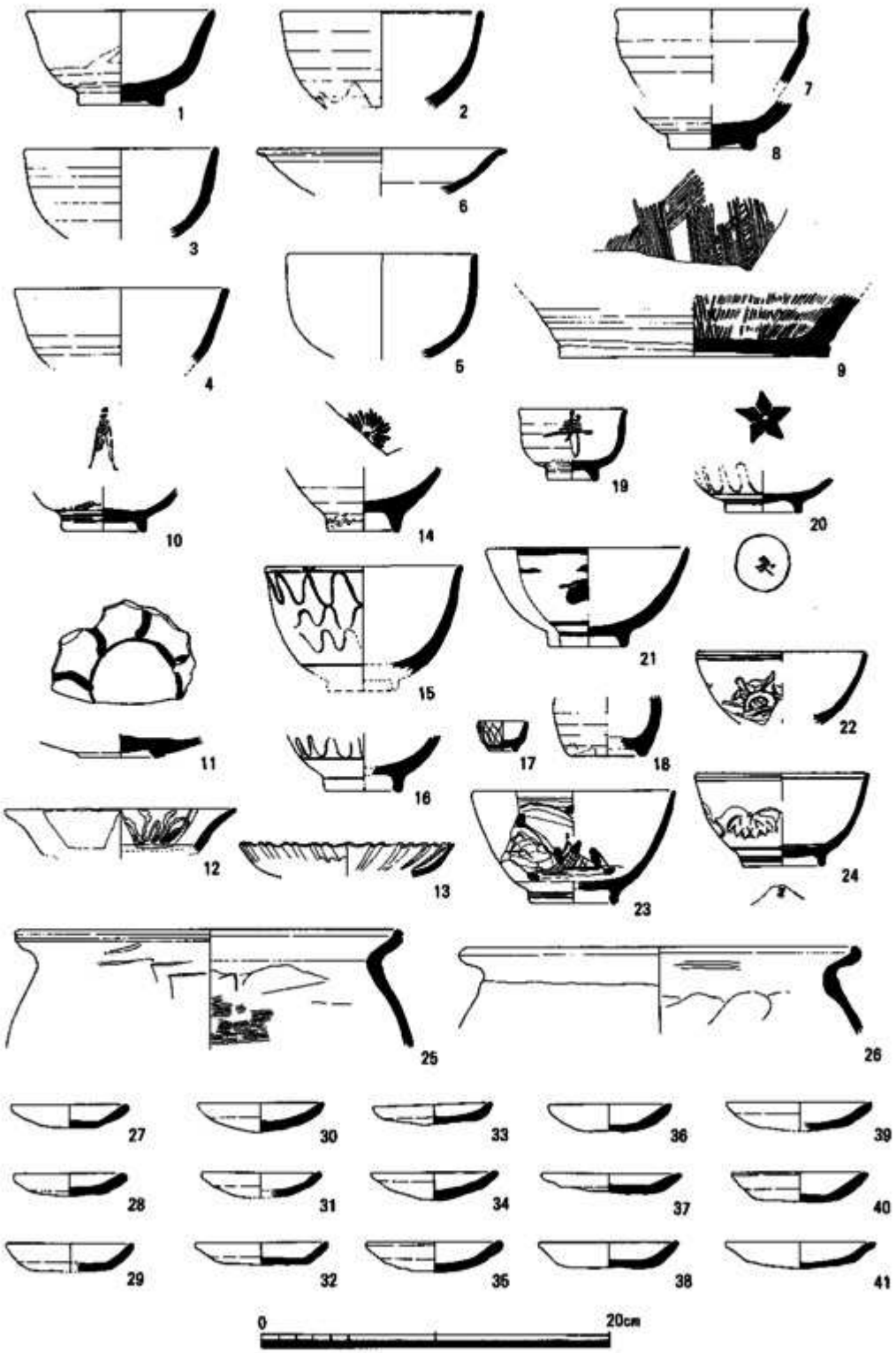
第17図　ＳＫ422出土土器



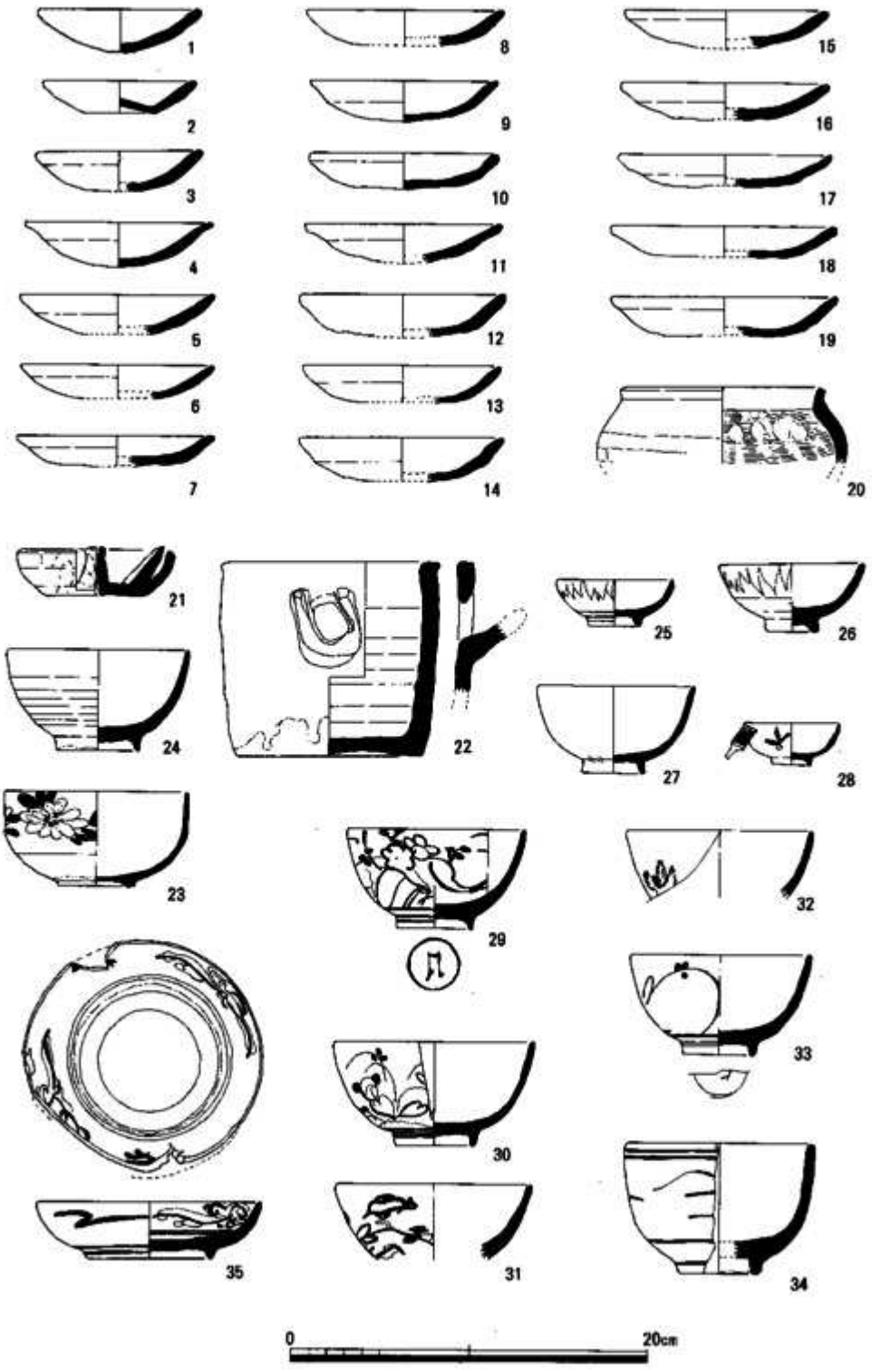
第18図　ＳＥ511・ＳＫ521・ＳＤ531出土土器



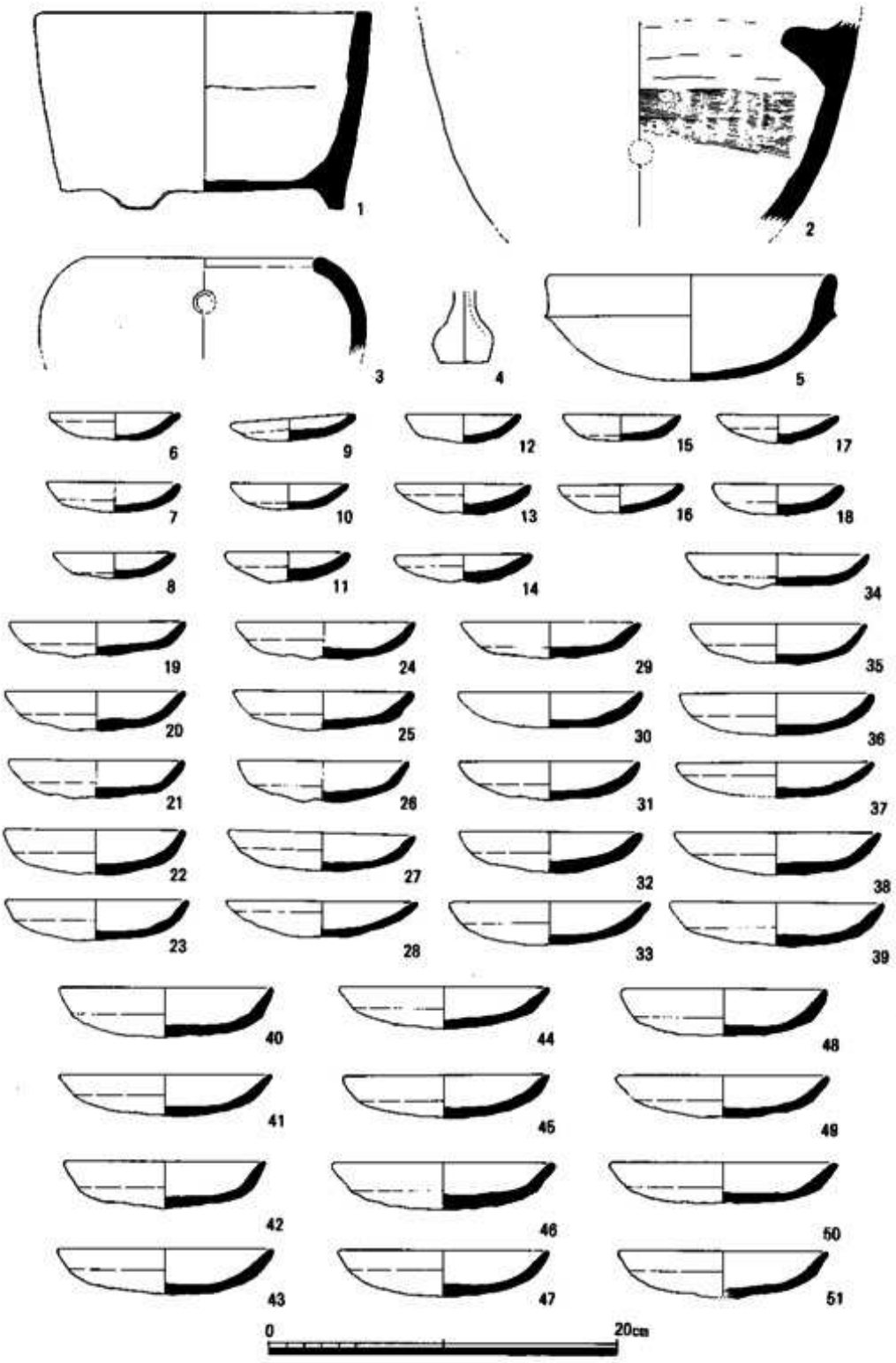
第19図　ＳＫ622出土土器



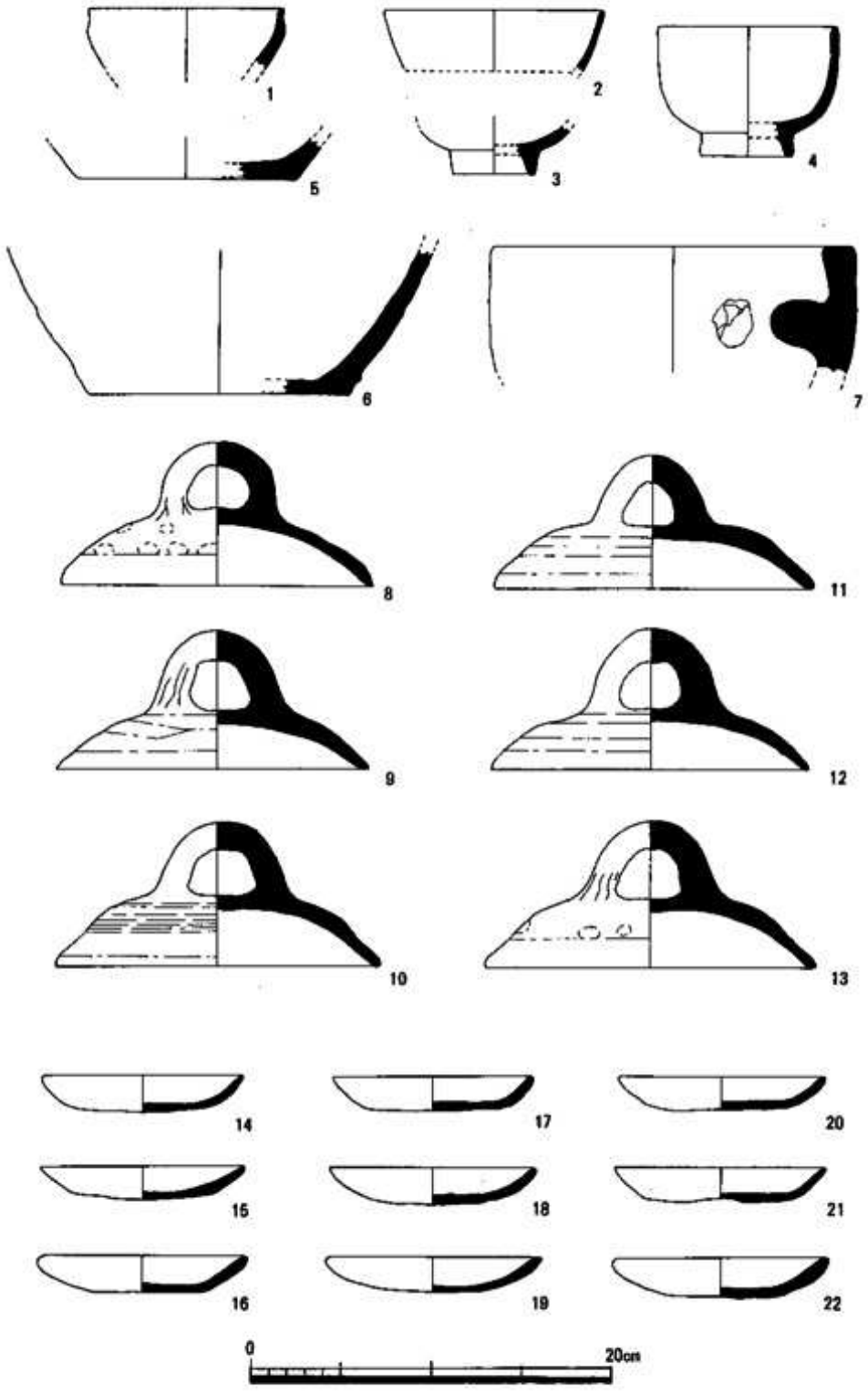
第20図　ＳＫ621出土土器(1)



第21図　ＳＫ621出土土器(2)・ＳＫ721出土土器(1)



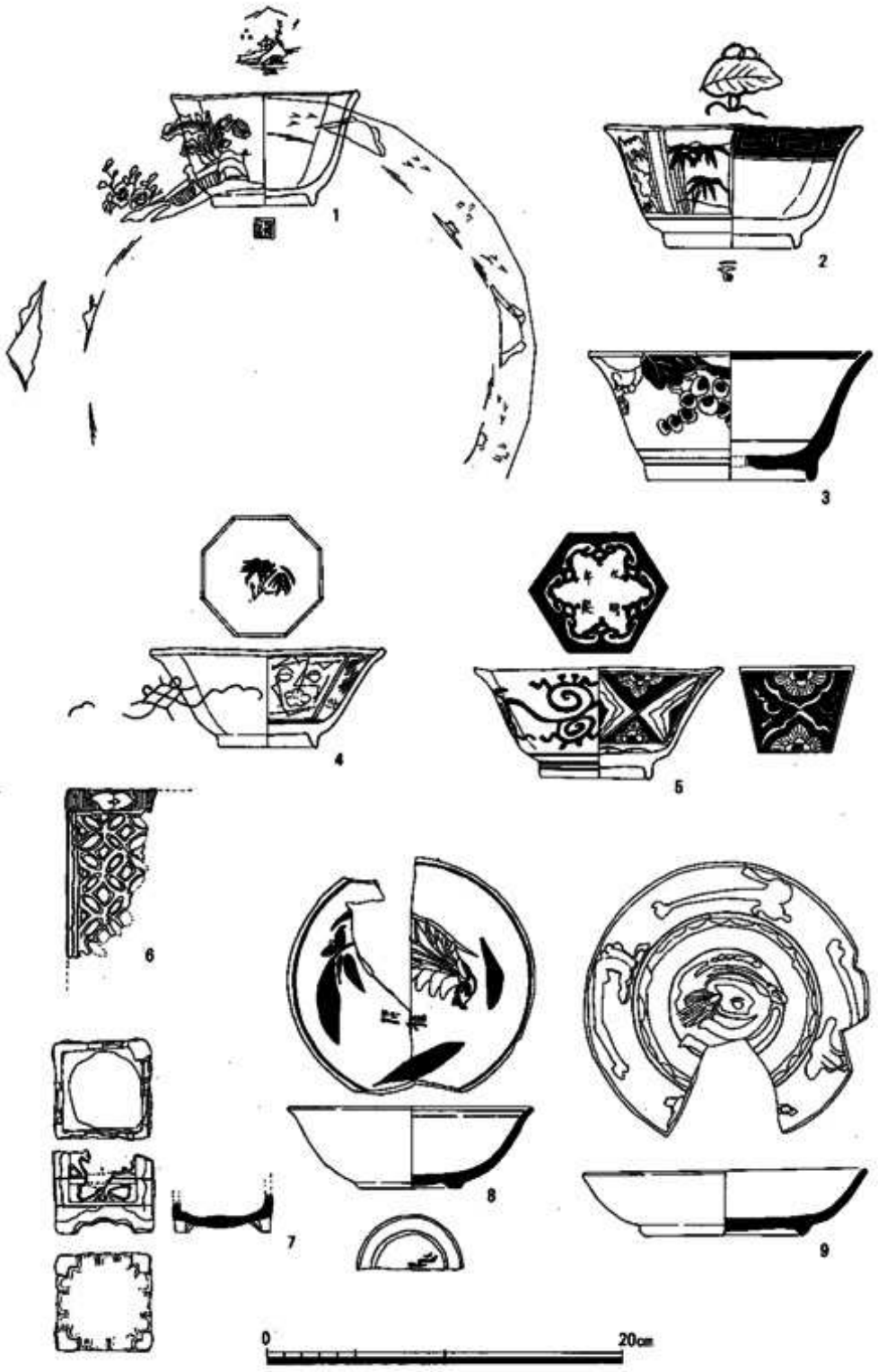
第22図　ＳＫ721出土土器(2)



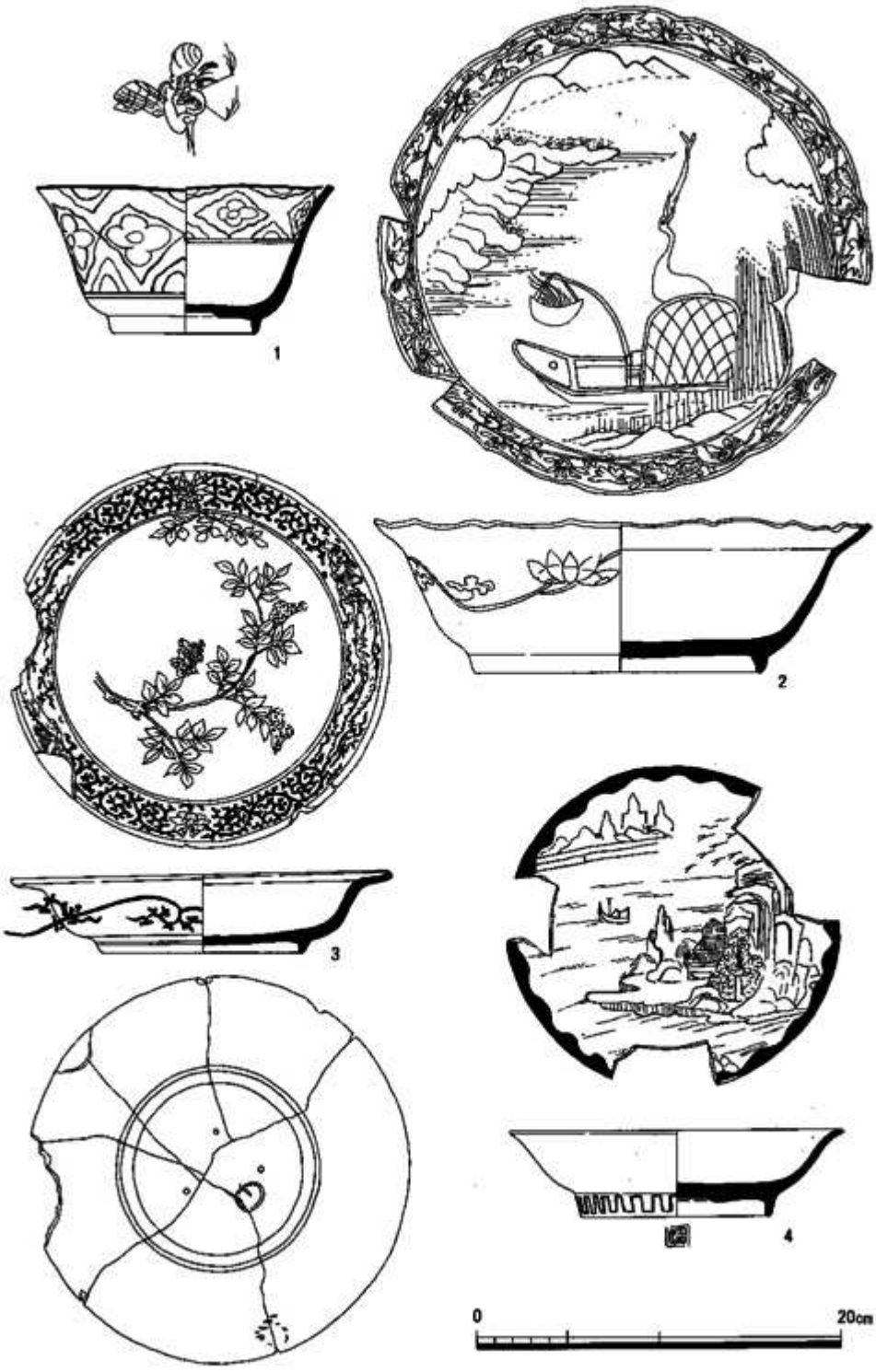
第23図　ＳＫ722出土土器

第24図　ＳＸ751出土土器

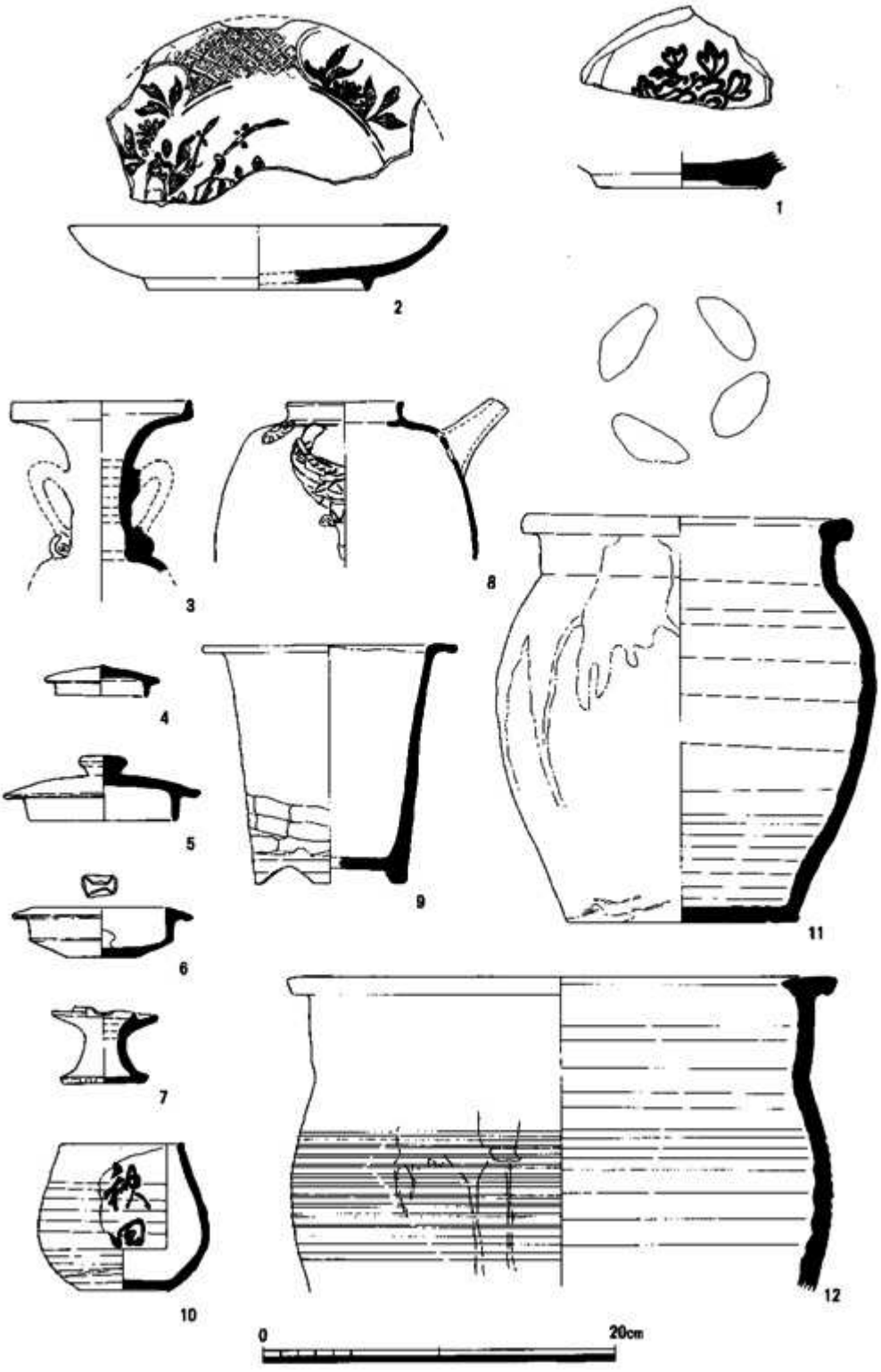
第25図　ＳＫ822出土土器(1)



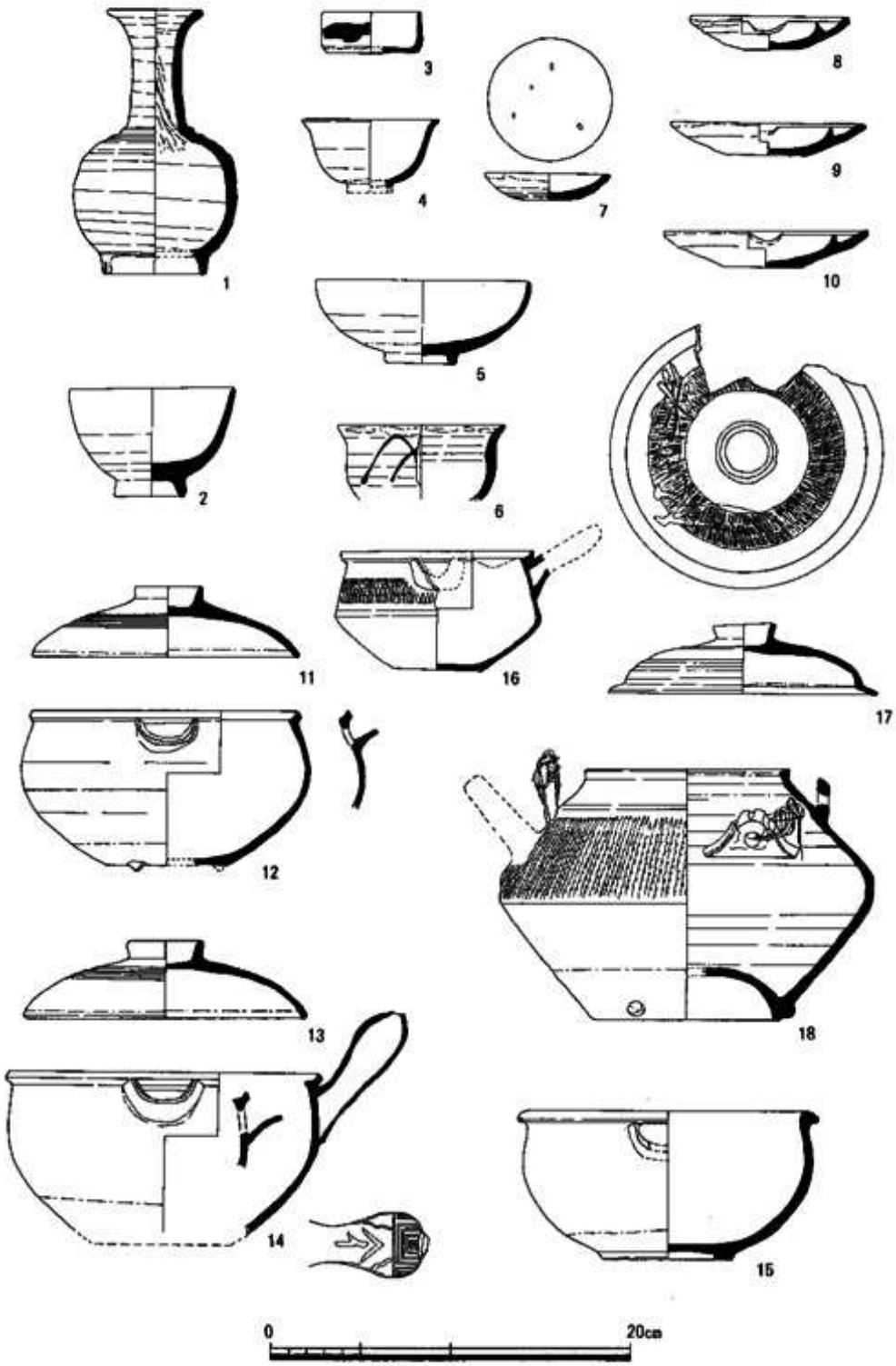
第26図　ＳＫ822出土土器(2)



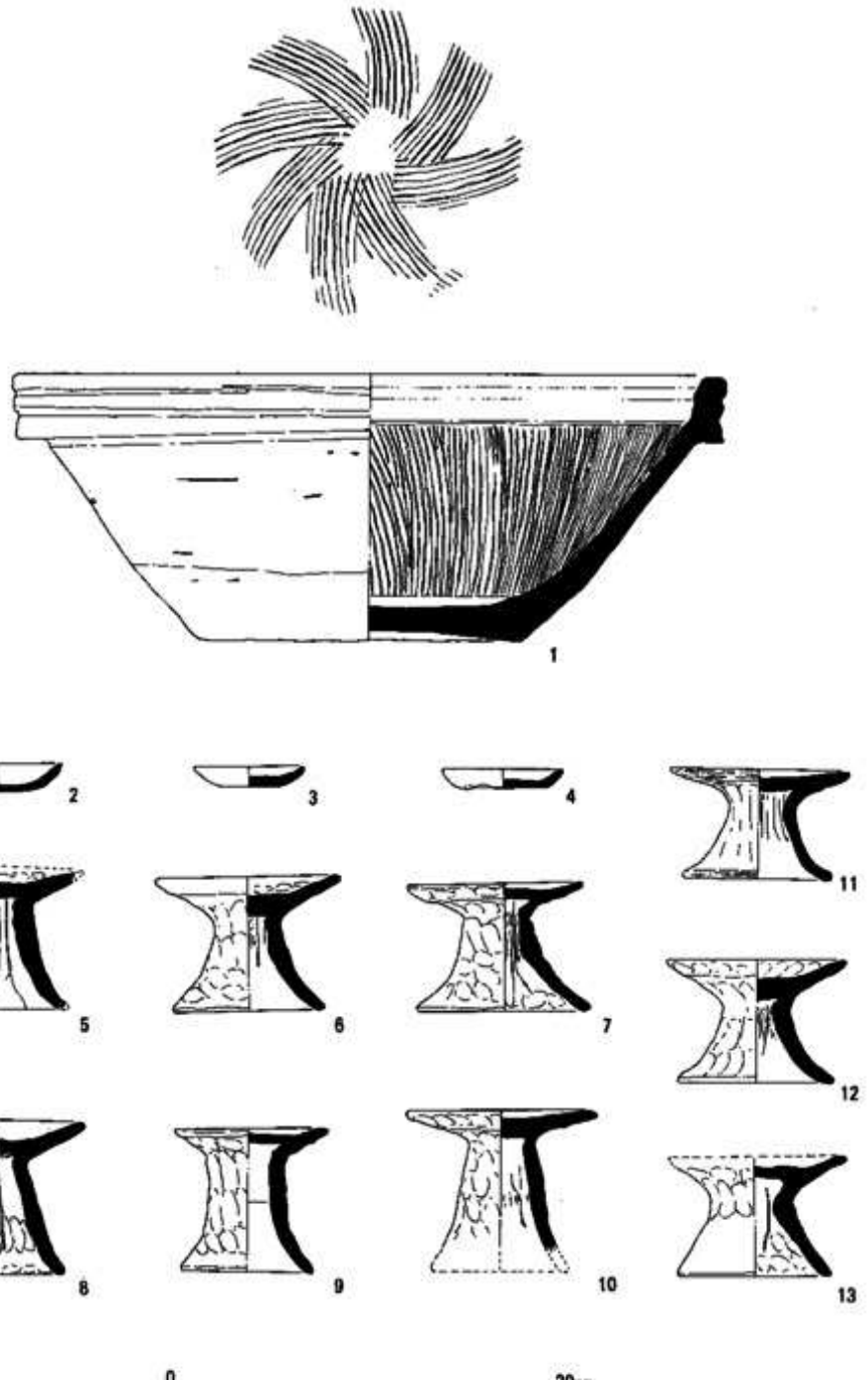
第27図　ＳＫ822出土土器(3)



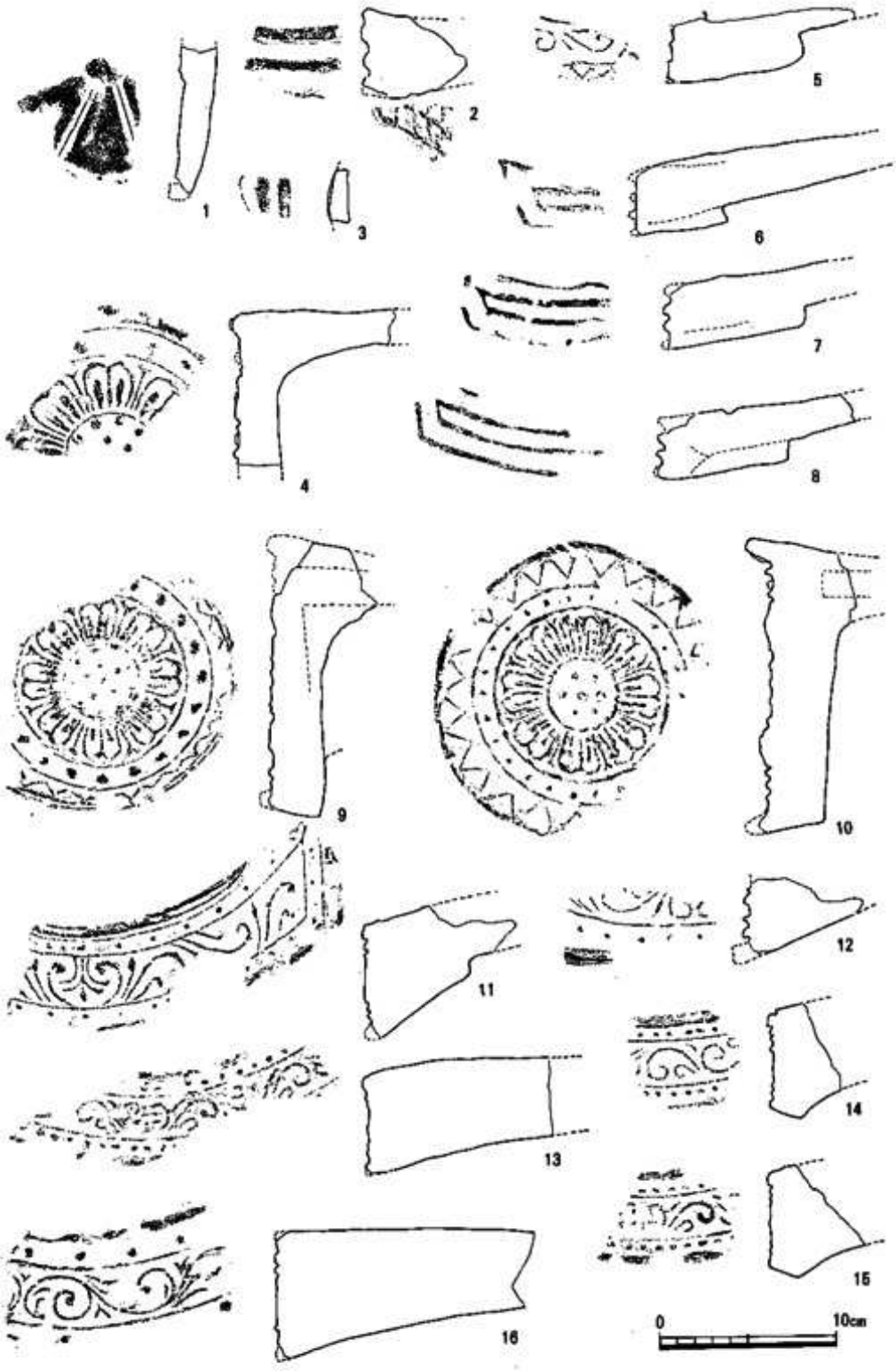
第28図　ＳＫ822出土土器(4)



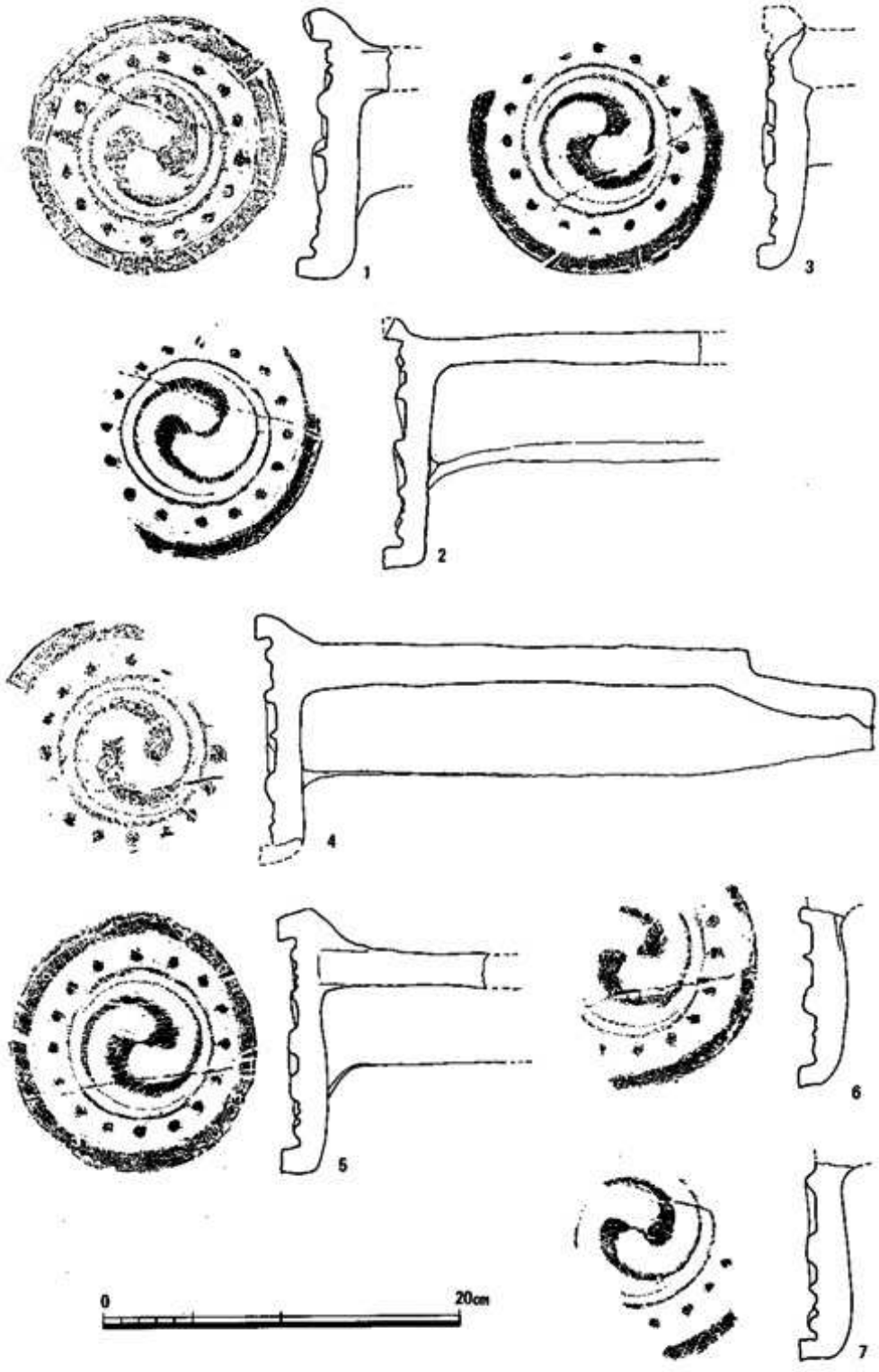
第29図　ＳＫ822出土土器(5)



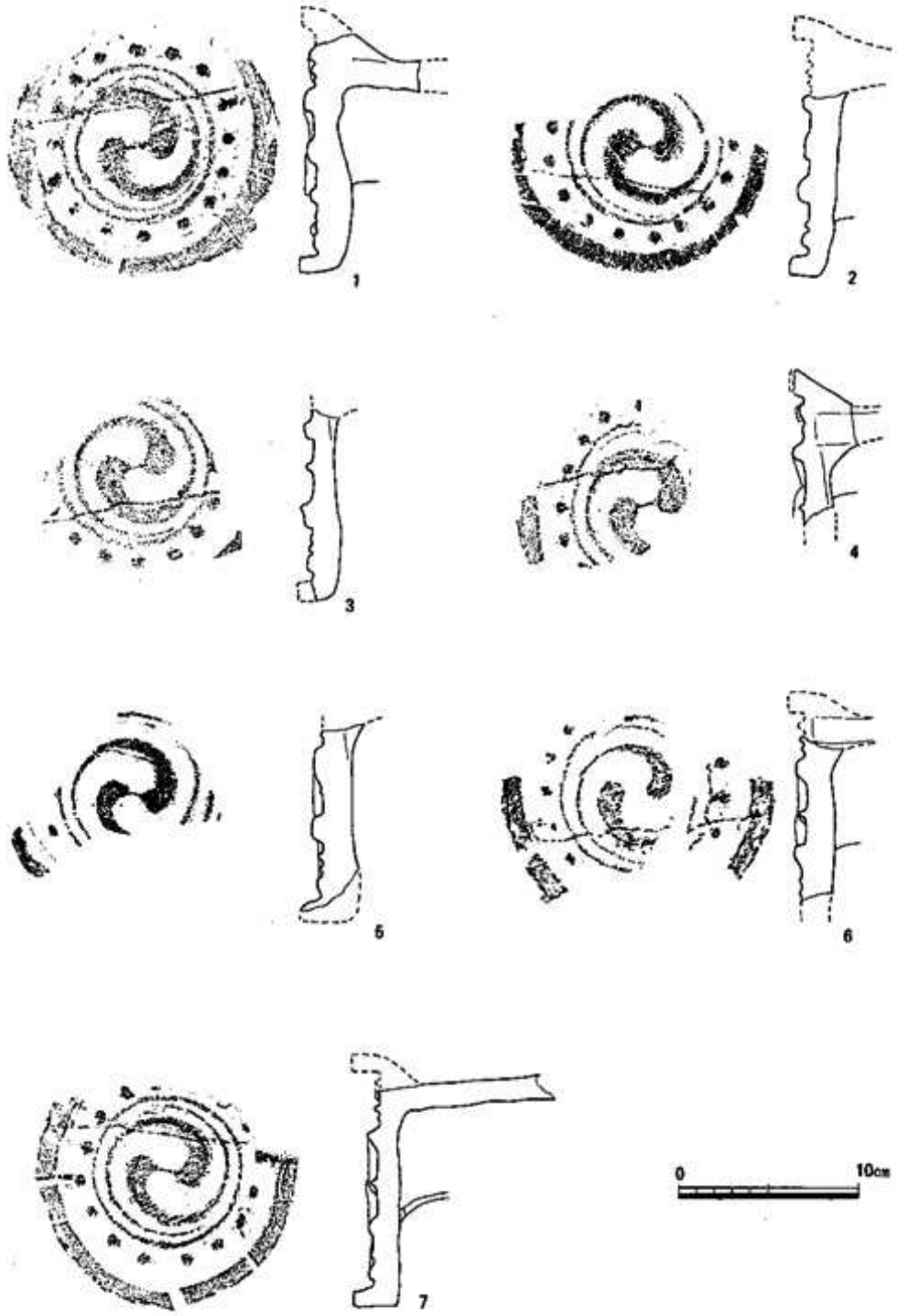
第30図　ＳＫ822出土土器(6)



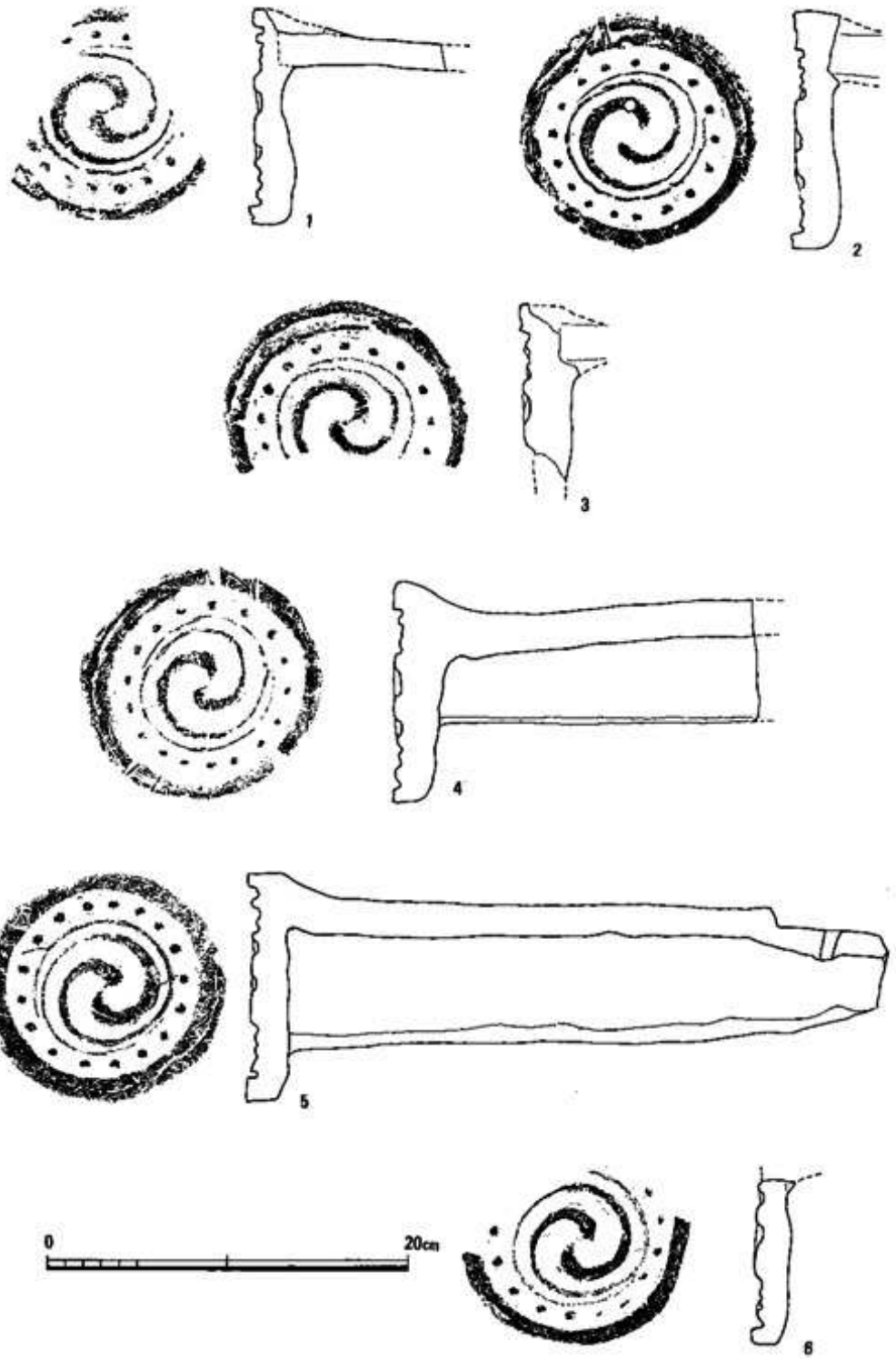
第31図　飛鳥・奈良時代軒瓦



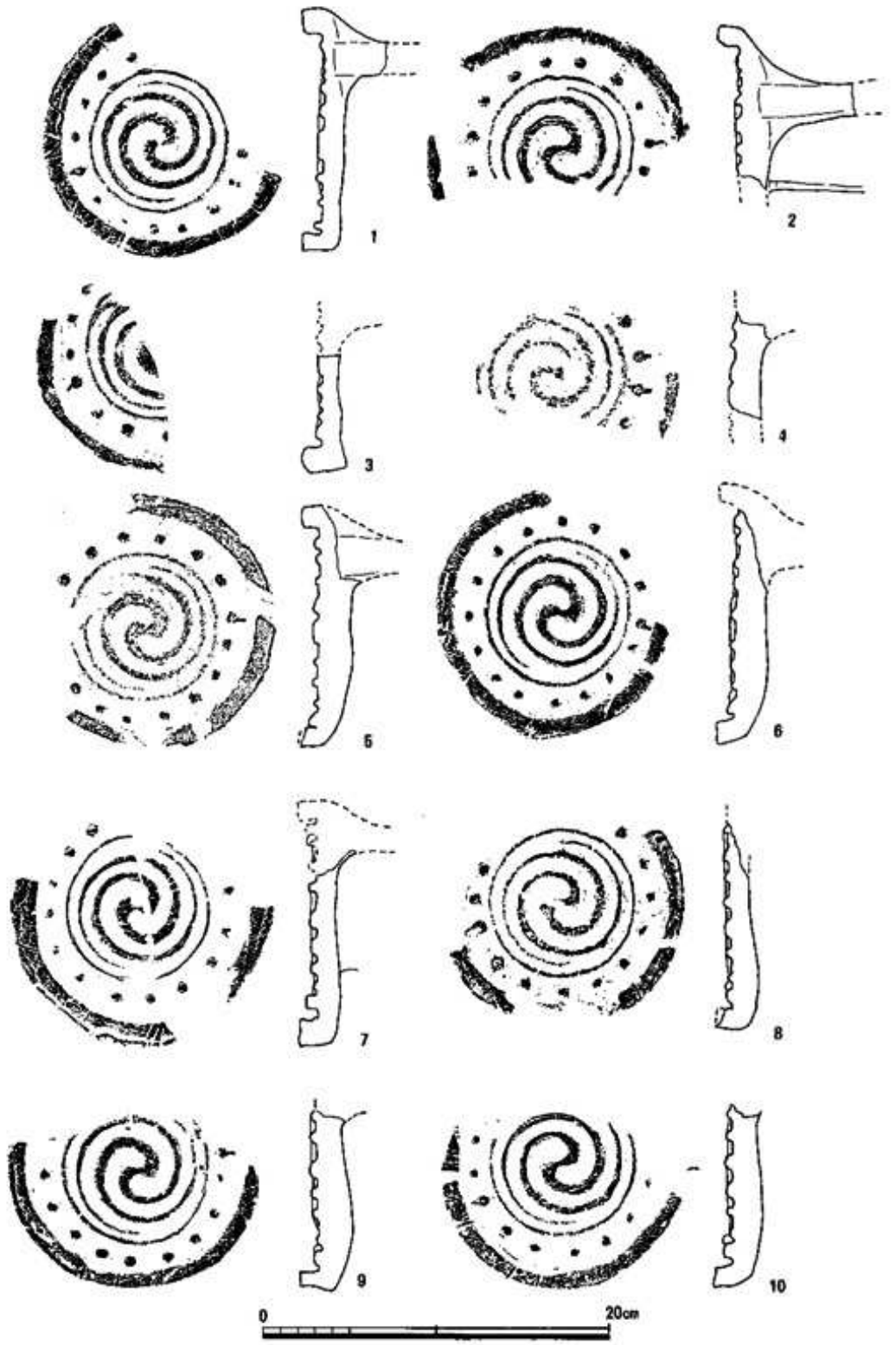
第32図　平安時代軒丸瓦(1)



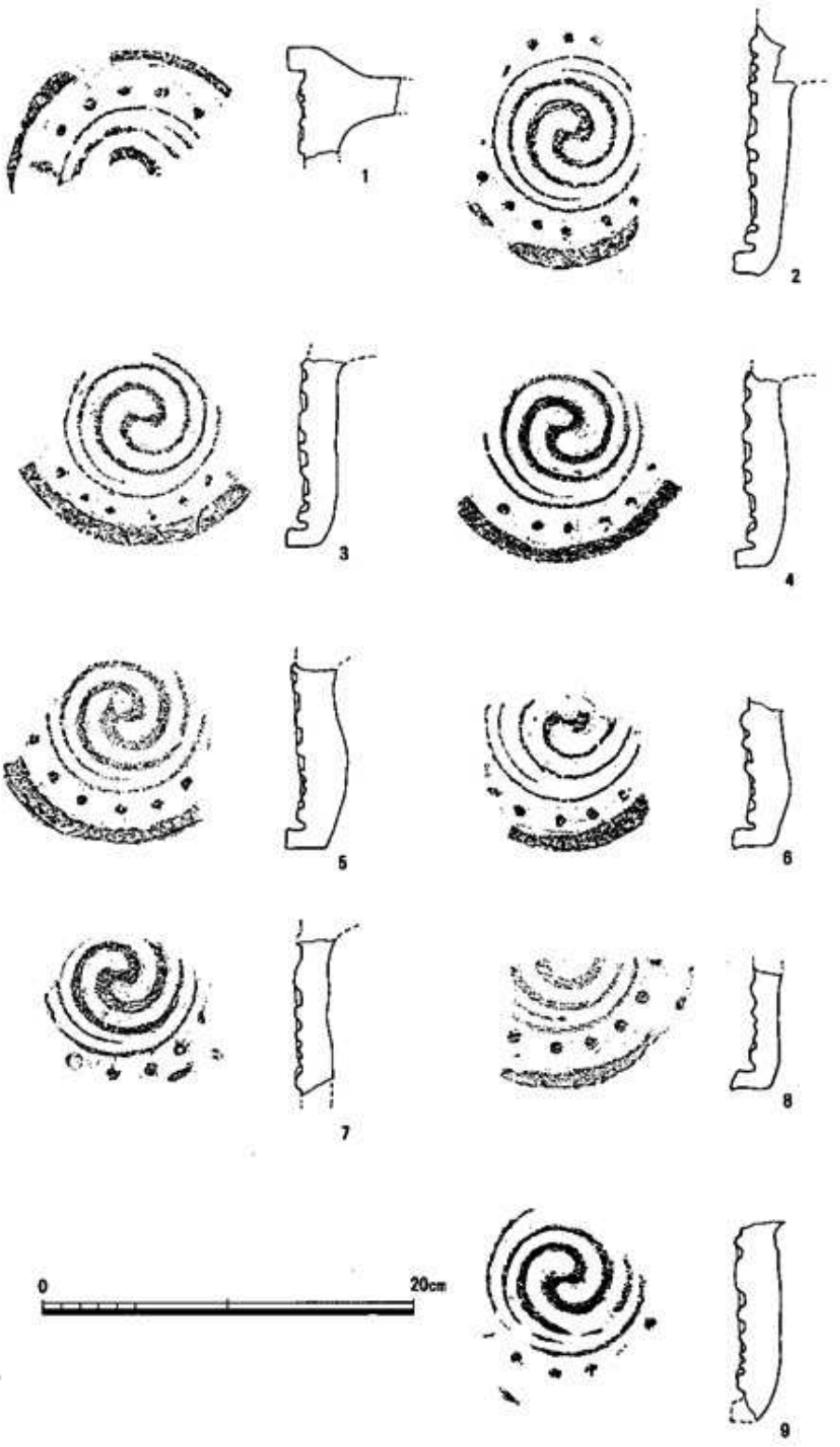
第33図　平安時代軒丸瓦(2)



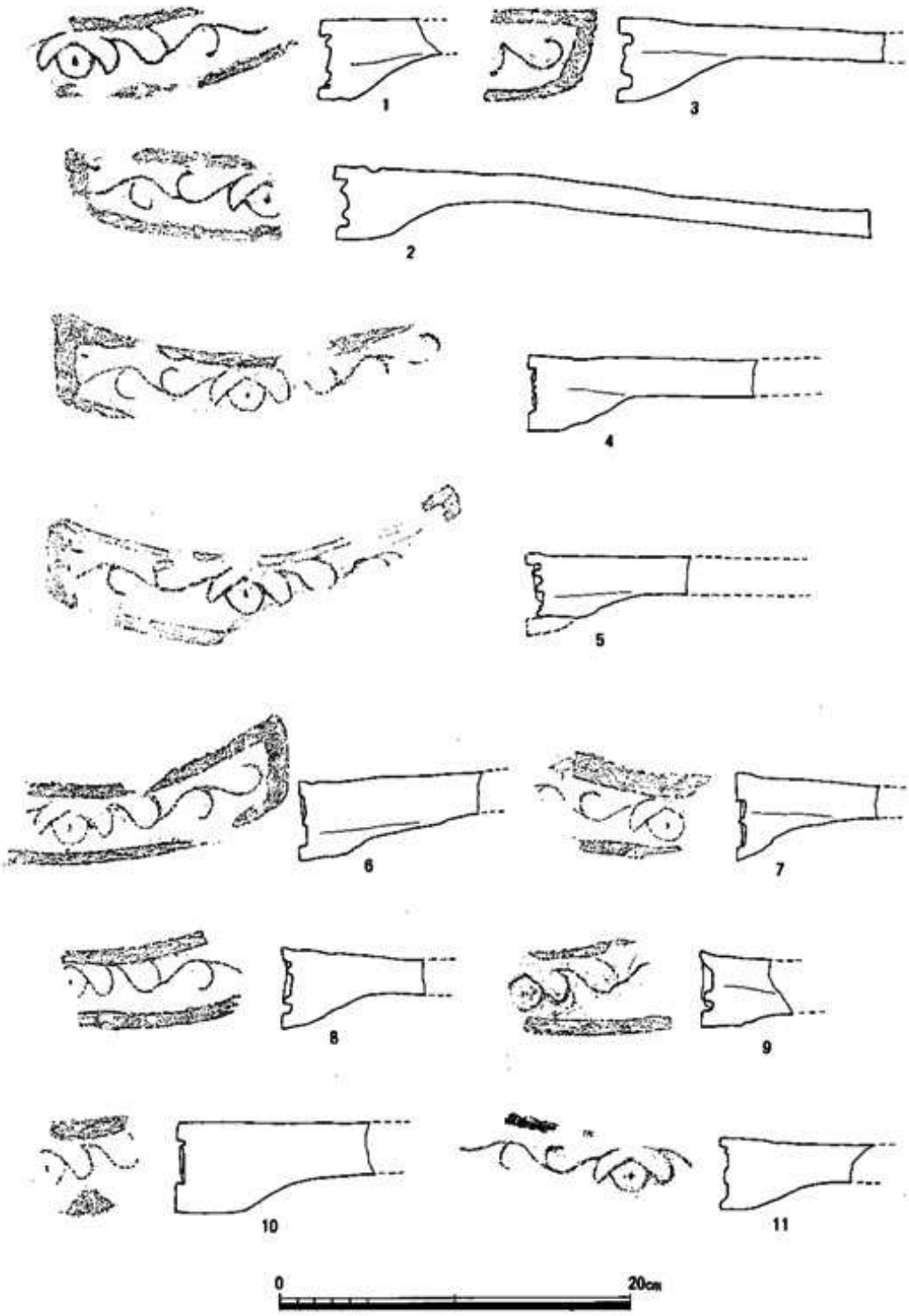
第34図　平安時代軒丸瓦(3)



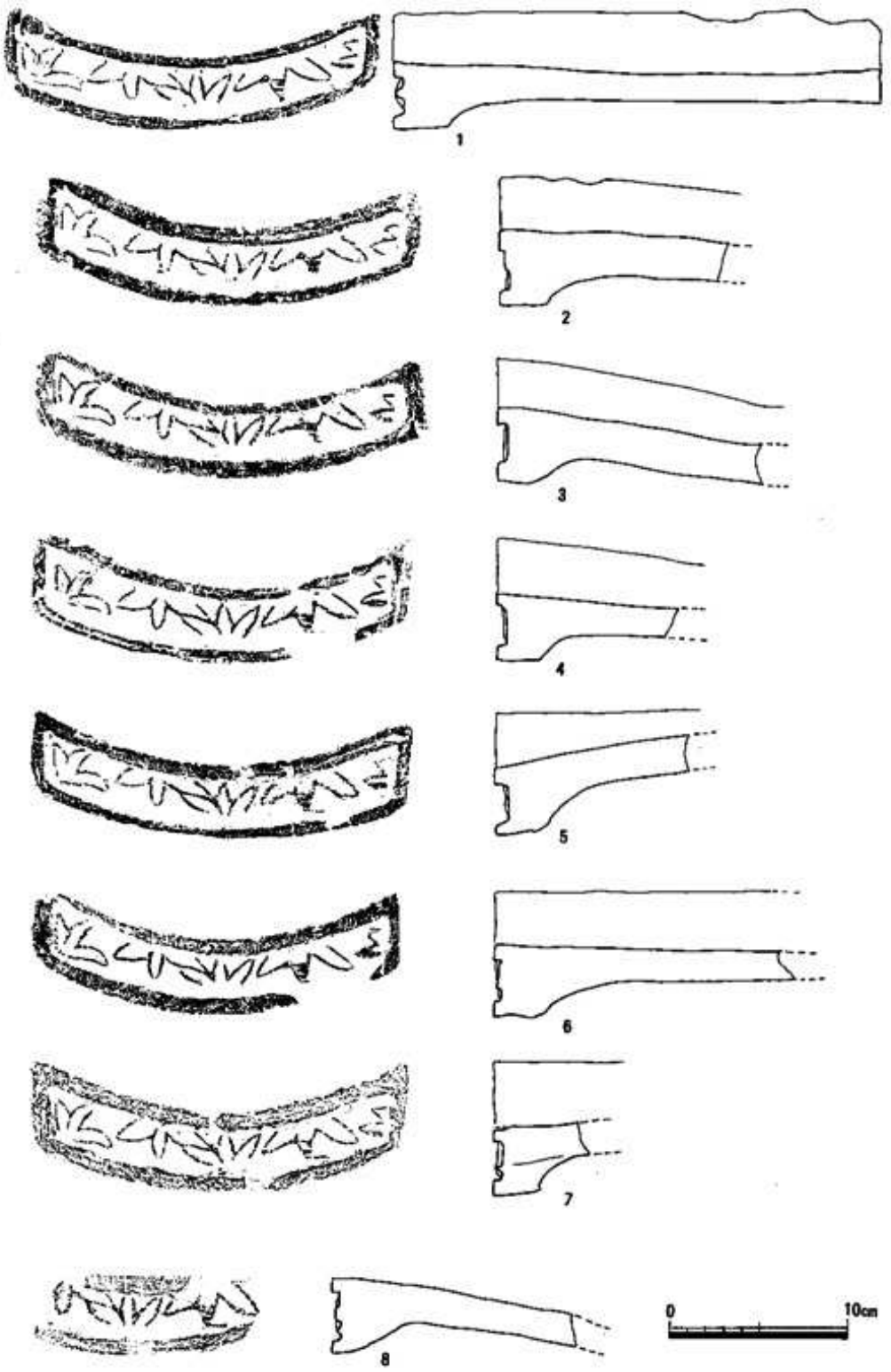
第35図　平安時代軒丸瓦(4)



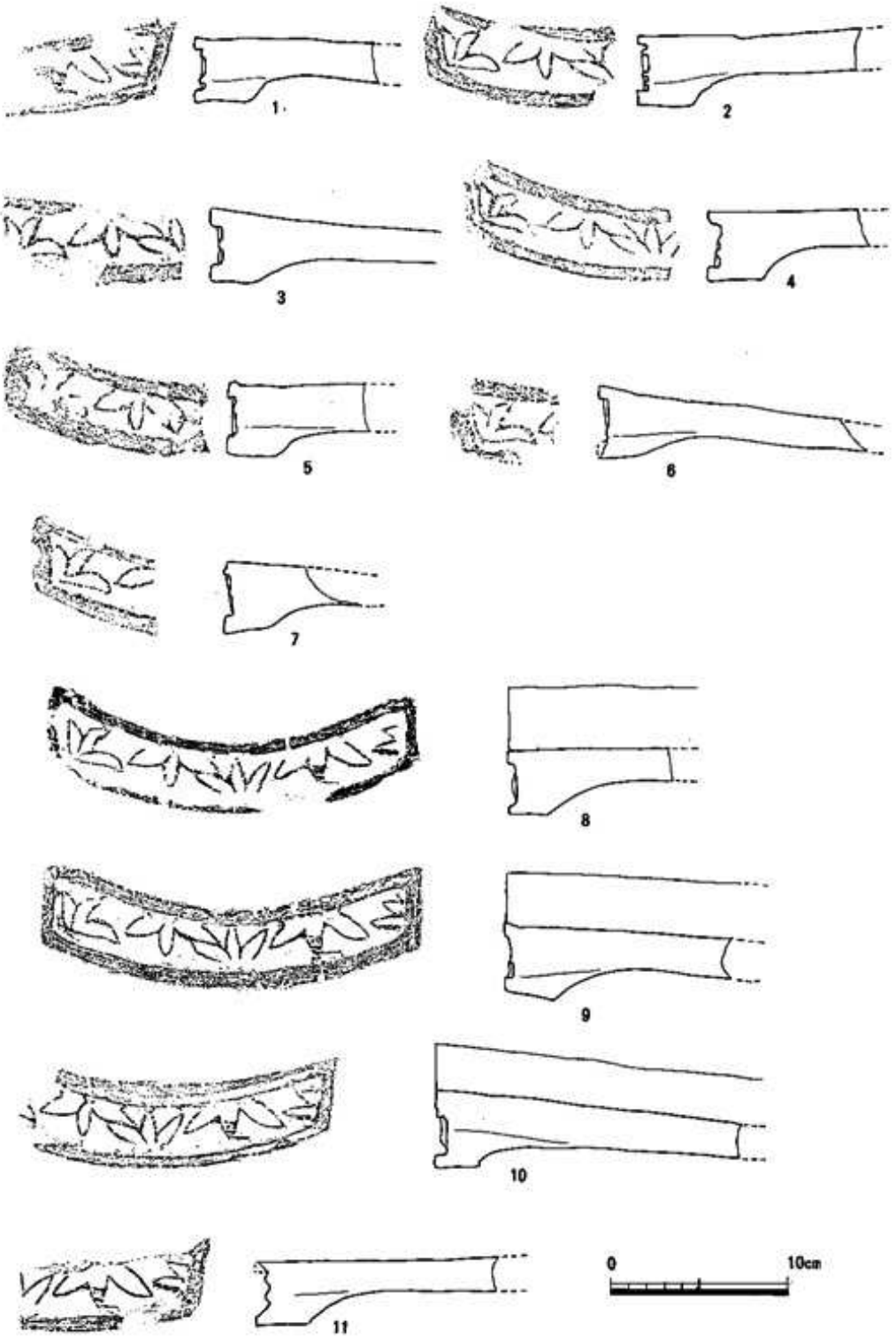
第36図　平安時代軒丸瓦(5)



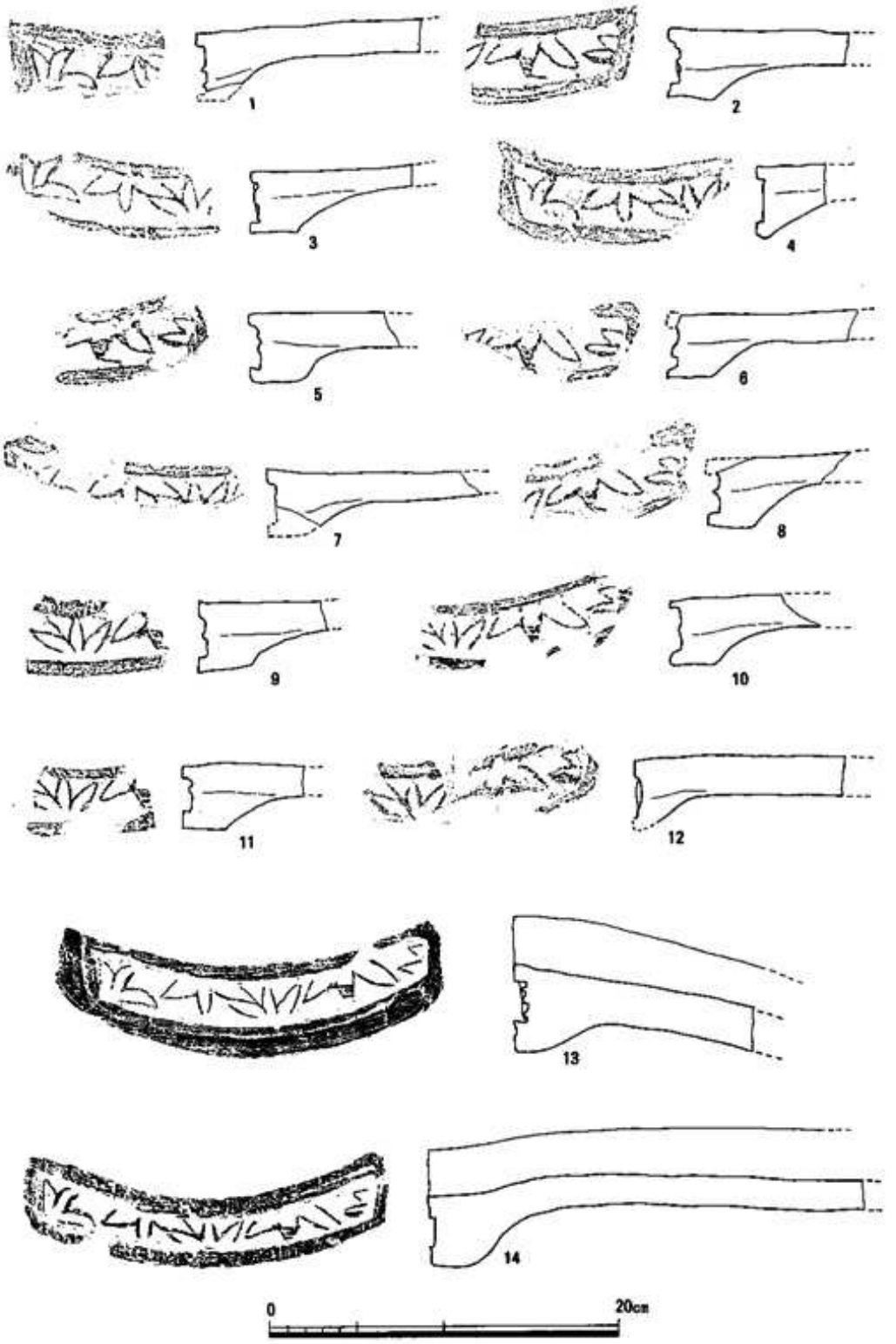
第37図　平安時代軒平瓦(1)



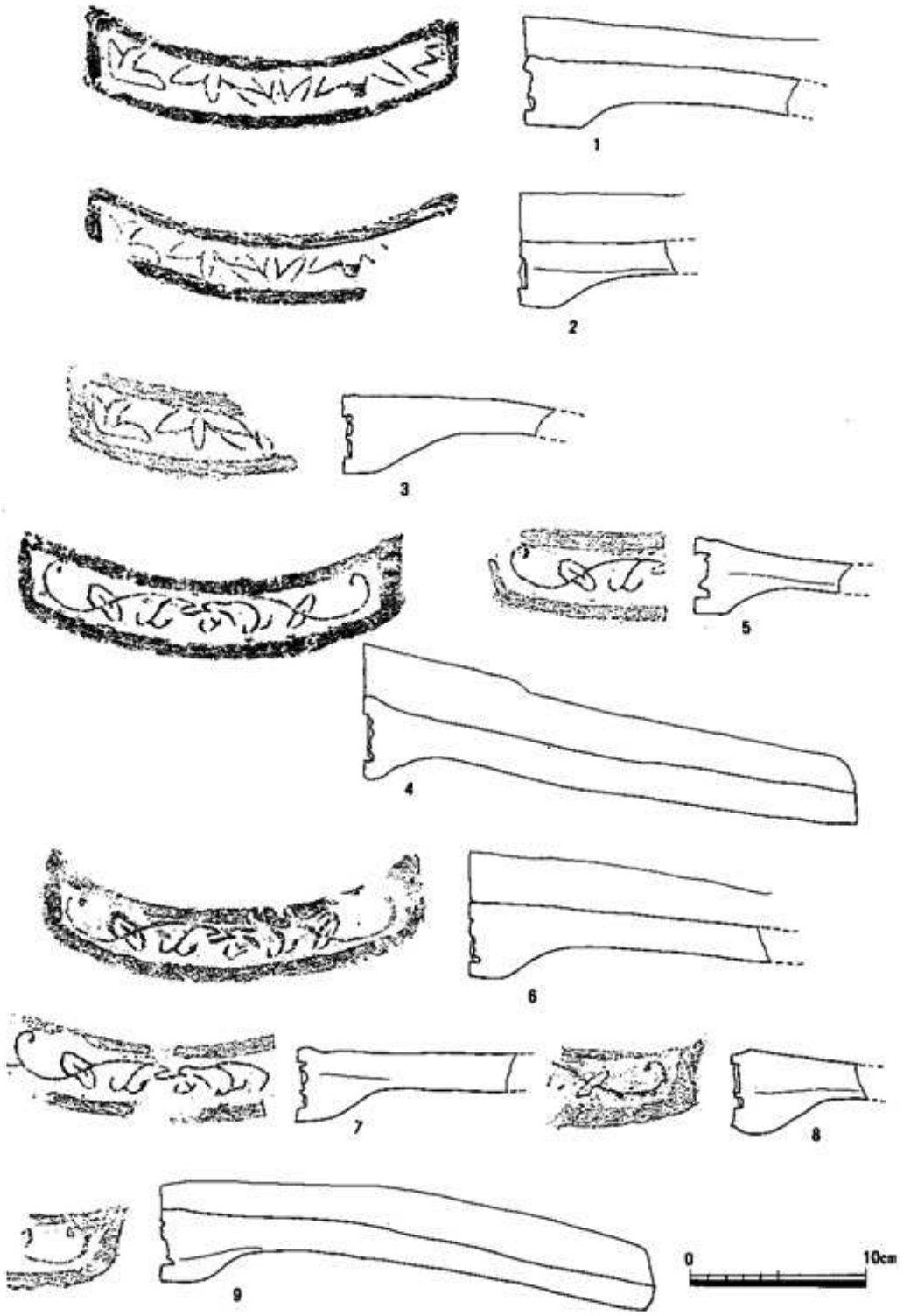
第38図　平安時代軒平瓦(2)



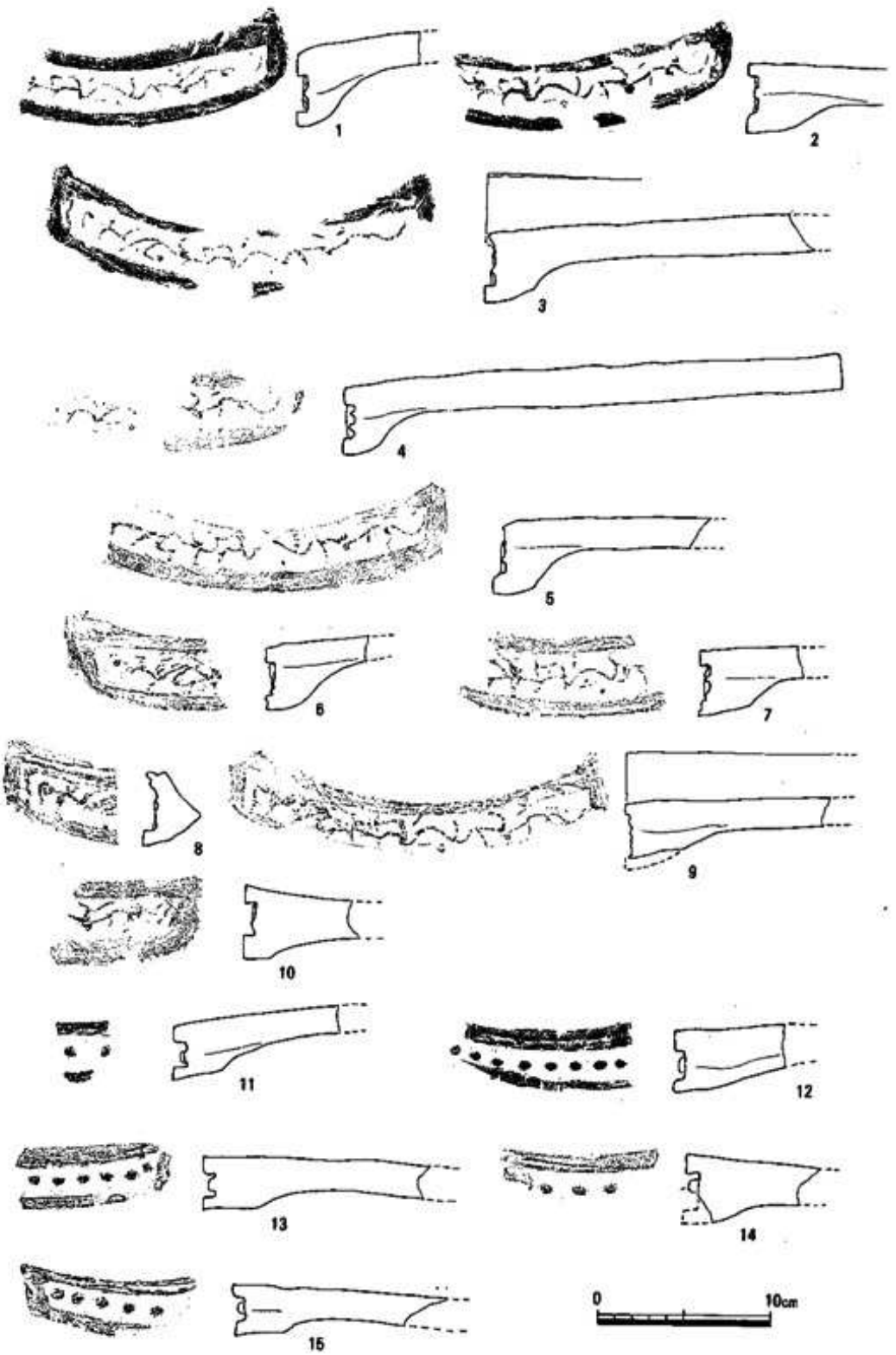
第39図　平安時代軒平瓦(3)



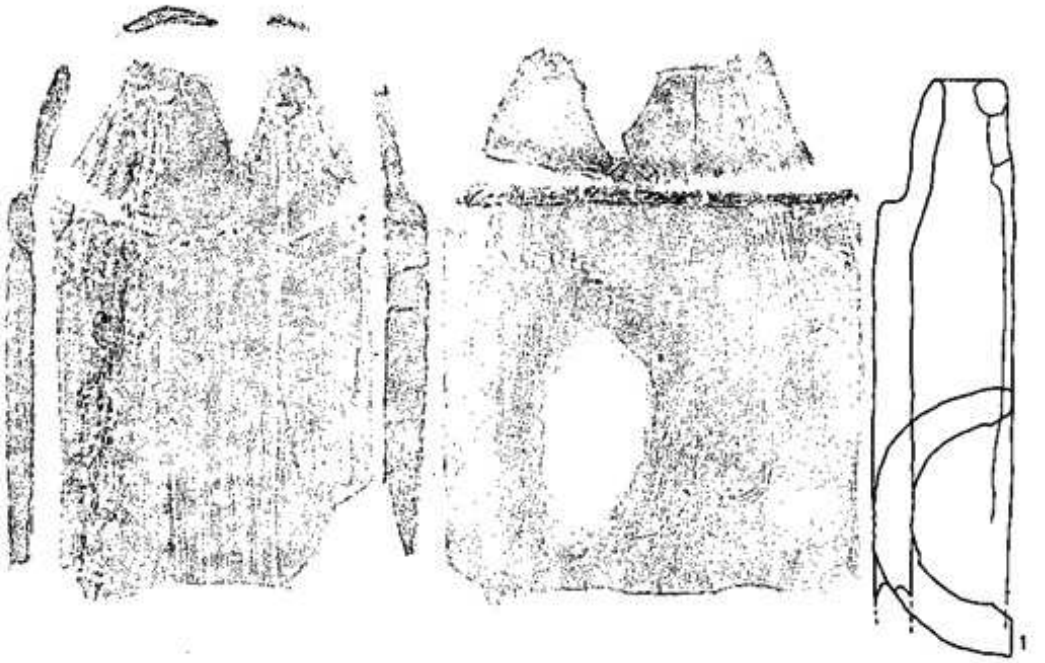
第40図　平安時代軒平瓦(4)

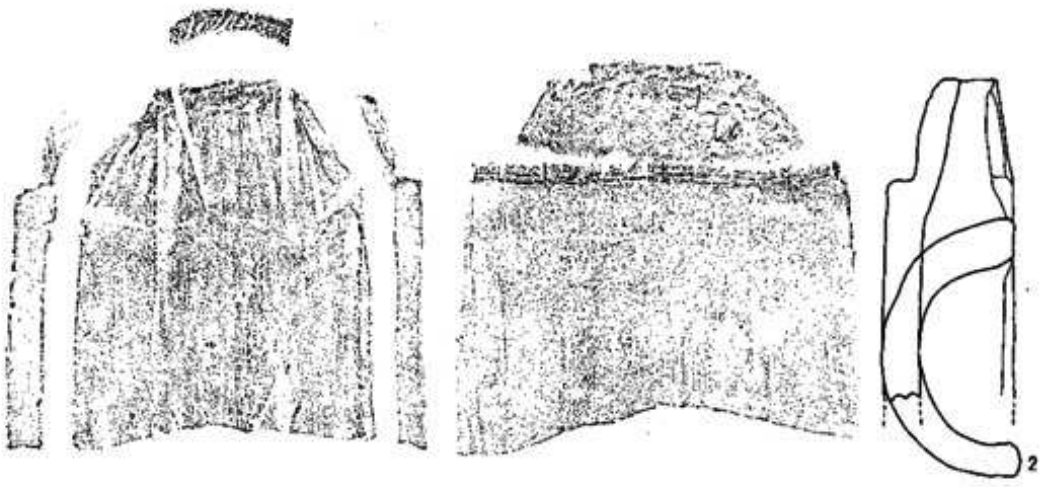


第41図　平安時代軒平瓦(5)

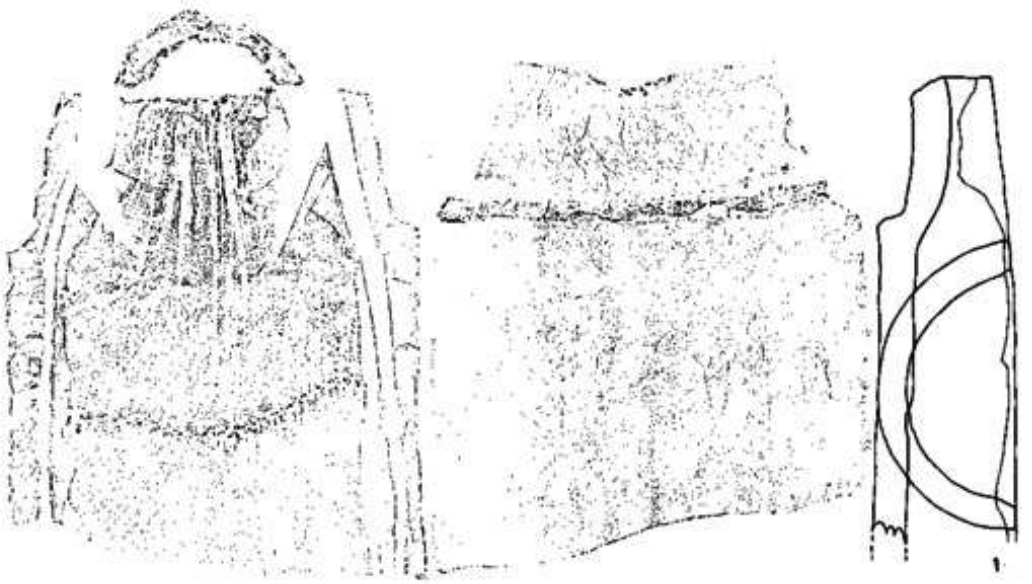


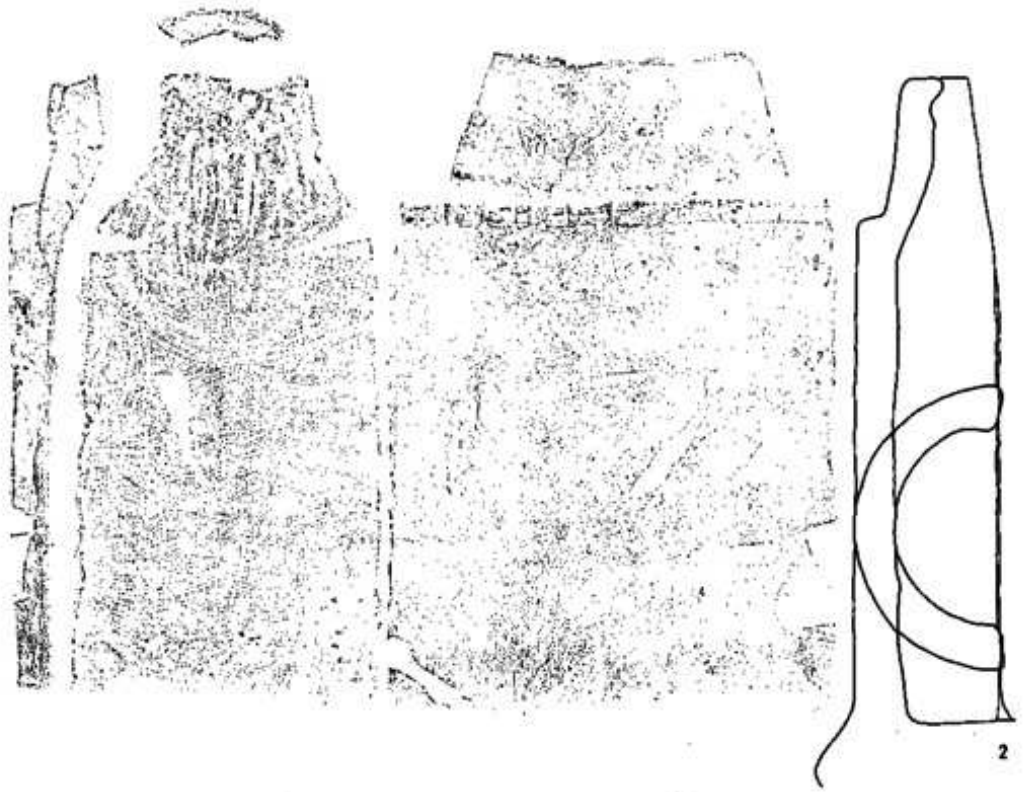
第42図　平安時代軒平瓦(6)



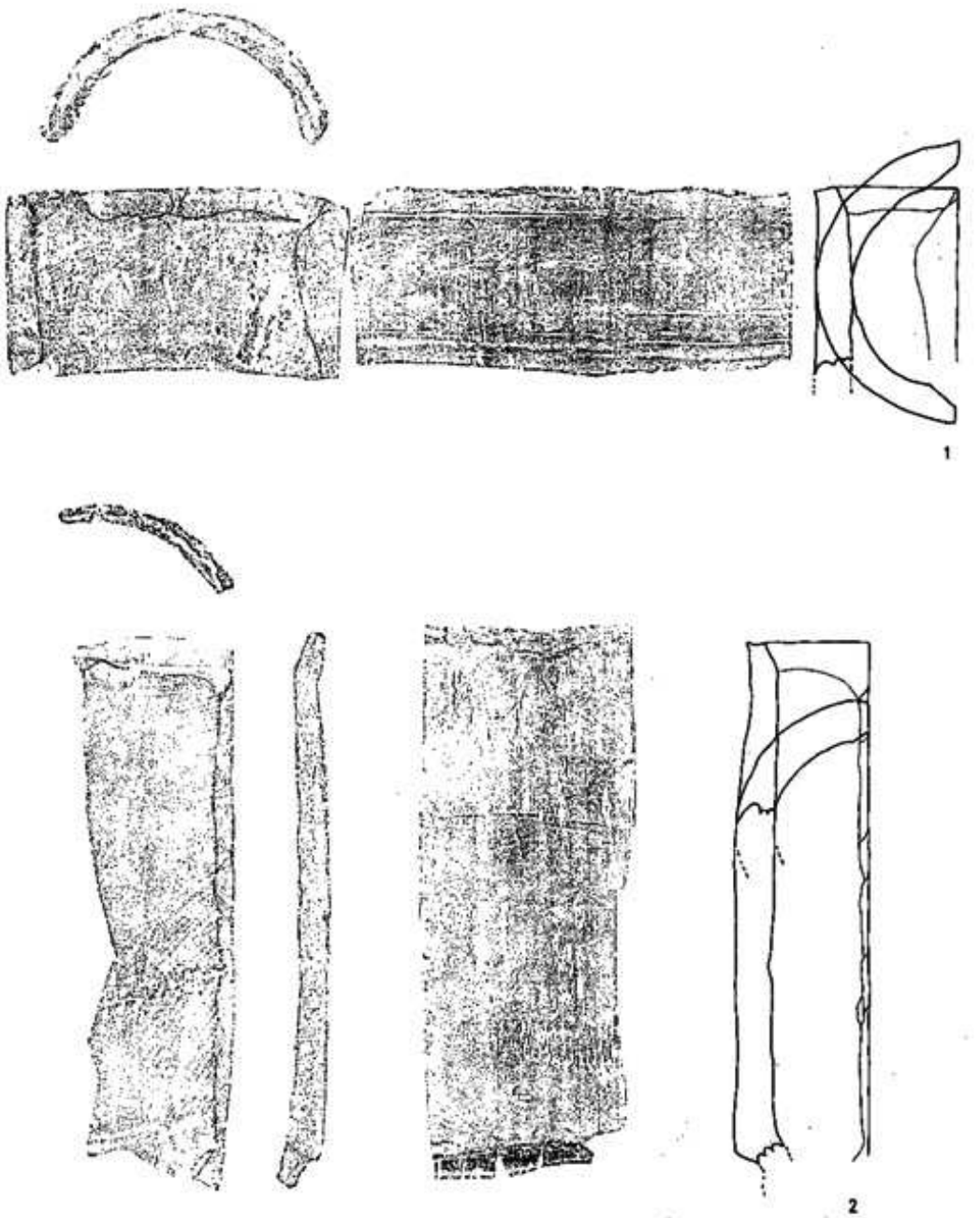


第43図　丸瓦(1)

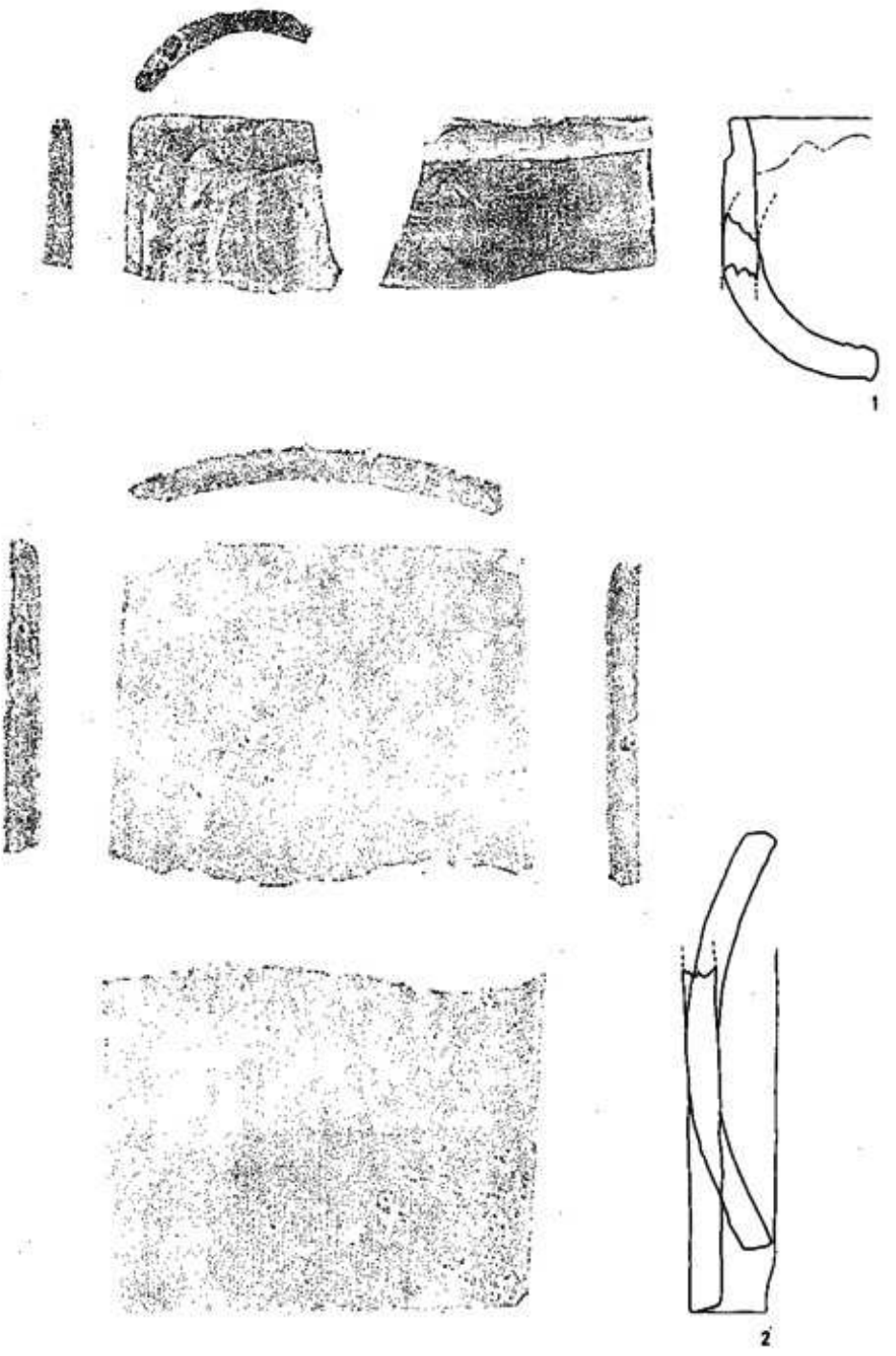




第44図　丸瓦(2)

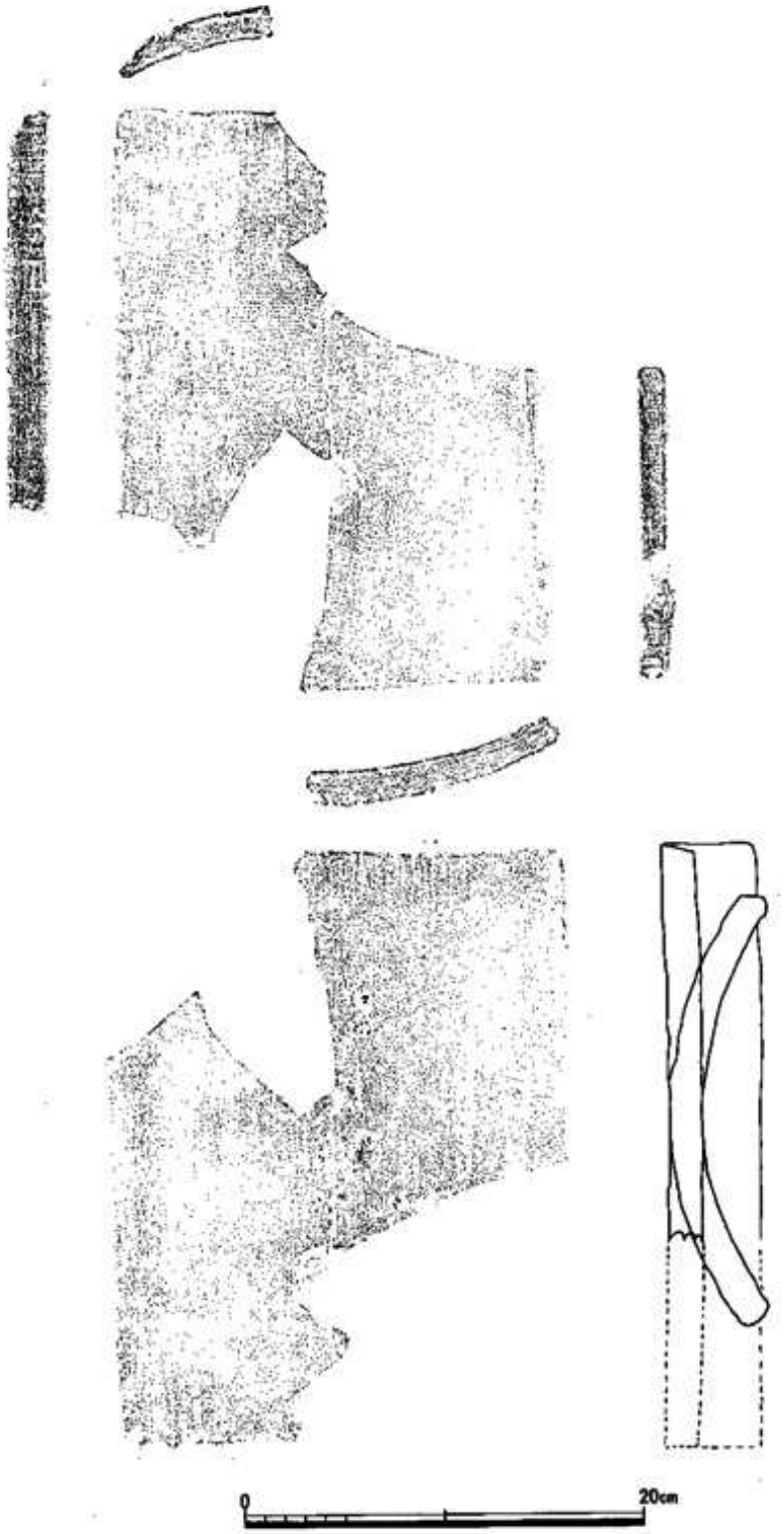


第45図　丸瓦(3)

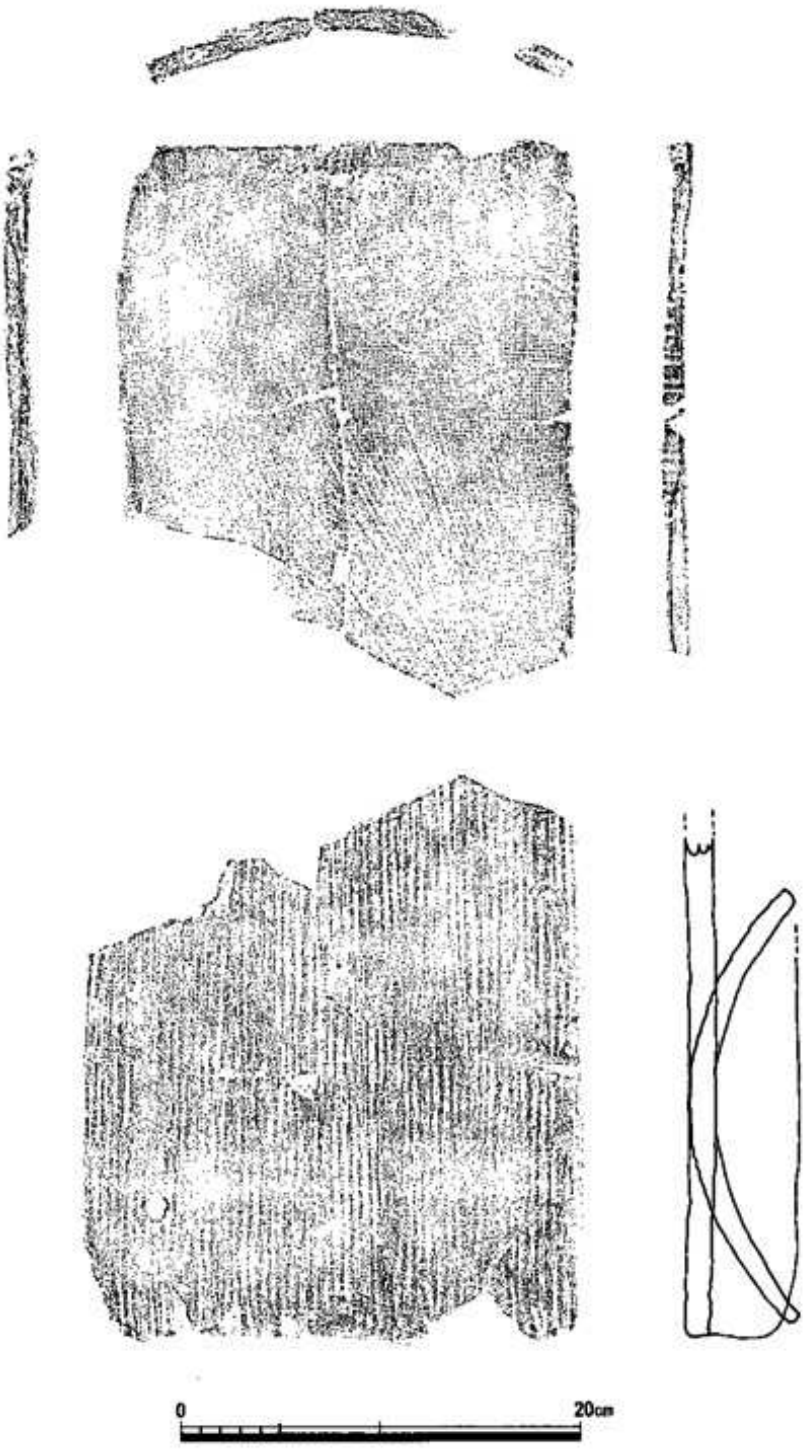


第46図　丸瓦(4)・平瓦(1)

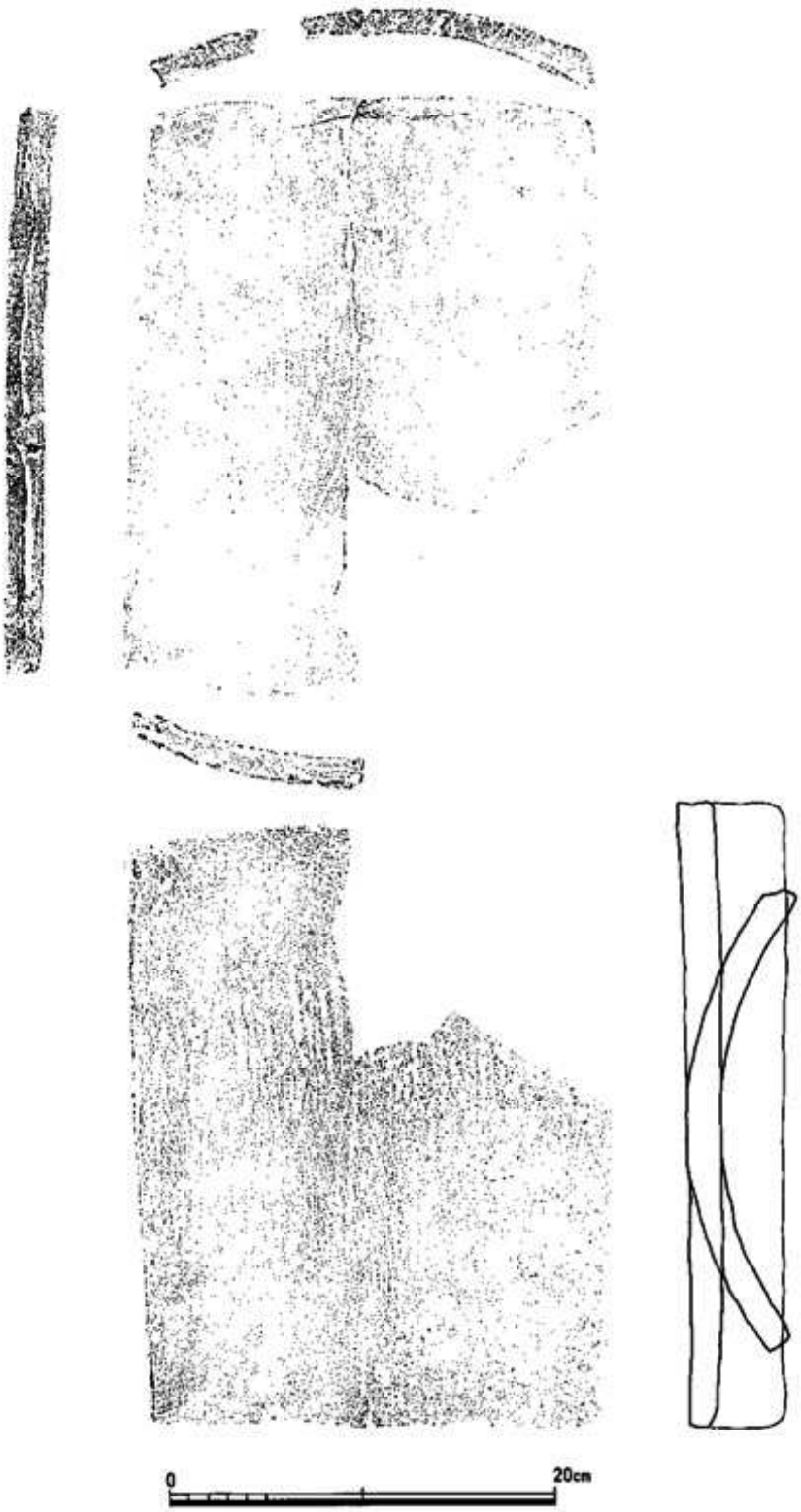
第47図　平瓦(2)



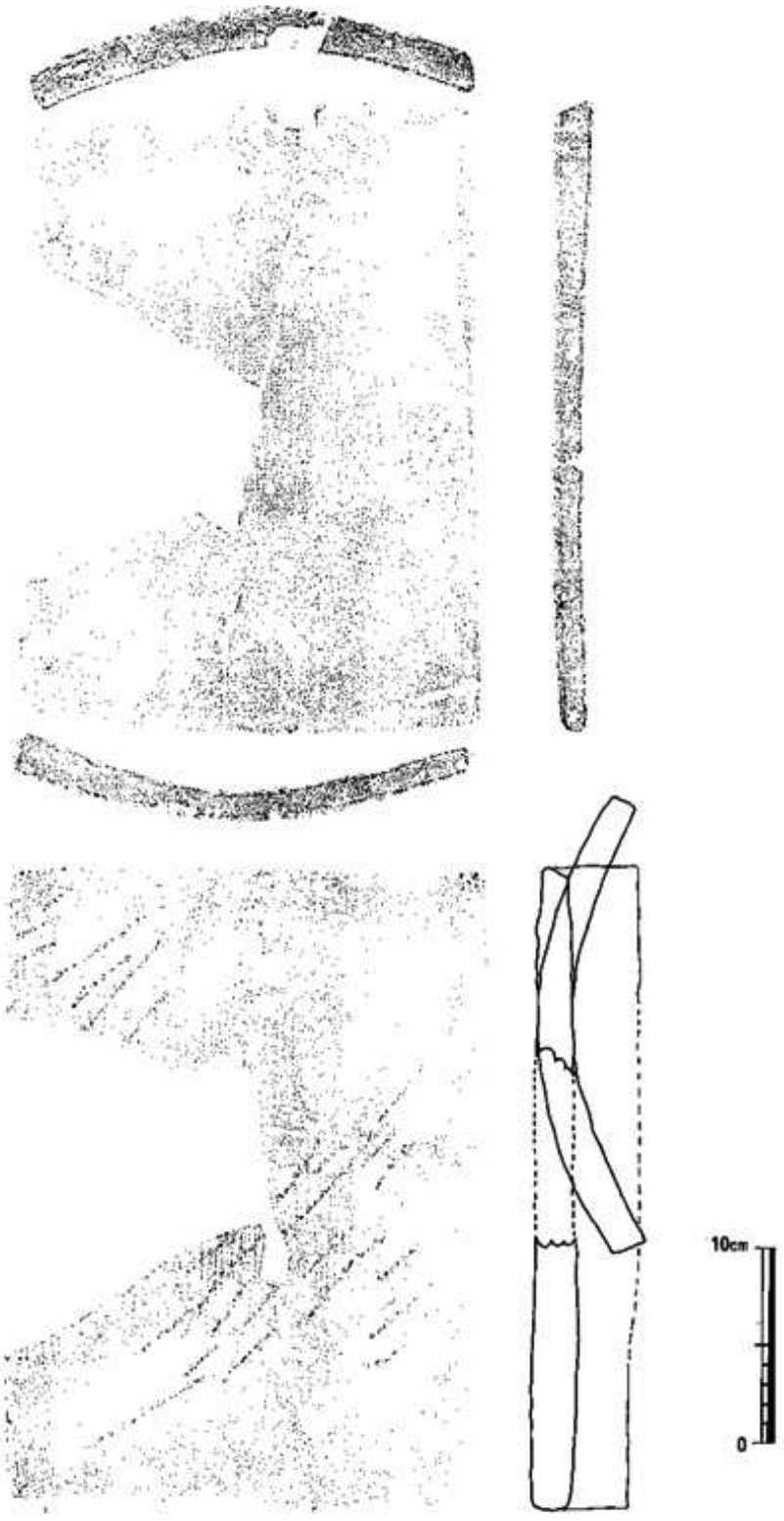
第48図　平瓦(3)



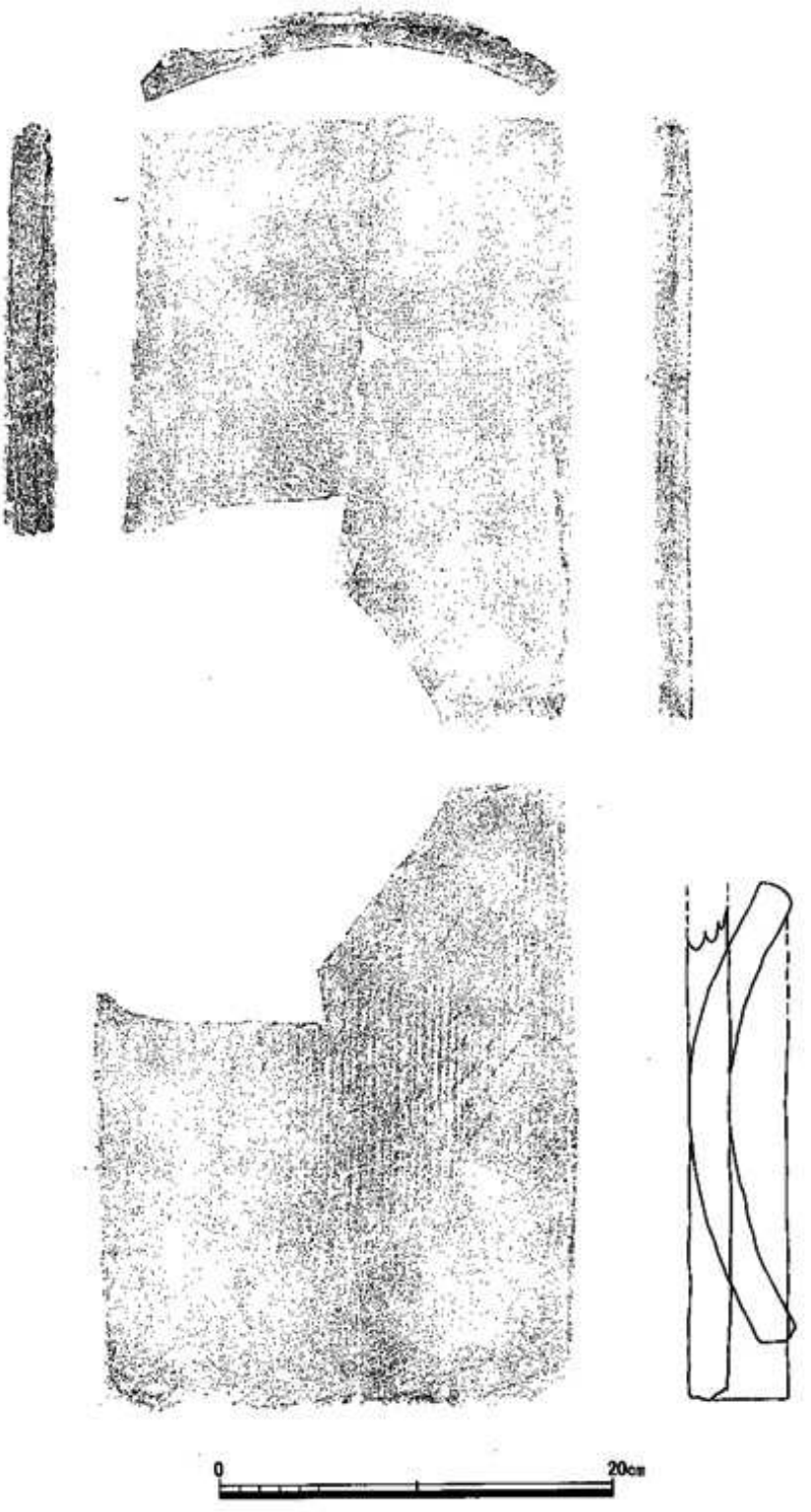
第49図　平瓦(4)



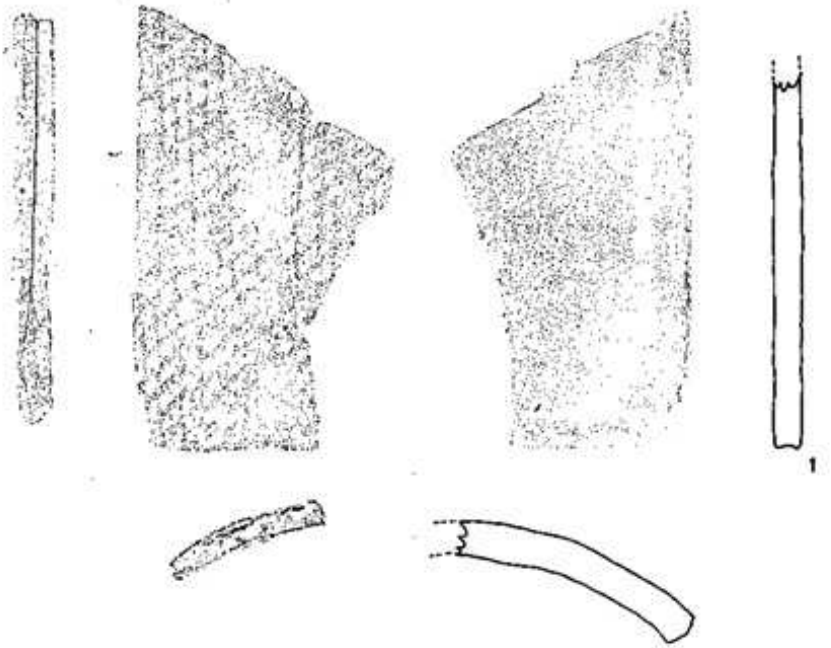
第50図　平瓦(5)

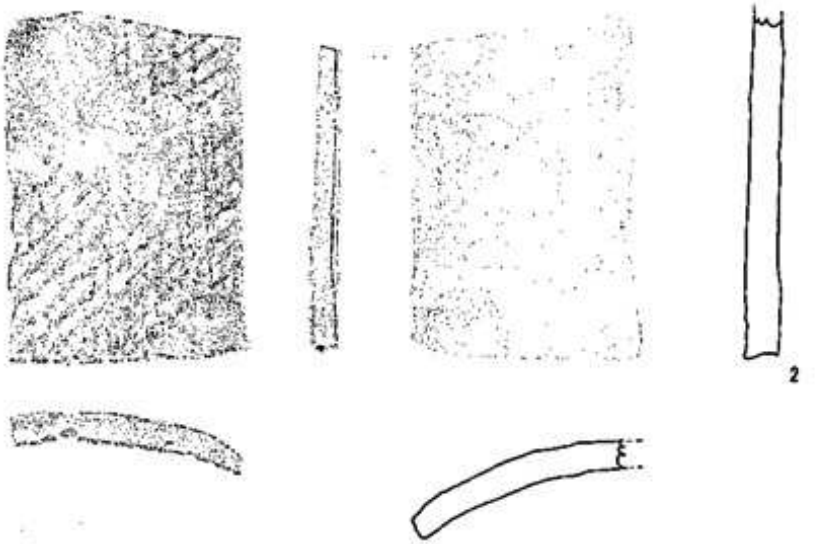


第51図　平瓦(6)

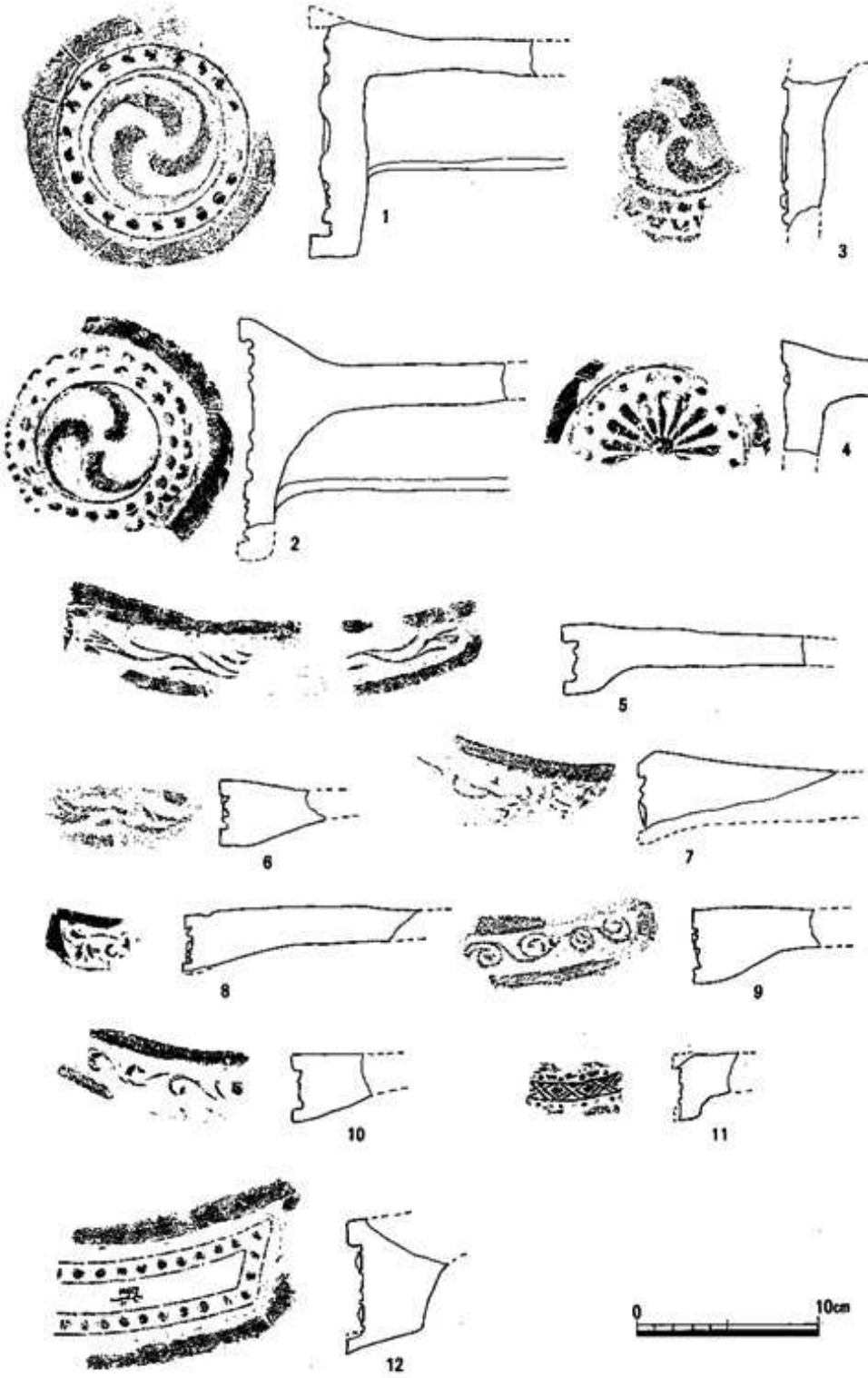


第52図　平瓦(7)

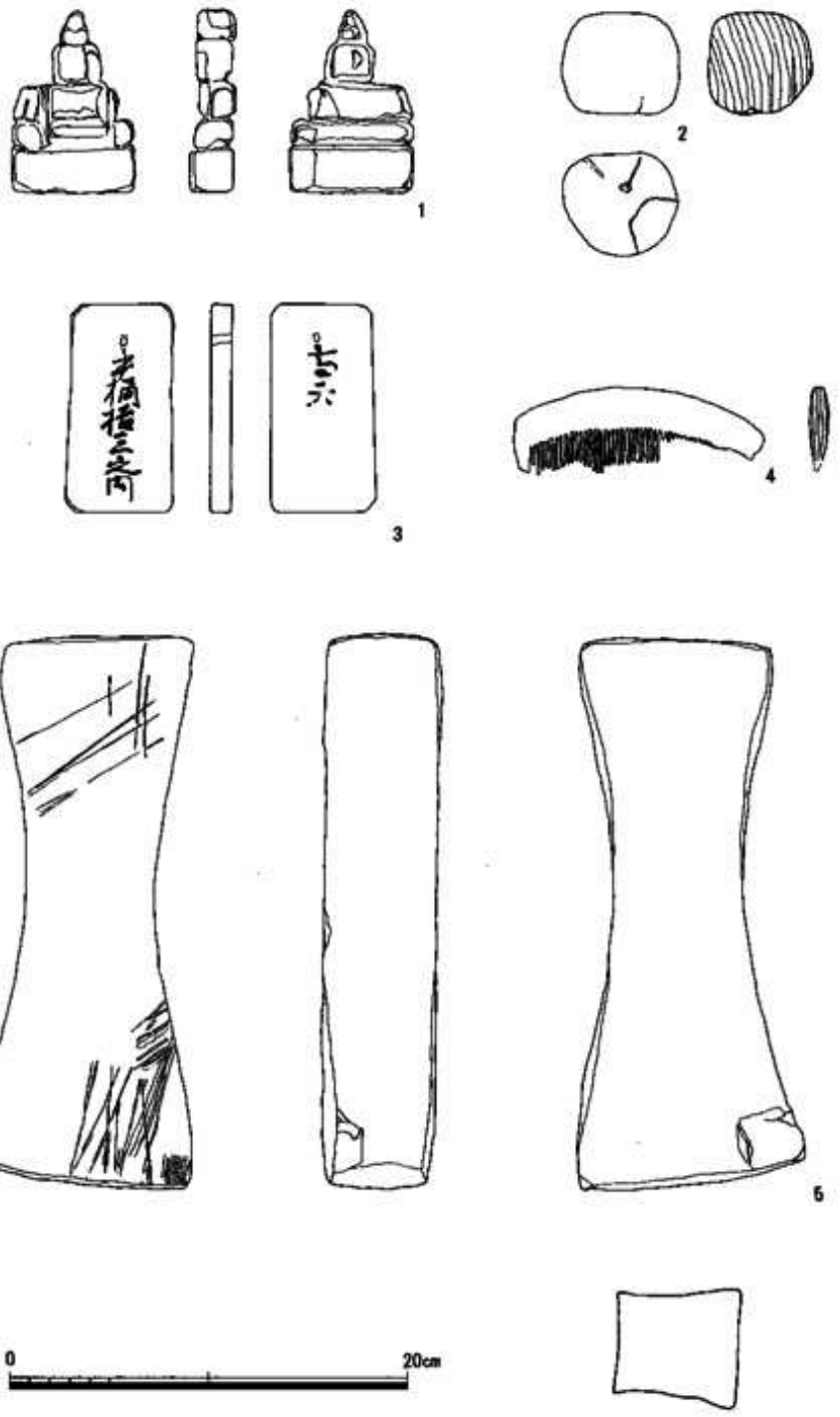




第53図　平瓦(8)



第54図　平安・鎌倉時代軒瓦



第55図　木製品・石製品

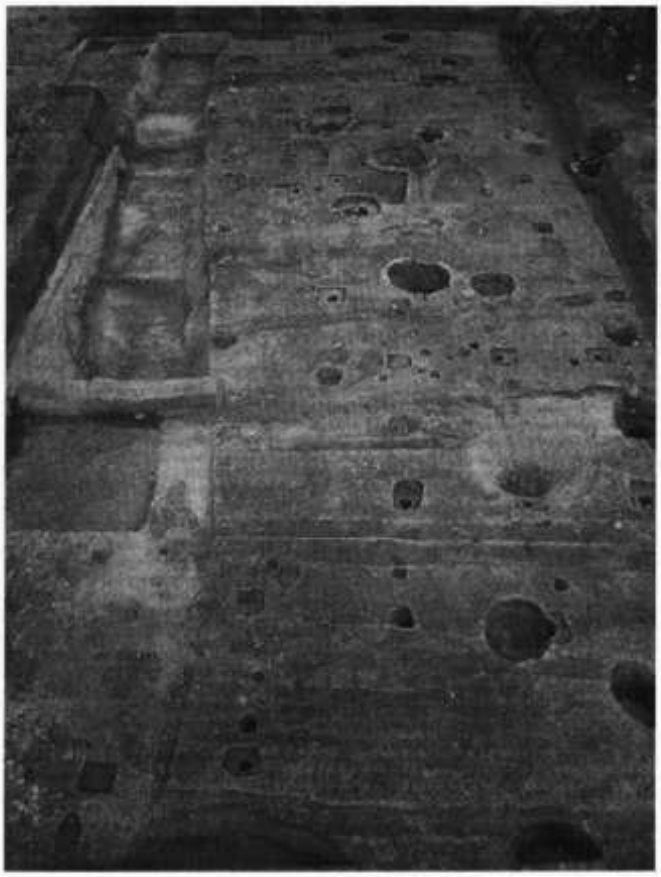
図版1　遺構全景

図版2　西北部遺構全景

東から

西から

図版3　東北部・東南部遺構全景

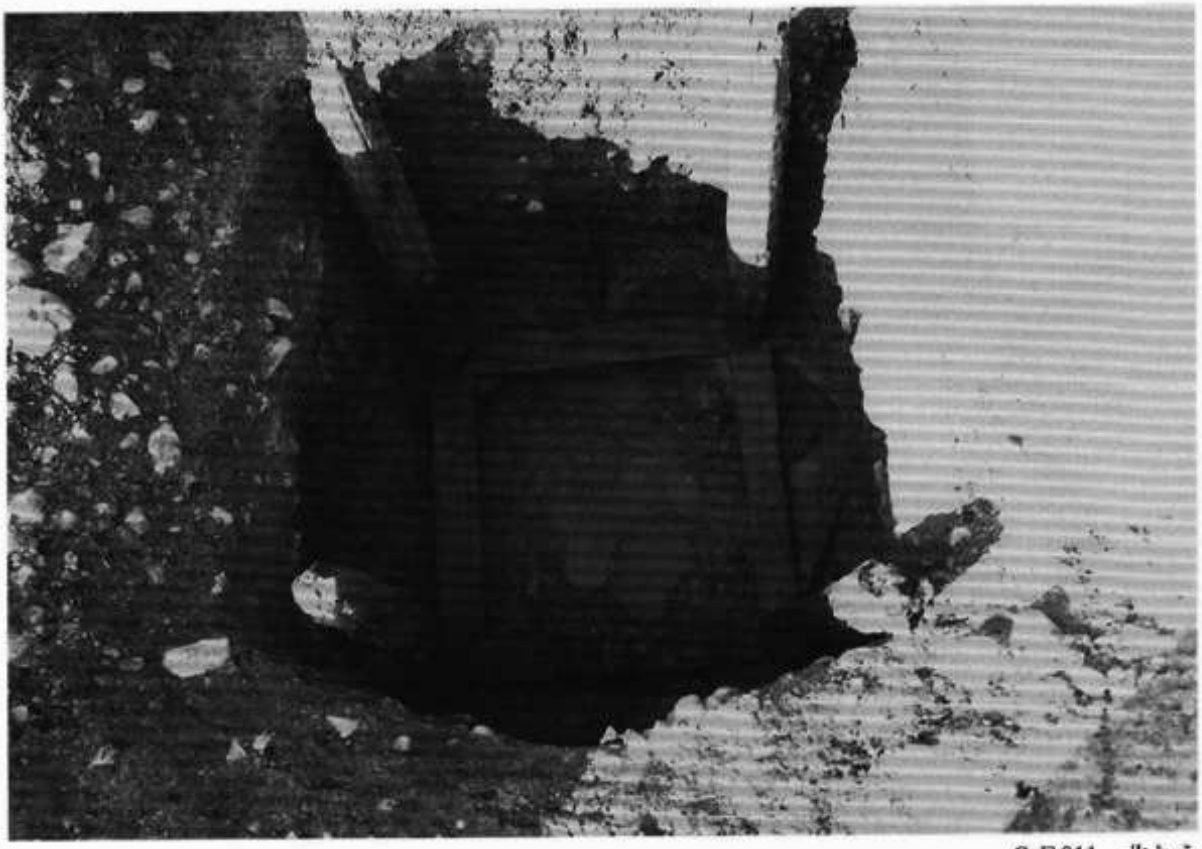


南から

北から

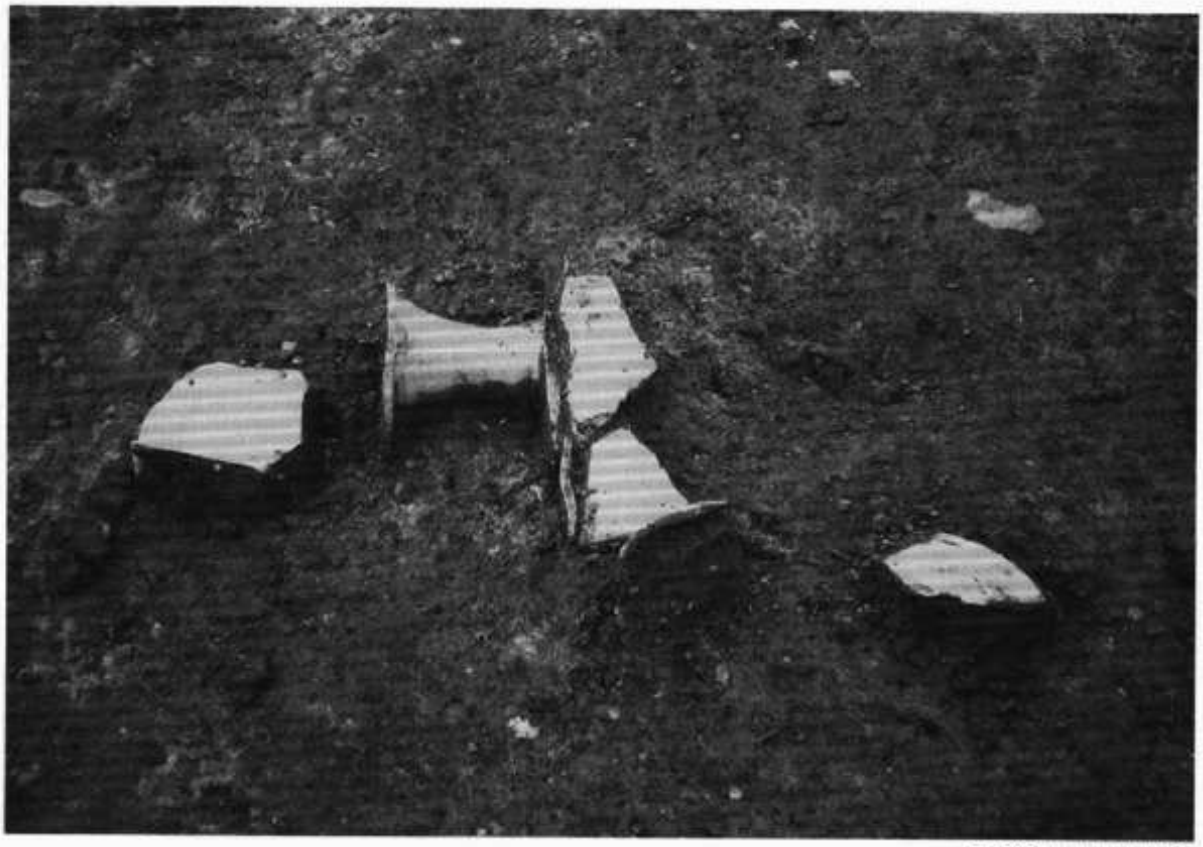
SB002　北から

SB003　北から



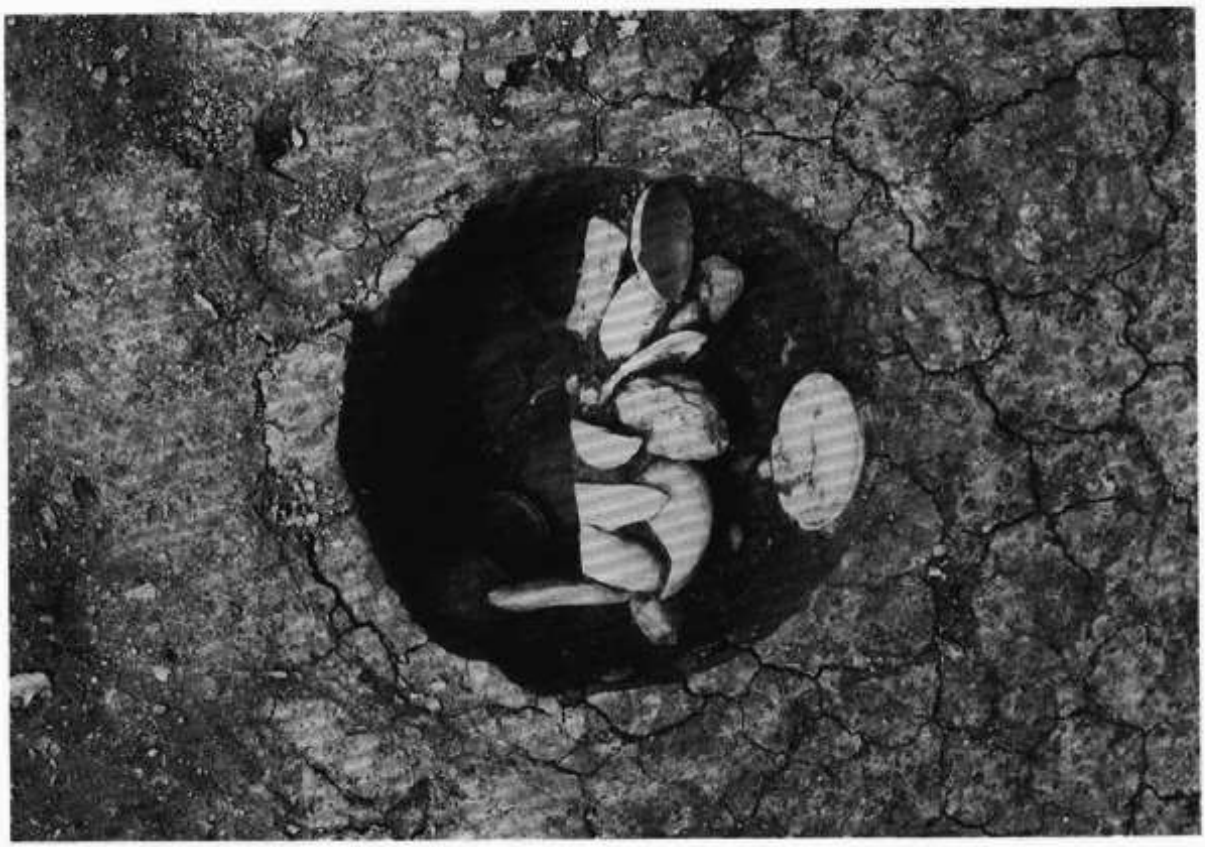
SE011　北から

SB006　東から

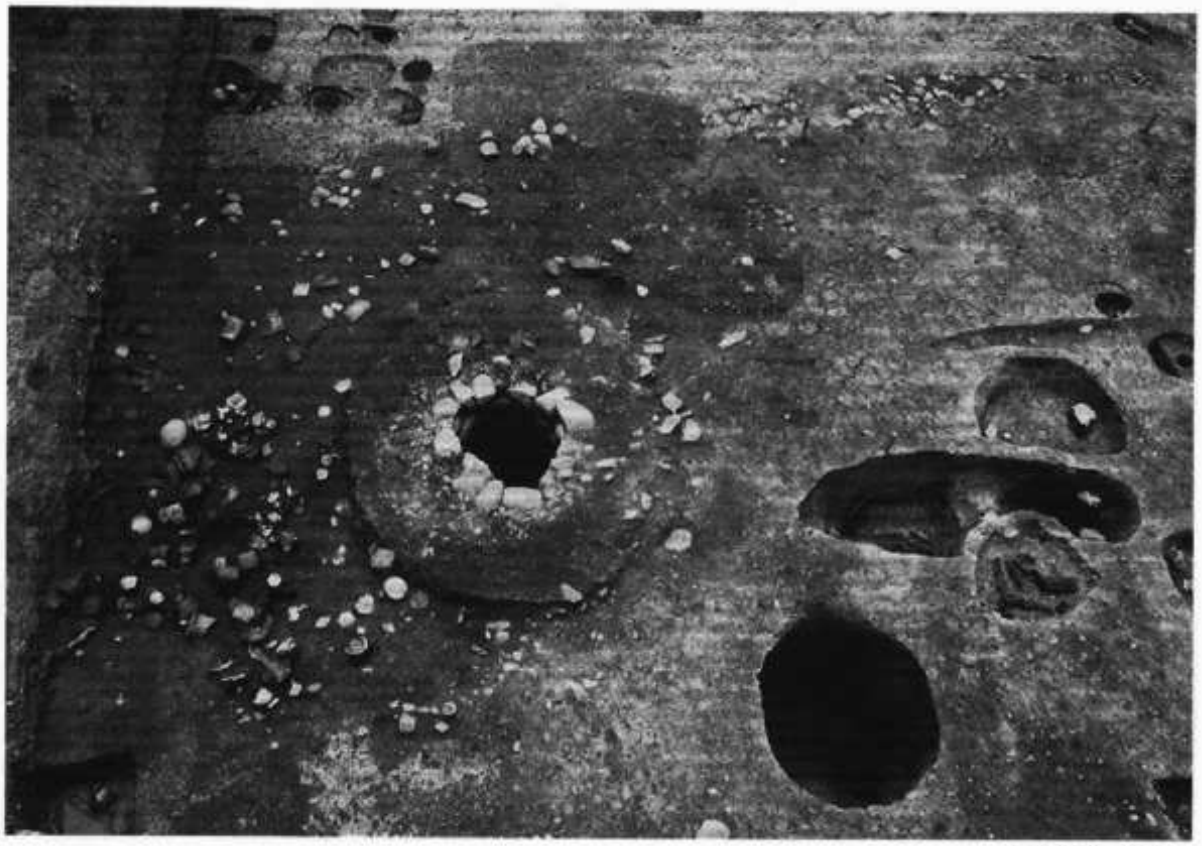


S K023土器出土状態

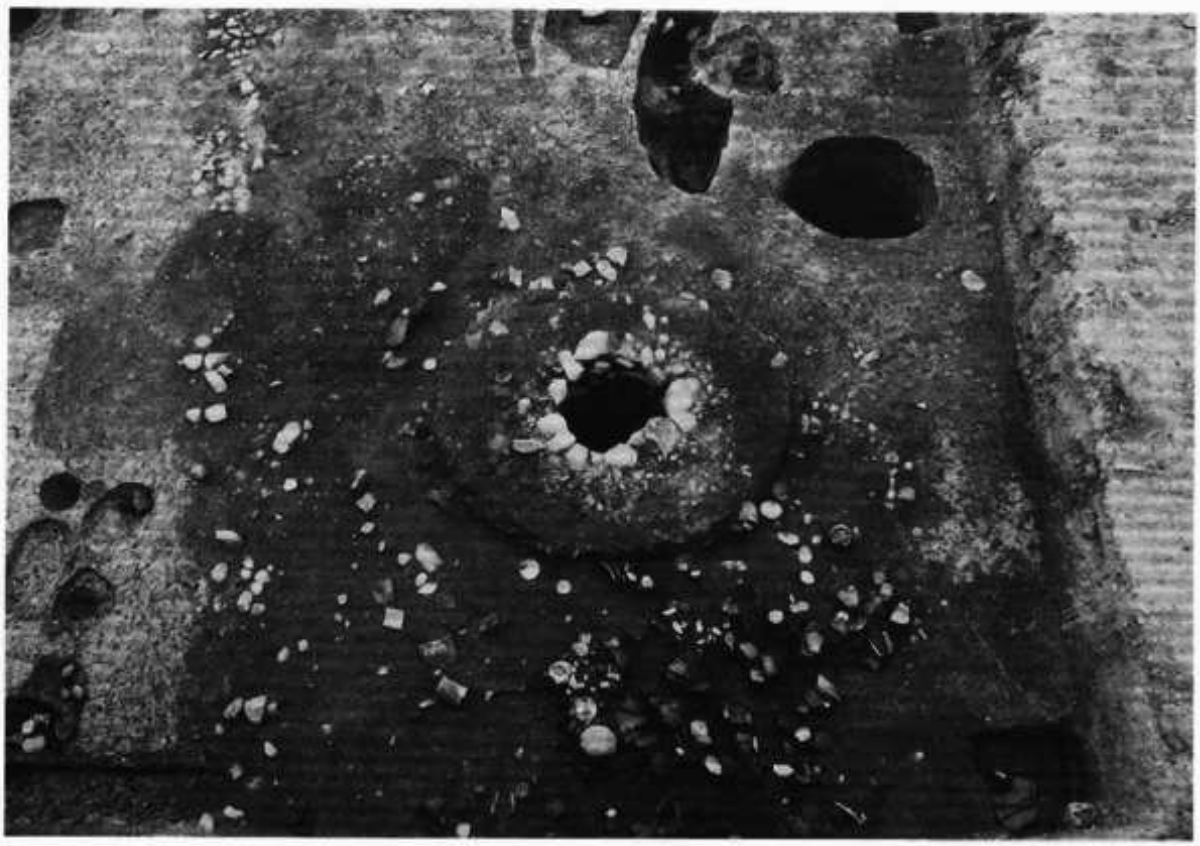
S E111　西から



図版7　B期小穴



SX352　北から



SX352　東から

S X352

S X351　北から

S X351　南から

S X351

S X351

S X355細部

S X353・S X361

S X353・S X355

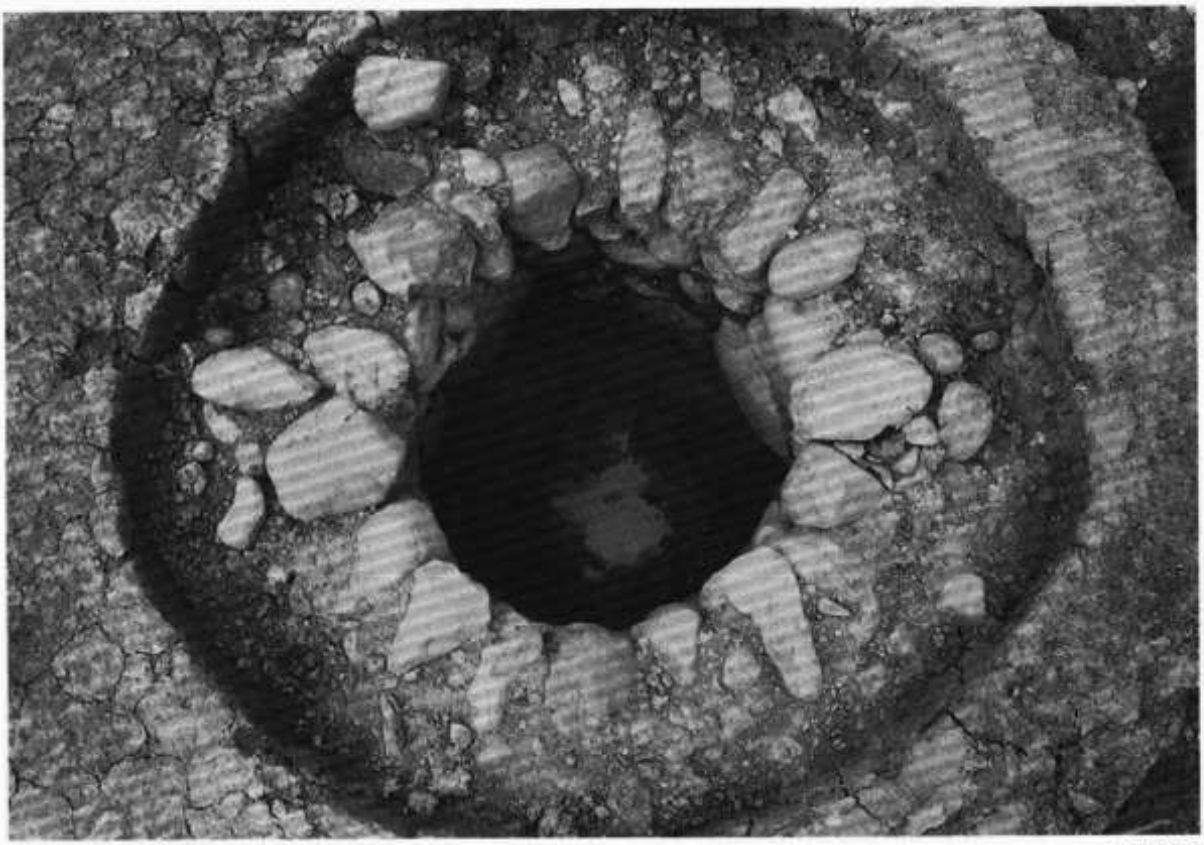
西北部西半

東北部西半

S E411

S E531　北から

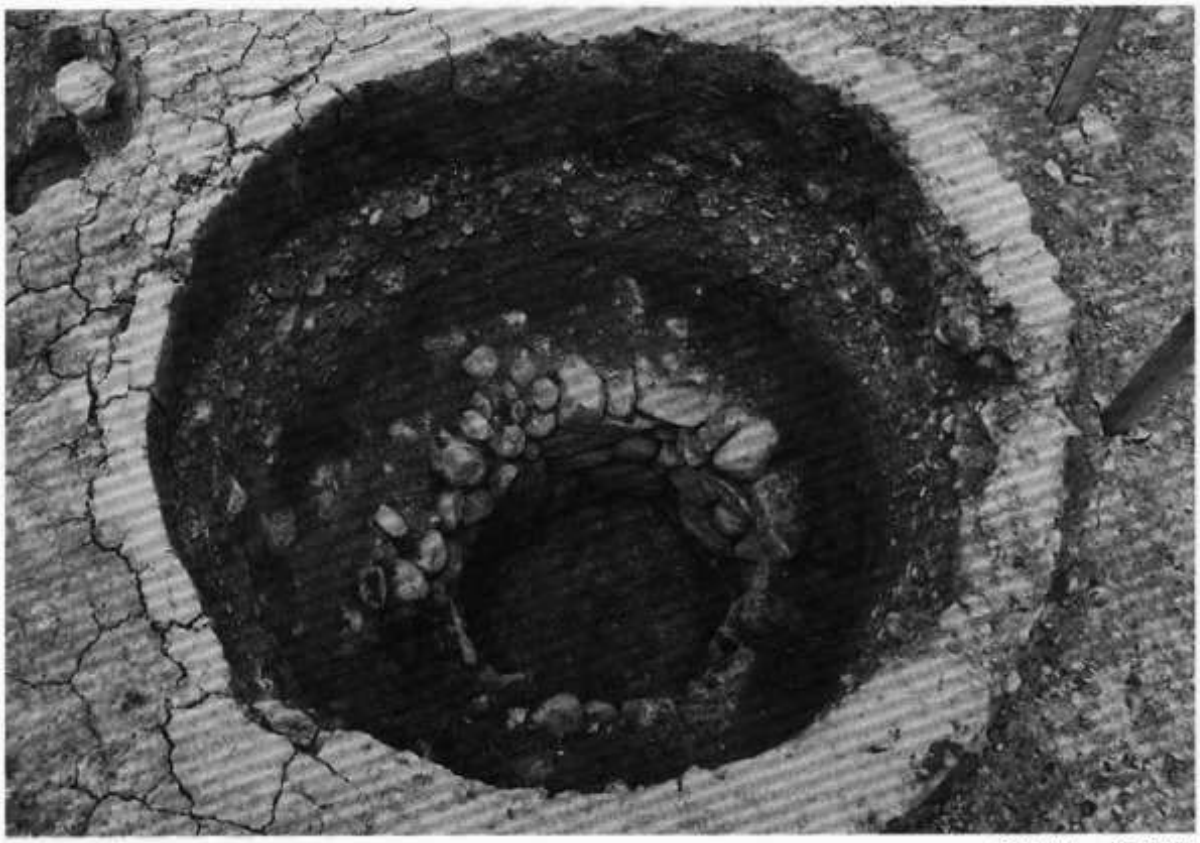
S E512・S E612



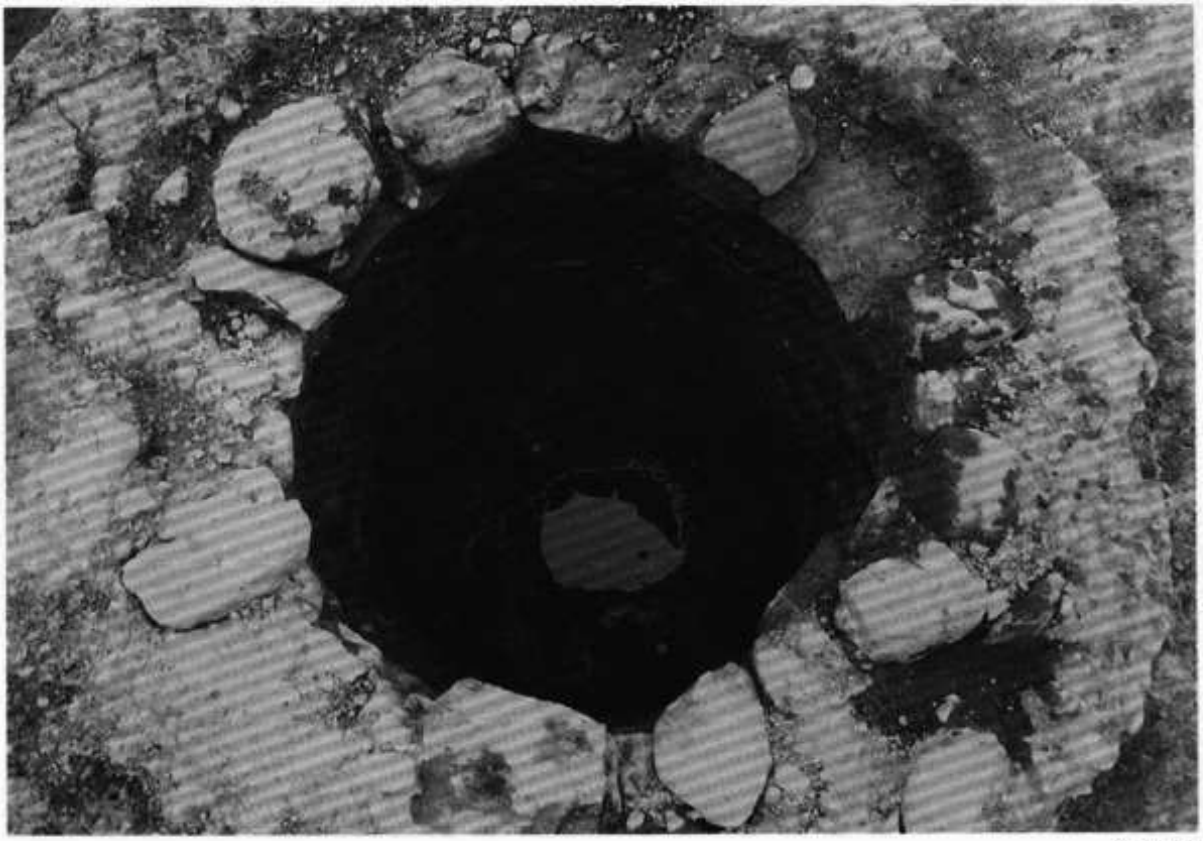
S E511

SX651

SX651桶除去後

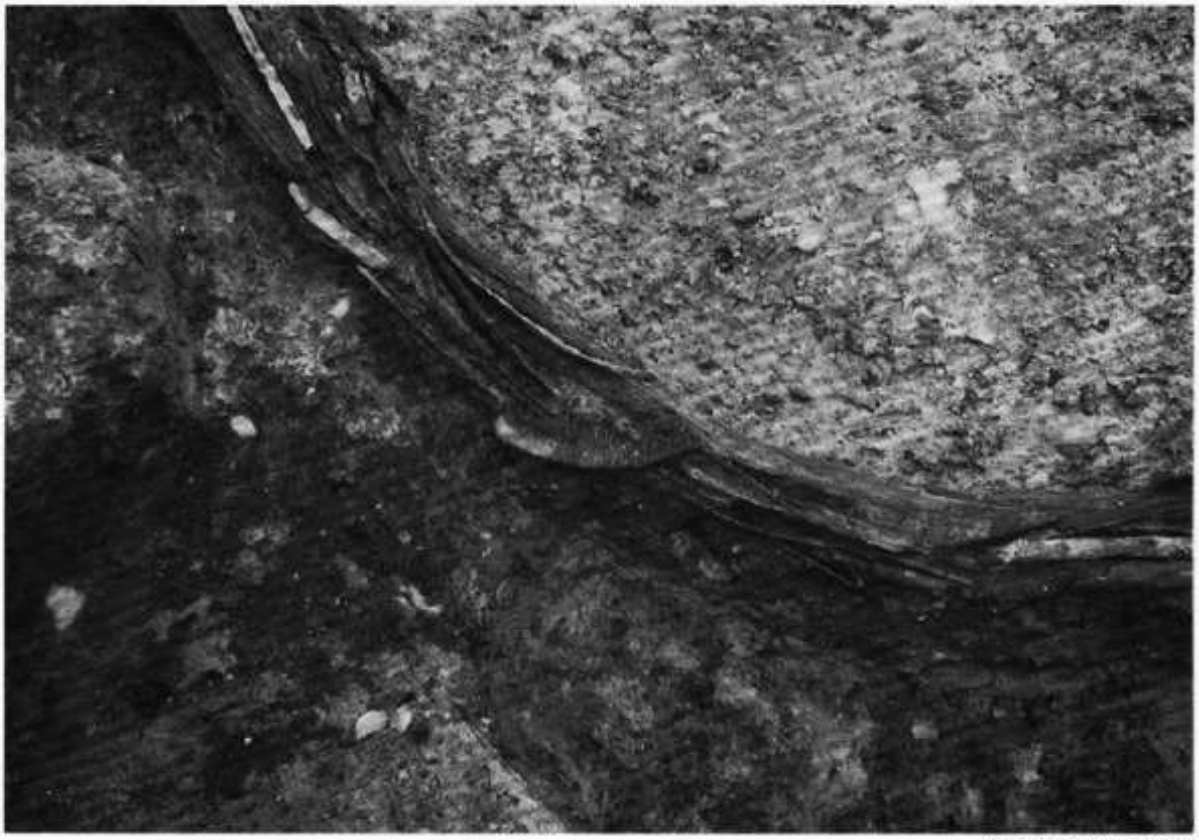


S K611・S E722

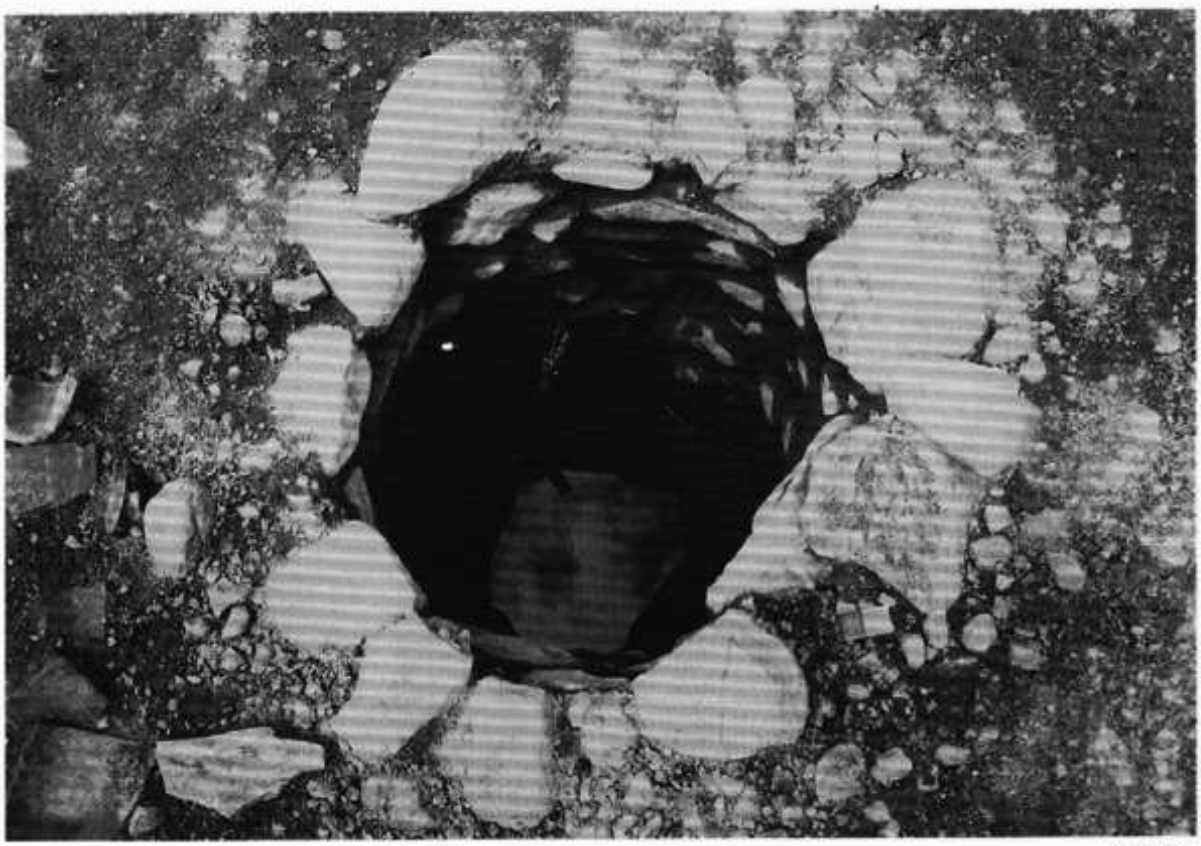


S E711

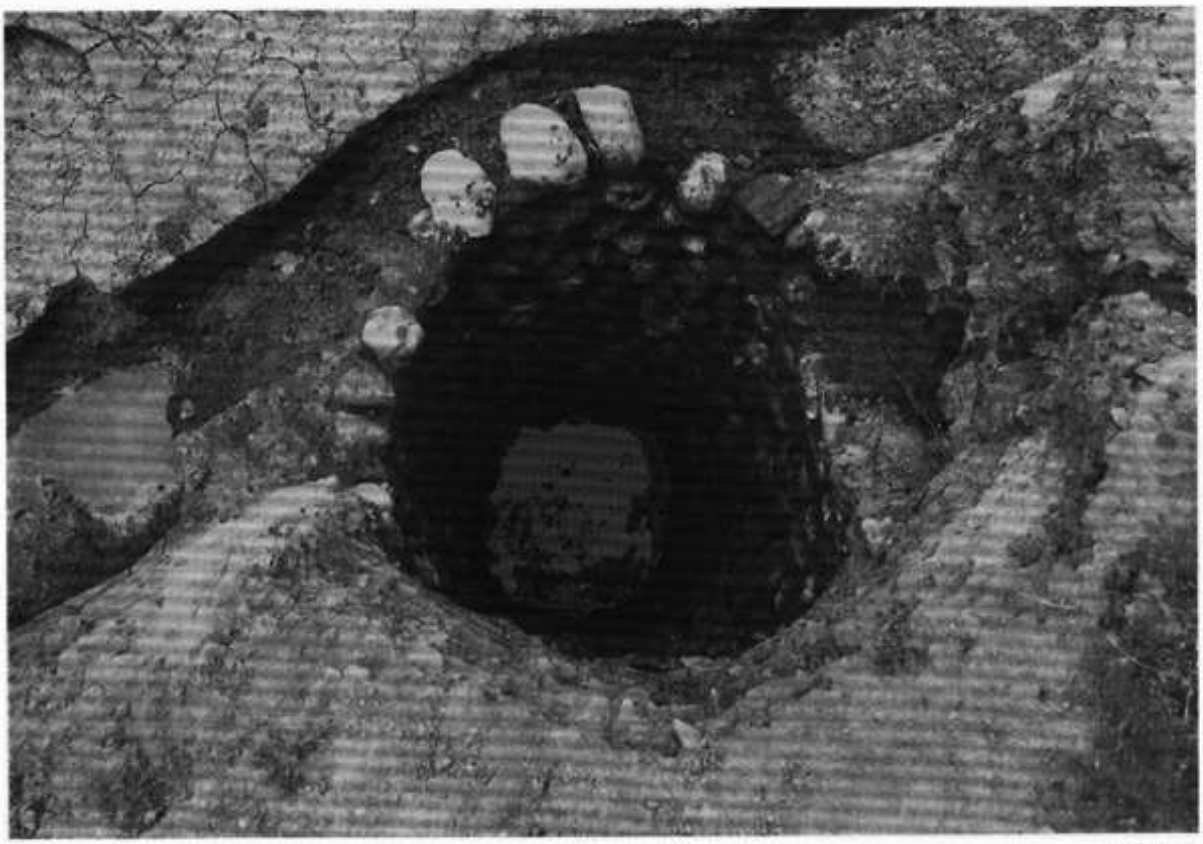
ＳＸ752　東から



ＳＸ752櫛出土状況



S E811

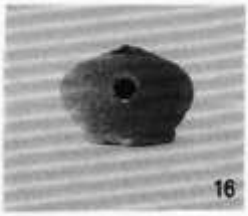


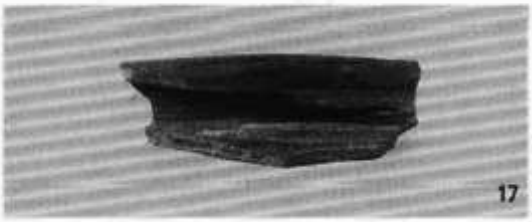
S E812

図版20　土器（1）

SK022

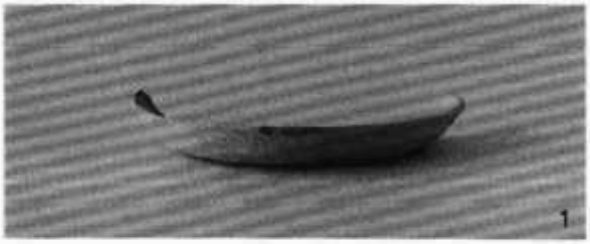
第1図

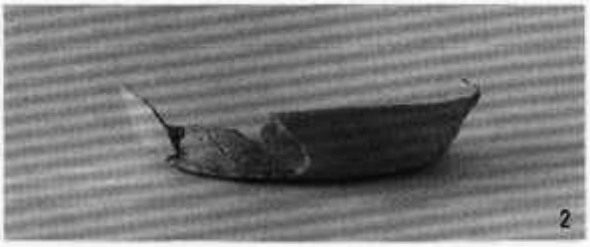


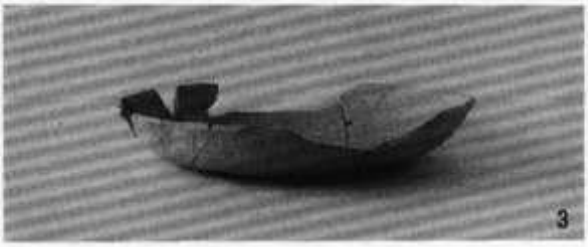


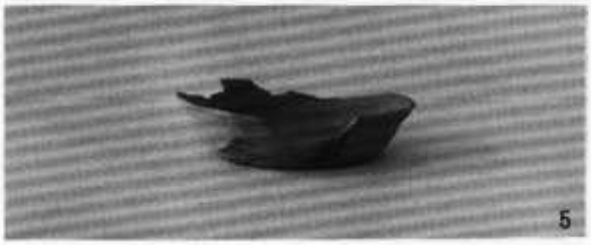
第2図

SK021





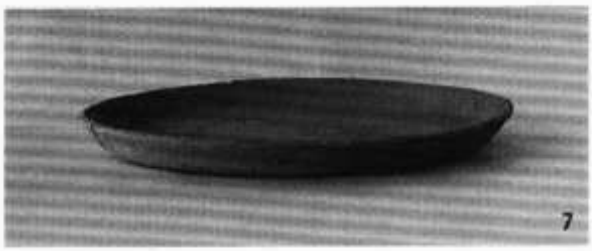




第3図

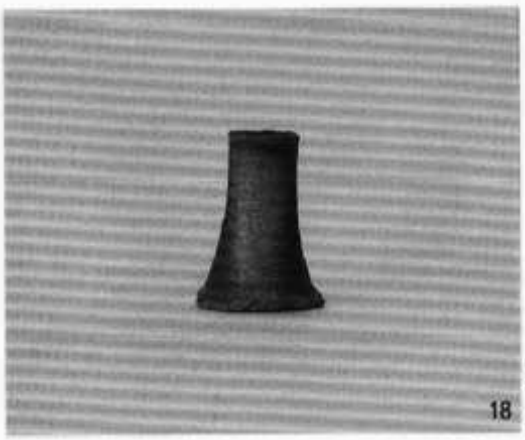
SK024・SE011

第3図



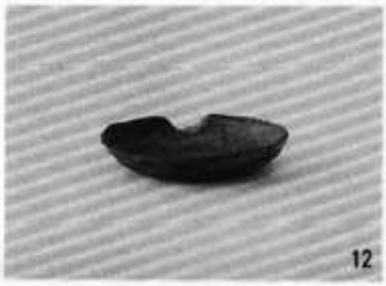
第4図

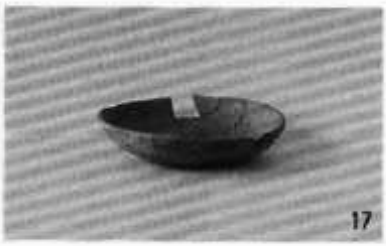
SX051



第5図

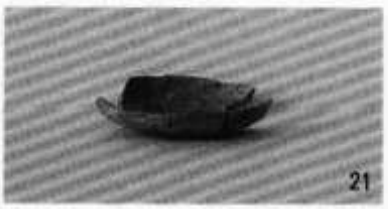
SE112





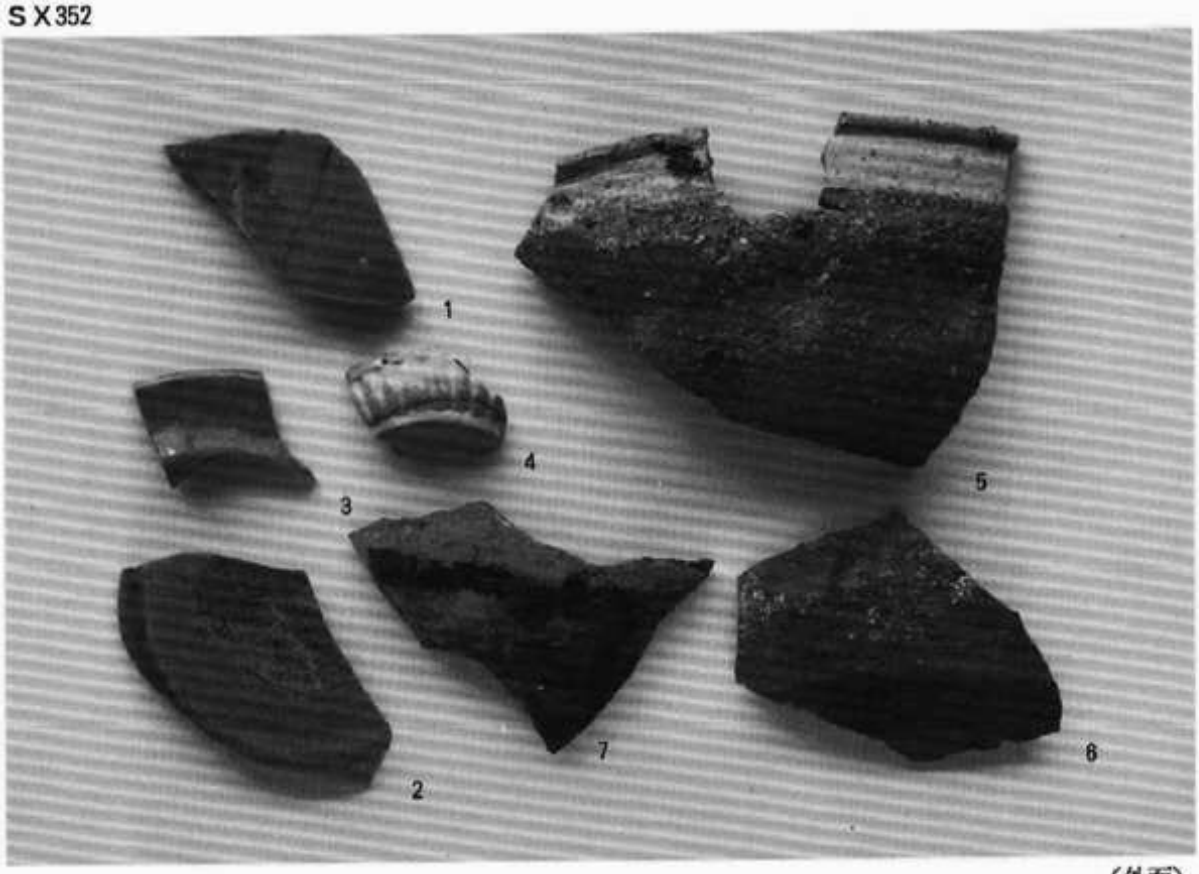
第6図

SG361



第7図

SX352



（外面）

（内面）

第8図

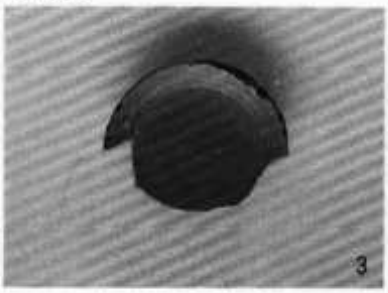
SG361

第7図

SX352

第8図

SK421



第9図

SD431

第10図

S D431

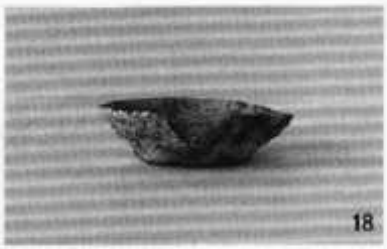
11

15

16

12

17


18

13

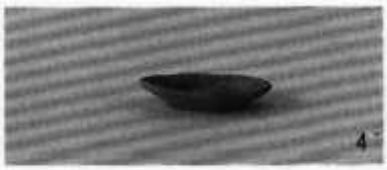
19

20

21

第10図

S K422


4

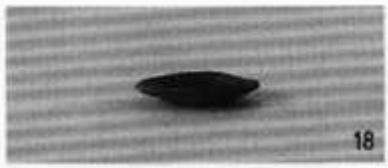
5

6

12

15

16


18

19

20

21

24

26

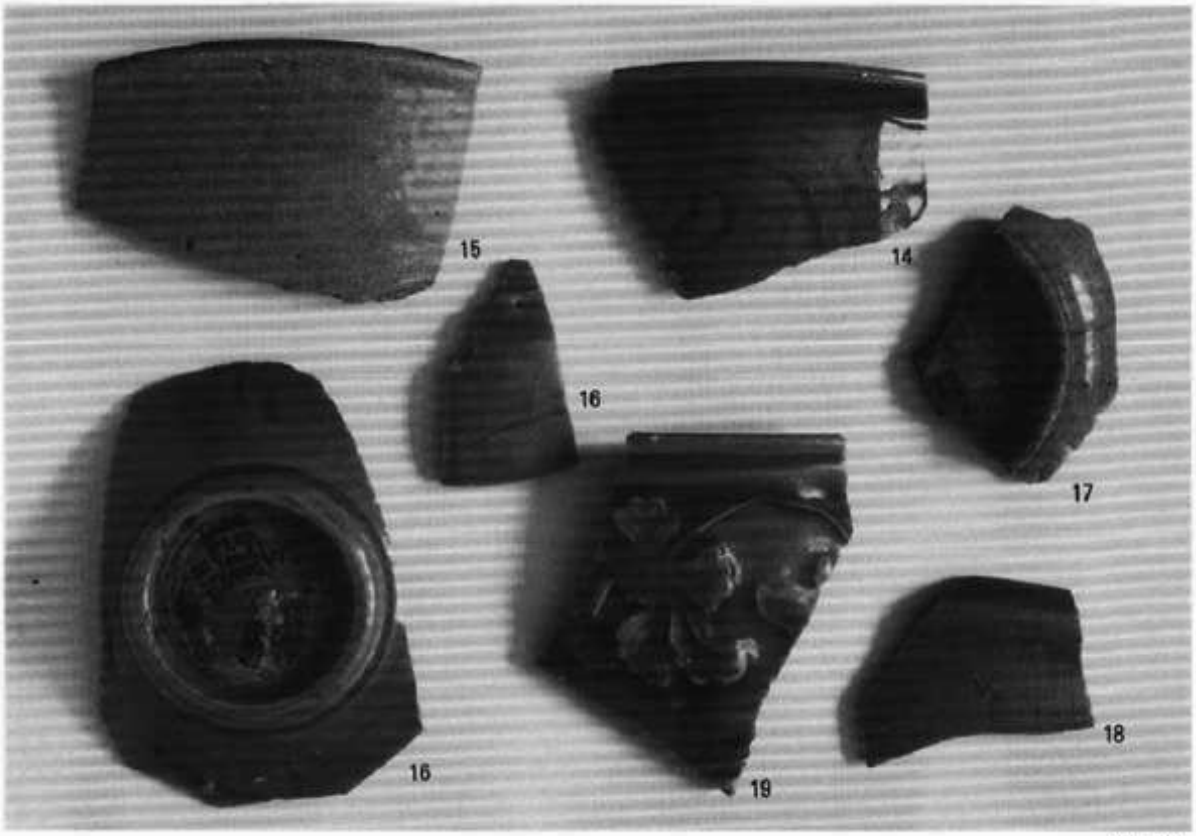
28

29

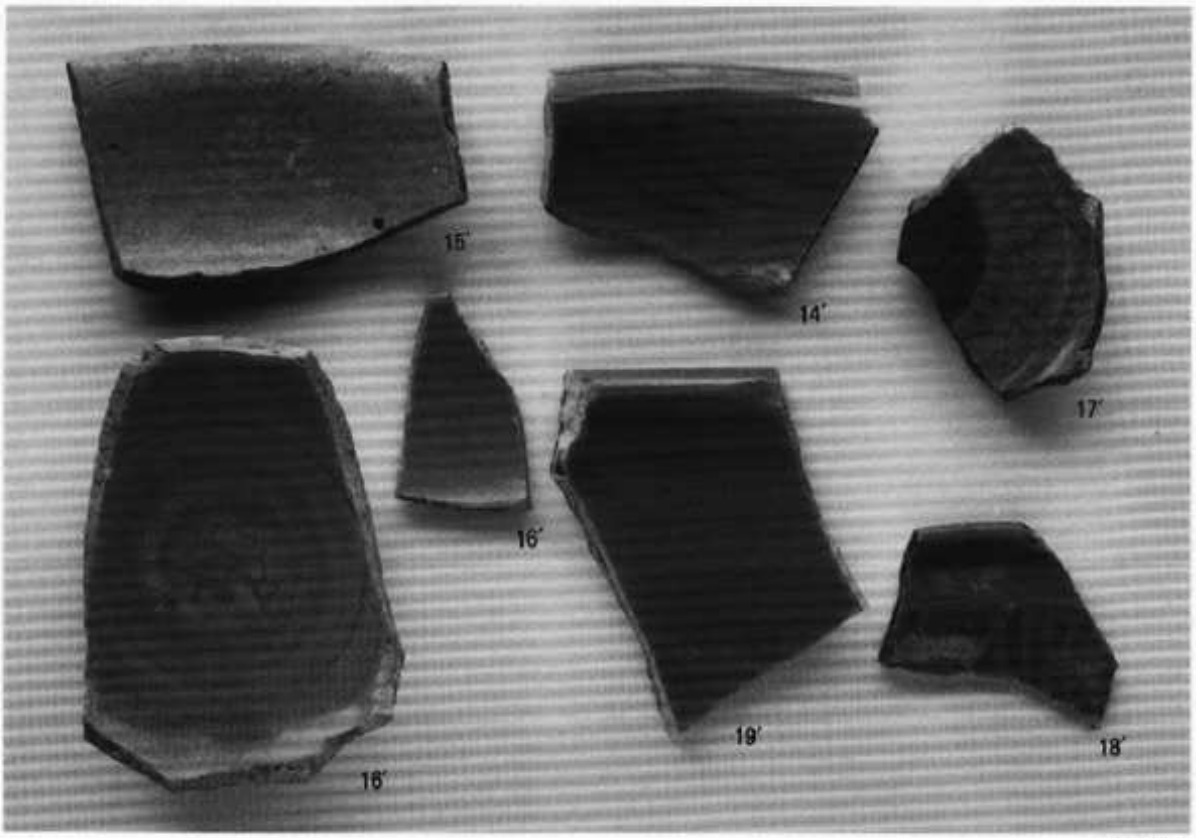
31

第17図

SE411



（外面）



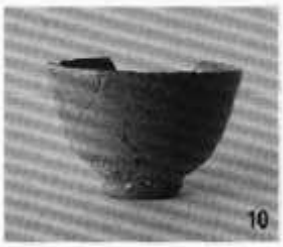
（内面）

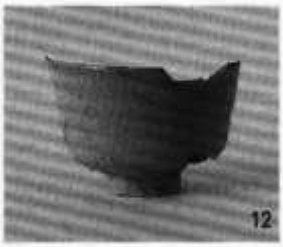
第13図

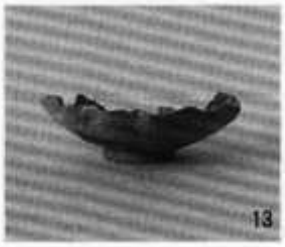
SK422

第17図

SK521



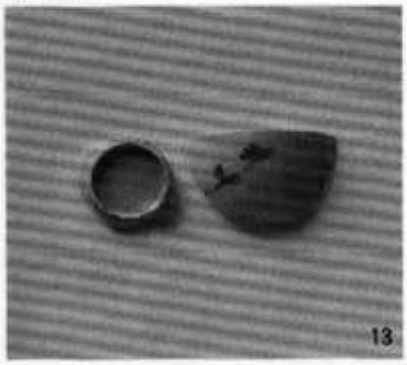


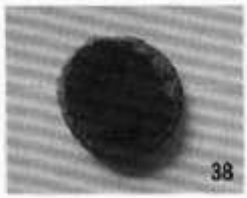


第18図

SE612

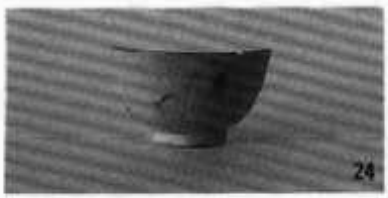
SK622





第19図

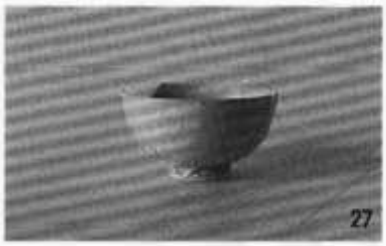
SK721



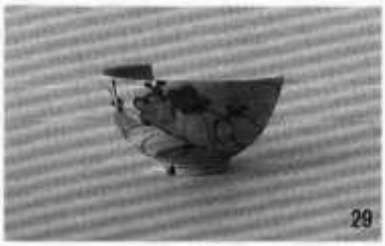
第21図

SK721

26


27

28


29

30

35

第21図

SK722

8

11

9

12

10

13

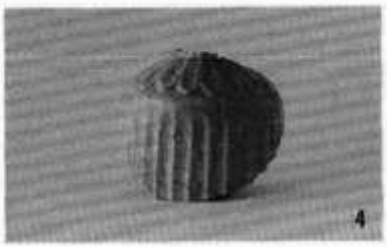
17

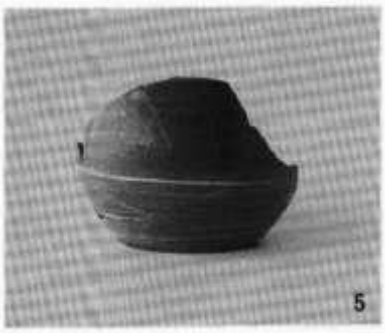
18

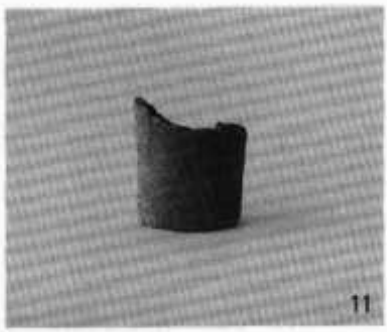
21

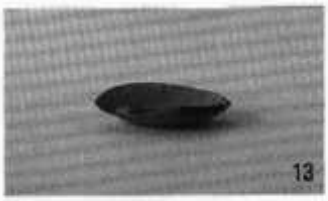
第23図

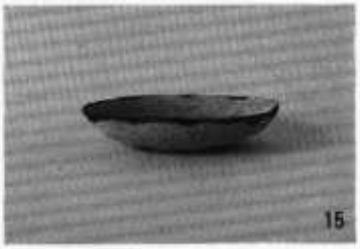
SX751





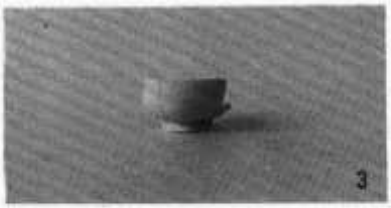






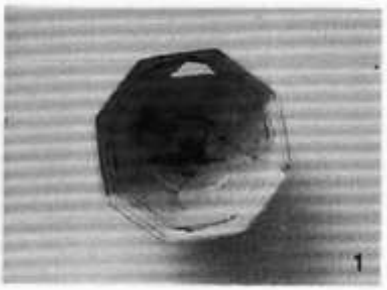
第24図

SK822



第25図

SK822

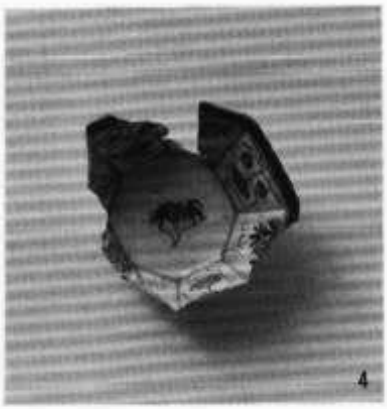


第25図

第26図

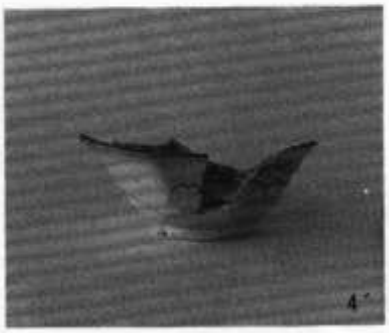
SK822

2


4

5

2'

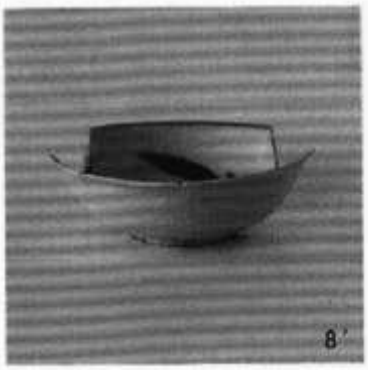

4'

5'

8

9

1


8'

9'

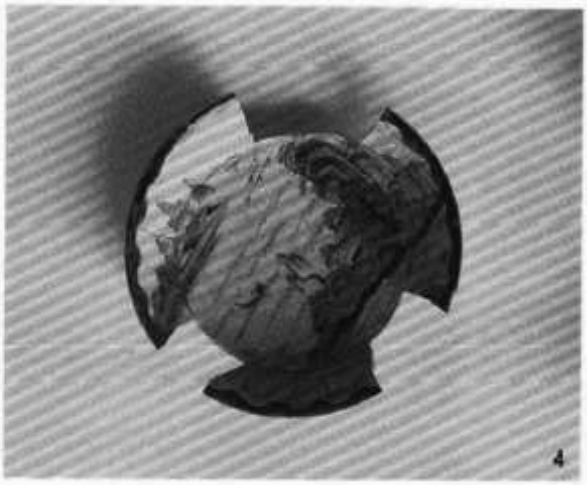
第26図

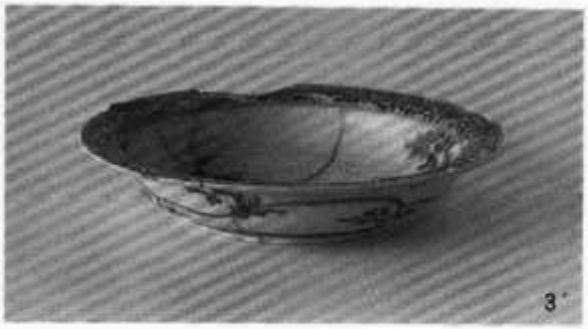
1'

第27図

SK822

3

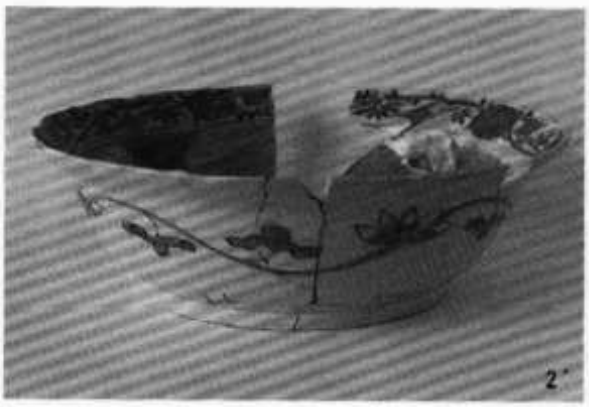

4


3'

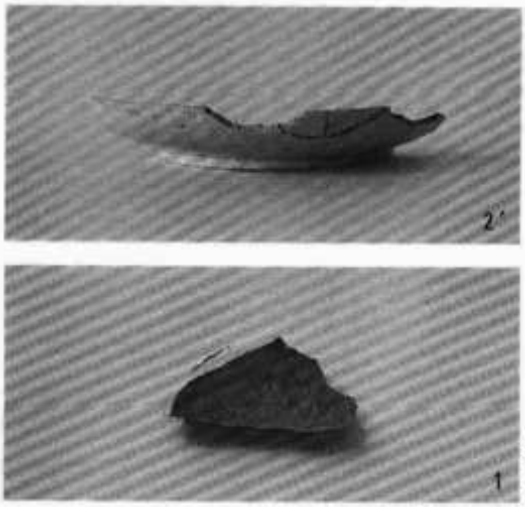
4'

2

2

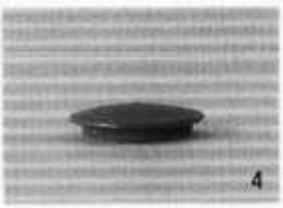

2'

第27図


1

第27図

S K822

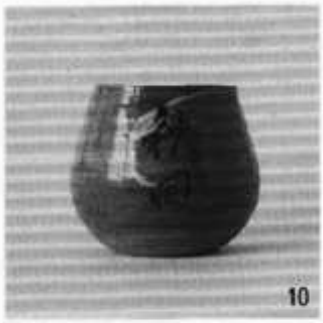

4

5

6

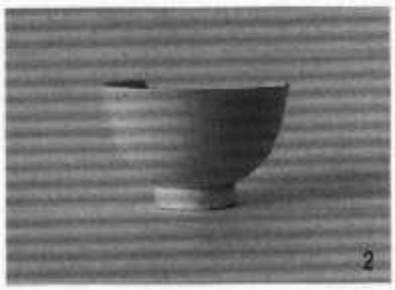
7

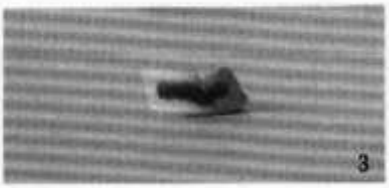
9


10

第28図

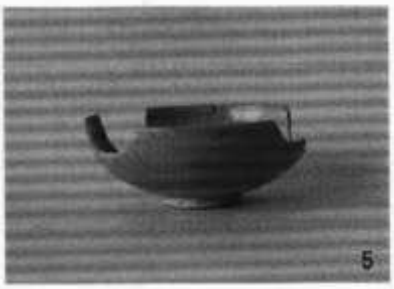
1


2

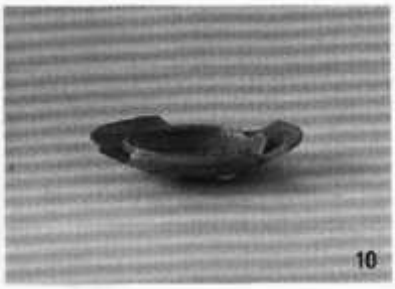

3

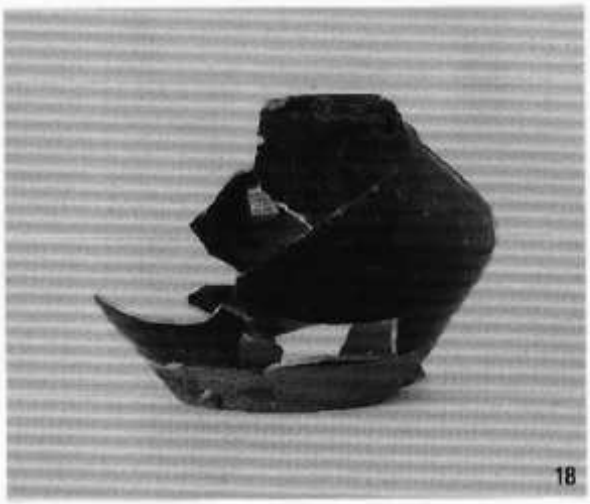
9

7


5

8


10

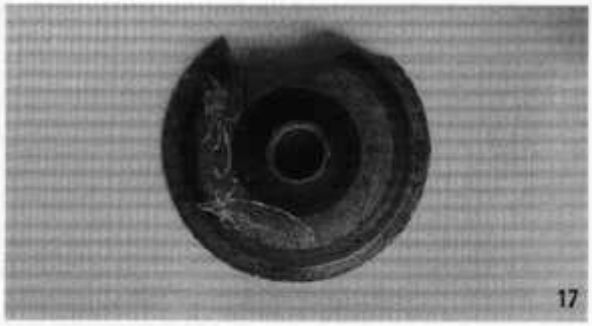

18

11

15

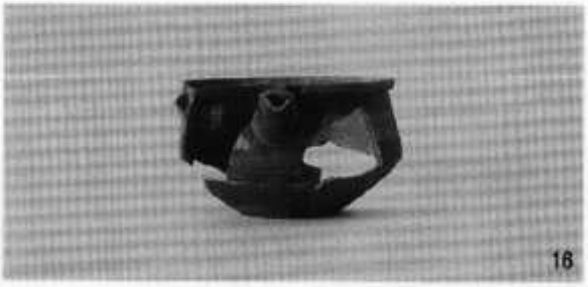
第29図

SK822


17

13

17′


16

第29図

1

2

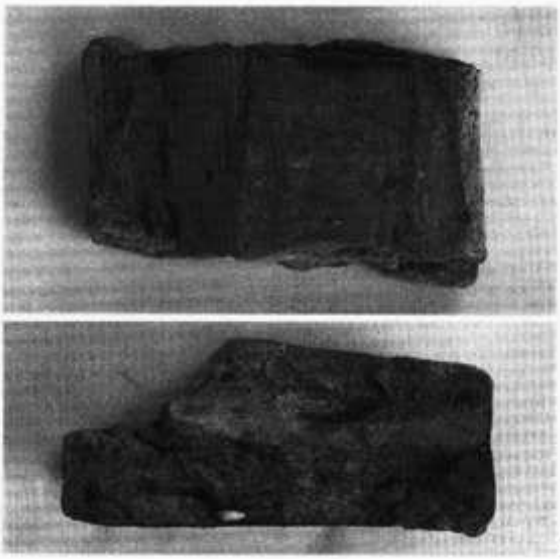
3

4

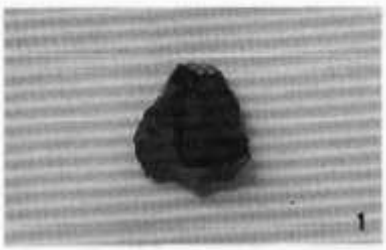
5

11

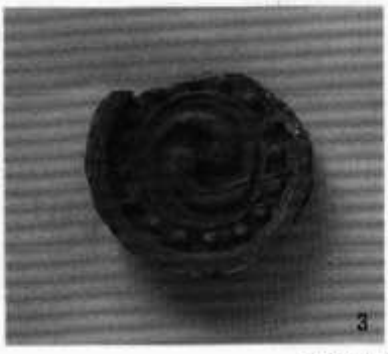
第30図



塼



第31図



第32図